

## SB473 (遺構: 図 1741、遺物: 図 1740)

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側と西側は搅乱により失われており、東側はSB475に、南側はSB474に切られている。検出時には両遺構の埋土と異なり、黒色土のブロック土が含まれていた。本遺構の周縁はすべて竪穴住居跡などの遺構により切られており、その平面形は不明であるが、底面が平坦で小穴を検出したため、竪穴住居跡と推定した。

**形状** 本遺構の周縁はすべて竪穴住居跡などの遺構により切られているため不明であり、深さは約0.1mである。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、ブロック土を多く含んでいることから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面で小穴を2基検出した。そのうち、P1は楕円形を呈し、埋土はほぼ水平堆積で、上層と下層の層界付近で土器（5983）が横位でまとまって出土した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器24点、小穴から土器11点が出土した。埋土中の出土土器はI期、IV期、VI期～VII期の土器が出土したが、I期とIV期のものは周辺からの混入と考えられる。小穴からはVI期～VII期の壺（5983）や高壺などが出土した。

**出土遺物** 5983はVI期～VII期壺。底部付近の破片で、外面は丁寧なミガキ、内面がハケによる調整が認められる。

**時期** 小穴から出土した遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

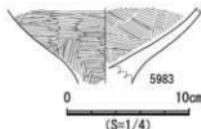


図 1740 SB473 遺物実測図

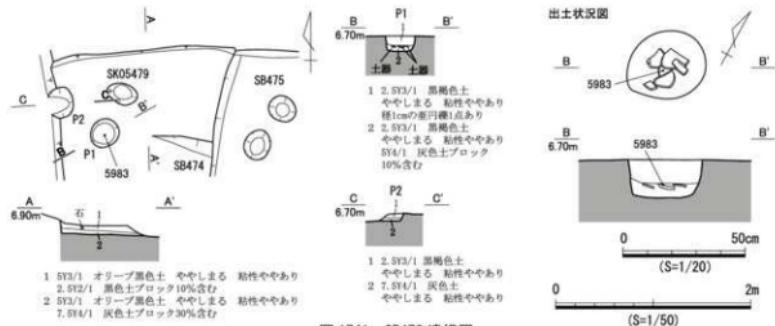


図 1741 SB473 遺構図

## SB474 (遺構: 図 1743、遺物: 図 1742)

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は搅乱により失われている。北側でSB473を切り、東側はSB475に、南側はSB476に切られている。遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

**形状** 北辺のわずかな範囲しか検出できておらず、不明である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。上層に亜円碟、下層にブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面にて小穴を4基検出したが、土層断面で柱痕跡を確認できる遺構はなく、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器145点、小穴から土器16点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが主体で、わずかにI期、IV期、V期のものが出土した。また、P4からはV期～VI期の甕底部（5984）が出土した。

**出土遺物** 5984はV期～VI期甕A類。平底の底部には大きな焼成後の穿孔が認められる。

**時期** VI期のSB477を切ることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。



図 1742 SB474 遺物実測図

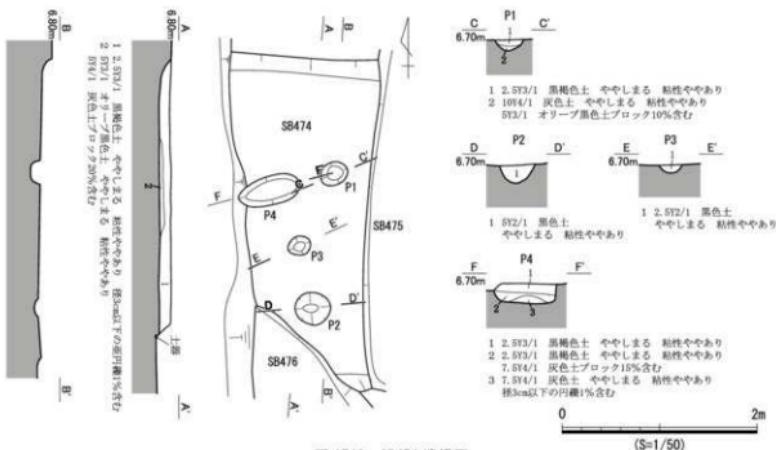


図 1743 SB474 遺構図

#### SB475（遺構：図 1744・1745、遺物：図 1746）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央は搅乱により失われ、西側でSB473とSB474を切る。平面形は明瞭であったが、南西隅はやや不明瞭であった。

**形状** 規模は不明であるが、西辺、南辺ともに丸みを帯び、およそ方形を呈する。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 4層に分層した。1・2層が覆土、5・6層が掘形埋土である。覆土の大半は1層であり、2層にはブロック土が混入している。

**床面** 平坦で貼床（整地土）がある。床面の認識はやや困難であったが、小穴や壁溝を確認できた面を床面とした。床面では3基の小穴を検出し、そのうちP1では土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から、P1とP2が柱穴と考えられる。壁溝は掘形が浅く皿状を呈し、西辺と南辺沿いで検出された。また、掘形底面では小穴を2基検出し、そのうちP4では土層断面で柱痕跡を確認した。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器674点、壁溝から土器38点、小穴から土器35点が出土した。埋土中

の出土土器はVI期～VII期の細片が多い。縄文時代晩期とV期の土器片は、混入の可能性が高い。

**出土遺物** 5985はVI期～VII期壺A4類。頸部の屈曲は弱く、短く外反し、端部はつまみあげられる。5986はV期高環B類。壺底部から口縁部が直線的に開く。5987はVI期器台B1a類。脚部が中空でほぼ直立し、裾部が円錐状に開く。現状では透孔は認められない。

**時期** VI期のSB477を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

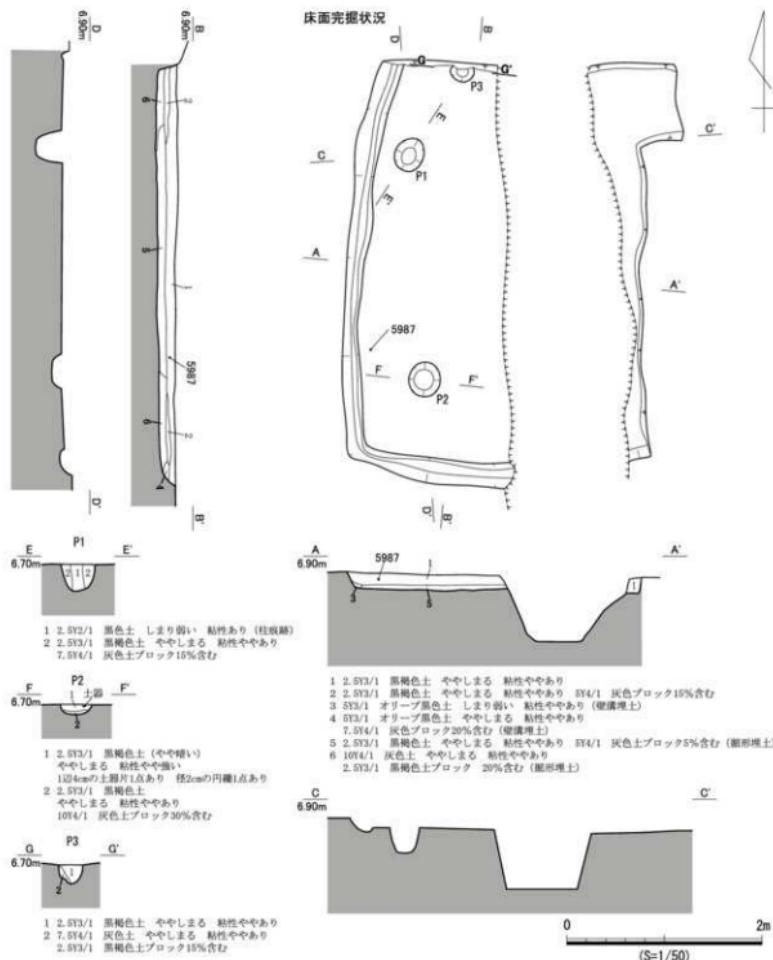


図1744 SB475 造構図（1）

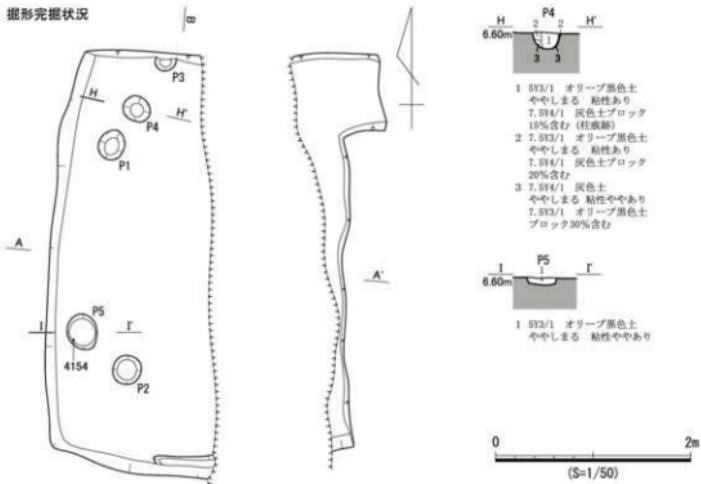


図 1745 SB475 遺構図（2）

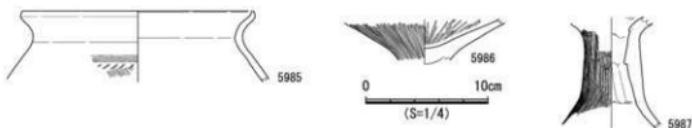


図 1746 SB475 遺物実測図

SB476（遺構：図 1747、遺物：図 1748）

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は搅乱により失われ、北側でSB474を、

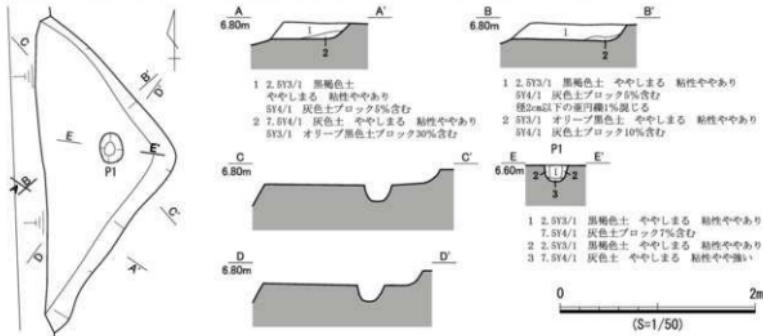


図 1747 SB476 遺構図

東側でSB477を切る。平面形は北東辺が明瞭に検出できたが、南東辺は不明瞭であった。

**形状** 平面形の一部分しか検出できていないが、北東辺と南東辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。埋土の大半は1層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

2層は壁面沿いの三角堆積層であり、この層もブロック土を多く含む。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を1基（P1）検出した。P1は土層断面で柱痕跡を確認できたが、住居の大半が調査区域外に位置するため、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器151点、小穴から土器2点が出土した。床面南側ではVII期壺B類（5989）の破片が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多い。なお、IV期の甕が埋土中から出土しているが、住居下にあるSZ173の混入遺物の可能性がある。

**出土遺物** 5988はIV期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部にはタキキ痕が認められる。外面はタキキの後にハケ調整が認められる。5989はVII期壺B4類。口縁部が直線的に開き、端部直下には刺突を加える。

**時期** VI期のSB476を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

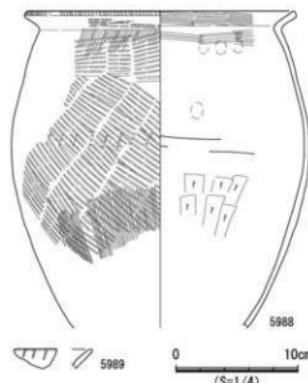


図 1748 SB476 遺物実測図

#### SB477（遺構：図1750、遺物：図1749）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、検出面において黒色土中に灰色ブロックが含まれていた。本遺構の周縁は複数の竪穴住居跡（SB474～SB476、SB479～SB481）に切られており、その平面形は不明であるが、埋土の状態が他の竪穴住居跡に類似し、底面で小穴を検出したため、竪穴住居跡と判断した。

**埋土** 2層に分層した、ほぼ水平堆積でブロック土の混入が認められるため、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を3基検出し、そのうちP3は土層断面で柱痕跡を確認した。しかし、住居の平面形が不明であるため、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中の出土遺物はなく、小穴から土器37点が出土した。P3からはVI期の甕D類と高壺C類が出土しており、VII期の遺物は確認できなかった。

**出土遺物** 5990はVI期壺D1b類。屈曲部から口縁部上段が外側へ引き出される。5991、5992はVI期高壺C類。5991の壺底部は平坦で、5992の脚部は透孔付近から下方が内湾する。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

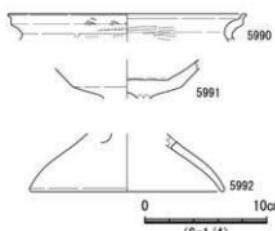


図 1749 SB477 遺物実測図

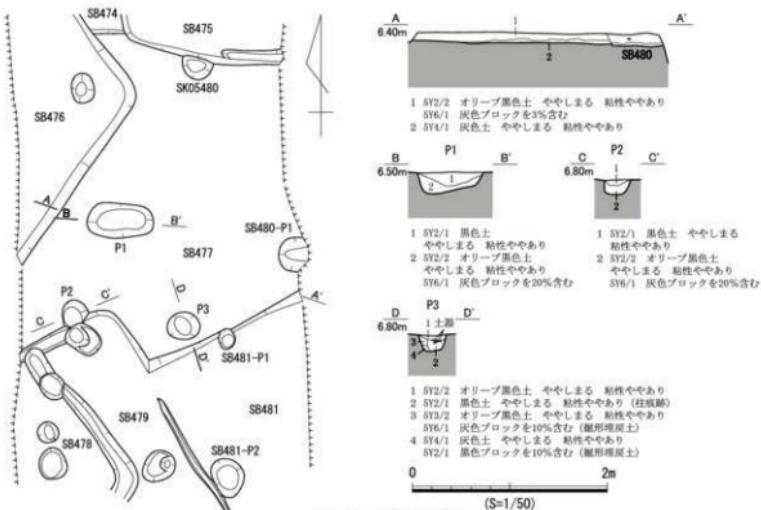


図 1750 SB477 遺構図

## SB478（遺構：図 1751、遺物：図 1752）

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は搅乱により失われている。本遺構はSB479掘形底面で検出し、検出面では住居の埋土は失われ、壁溝と小穴の平面形が明瞭に確認できた。

形状 北東辺と南東辺の一部しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面では小穴を2基検出し、そのうちP1は掘形が深い。しかし、住居の全容が不明であるため、その性格も不明である。壁溝は、途切れることなく巡っている。

遺物出土状況 壁溝から土器22点、小穴から土器11点が出土した。出土土器のうち時期が判明する

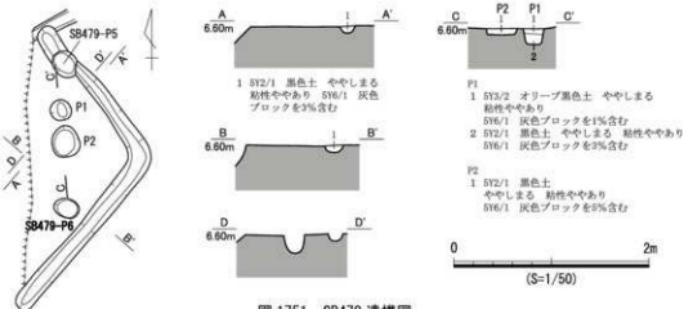


図 1751 SB478 遺構図

ものはVII期に属する。

**出土遺物** 5993はVII期窓B3類。口縁部がくの字に屈曲し、直線的に開く。端部に強い押圧を加え、外方へ粘土がはみ出す。5994はVII期高窓C類。窓底部から口縁部が開いて立ち上がる。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

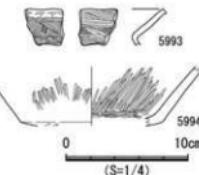


図 1752 SB478 遺物実測図

SB479 (遺構: 図 1753・1754、遺物: 図 1755)

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は搅乱により失われている。北側でSB477を、東側でSB481を切り、掘形底面でSB478を検出した。本遺構の平面形は北側は明瞭であったが、南側は不明瞭であった。

**形状** 北西—南東長約4.0mで、隅丸方形を呈する。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。1・2層が覆土、6層が掘形埋土である。覆土はほぼ水平に堆積し、1層中



図 1753 SB479 遺構図 (1)

に土器片を多く含み、2層中にはブロック土が含まれる。

**床面** 平坦で貼床（整地土）がある。床面の認識はやや困難であったが、東壁面沿いで壁溝が見えた高さを床面とした。床面では小穴を9基検出し、そのうちP1とP2は土層断面で柱痕跡を確認できた。しかし、位置的に本遺構の柱穴とは想定できず、その性格は不明である。また、P7は不整方形を呈し、検出面ではほぼ完形に復元できるIX期の土師器甕（6003）が出土した。壁溝は深くて壁面の立ち上がりも強いが、北東隅と南東隅で途切れている。なお、掘形底面では住居南東隅にて小穴を2基検出した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,677点、壁溝から土器37点、小穴から土器133点が出土した。埋土中や床面直上の土器はVI期～IX期のものが多く、縄文時代晩期の破片も混入している。また、P1からはVII期の高杯が出土し、P7検出面の甕（6003）は口縁部を南に向けて出土した。

**出土遺物** 5995はVII期壺。胴部に線刻が認められる。5996はVII期壺。胴部が球形を呈する。5997と5998はIX期壺。5997の胴部は小型の球形を呈する。5998は大型の壺底部。底面には木葉痕が残る。5999、6000はVII期甕D類。5999は口縁部で、屈曲が弱く、大きく開く。6000は器壁の薄い脚部が直線的に開く。6001はVI期～VII期甕。器壁の薄い脚部で、端部内面には粘土の折り返しが認められる。6002～6005はIX期甕。6002は口縁部が内湾するが、端部に肥厚した内傾面は認められない。布留型甕の模倣であろう。6003はほぼ完形品で、布留型甕を模倣したものと考えられる。口縁部はわずか

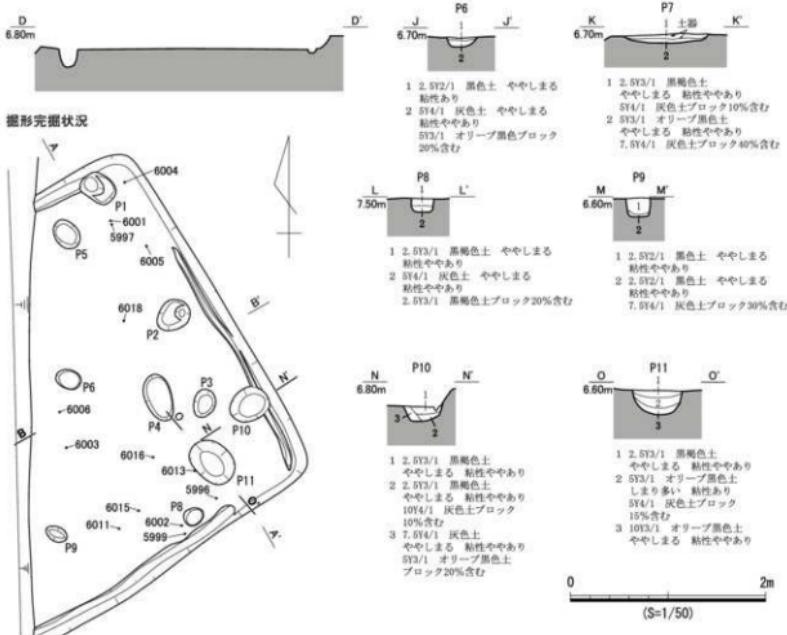


図 1754 SB479 遺構図 (2)

に内湾し、端部は内傾して肥厚する。胴部は球形を呈するが、やや縦方向に長い。摩耗が著しいが、ハケ目がわずかに残る。6004、6005は口縁部で、弱く屈曲して端部が肥厚する。6006はVII期～IX期窓D類。底部から器壁の薄い脚部が開く。6007はIX期鉢。胴部は丸みを帯び、口縁部が直線的に外側に開く。6008はV期高窓B類。脚部は円柱状で、透孔付近から外反する。6009はVI期高窓C3b類。口縁部が肥厚し、内面に多条沈線を施文する。6010、6011はVII期高窓C4c類。6010は内外面ともに加飾する。やや厚い器壁の内面には多条沈線を施文する。端部を尖らせ、その外面には山形文、多条沈線を施文する。山形文は端部直下に認められ、クシによる二重山形文となる。6011は口縁部途中まで段を形成し、その上方に多条沈線のみを施文する。6012、6013はVII期高窓C類。ともに脚部が円錐状に開く。6014はVII期高窓D5類。端部の平坦面及び内面に多条沈線を施し、内面には多条沈線間に3帯の連弧文を施文する。6015はVII期高窓。脚部が付根から短く大きく開く。6016はIX期高窓。器壁の薄い作りの脚部が円錐状に開き、細かいミガキが認められる。6017、6018はVII期器台。6017は窓底部から口縁部が短く外反する。6018は内湾する小型の受部が完存する。6019、6020はともにVI期～VII期手捏ねC類。平底から口縁部が外傾して直線的に立ち上がる。

**時期** 出土遺物はVI期～IX期に属するが、VII期のSB478より後出することから、VII期～IX期と考えられる。

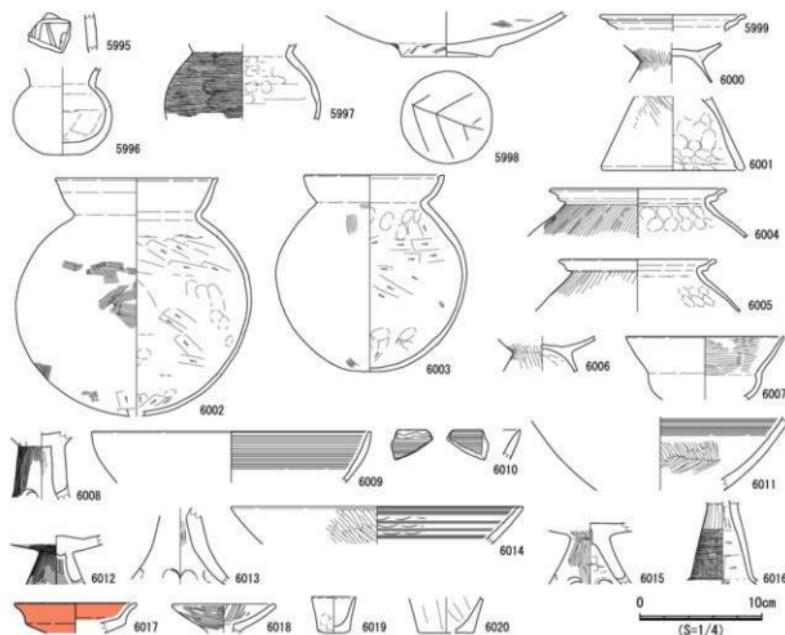


図 1755 SB479 遺物実測図

## SB480（遺構：図1756、遺物：図1757）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は擾乱により失われている。南側をSD1092に切られ、西側でSB477を切る。本遺構の平面形は不明瞭であった。遺構の全容は不明であるが、西辺が直線的にのび底面が平坦であることから、竪穴住居跡と判断した。

**形状** 西辺が直線的にのびるが全体形は不明である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。上下層ともにブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面にて小穴1基を検出したが、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器222点が出土した。出土土器の多くはVI期～VII期である。

**出土遺物** 6021はVI期高坏H1類。口縁部が内湾して立ち上がり、内外面ともに丁寧なミガキ調整が認められる。端部を丸くおさめ、外面に煤が付着する。6022はVII期高坏C3c類。内湾する口縁部内面に多条沈線が認められる。

**時期** VI期のSB477を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

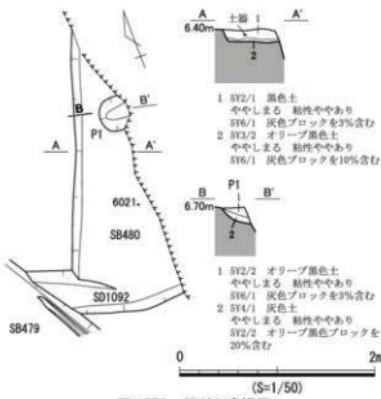


図 1756 SB480 遺構図

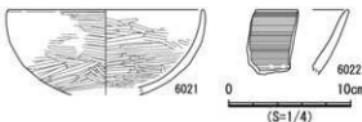


図 1757 SB480 遺物実測図

## SB481（遺構：図1758、遺物：図1759）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側を擾乱により失われ、西側はSB479に、南側はSB482に切られている。平面形は南辺は明瞭に確認できたが、北辺は不明瞭であった。

**形状** 南北長約4.0mで、東西に長い長方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。ブロック土をわずかに含むことや、周辺遺構との重複が著しいことなどから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴を4基検出した。そのうちP2では土層断面で柱痕跡を確認できたが、住居のほぼ中央に位置し、その性格は不明である。なお、SB479の掘形底面で検出したSB479-P10・P11は、本遺構に伴う小穴の可能性もある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器90点、小穴から土器100点が出土した。小穴のうちP4からは60点の土器片が出土している。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、IV期、VIII期以降の土器片もわずかに出土したが、これらは混入と考えられる。

**出土遺物** 6023はVII期高坏G3c類。口縁部直下に刺突文を施し、下方に多条沈線が認められる。

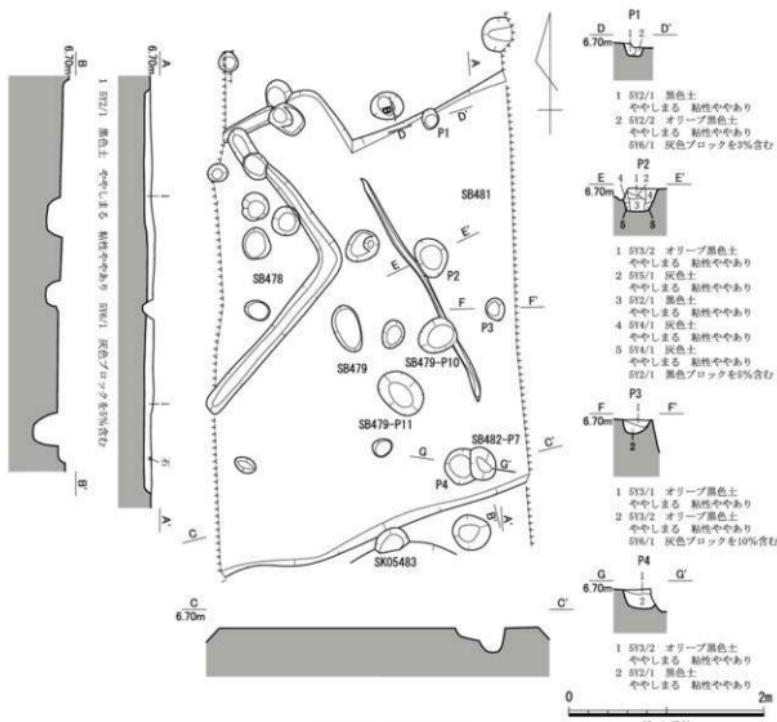


図 1758 SB481 遺構図

現状では、多条沈線間に山形文を2帯、羽状文を1帯施す。精緻な作りで、刺突は貝の可能性が高い。6024はIX期高坏。脚部の開きはわずかで、円柱状に近い。

**時期** VII期～IX期のSB479とVI期～VII期のSB482に切られるごと、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB482(遺構:図1760、遺物:図1761)

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は擾乱により失われ、北側をSB479に切られ、北側でSB481を切る。本遺構の平面形は南辺西側は比較的明瞭であったが、東側にむかうにつれて不明瞭になった。南辺のみしか検出できていないが、南辺が直線的で底面が平坦であることから竪穴住居跡と判断した。

**形状** 南辺が直線的にのびることから、方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

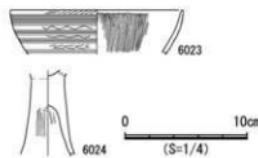


図 1759 SB481 遺物実測図

**埋土** 2層に分層した。上下層ともに土器片を多く含み、ブロック土や円礫も混入することから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を8基検出した。土壟断面で柱痕跡を確認できた遺構はないものの、P4、P5、P7、P8は掘形が深く、壁面の傾斜も急である。しかし、本遺構の柱穴の推定は困難であった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,151点、石器類1点、小穴から土器162点が出土した。埋土中の土器は散在して出土し、VI期～VII期のものが多く、復元できる個体はVII期のものが目立つ。VII期以降の

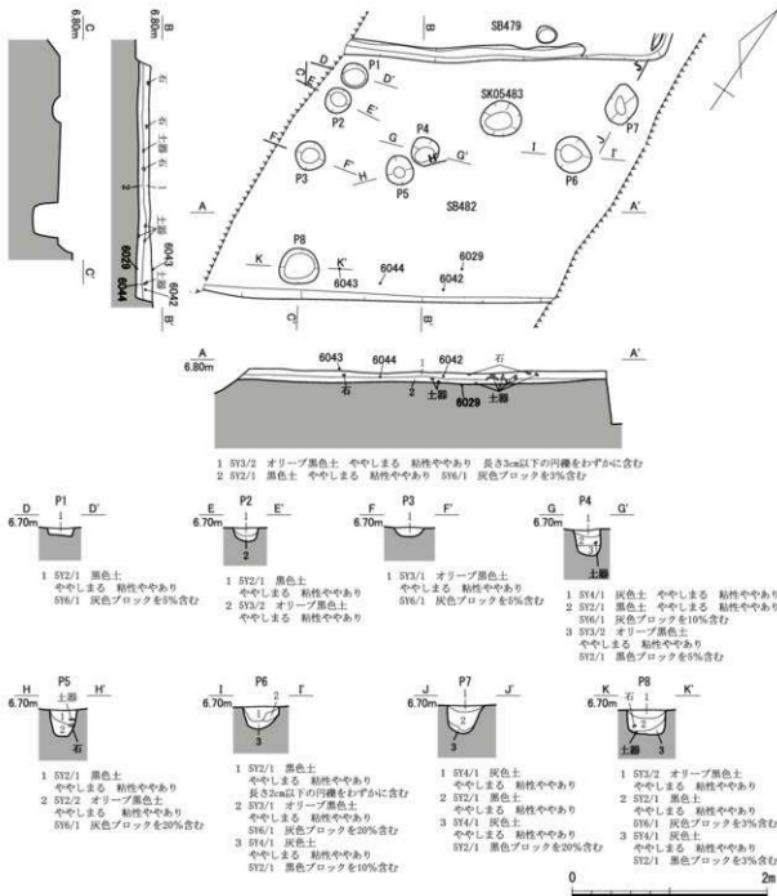


図1760 SB482 遺構図

土器片は混入と考えられる。

**出土遺物** 6025はV期～VI期壺A1a類。口縁部が外反し、端部を下方に大きく拡張する。上方への拡張もわずかに認められ、端部外面には6条の擬凹線が認められる。6026はVII期壺H2b類。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁部中位やや下まで細かい加飾が認められる。多条沈線を施し、その間に小さなクシ状工具を用いて山形文、刺突文を加えている。精緻な作りの資料である。6027はVI期～VII期壺H2a類。口縁部が内湾し、加飾は見られない。6028はVI期～VII期壺。木葉文状の線刻が認められるものの確認可能な範囲が狭く、現状では文様全体の様相は不明である。6029はV期～VI期甕B類。脚部が短く直立気味に開き、器壁は厚い。6030はVI期～VII期甕。胴部には粗いハケ目が残り、

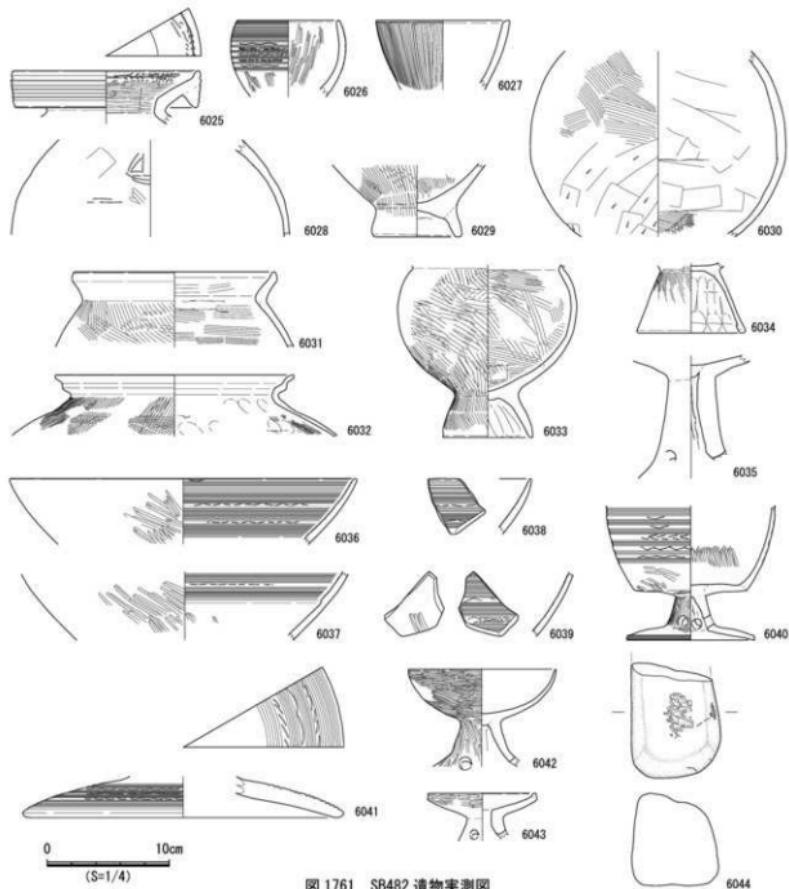


図 1761 SB482 遺物実測図

煤が付着する。6031はVI期～VII期甕A4類。口縁部が短く屈曲し、内面はわずかに内湾する。端部外面が直立するように平坦面を形成し、先端は尖る。6032はVII期甕D2b類。口縁部が短く明瞭に屈曲し、上段がわずかに外方に引き出され、平坦面をもつ。6033はVI期～VII期甕E3類。小型の甕で脚部が付き、胸部は球形を呈する。粗いハケ目が残り、煤が付着する。6034はVII期～IX期甕。器壁は薄く、脚部が開く。6035はV期高坏B類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔を境に大きく外反する。6036～6039はVII期高坏C4d類。6036～6038は口縁部内面に多条沈線を施し、その間に山形文を配する。6036は6037と同一個体の可能性がある。6039は山形文のほかにクシによる羽状文が認められる。6040、6041はVII期高坏G3c類。6040は口縁部が開いて立ち上がる。外面には中位より下まで多条沈線を施し、山形文4帯と羽状文1帯をその間に加える。脚部は中程で強く屈曲して開き、2孔1対の透孔を2方向に配置する。脚端部は平坦面をもつ。6041は脚部の小片。多条沈線を施し、その間に山形文、刺突文を加える。6042はVII期高坏H1類。坏部は完存し、内湾する。脚部は円錐状に開き、透孔のやや上からさらに大きく開く。6043はVII期器台C1類。受部が弱く内湾し、皿状を呈する。6044は叩石。上方が割れた長楕円錐の平坦面に敲打痕が残る。

**時期** VI期～VII期のSB481を切っているが出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられ、VII期により多くの土器が廃棄されたと推定される。

#### SB483（遺構：図1762・1763、遺物：図1764・1765）

**検出状況** 東部西側中央の堅穴住居跡密集域に位置し、中央は搅乱により失われている。西側はSK05487に切られ、北側はSB482床面で、南側はSB484床面でそれぞれ検出した。なお、平面形は比較的明瞭であった。

**形状** 遺構の北辺と西辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。全体的に中央に向かって緩やかに下降する堆積層であるが、埋土のいずれの層にもブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面では柱穴などは全く確認できず、大きな穴（P1）のみを住居北西隅で検出した。P1は不整梢円形を呈し、壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層でき、上層に多量の土器が含まれていた。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,562点、石器類2点、小穴から土器693点が出土した。出土遺物の多くはVII期に属し、わずかにV～VII期の破片も出土したが混入と考えられる。P1中央東寄りではほぼ完成の小型の甕D類（6056）が横位で口縁部を南に向けて出土し、その東側には通常の大きさのVII期甕D類（6055）が口縁部を北に向けて潰れたような状態で出土した。また、その東側には木製の棒状材も横位で出土した。一方、中央西寄りではVII期の壺（6047）とVII期甕（6059）が出土した。

**出土遺物** 6045はV期壺B1類。口縁部が強く外反し、端部を上下両方にわずかに拡張する。端部には明瞭な平坦面を形成し、円形刺突文を施す。6046はVII期壺。口縁部が頸部から強く外反し、端部には平坦面を形成する。端部には沈線状の窪みが認められる。6047はVII期壺。口縁部がわずかに外反して立ち上がる。端部には平坦面をもち、内外面ともにハケ目が残る。6048はVII期～IX期壺。平底の底部がやや突出する。6049はV期甕A2a類。口縁部が受口状となる。端部には明瞭な平坦面をもち、

口縁部内面にも顯著な平坦面を形成する。端部外面には刺突文を施文する。6050はVII期甕D2b類。口縁部が短く明確に屈曲し、上方がわずかに引き出される。6051はVII期甕D類脚部。6052はVII期～VIII期甕。口縁部が明瞭に屈曲する。強く外方に引き出され、平坦面を形成する。端部は直立気味に立ち上がり、外面には煤が付着する。6053～6062はVII期甕D類。6053、6054、6062は脚部。6062は器壁の薄い作りである。6055は口縁部と胴部の一部と、脚部すべてを欠損する。6057より小型である。6056はほぼ完形品で、器高約11cmの小型品である。6057はほぼ完形。口縁部は大きく外方に引き出され、端部は外反気味となる。胴部最大径は中央の上方となり、全面に粗いハケ目が認められる。最大径の部位より下方には煤が付着する。脚部はやや細身で、脚高が高い。6058、6060、6061は口縁部が6061

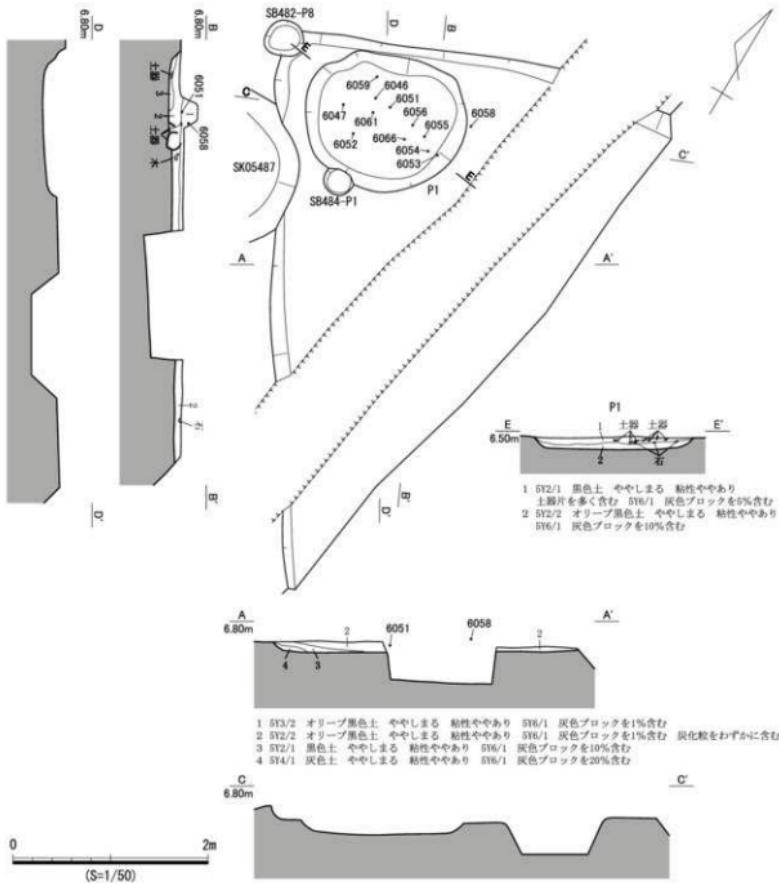


図 1762 SB483 遺構図 (1)

は口縁部が大きく外方に拡張する。6059は口縁部が完存する資料で、端部に凹面が認められる。6063はVI期～VII期の高杯。脚裾部がハの字状に開き、端部を丸く收める。付根部分の器壁が厚い。6064はV高杯B類。脚部に、現状では2条1組の沈線が5帯認められる。6065はVI期～VII期高杯C類。脚部が円錐状に開く。6066はVII期高杯C類。杯底部から口縁部が外傾して立ち上がる。内面の段、外面の稜ともに明瞭に残る。6067はV期器台A1類。口縁部が大きく外反し、端部には明瞭な平坦面を有する。端部平坦

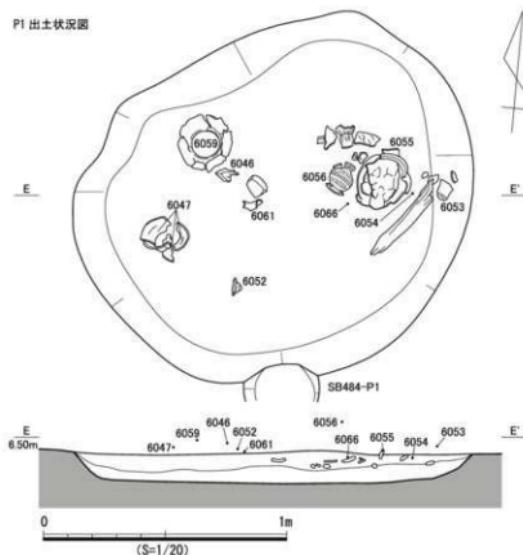


図 1763 SB483 遺構図（2）

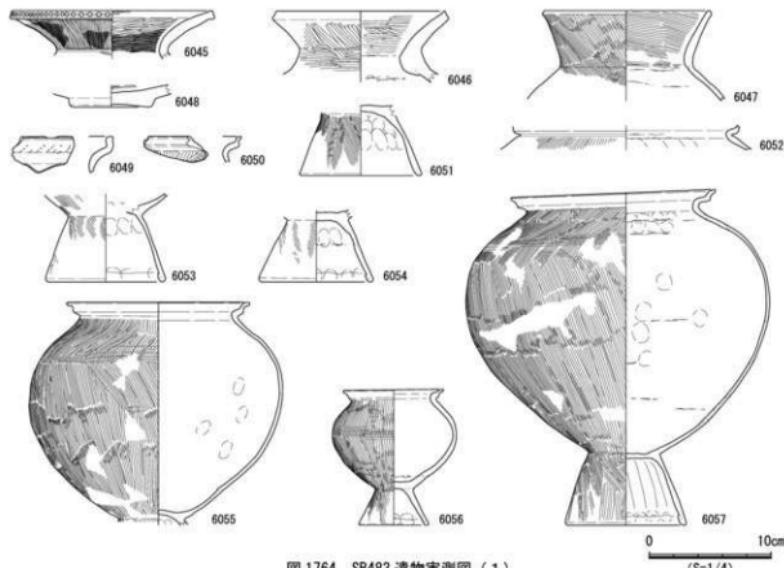


図 1764 SB483 遺物実測図（1）

面には円形浮文を貼付する。内面の端部に沿った一帯に煤が付着しており、二次的な使用が認められる。

**時期** 出土遺物の時期からⅧ期～Ⅸ期と考えられるが、本遺構はVI期～VII期のSB482床面で検出しておらず、出土遺物の時期と遺構の重複関係とが矛盾している。SB483-P1付近の出土土器はⅧ期～IX期のSB484の土器集中箇所の下に位置することから、遺構の平面形の確認時に誤認した可能性がある。

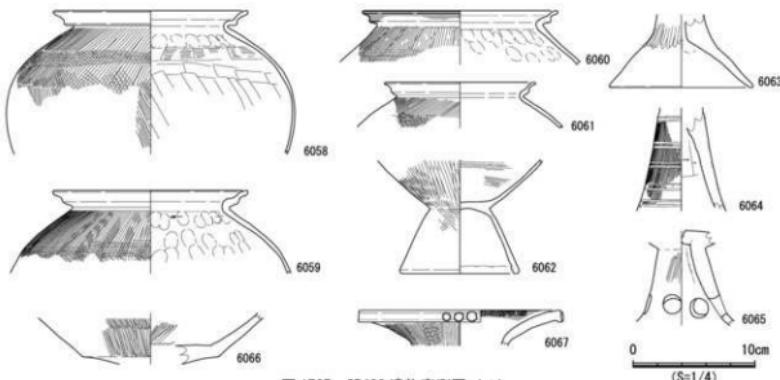


図 1765 SB483 遺物実測図（2）

#### SB484（遺構：図 1766、遺物：図 1767）

**検出状況** 東部西側中央の豎穴住居跡密集域に位置する。中央と西側は擾乱により失われ、北西隅はSK05487に切られている。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

**形状** 東西両端の形状は不明であるが、南北長約5.6mで北西隅が西側へやや突出する不整方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は南辺と北辺が急で、西辺は緩やかである。

**埋土** 2層に分層し、上層は炭化粒を含む。上下層ともブロック土が混入し、層界の凹凸も顕著であることから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床は（整地度）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を6基検出したが、いずれも浅く土層断面等で柱痕跡を確認できなかったため、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,848点、小穴から土器86点が出土した。土器は北壁沿いで細かく割れた破片が多数出土したもの、残存状態の良好な破片は出土しなかった。出土遺物はVI期～IX期の土器片が含まれ、わずかに繩文土器やI期の土器片も出土した。

**出土遺物** 6068はⅧ期甕D類。口縁部が大きく外方に引き出され、端部は外反する。6069はⅧ期～IX期甕脚部。器壁が非常に薄い。6070はIX期甕。6068より口縁部の屈曲が弱くなる。

**時期** 出土遺物の時期はVI期～IX期であるが、本遺構はⅦ期～Ⅷ期のSB483より後出するため、Ⅷ期～IX期と考えられる。

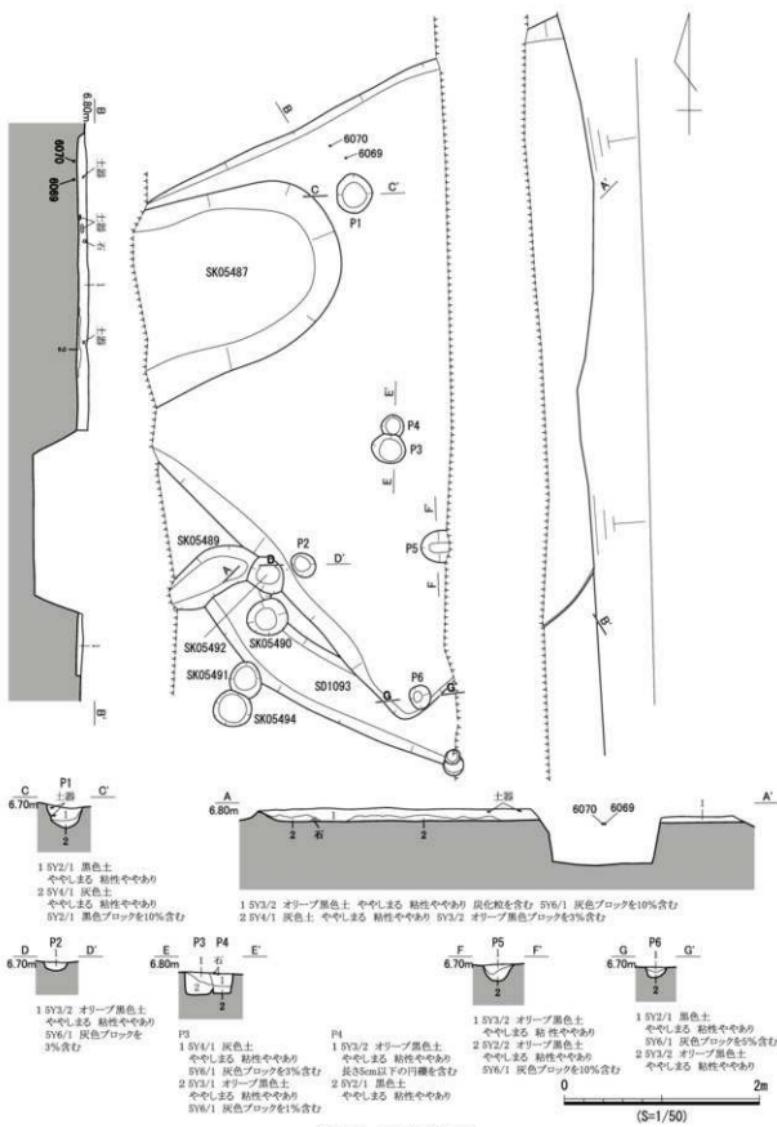


図 1766 SB8484 遺構図



図 1767 SB484 遺物実測図

## SB485（遺構：図 1768）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は擾乱により失われており、北側はSB484に、南側はSB486に切られている。検出時には両造構の埋土と異なり、V層のブロック土が全体的に含まれていた。本造構の周縁はすべて竪穴住居跡に切られているため平面形は不明であるが、底面が平坦であることや埋土除去後に小穴を検出したため竪穴住居跡と判断した。

**埋土** 2層に分層した。上下層ともブロック土が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を2基検出し、そのうちP2は楕円形が深く壁面の傾斜がほぼ垂直であることから、柱穴の可能性がある。  
**遺物出土状況** 埋土中から土器166点、小穴から土器5点が出土した。出土土器にはVI期～VII期及び繩文土器の小片が含まれるが、いずれも小片であり図示していない。

**時期** VII期～IX期のSB484とVII期～VIII期のSB486に切られることと、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

## SB486（遺構：図 1769～1771、遺物：図 1772）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央と西側、南東隅は擾乱により失われ、北側でSB485を切る。本造構の平面形は明瞭であった。

**形状** 南北長約5.1mで、隅丸方形を呈する。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。1～3層が覆土、5層が掘形埋土である。覆土はほぼ水平堆積であり、床面直上に堆積している3層のみブロック土を多く含む。

**床面** 平坦で貼床（整地土）がある。住居の中央付近で炉跡を確認した面を床面と判断したが、硬化

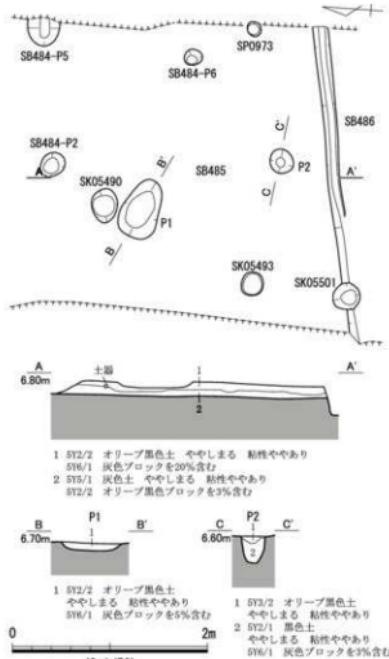


図 1768 SB485 遺構図

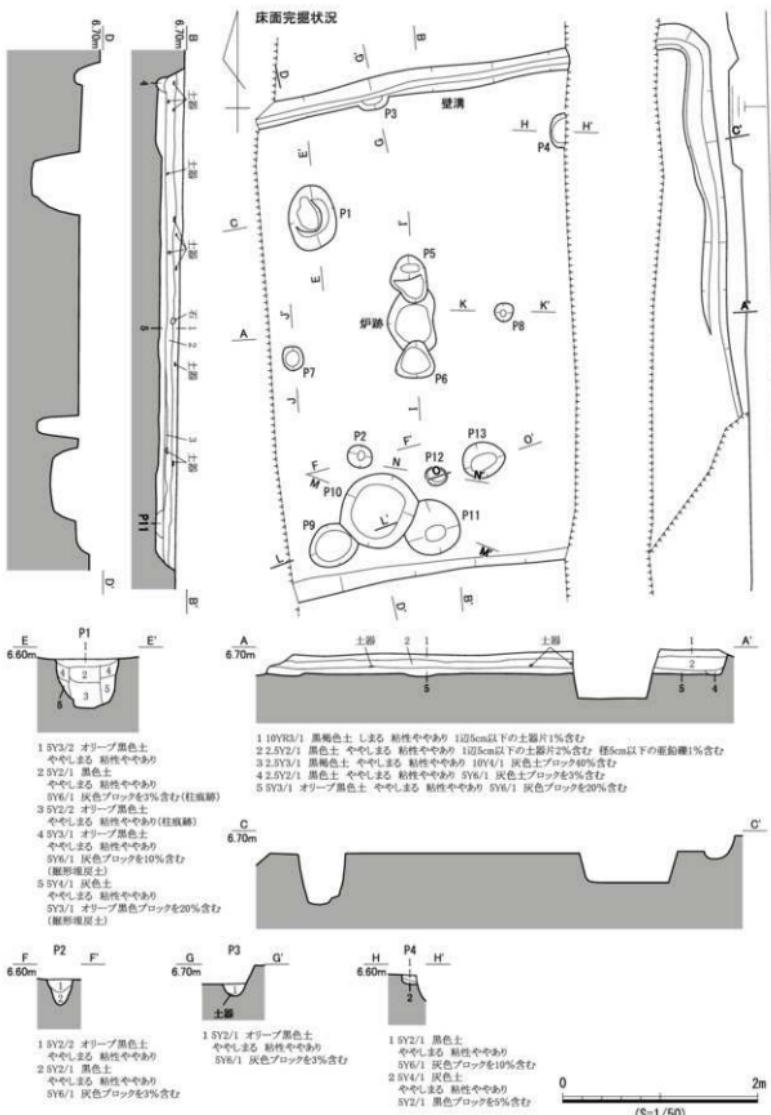
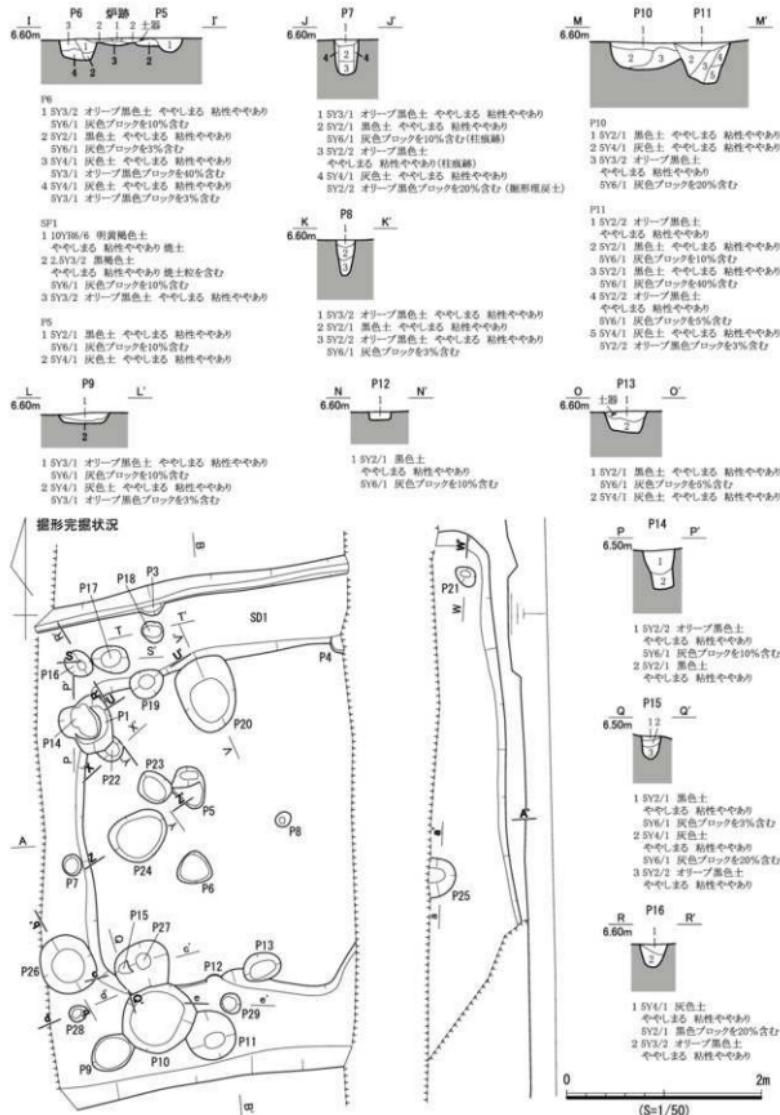


図 1769 SB486 遺構図 (1)



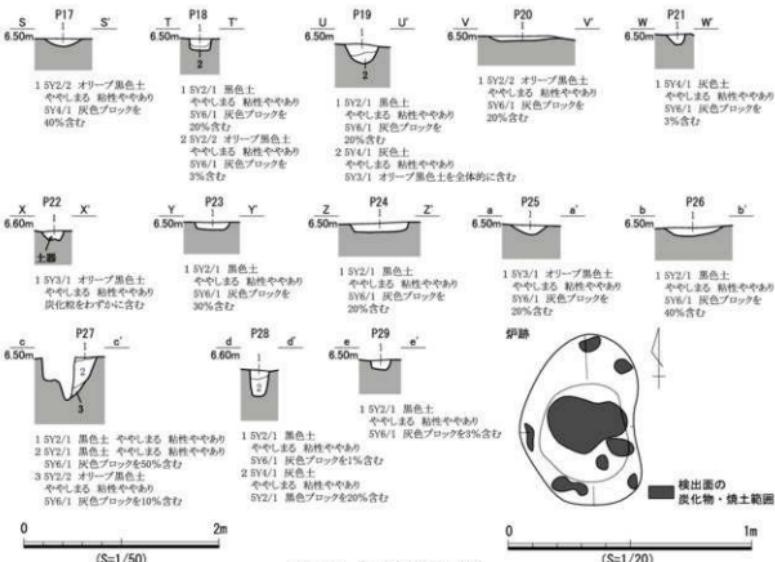


図 1771 SB486 遺構図 (3)

面は確認できず、ブロック土を含む整地土が全面に広がっていた。床面では炉跡1基、小穴13基を検出した。炉跡は南北に長い楕円形を呈し、検出面において中央付近に長さ約30cmの範囲で焼土がまとまって出土した。その周辺には焼土粒と炭化物、灰色ブロック土などが広がっていた。焼土の厚さは約1cmであり、それを掘削すると黒色土が残り、最終的には中央部分が浅い凹みとなった。また、炉跡の南北両側では2基の小穴(P5, P6)を検出し、南側のP6は掘形が深く壁面の傾斜も急であるが、北側のP5は浅くて底面が丸い形状であった。調査中は、これらの2基の小穴が炉跡に伴う可能性を考えていたが、埋土中に炭化物や焼土粒、灰層などは確認できなかった。小穴13基のうち、P1とP7は土層断面で柱痕跡を確認した。また、P2とP8は掘形が深くほぼ垂直に掘り込まれており、P2は住居の貼床を除去すると下から掘形(P27)を検出したため、柱部分のみをP2として認識したことになる。これらのことから、本遺構の柱穴はP1とP2であったと考えられる。また、南壁沿いではP9～P11というやや大きな穴を検出し、いずれもブロック土が含まれていた。なお、壁溝は北壁と東壁沿いは明確に確認できたものの、南壁沿いには確認できなかった。

**掘形** 埋土は単層であり、ブロック土を多く含む土である。それを掘削すると基盤層であるV層が見え、住居周縁のみ溝状に幅広く黒色土が残った(SD1)。掘形底面では小穴を16基検出し、そのうち、P17, P26, P27の3基はSD1掘削後に検出した。また、P14, P15, P28は掘形が深く、ほぼ垂直に掘り込まれている。SD1埋土上面で多数の掘り込みを確認できたことから、本遺構はSD1埋没後に一時期竪穴住居跡としての機能があり、さらに床面を整地するなどの改築を行った可能性が指摘できる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器5,780点、石器類4点、壁溝から土器55点、炉跡から土器7点、床面

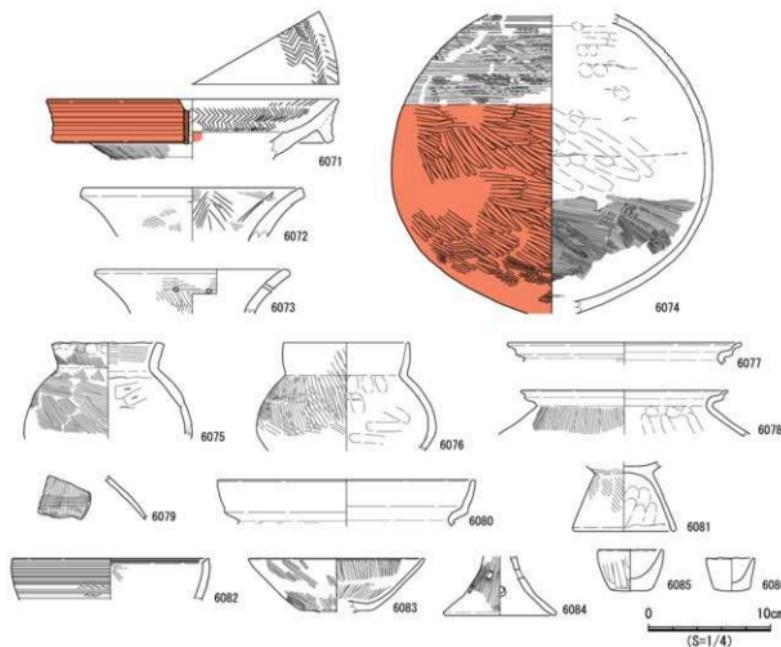


図 1772 SB486 遺物実測図

上の小穴から土器 203 点、掘形底面の小穴から土器 53 点が出土し、掘形周縁の溝状遺構 (SD1) からは遺物が出土しなかった。埋土中からは遺物が散在して出土し、床面に近いほど大きな土器片が出土した。床面上の小穴では P1 と P10 から遺物の出土が目立ち、掘形底面の小穴からはいずれも 10 点以下しか遺物が出土しなかった。出土土器の時期は V 期～IX 期に属し、そのうち VII 期～VIII 期の遺物が多く、他の時期の遺物は混入と考えられる。

**出土遺物** 6071 は VII 期壺 A5 類。口縁部が短く外反して立ち上がり、端部下端を大きく拡張する。口縁部内面には羽状文を施し、直下に段を設ける。端部外面には擬凹線を施し、赤彩、棒状浮文が認められる。6072 は VII 期壺 B2a 類。口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面を持つ。口縁部内面には先の細い工具による線刻が認められ、山形が幾重にも重なる形が複数描かれる。6073 は VII 期～IX 期壺。大きく外反する口縁部に 2箇所の穿孔が認められ、焼成前に形成されたものである。6074 は VII 期～VIII 期壺。胴部上半にはハケ調整の後に直線文を施す。文様に歪みが見られたり施文時の押圧が一定でなかったりして、やや粗雑な印象を受ける。最大径以下にはハケ調整後にミガキを施し、全体に赤彩が認められる。6075、6076 は VII 期壺 E3 類。ともに口縁部が短く外反する。6075 はナデによって端部に平坦面を形成し、一部で粘土が外方にはみ出す。6076 は器面に粗いハケ調整を施す。6077 は VII 期壺 D2b 類。口縁部が短く明確に屈曲し、上方がわずかに引き出される。6078 は VII 期 D

類。口縁部下段が大きく外に引き出され、上段が短く外反する。6079はVII期壺D類。胸部にヨコハケが認められる。6080はVII期～IX期壺。いわゆる有段口縁壺で、屈曲した口縁部が段をもって内湾気味に立ち上がる。形状は北陸系に類似するが、胎土は壺D類と共通する。6081はVII期～IX期壺D類。器壁の薄い脚部がハの字状に開く。6082はVII期高壺G3c類。口縁部外面に多条沈線を施し、その間にクシによる刺突文を加える。端部には内傾面を形成し、沈線が認められる。6083はVII期～VIII期高壺。壺底部は小さくなり、口縁部が大きく開く。壺底部にはわずかに段が認められる。6084は高壺脚部が円錐状に開き、裾部がわずかに内湾気味となる。透孔を千鳥状に配置する。6083と同一個体の脚部と考えられる。6085、6086はVI期～VII期手捏ねC類。6086は小型で、ともにユビナデ痕が明瞭に残る。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期～VIII期と考えられる。

#### SB487（遺構：図1773・1774、遺物：図1775）

**検出状況** 東部西側中央の豎穴住居跡密集域に位置する。東西両側は搅乱により失われ、南側でSB488、SB489を切る。また、埋土上面でSH024を検出し、検出面は若干硬化していた。なお、平面形は北辺、南辺ともに明瞭である。

**形状** 南北長約6.1mであり、北辺と南辺が平行することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。各層ともにブロック土を含み、層界の凹凸も顕著であることから、人為堆積と考えられる。また、後述するようにP5がSH024の掘形とするならば、本遺構の廃棄後、比較的短期間のうちにSH024が構築され、本遺構はその整地のために埋没した可能性がある。なお、住居の中央付近から南西側にかけては、埋土中に部分的に炭化物層を確認できた。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では方形周溝墓の埋土を検出しておらず、その埋土と本遺構に伴う埋土の識別が困難であった。床面では小穴7基を検出した。このうち、P3とP6は掘形が深く、P3では東側に傾斜した加工材を検出した。しかし、この加工材に伴う掘形は確認できず、P3の埋土は中央が窪む堆積であった。なお、P5はSH024を構成する柱穴（SH024-P6）が掘形の中央に位置し、P5の埋土は上下層ともにブロック土を含むことから、SH024-P6の掘形の可能性もある。また、P2とP4は長さ約1mの隅丸方形の穴であり、検出時の埋土が類似していた。いずれもブロック土を多く含むことから人為堆積と考えられ、P2の上層には焼土粒を確認した。これらの遺構の平面形は、住居床面で検出した方形周溝墓SZ179の埋土中に収まっていることから、本遺構に伴うものではなく、方形周溝墓の周溝の窪地を利用した土坑かもしれない。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,994点、石器類2点、小穴から土器230点、木製品1点が出土した。出土遺物の大半は小片で、時期が判別できたものはVII期に属する破片が多い。P3からは加工材が斜位で出土した。

**出土遺物** 6087はVI期～VII期壺A3類。口縁部が短く屈曲し、端部が内湾して立ち上がる。内面には凹面を作り出すためのナデの痕跡が残る。外面は端部直下に刺突が認められ、全面に煤が付着する。6088はVII期壺A3類。直立気味の頸部から口縁部が弱く屈曲し、端部を丸くおさめる。また、端部には刺突が加えられている。6089はVII期高壺D4類。内傾する端部と内面に多条沈線を施す。内面の

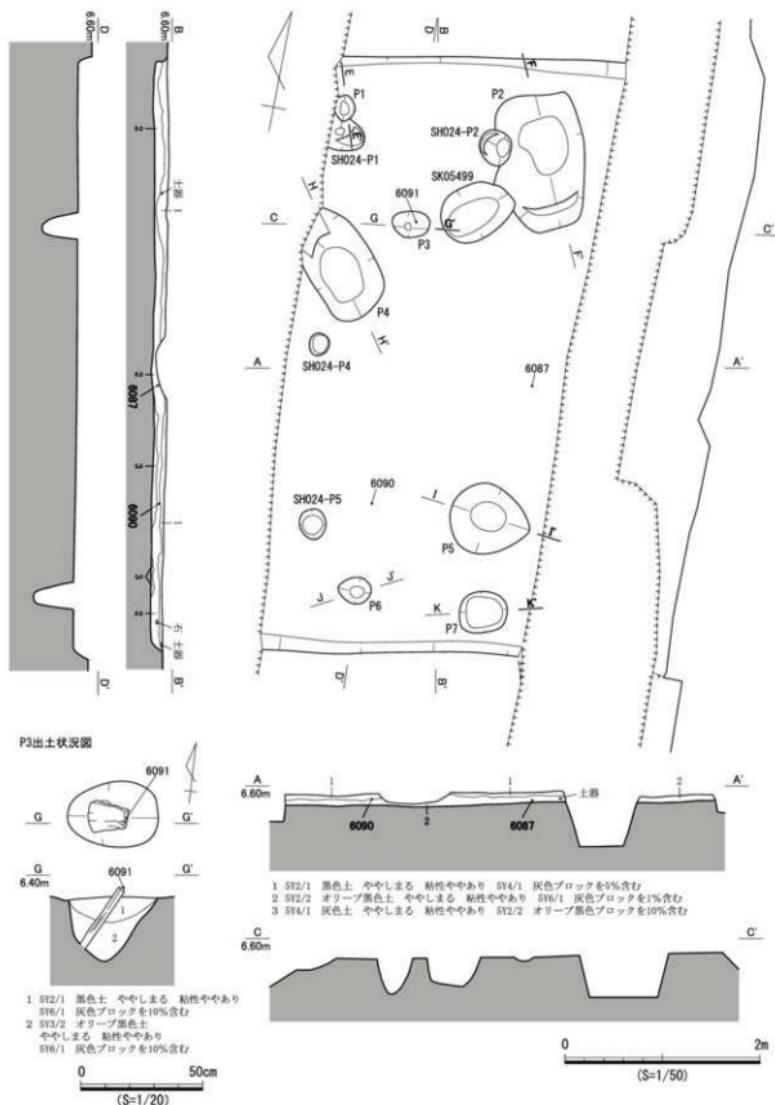


図1773 SB487遺構図(1)

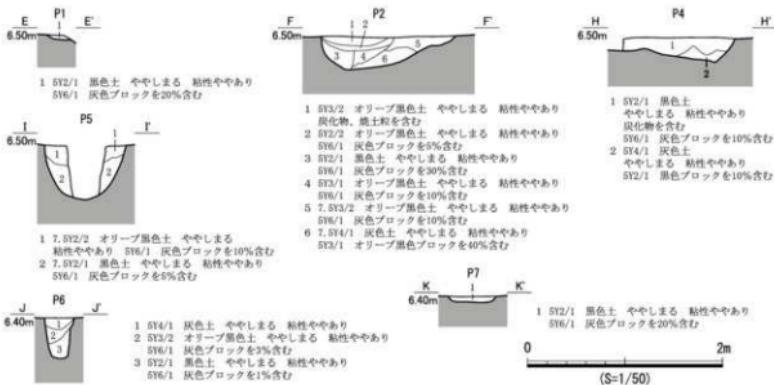


図 1774 SB487 遺構図(2)

多条沈線間に3帯の山形文を施す。6090はIV期高坏脚部。脚部がながらに円錐状に開き、端部の接地する面は平坦面を形成する。器壁が厚く、現状では透孔は認められない。内面にはケズリ調整が認められる。外面には細かいミガキが施されるが、全体的にやや歪んでいる。6091はその他の加工材。実測図の上端を下にして出土した。分割材で、断面形は直角三角形から台形状を呈し、上端は粗い加工がなされ、三角形状に尖る。

**時期** VII期～IX期のSH024に切られ、VII期のSB489を切ることと、出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

#### SB488 (遺構: 図 1776、遺物: 図 1777)

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は掠乱により失われ、北側をSB487に、東側をSB489に切られる。本遺構付近は遺構の重複が著しく、本遺構の検出は困難であった。

**形状** 遺構の南辺しか検出できていないため、形状は不明である。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。上層は炭化物を含む。埋土中にブロック土が多く含まれていることから、人為堆積と考えられる。

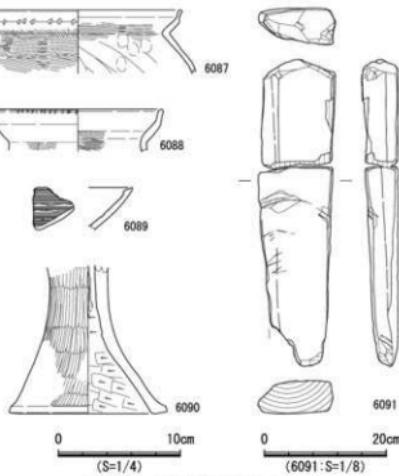


図 1775 SB487 遺物実測図

**床面** 本遺構直下に方形周溝墓の周溝が巡っており、床面の認定も難しかった。床面は平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴を3基検出し、いずれも平面形は明瞭に確認できたが、掘形は浅く単層であり、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,274点、石器類4点、小穴から土器2点が出土した。出土土器の多くはV期～Ⅶ期のものであるが、他の竪穴住居跡と比較するとV期のものがやや目立つ。IV期の遺物は混入の可能性が高い。

**出土遺物** 6092はV期～VI期壺K類。口縁部径10cm弱の小型品である。直立気味の頸部から口縁部が短く外反し、端部には顯著な平坦面を形成する。内外面ともに丁寧なミガキ調整を施し、精緻品といえる。口縁部内面には、端部際と屈曲部側にそれぞれ直線文帯を配置し、その間にヘラで文様を加える。斜格子状、弧状、鋸歯状などの文様が混在し、規則的な施文ではない可能性がある。器形そのものの丁寧な作りとは対照的に、施文に関しては雑である。端部には細かな刺突を加える。6093は

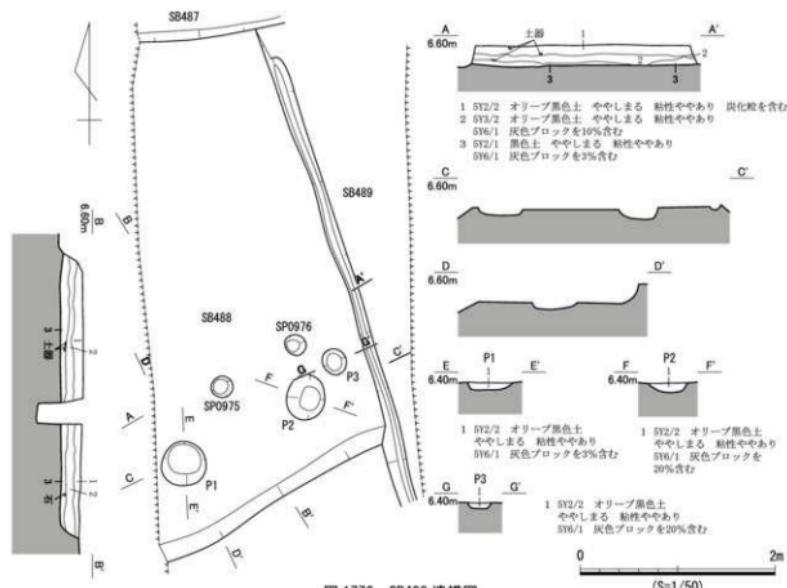


図 1776 SB488 遺構図

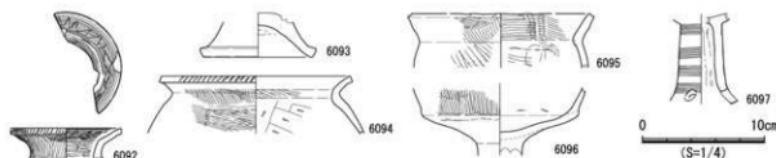


図 1777 SB488 遺物実測図

V期壺。台付壺の脚部片で、裾部が強く外反し、端部には顯著な平坦面をもつ。6094はV期甕B1b類。口縁部が短く外反し、端部に平坦面をもつ。端部には刺突を加える。内面にはケズリを施し、堅緻な作りの資料である。屈曲部にのみ煤が付着する。6095はVII期甕B2類。口縁部が短く屈曲し、端部は平坦となる。6096はV期高壺A2類。壺部は浅い皿状となり、口縁部が短く直立する。6097はV期高壺B2類。付根から透孔までは円柱状で、直線文帯を等間隔に4箇所に配する。透孔を3方向に配置し、透孔以下は外反する。

時期 VII期のSB487に切られるが、出土遺物の時期からV期～VII期と考えられる。

#### SB489（遺構：図1778、遺物：図1779）

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は攪乱により失われている。北側はSB487に切られ、西側でSB488を切る。本遺構付近は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。攪乱壁面を精査して平面形の確定に努めたが、誤認している可能性もある。

形状 遺構の西辺しか検出できていないため、形状は不明である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。ブロック土が混入し層界の凹凸が顯著であることから、人為堆積と考えられる。

床面 床面の認定も困難であったが、壁沿いに色調の濃い黒色土を帶状に検出したため、壁溝と判断

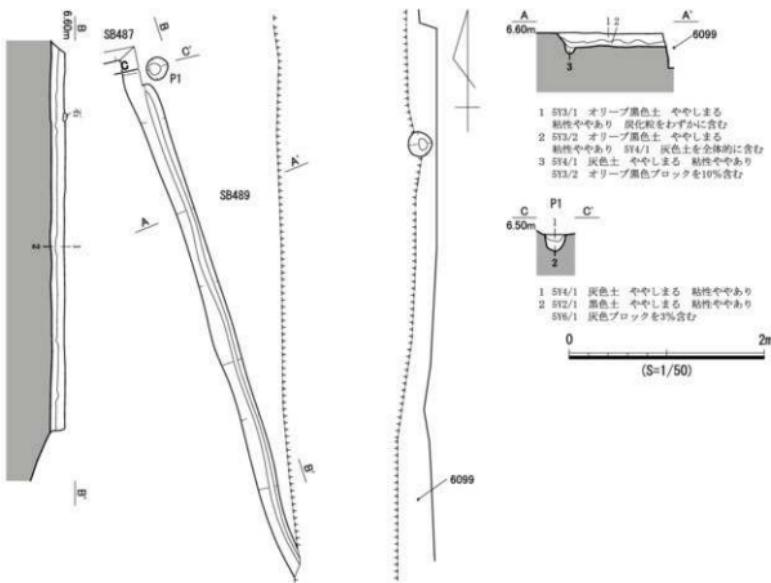


図1778 SB489 遺構図

した。床面は平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。なお、床面では掘形の浅い小穴を1基検出したが、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器172点、壁溝から土器3点が出土した。住居の南側にて粘土塊とやや残りの良い土器片が出土した。出土土器はVII期のものが多く、I期とIV期の土器片がわずかに出土したが、いずれも混入と考えられる。

**出土遺物** 6098はI期壺。沈線文系の壺の可能性がある。6099はVII期高坏H2類。坏部は碗状を呈し、内外面ともにミガキ調整を施す。外面端部直下には多条沈線を施す。

**時期** VII期のSB487に切られるが、出土遺物の時期からVII期と考えられる。

#### SB490（遺構：図1780、遺物：図1781）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、東側は搅乱により失われている。南側でSB491を切り、埋土上面でSH025を検出した。

**形状** 西辺と南辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈する考えられる。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。炭化粒とブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて1基の小穴とやや幅広の壁溝を検出した。小穴は浅く、壁溝は西壁中央付近で途切れている。

**遺物出土状況** 埋土中から土器64点、壁溝から土器43点、小穴から土器5点が出土した。埋土からの出土土器はVII期～VIII期のものが多いが、いずれも細片である。

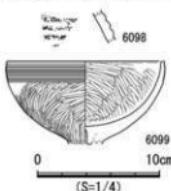


図 1779 SB489 遺物実測図

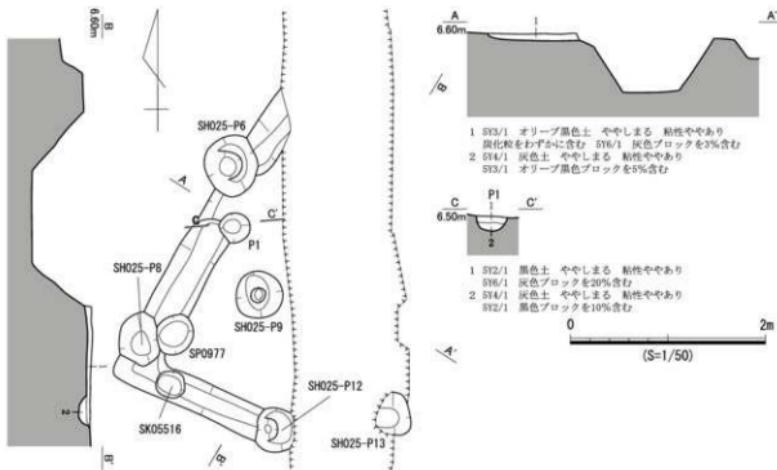


図 1780 SB490 遺構図

**出土遺物** 6100はVII期斐C2類。口縁部がくの字に屈曲し、やや内湾する。

端部は平坦である。

**時期** VII期のSB491を切るが、出土遺物の時期からVII期以降と考えられる。

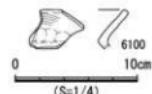


図 1781 SB490 遺物実測図

SB491（遺構：図 1782、遺物：図 1783）

**検出状況** 東部西側南寄り竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は搅乱により失われ、北東側をSB490に、南東側をSB492に切られている。本遺構周辺の遺構検出面の埋土は、全体的にV層に灰色土が混入する土であり、平面形の確定が困難であった。

**形状** 遺構の北辺と南辺のわずかな範囲しか検出できていないが、両辺はほぼ平行することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 単層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**床面** やや凹凸があり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面はブロック土を含む土で形成されており、南西側はそれを住居埋土と誤認して掘り過ぎてしまった。なお、この床面構成土は本遺構周辺に広く展開しており、SK05579として掘削した。つまり、SK05579の埋土は人為堆積であり、かつSB491の床面を構成する土であるといえる。床面では2基の小穴を検出したが、いずれ

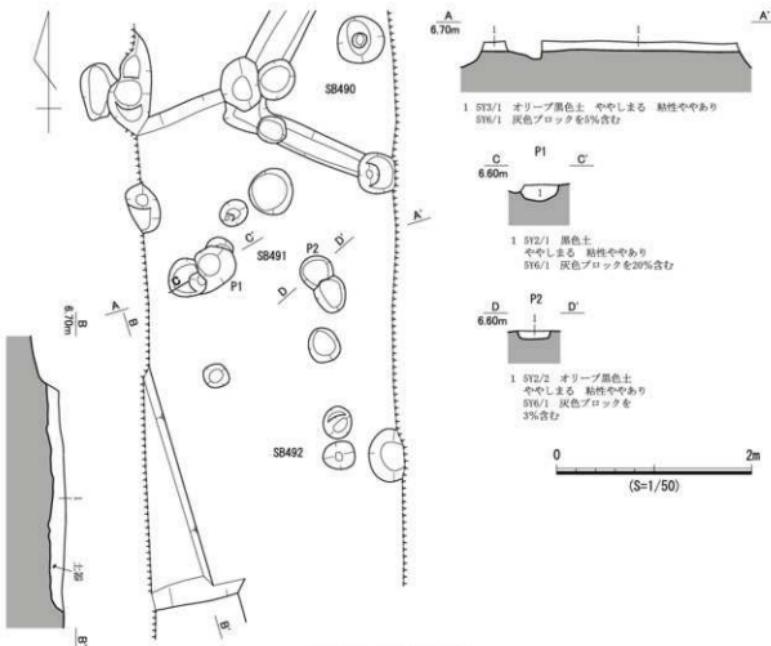


図 1782 SB491 遺構図

も掘形が浅く、単層である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 266 点、小穴から土器 17 点が出土した。埋土中の出土土器は VII 期の遺物が多い。

**出土遺物** 6101, 6102 は VII 期甕 B3 類。6101 は内外面ともにナデ調整を施し、同様にナデによって凹凸のある平坦面を形成する。6102 は口縁部がくの字に屈曲し、内外面ともに粗いハケ目が認められる。端部には平坦面を形成し、下端にはユビナデ痕が残る。6103 は VII 期鉢 B 類。口縁部がやや内湾し、端部を丸くおさめる。6104 は VII 期高杯 D3 類。口縁部内面及び端部平坦面に多条沈線を施す。

**時期** 出土遺物の時期から、VII 期と考えられる。

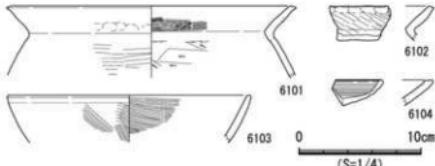


図 1783 SB491 遺物実測図

SB492 (遺構: 図 1784・1785、遺物: 図 1786)

**検出状況** 東部西側南寄り竪穴住居跡密集域に位置する。中央を搅乱により失われ、北側で SB491 を切る。平面形は比較的明瞭であった。

**形状** 南北長約 5.3 m であり、柱穴配置から南北に長い長方形を呈すると考えられる。深さは約 0.1 m で、壁面の傾斜は西側がやや緩やかで、南北側が急である。

**埋土** 2 層に分層した。層界の凹凸が顕著で、埋土中に炭化物やブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて 12 基の小穴を検出し、P4、P5、P11 は土層断面で柱痕跡を確認した。また、P2 は掘形が深く、壁面の傾斜も急である。平面的な位置関係から P2、P9、P10、P12 が柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 1,321 点、石器類 1 点、小穴から土器 106 点が出土した。埋土中の出土土器は VI 期～VII 期のものが多く、わずかに IV 期の土器片が混入している。なお、P7 から VII 期甕 D 類 (6110)、P9 から VI 期～VII 期甕 A 類 (6108) が出土した。

**出土遺物** 6105 は IV 期壺 A1 類。口縁部が屈曲して内傾し、1 条の凹線が認められる。6106 は IV 期壺 H 類。斜格子文を施した上に沈線が 2 条認められる。黒褐色を呈する胎土が特徴的である。6107 は VI 期～VII 期甕脚部。脚部は完存し、やや内湾する。端部は接地面に対して平坦になるよう形成され、粘土の一部が内側にはみ出している。6108 は VI 期～VII 期甕 A3 類。口縁部がくの字に屈曲し、端部はやや内湾して直立気味に立つ。6109 は VII 期甕 B3 類。口縁部がくの字に屈曲し、内面には粗いハケ目が認められる。外面及び端部平坦面は断続的なナデによって形成される。6110 は VII 期甕 D2b 類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が短く外反する。6111 は VII 期甕 D3 類。口縁部が大きく外方に拡張され、端部も強く外反して開く。6112 は VII 期高杯 C4d 類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面には多条沈線を施し、沈線間に山形文を 2 带加える。6113 は砥石。扁平な亜円礫の平坦面を砥面として利用し、割れた面に煤が付着している。

**時期** 出土遺物の時期は VI 期～VII 期であるが、VII 期の SB491 を切ることから VII 期と考えられる。

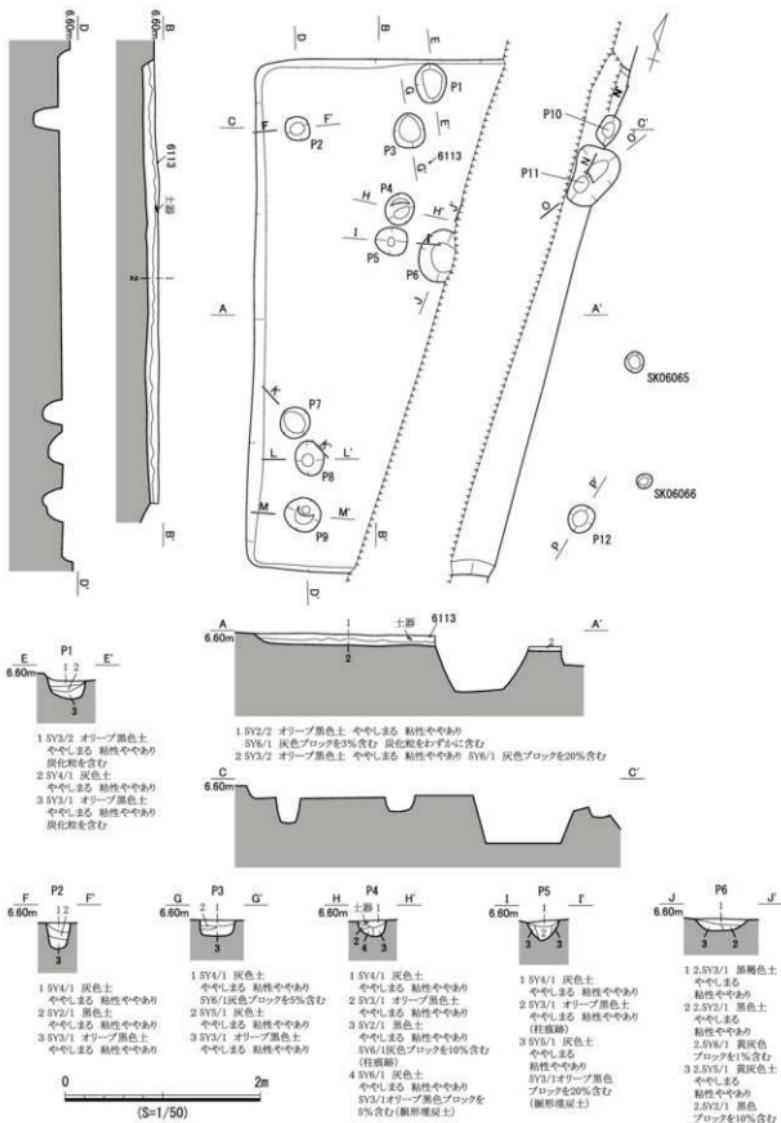


図 1784 SB492 遺構図 (1)

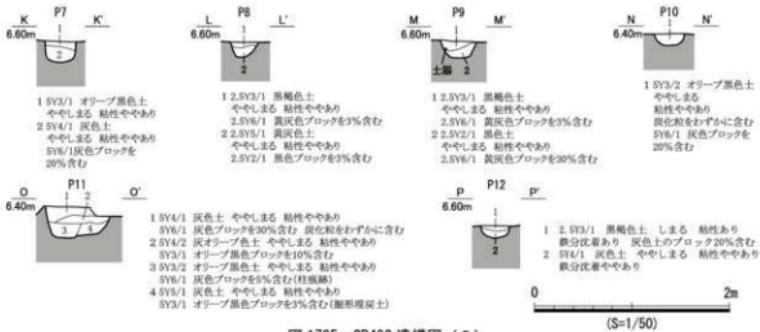


図 1785 SB492 遺構図(2)

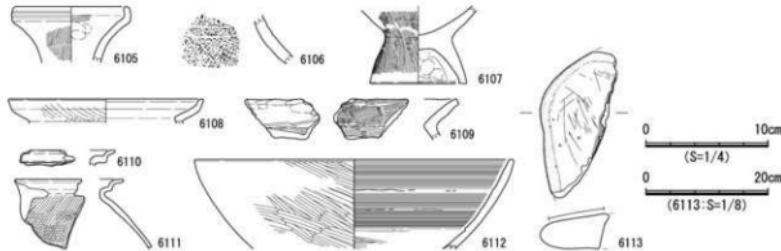


図 1786 SB492 遺物実測図

## SB493 (遺構: 図 1787・1788、遺物: 図 1789)

**検出状況** 東部西側南寄り竪穴住居跡密集域に位置し、遺構の大半は調査区域外へとのびている。平面形は、北西側と北東側は明瞭であったが、南東側は不明瞭であった。

**形状** 北西～南東長約4.7mであり、方形を呈する。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。住居の北側は、床面下に方形周溝墓の周溝が位置し、床面の認定が難しく若干掘りすぎてしまった。床面では小穴を14基確認し、そのうちP1のみ土層断面で柱痕跡を確認した。P1を柱穴と仮定するならば、柱痕跡は確認できていないものの位置的にP1に対応するP2も柱穴となる。なお、住居南西隅で検出したP3は平面形が明瞭であり、調査中は壁溝と考えていたが、他の壁面沿いでは確認できなかつたため浅い土坑とした。

**遺物出土状況** 埋土中から土器404点、小穴から土器45点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多い。

**出土遺物** 6114はVI期～VII期壺C2類。口縁部が外反し、端部付近でやや内湾する。器壁は厚く、端部には顯著な平坦面をもつ。6115はVI期～VII期高壺C類。脚据部が内湾し、外面に煤が付着する。6116はVI期～VII期高壺C3b類。口縁部内面を肥厚し、その上に多条沈線を施す。6117はVI期～VII期高壺C3c類。口縁部内面に多条沈線を施す。6118はVII期高壺の脚部。小型高壺脚部で穿孔が複数個所

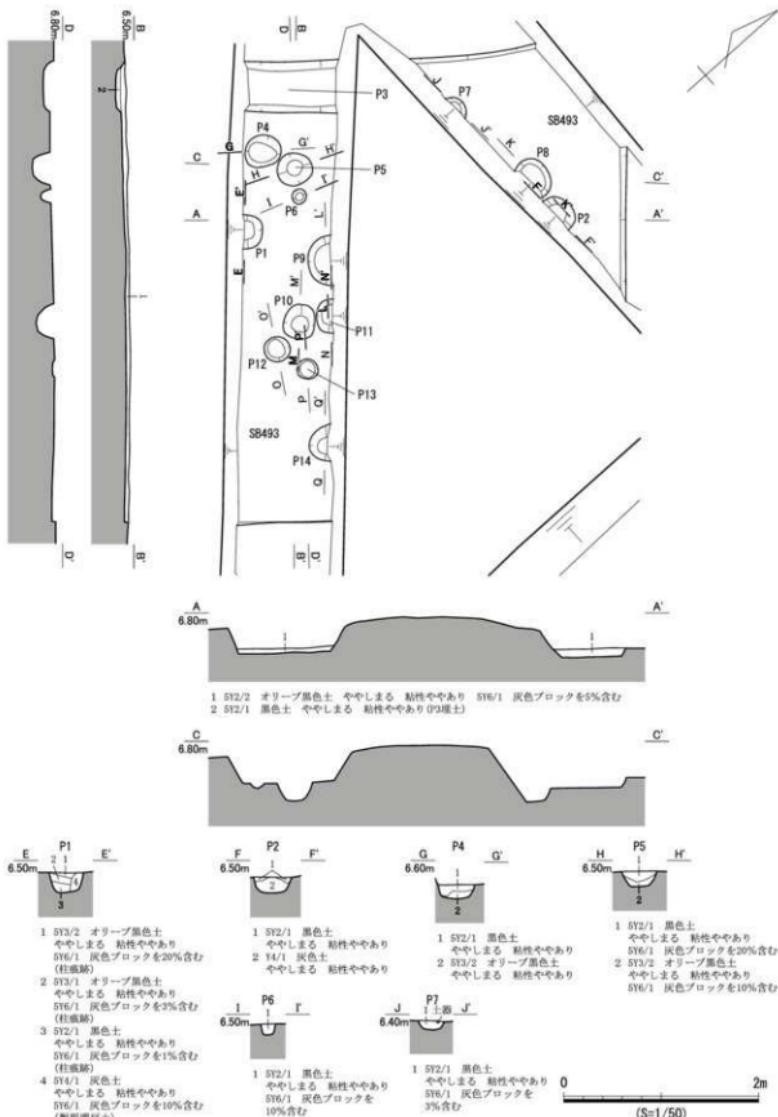
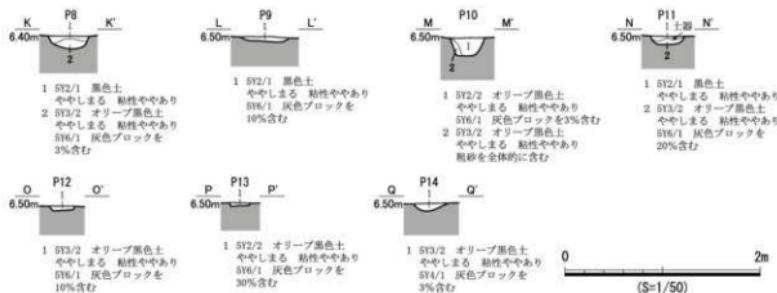


図1787 SB493 遺構図（1）



認められる。残存部位が限られるために全容は不明だが、焼成前に形成されたと考えられる小孔が、現状では3方向、2段に確認できる。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB494 (遺構: 図 1790・1791、遺物: 図 1792)

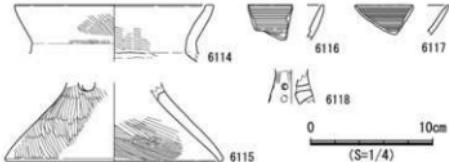
**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、東西両側を搅乱により失われている。平面形は不明瞭であったが、搅乱壁面を精査したところ、炭化物層が薄く帯状に堆積していることを確認し、その上下層の広がりを根拠に平面形を確定した。なお、検出時において、住居南側に白色粘土がブロック状に散在していた。

**形状** 南北長約4.5mである。北辺と南辺は平行せず不整方形を呈し、南西隅は鈍角気味に広がる。住居の北辺沿いの深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 9層に分層した。1～7層が覆土、9・10層が掘形埋土である。全体的にブロック土を多く含み、最上層(1層)と床面直上層(7層)が特に多い。2層は炭化物や炭化粒の集積層であり、北壁際と中央付近から南側を除いて全面に確認できた。2層にはわずかに炭化材も確認でき、焼土粒も含まれていた。炭化材は草本類が炭化したもので、その向きは不規則で編んであるようには見えなかった。その直下に焼土ブロック集積層である3層を確認し、炭化粒が含まれていた。炭化材の遺存状況は極めて悪いが、全体的に広がる炭化粒と焼土集積層の存在から、焼失家屋と判断した。

**床面** 平坦であり、貼床(整地土)がある。床面にて小穴を14基検出し、およそ南北方向に列状に並んでいるように見える。小穴のうち、P1とP13は土層断面で柱痕跡を確認し、P1は位置的に柱穴と認定できるかもしれない。壁溝は残存している床面を全周しており、その掘形は深い。なお、P7は壁面に平坦面を有する穴であり、壁溝を切っている。炉跡は確認できなかった。

**掘形** 床面には明確な硬化面を確認できなかったが、床面を構成する土は灰色ブロック土を含んでいたため、整地していると判断した。貼床(整地土)は比較的厚く、ブロック土を含む。掘形底面から



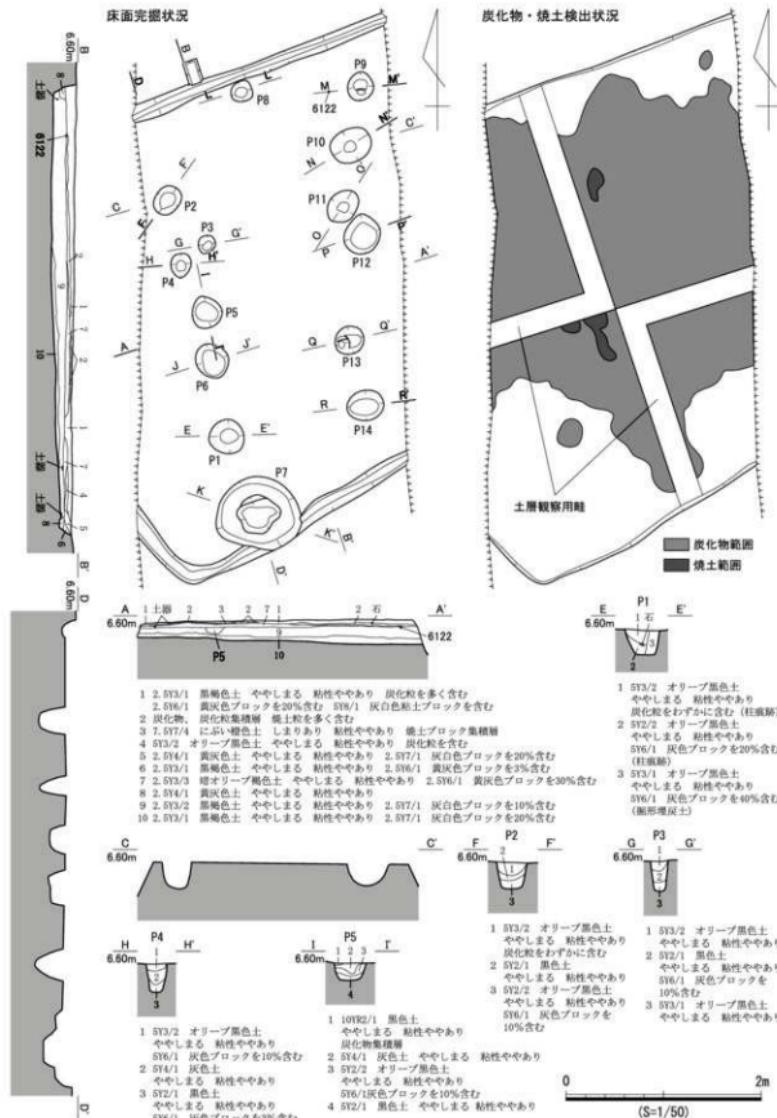


図 1790 SB494 遺構図（1）

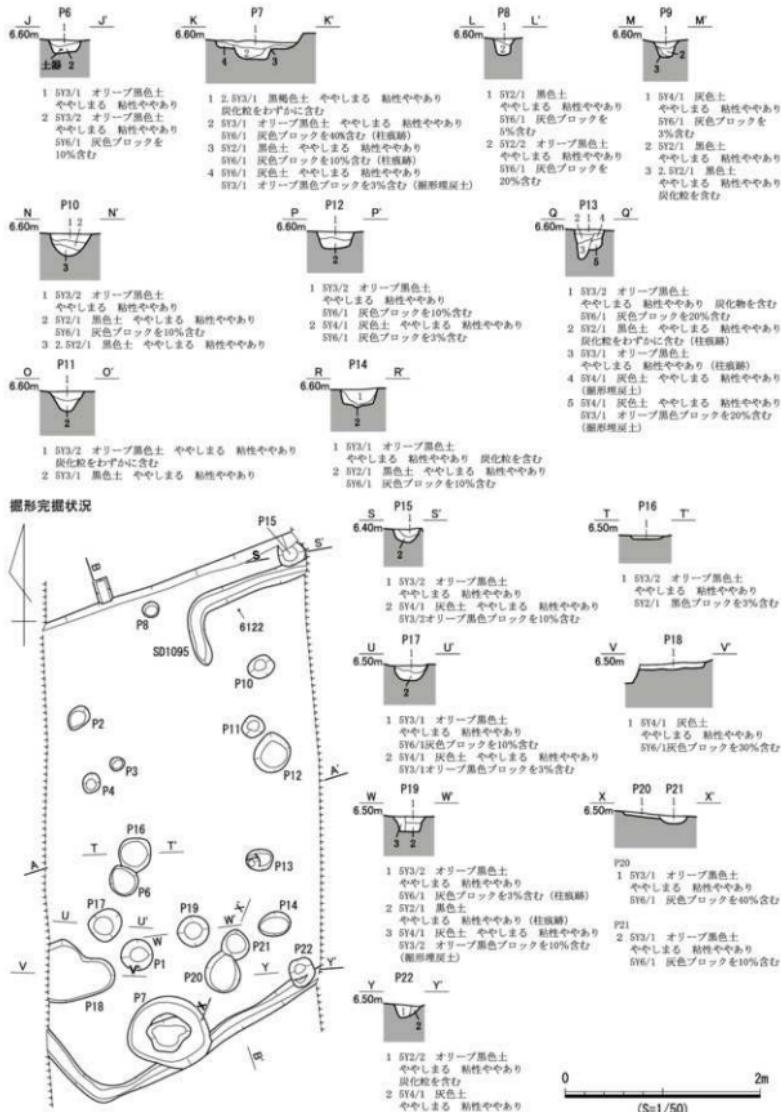


図 1791 SB494 遺構図（2）

は小穴を8基検出し、そのうちP19のみ土層断面で柱痕跡を確認した。また、北壁沿いで屈曲する細長い溝SD1095を検出したが、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 住居埋土と掘形埋土から土器2,158点、石器類1点、小穴から土器167点が出土した。また、炭化材とともに炭化した種子や線刻土器(6121)なども出土している。埋土中の出土土器は、VI期～VII期のものが主体で、IV期の土器片もわずかに出土した。また、埋土上層ではIX期の高壙や甕が出土したが、混入の可能性がある。

**出土遺物** 6119はIV期壺口類。口縁部が大きく外反し、端部には顯著な平坦面を有する。端部にはヘラによって押圧を加え、凹凸を形成する。内面は剥落が著しいものの、外面はナデによって丁寧に器面調整が施される。頸部には細い沈線が1条認められるが、それ以下の状況は不明である。本器種の胴部片はこれまでにもわずかに確認されているが、口縁部が見つかるのは稀である。6120はIV期壺A2類。胴部上半に波状文及び直線文が交互に施文され、その上から縱方向の直線文が加えられる。6121はVI期～VII期壺G3a類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部には顯著な平坦面をもつ。外面には細い線描によって円形の文様が描かれるが、その後のミガキによって、一部が途切れている。6122はVI期～VII期壺K類。小型の壺胴部には太く明瞭な沈線によって斜格子文が施文される。6123、6124はともにIV期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部にはタタキを加える。胴部にはタタキ調整の後にハケによる調整が加えられる。6125はIV期甕A5類。低い脚台部がハの字に開く。胴部にはハケ調整が施されるが、脚部には調整痕は認められない。6126、6127はVI期～VII期甕A3類。口縁部が外反し、端部付近で内湾する。6128はVI期～VII期甕C1類。口縁部がわずかに内湾し、外面には煤が付着する。6129はVII期甕B4類。口縁部が外反して長く立ち上がる。端部はナデによってわずかに平坦面を形成する。6130はVII期甕D1b類。口縁部下段は強く外方に引き出され、上段は短く屈曲し、凹面を形成する。6131はVII期甕E3類。口縁部が外反し、胴部はほぼ球形形状に丸くなり、低い脚部がつく。胴部外面からも輪積み痕が確認でき、形状を整える程度で丁寧な器面調整が施された形跡はない。口縁部を除いて

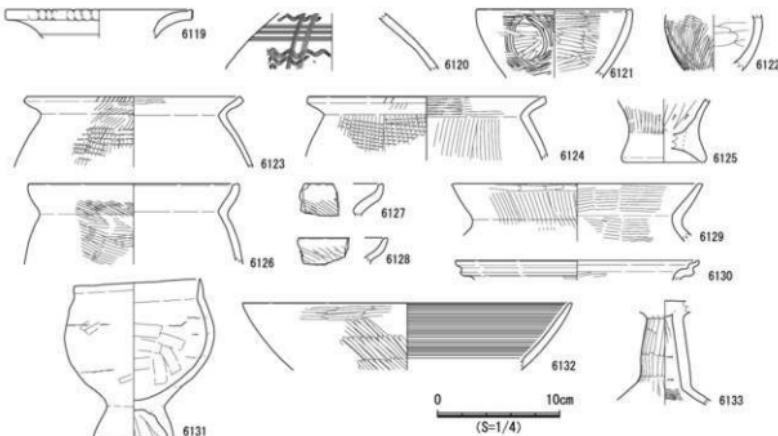


図1792 SB494 遺物実測図

てほぼ完存するものの、全体的に粗雑な作りの資料である。6132はVI期～VII期高壙C2c類。口縁部が内湾し、内面には多条沈線を施す。6133はIX期高壙。脚部が円錐状に開くが、中央部がわずかに膨らむ。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB495（遺構：図1793、遺物：図1794）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、中央と東側は擾乱により失われ、南北側は調査区域外へとのびている。平面形はやや不明瞭であったが、底面が平坦で小穴を検出したことから竪穴住居跡と判断した。

**形状** 北西辺の一部しか検出できていないため、形状は不明である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。なお、本遺構の東側に位置するSB496と主軸がほぼ一致するものの、床面の検出標高が異なるため、別遺構と判断した。

**埋土** 単層であり、円礫をわずかに含む。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴1基を検出したが、掘形は浅く、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器136点、小穴から土器4点が出土した。埋土中の出土土器はVI期のものが多い。

本遺構はSZ181、SZ182、SZ184の周溝埋土上層に位置するためか、IV期の壺や甕の破片が混入している。

**出土遺物** 6134はVI期甕D1b類。屈曲部から口縁部下段が外方に引き出され、外面には刺突が認められる。6135はVI期高壙B3b類。口縁部が壙底部から強く外反し、外面ともに煤が付着する。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

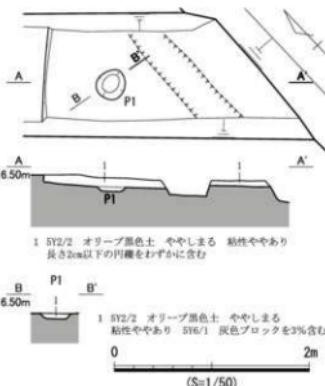


図1793 SB495 遺構図

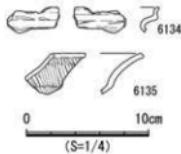


図1794 SB495 遺物実測図

#### SB496（遺構：図1796、遺物：図1795）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は擾乱により失われている。東側でSB497を切り、北側はSK05526に、南側はSB498に切られる。平面形は不明瞭で、検出時には何度も精査を繰り返した。

**形状** 北東辺と南東辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。東辺はやや内側に反り気味で、深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。東壁面沿いで小穴を2基検出したが、いずれも浅く、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器73点、小穴から土器2点が出土した。埋土中の出土土器はVI期のものが多い。

**出土遺物** 6136はVI期～VII期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、わずかに外反する。端部は平坦となる。

**時期** 重複するSB497、SB498とともにVI期～VII期であることと、出土遺物の

時期から、VI期～VII期と考えられる。

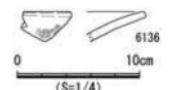


図 1795 SB496 遺物実測図

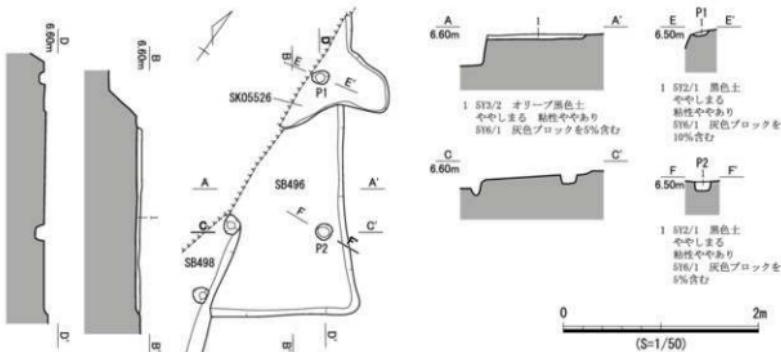


図 1796 SB496 遺構図

SB497（遺構：図1797、遺物：図1798）

**検出状況** 東部西側南寄りの堅穴住居跡密集域に位置し、南側はSB501に、西側はSB496、SB498、SB500に切られる。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

**形状** 遺構の北西隅のみしか検出できていないが、およそ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ブロック土の混入が目立つことから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて5基の小穴を検出したが、いずれも浅く、柱穴と想定できる遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器394点、小穴から土器18点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、わずかにIV期の土器片が混入している。

**出土遺物** 6137はVI期甕D1b類。端部に刺突を加える。6138はVI期～VII期甕A3類。口縁端部が内湾し、端部にはわずかな平坦面をもつ。6139はIV期高杯。口縁部が内湾し、肥厚する端部には平坦面を形成する。端部直下には3条の凹線が認められる。6140はVI期高杯C3b類。口縁端部を肥厚し、多条沈線を施す。6141はVII期高杯H類。脚部が直線的に開き、端部には平坦面を形成する。外面には3条1組の多条沈線間に大振りの連弧文を配する。端部には外傾面を形成し、多条沈線を施す。6142はVI期～VII期手程ね土器D類。全形は不明だが、胴部は丸く形成され壺形を呈すると考えられる。

**時期** V～VII期のSB501とVI～VII期のSB496、SB498に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

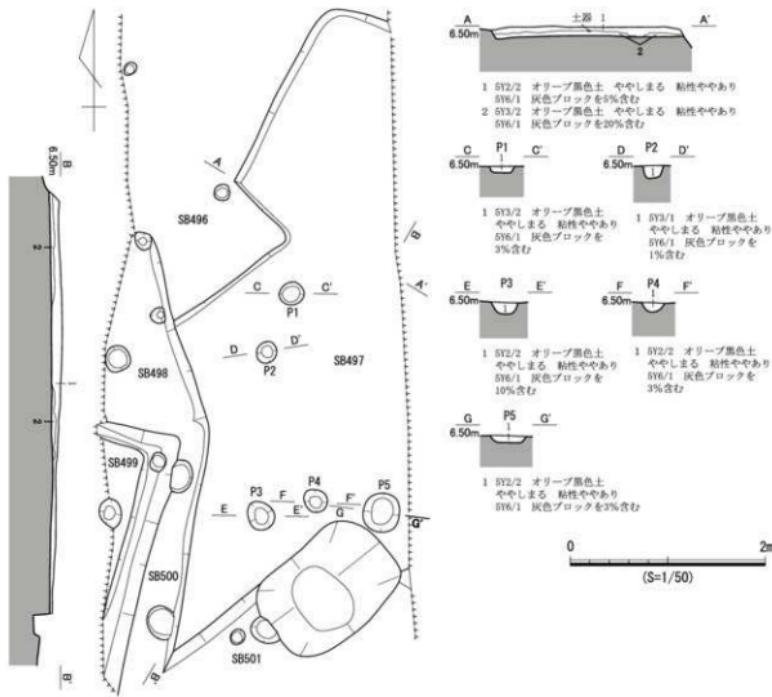


図 1797 SB497 造構図



図 1798 SB497 造物実測図

## SB498 (造構: 図 1799、遺物: 図 1800)

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は擾乱により失われている。北側でSB496を切り、南側でSB500に切られる。平面形は比較的明瞭であった。

**形状** 造構の大半が調査区域外に位置するため、形状は不明である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。上層は炭化粒をわずかに含み、下層にはブロック土が混入する。層界の凹凸もみられることから、人為堆積と考えられる。

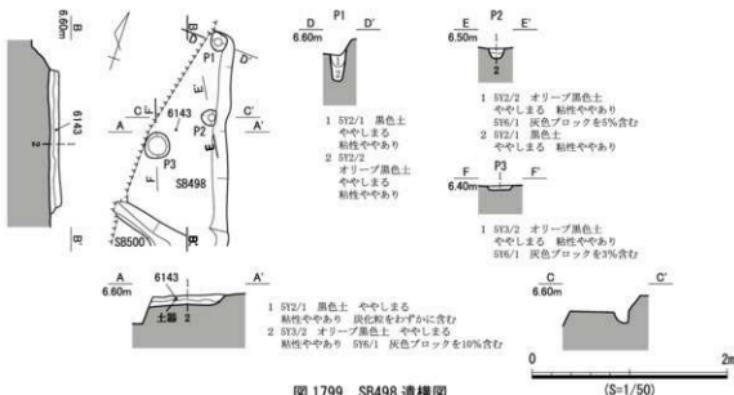
**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面の認定は困難であり、小穴が明確に見える深さまで掘削したため、若干掘りすぎたかもしれない。床面上では小穴を3基検出

したが、柱穴といえるような穴は確認できなかった。なお、北端のP1は直径が小さいものの、深くて壁面がほぼ垂直であった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器110点、石器類1点、小穴から土器9点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多い。

**出土遺物** 6143はVII期壺A類。頸部直下に粘土を貼り付けて突帯を形成し、ナデによって調整を施した後に赤彩を施す。突帯下方には大振りの山形文が認められ、赤彩は認められない。6144はVI期～VII期鉢B2類。口縁部が直線的に外傾し、端部を肥厚して外面に粘土がはみ出る。6145はVI期～VII期鉢A3a類。口縁部がわずかに内湾し、外面にはわずかに煤が付着する。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。



(S=1/50)



SB499（遺構：図1802、遺物：図1801）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住跡密集域に位置し、西側は擾乱により失われている。本遺構はSB500の床面で検出した遺構であり、平面形は明瞭であった。

**形状** 遺構の北辺と東辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層でき、下層にブロック土を含む。本遺構を切るように、ほぼ同じ方位でSB500が構築されていることから、本遺構は建て替えに伴い人為的に埋め戻されている可能性がある。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面では小穴1基と壁溝を検出した。小穴は掘形が浅く、壁溝は北辺沿いのものに比べて東辺沿いのものがやや幅広である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器79点、石器類1点、壁溝から土器14点、小穴から土器3点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、IV期の破片がわずかに混入している。なお、壁溝

からVII期高坏C類(6146)が出土した。

**出土遺物** 6146はVII期高坏C4c類。やや内湾する口縁部内面に多条沈線を施す。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

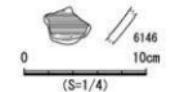


図 1801 SB499 遺物実測図

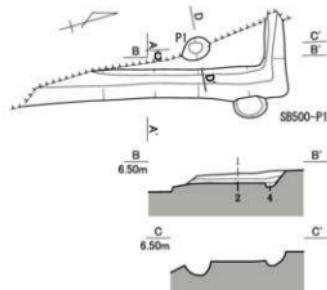


図 1802 SB499 遺構図

- SB500 (遺構: 図 1803、遺物: 図 1804)
- 検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は擾乱により失われている。東側でSB501を切り、本遺構の床面でSB499を検出した。
- 形状** 遺構の北東隅のみしか検出できていないが、方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。
- 埋土** 2層に分層した。2層はブロック土を含むため整地土の可能性を検討したが、1層下では遺構を検出できず、2層下まで掘削した。埋土は人為堆積と考えられる。
- 床面** 平坦であり、貼床(整地土)、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴3基を検出した。いずれも東辺に沿っており、掘形は浅く、柱穴と想定できる遺構はない。
- 遺物出土状況** 埋土中から土器353点、小穴から土器5点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、IV期、V期、VII期の遺物がわずかに混入する。

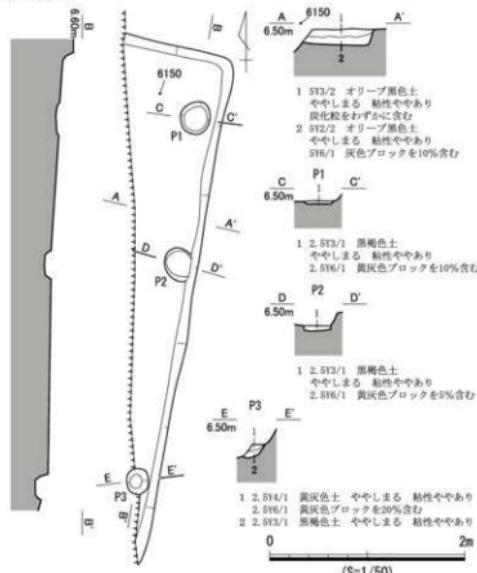


図 1803 SB500 遺構図

**出土遺物** 6147はII期壺B類。直線文と波状文の組み合わせによって加飾される。6148はVI期甕A3類。口縁部が外反し、端部付近が直立して受口状となる。端部には内傾する平坦面をわずかに形成する。外面端部直下には3条の沈線を施し、その下方に刺突を加える。6149はVII期～VIII期甕A4類。口

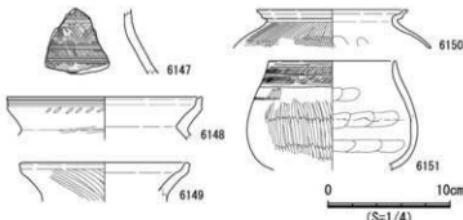


図 1804 SB500 遺物実測図

縁部が外反し、端部付近でわずかに内湾する。端部外面には擬凹線状の凹みが認められる。6150はVII期甕D類。口縁部の屈曲は弱く、大きく外方に開く。6151はV期高杯I2類。杯部は碗状を呈し、口縁部が外反して直立する。端部直下に直線文とヘラによる刺突を2帯配す。

**時期** VII期のSB499を切ることと、出土遺物の時期から、VII期～VIII期と考えられる。

SB501（遺構：図 1805・1806、遺物：図 1807）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側と中央を擾乱により失われ、北西隅をSB500に、南側をSB502に切られている。平面形は比較的明瞭であった。

**形状** 北東辺と北西辺のみしか検出していないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈する考えられる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。1層が覆土、2層が掘形埋土である。1層は炭化粒を含み、土器片が多い。ブロック土も混入していることから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）がある。本遺構の下には複数の方形周溝墓の周溝が存在し、床面の認定に手間取ったが、小穴の検出面を床面とした。床面上にて5基の小穴を検出し、そのうち、P3～P5の掘形が深い。しかし、平面的な位置関係から柱穴の想定は難しい。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

**掘形** 床面では明確な硬化面を確認できなかったが、全体的に黒色土が広がっていたので貼床（整地土）と判断した。整地土はやや大きめの円礫をわずかに含んでおり、掘形底面にて小穴2基を検出した。P6は竪穴住居跡の北東隅に位置する隅丸方形を呈する土坑で、底面は緩やかに湾曲している。その埋土は2層に分層でき、層界の凹凸が著しいことから人為堆積と考えられる。本遺構の主軸は竪穴住居跡とほぼ一致するものの、本遺構に伴う遺構かどうかは定かでない。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2465点、石器類5点、小穴から土器243点、石器類1点が出土した。埋土中の土器は1層から散在して出土しており、V期～VII期のものが多く、II期とIV期の遺物も混入している。住居跡の南辺付近では残りの良い高杯B類（6164）が口縁部を下にして出土し、その西側で被熱した赤鉄鉱が出土した。

**出土遺物** 6152はV期壺。平底の底部で器壁が厚く、外側に突出する。6153はVI期～VII期壺A2類。口縁部が大きく外反し、端部をわずかに下方に拡張する。端部には複数の擬凹線を巡らせ、3個1対の円形浮文を3方向に配置する。内面は磨滅が著しく、文様や段の有無は不明である。頸部直下には直線文が認められる。6154はIV期甕E類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。指頭のユビナ

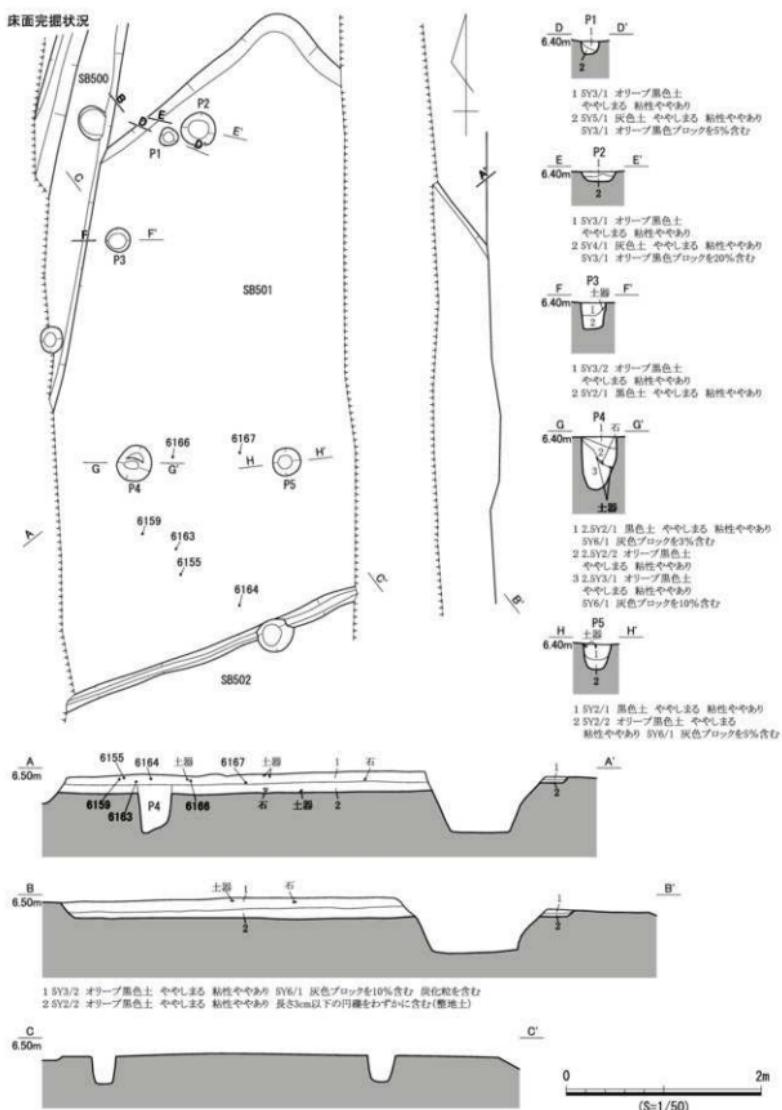


図 1805 SB501 遺構図 (1)

デ痕、押圧痕が各所に残る。6155はVI期甕E類。口縁部が短く屈曲し、端部を丸くおさめる。ユビナデによる整形のため器面にはユビの凹凸が残り、粗雑な作りの印象を受ける。6156はIV期甕D類。口縁部が短く屈折し、端部を上下に拡張する。端部には回線が認められる。6157はIV期甕E類。底部の中央に焼成後の穿孔が認められ、その周辺には不定方向のヘラケズリが認められる。6158はV期甕A2a類。口縁部が強いヨコナデとともに屈曲して直立し、屈曲部内面には顕著な凹面を形成する。端部には内傾する平坦面をもつが、口縁部外面及び胴部に加飾は認められない。6159はV期甕A2a類。口縁部が強いヨコナデによって短く明瞭に屈曲する。頸部には直立する部位が認められ、端部内面には顕著な平坦面を形成する。端部はつまみあげたようにやや尖り、下端には刺突を加える。胴部には直線文と波状文を施す。6160はV期甕E1類。口縁部は短く外反し、端部には外傾する平坦面を形成する。最大径の位置は胴部中央から上方になり、底部に向けて細くなる。底部は突出して外側にも拡張される。6161はVI期～VII期甕E類。手捏ねによる小型の甕脚部で、各所にユビナデの痕跡が残る。6162はVII期甕D2b類。口縁部が屈曲するが、上下段とともに大きく外方に開く。6163はVI期～VII期鉢A4c類。口縁部の立ち上がりが直線的で、端部にはわずかな平坦面をもつ。胴部径は口縁部径よりも

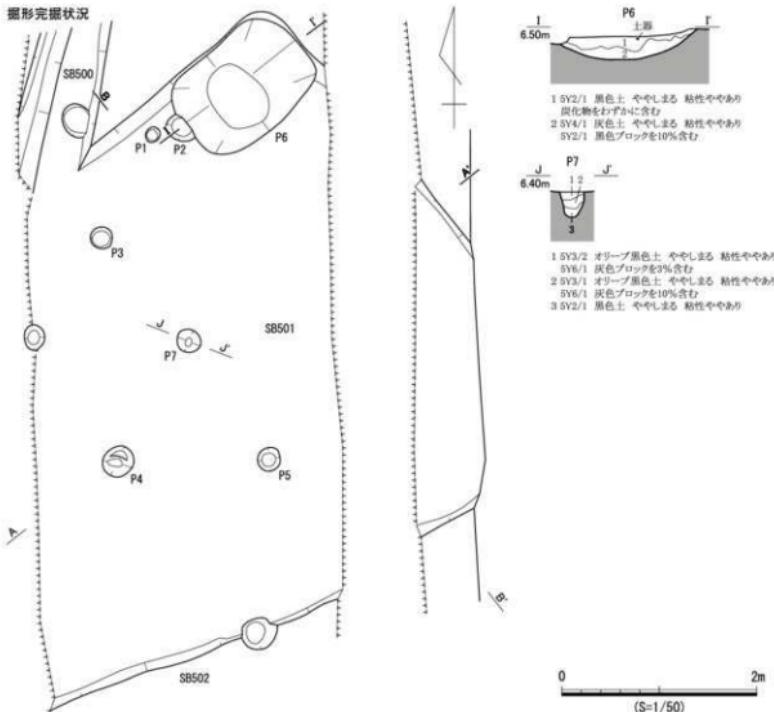


図1806 SB501 遺構図(2)

大きくなり、器面に文様は認められない。6164はV期高壺B3b類。壺部は浅い皿状を呈し、口縁部が短く強く外反する。内面の屈曲はやや不明瞭で、端部を丸くおさめる。屈曲部の外面には顯著な稜が形成される。内外面ともに丁寧なミガキによって器面調整を施している。6165はV期高壺B類。中空の脚部が円錐状に開き、透孔付近を境に大きく外反する。6166はV期高壺B類。壺底部から脚部が細く円錐状に伸び、裾部は外反して大きく開く。透孔は3方向に配置される。6167はV期器台A1類。円柱状の脚部から受部が大きく開く。脚裾部は、3方向に配置された透孔を境として外反気味に大きく開き、端部にはわずかに平坦面が認められる。6168、6169はともにII期壺A2類。6168は肩部片で、二枚貝による直線文が認められる。6169は頸部下方に6168と同様の直線文が認められる。

**時期** VII期～VIII期のSB500、VII期のSB502に切られることと、出土遺物の時期から、V期～VII期と考えられる。

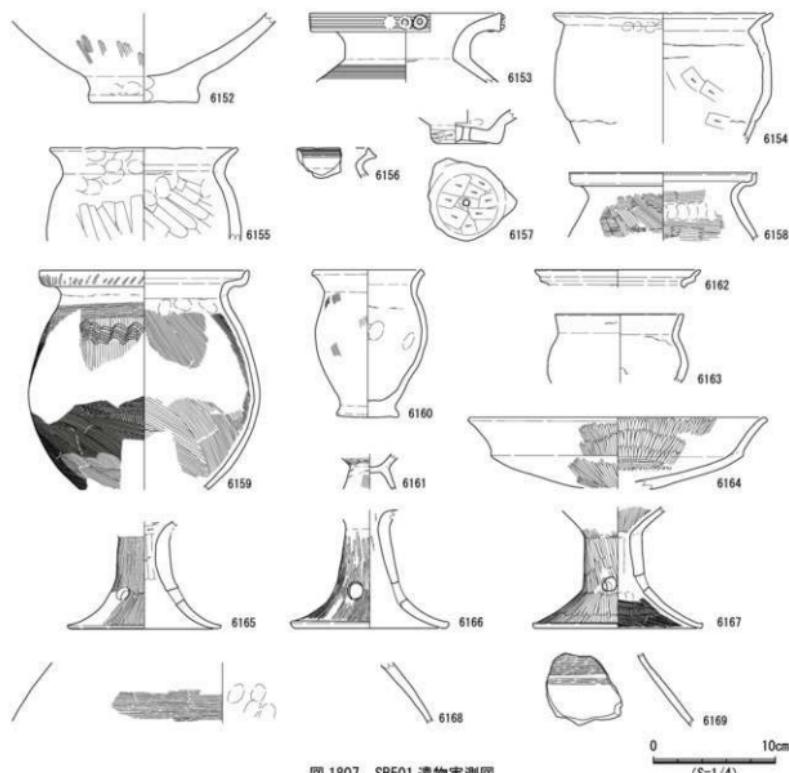


図 1807 SB501 遺物実測図

SB502（遺構：図1808、遺物：図1809）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側と中央は搅乱により失われ、北側でSB501を切り、南側でSB503に切られている。平面形は不明瞭で、東西両側の搅乱壁面を数回精査して平面形を確定した。

**形状** 遺構の北辺のみしか検出できていないため、平面形は不明である。北辺は直線的にのび、深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、上層に炭化粒を含む。層界の凹凸がみられ、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床、炉跡は確認できなかった。床面上にて3基の小穴を検出したが、いずれも柱穴の推定は困難である。壁溝は北壁沿いで検出し、掘形底面は丸みを帯びている。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,236点、石器類1点、小穴から土器21点が出土した。床面の中央南東寄りで用途不明石製品（6179）が、中央北西寄りで直径約5cmの赤鉄鉢が出土した。埋土中の出土遺物はⅦ期～Ⅷ期のものが多く、P2からⅧ期壺B類（6172）が出土した。

**出土遺物** 6170はⅦ期壺D3b類。口縁部が外反して大きく開き、端部付近でわずかに屈曲する。端部外面が直立し、直線文を施す。6171はⅧ期壺。浅い胴部から口縁部が大きく開き、内湾して立ち上がる。6172はⅧ期壺E3類。口縁部が短く屈曲し、端部にはナデによる平坦面が形成される。

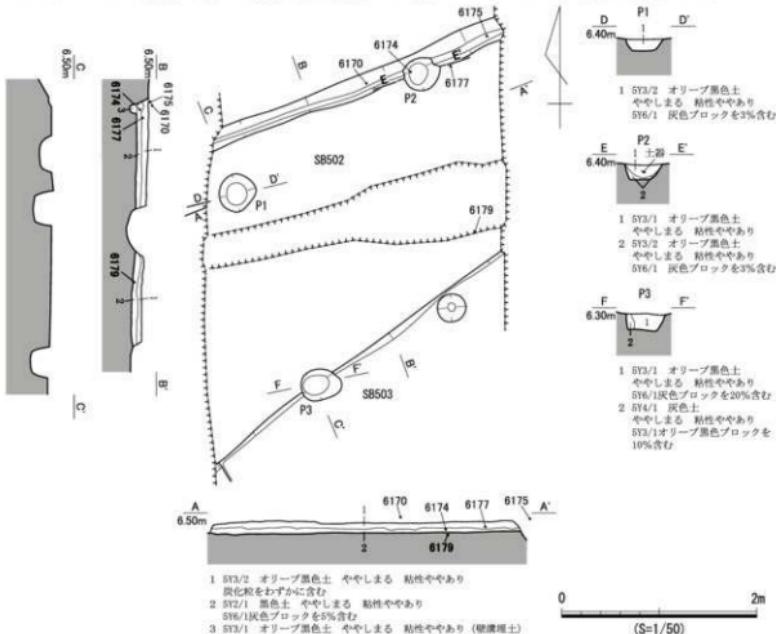


図1808 SB502 遺構図

6173はVII期壺C1類。口縁部がゆるやかに外反し、端部付近でわずかに内湾する。端部内面には内傾面を形成して直線文を施している。頸部直下には直線文を施し、その下方にはクシによる刺突が認められる。6174はVII期壺。脚部が内湾し、外面には粗いハケ目が残る。6175はVII期壺D類。屈曲する口縁部が大きく開き、一部に打ち欠きが認められる。器壁の薄い胸部全面に粗いハケ目が残り、主に胸部下半に煤が付着する。最大径は胸部中央よりやや上方に位置し、肩部が強く張る。6176はVII期高壺C2c類。口縁部が内湾して立ち上がり、多条沈線を施す。6177、6178はともにVII期高壺。6177は壺底部にわずかに平坦面をもち、口縁部が内湾気味に立ち上がる。内面に段は認められないが、外面にはわずかに稜が認められる。脚部は付根が細く、円錐状に開く。6178は6177と酷似するが、やや大型で口縁部が大きく開く。6179は用途不明石製品。粘板岩質で、表面は研磨により整形され、断面方形を呈する。

**時期** V期～VII期のSB501を切り、VII期のSB503に切られる。また、P2からVII期の壺が出土していることからVII期と考える。なお、出土遺物にVII期のものが含まれるが、その頃が最終埋没時期と考える。

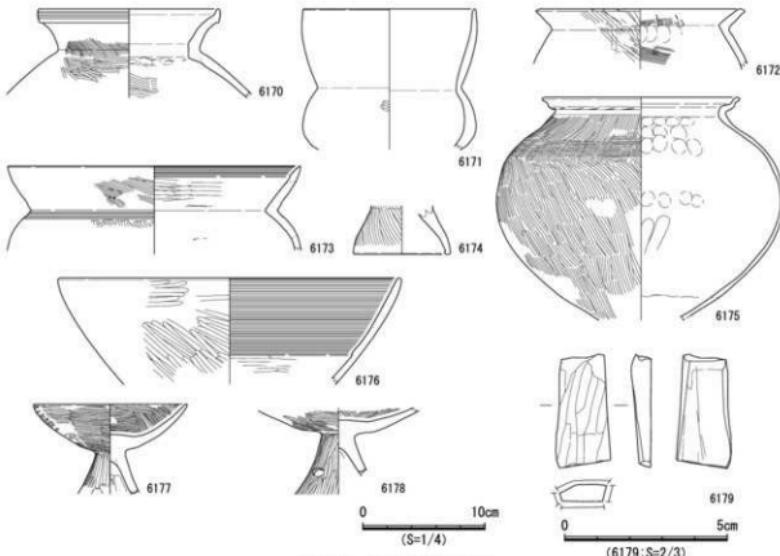


図 1809 SB502 遺物実測図

SB503(遺構:図1810・1811、遺物:図1812)

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住跡密集域に位置する。中央は搅乱により失われ、西側でSB504を切り、底面でSB505を検出した。平面形は北西辺と南西辺が比較的明瞭であったが、南北の搅乱以東は不明瞭であった。

**形状** 北西-南東長約4.3m、北東-南西長約4.9mであり、東辺がわずかに外側に開く不整長方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

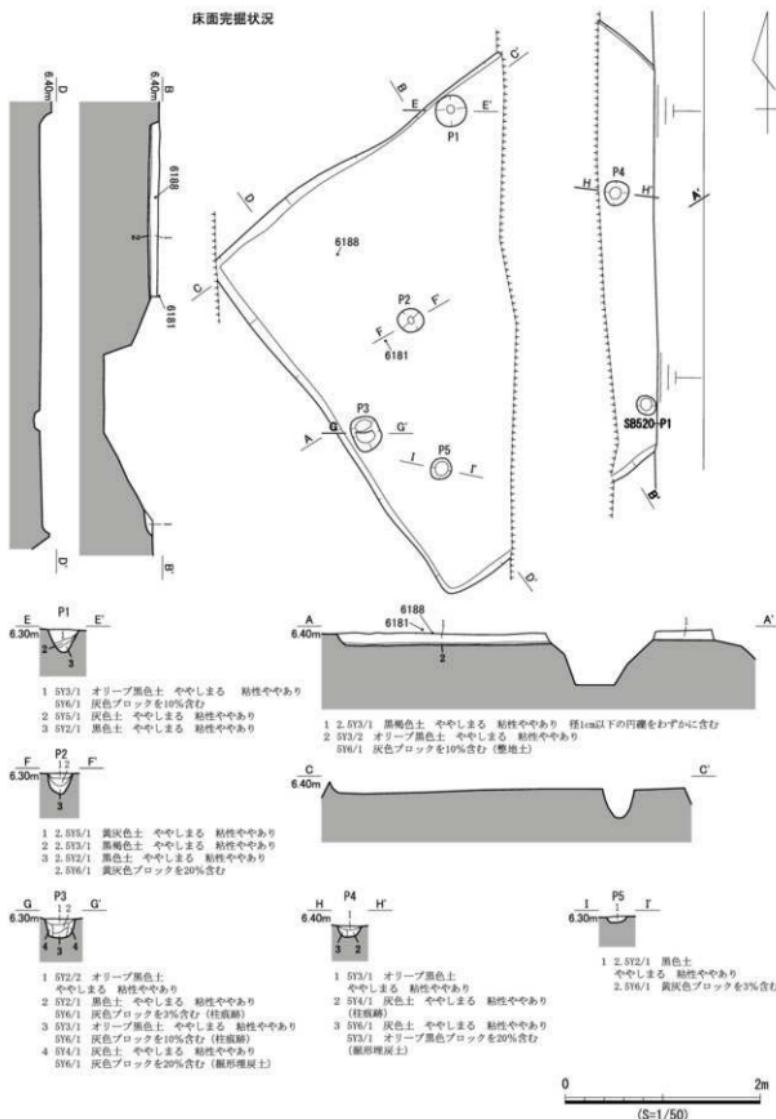


図 1810 SB503 遺構図（1）

**埋土** 2層に分層した。1層が覆土、2層が掘形埋土である。1層は小礫をわずかに含むが、ブロック土の混入は確認できなかった。

**床面** 平坦であり、床面には明確な硬化面を確認できなかったが、全体的にブロック土を含む黒色土が広がり、その上面で遺構を検出したので、貼床（整地土）と判断した。床面上にて6基の小穴を検出し、そのうちP3とP4は土層断面で柱痕跡を確認でき、P1とP2は掘形が比較的深い。柱穴の推定は困難だが、P2とP4の2本柱の可能性もある。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

**掘形** 貼床はとても薄く、それを掘削すると掘形底面で小穴を8基検出した。その多くは浅いが、P10とP12は深く、P12では土層断面で柱痕跡を確認し、その内部から砥石と高杯の脚部片が出土した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,719点、石器類3点、小穴から土器179点、石器類1点が出土した。

埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、P8からVI期～VII期の鉢B類（6183）、VII期の甕D類

#### 掘形完掘状況

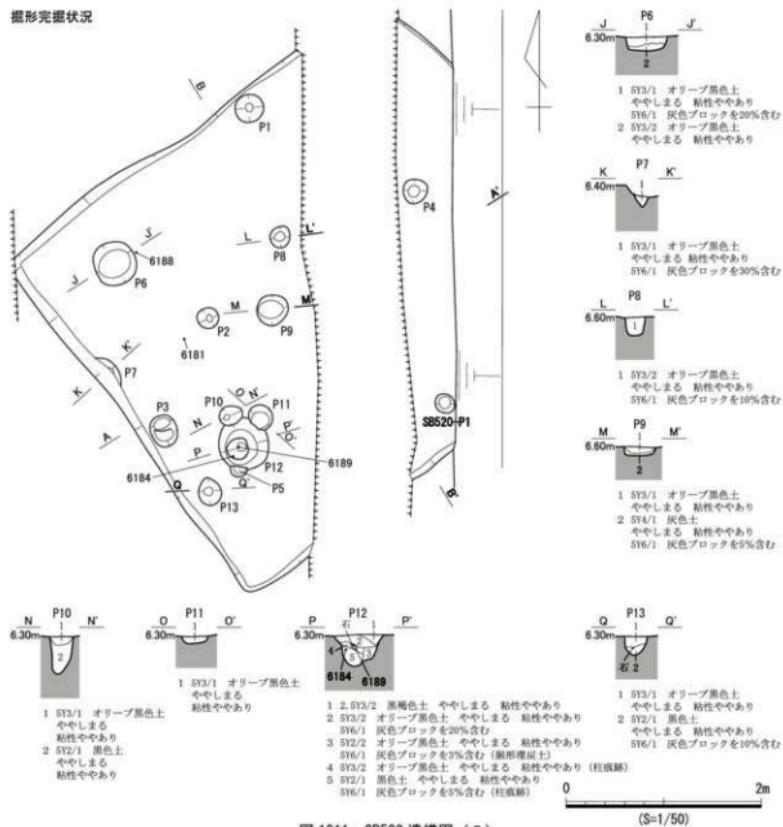


図1811 SB503 造構図（2）

(6182)、P12からVI期～VII期の高坏C類(6184)が出土した。

**出土遺物** 6180はIV期壺H類。斜め方向のハケ調整に上に強い沈線が認められる。6181はVII期壺G2a類。口径からかなりの大型品と考えられる。頭部の屈曲は弱く、口縁部が内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。6182はVII期甌D2a類。口縁部が明瞭に屈曲し、中段が垂直気味に立ち上がる。6183はVI期～VII期鉢B2類。口縁部が内湾し、端部には顯著な平坦面をもつ。外面はハケ及びナデ、内面はハケによる調整痕が認められる。6184はVI期～VII期高坏C類。付根から脚部が円錐状に開き、2孔1対の透孔が認められる。6185～6187はいずれもVII期高坏G3c類。6185は口縁部で、端部から多条沈線、刺突文、直線文、山形文など、端部直下から様々な文様が認められる。6186は脚部で、精緻な文様が認められる。透孔下部から多条沈線、山形文、貼付突帯、刺突文など、種々の加飾が認められる。脚裾部は内湾傾向で、端部には平坦面をもち、そこに沈線を2条施す。6187も脚部で、多条沈線の間に振り幅の小さい連弧文を加える。端部は平坦に形成し、上端に刺突を加える。6188はVII期高坏G類。脚部がわずかに円錐状に開き、透孔を境に大きく開く。裾部は内湾気味となり、端部には平坦面をもつ。6189は砥石。扁平な亜円錐の一面と砥面として利用しており、部分的に煤が付着している。

**時期** 出土遺物の時期はVI期～VII期であるが、VII期のSB504を切っていることからVII期と考えられる。

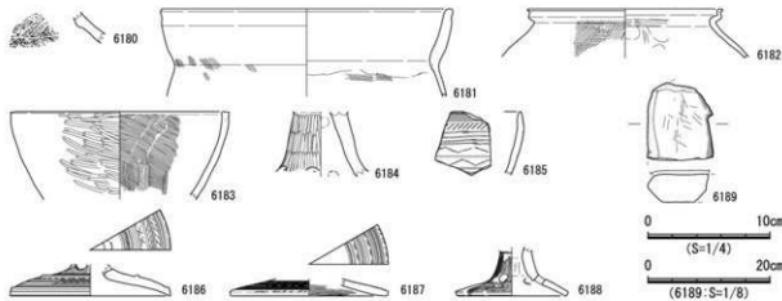


図1812 SB503 遺物実測図

SB504(遺構:図1813、遺物:図1814)

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住跡密集域に位置し、西側は擾乱により失われ、東側はSB503に切られ、南側でSB506を切り、底面でSB505を検出した。平面形は比較的明瞭で、検出面の土がブロック土を含んでいたことから床面である可能性を検討したが、小穴などの遺構が確認できなかつたため埋土として掘削した。

**形状** 遺構の南辺のみしか検出できていないため、平面形は不明である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層で、炭化粒とブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床(整地土)、炉跡は確認できなかった。床面上にて5基の小穴を検出し、そのうちP2とP4は掘形が深く、いずれかが柱穴となるかもしれない。なお、SB503の掘形底面で検出した遺構の幾つかは、本遺構に所属する可能性もある。壁溝は南辺沿いで確認したが、掘形はとても

浅かった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器292点、石器類1点、小穴から土器135点、壁溝から土器11点が出土した。また、P2の底面付近にて炭化物が出土した。

**出土遺物** 6190はVI期～VII期高坏C類。脚部が内湾する。6191はVII期高坏C4b類。口縁端部に内傾面を形成し、そこに多条沈線を施す。6192はVII期高坏G3b類。口縁部がわずかに内湾し、端部直下に多条沈線を施す。6193は刃器。素材とする縦長剥片の縁辺に、連続する細かい剥離を施している。

**時期** VI期～VII期のSB506を切り、VII期のSB503に切られることと、出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

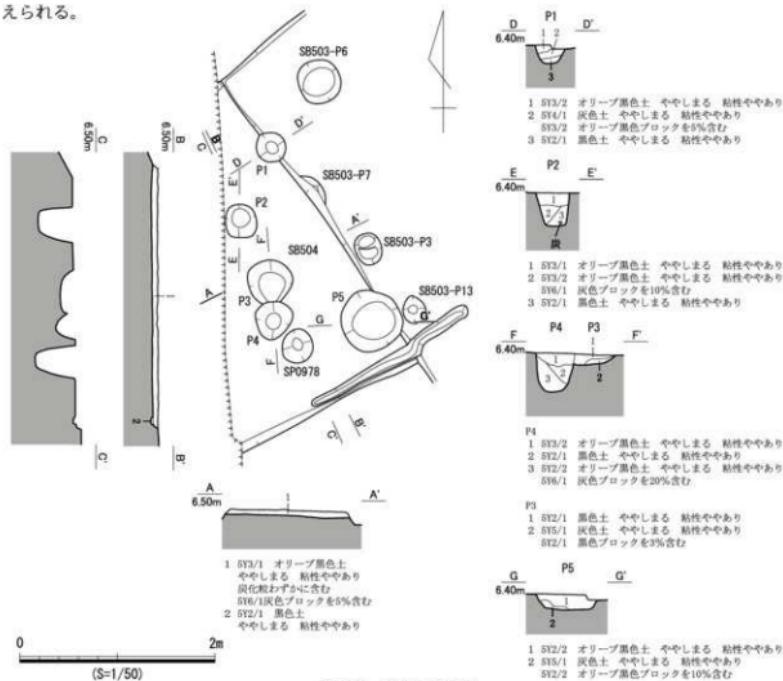


図 1813 SB504 遺構図

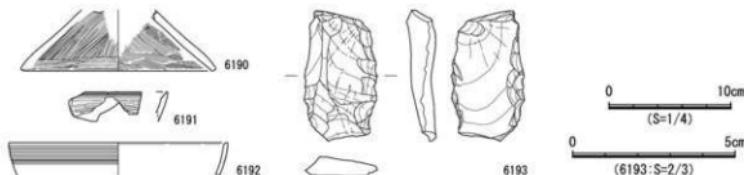


図 1814 SB504 遺物実測図

## SB505（遺構：図1815）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。本遺構はSB503とSB504の床面で検出し、埋土は確認できず、ほぼ直角に屈曲する壁溝2条を検出したために竪穴住居跡と判断した。

**形状** 南西辺と南東辺の壁溝のみしか確認できていないが、およそ方形を呈すると考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。本住居の床面に伴う遺構は、SB503・SB504の床面で確認した遺構のいずれかと考えられるが、特定する根拠が乏しい。しかし、P1のみ土層断面で柱痕跡を確認し、位置的に本遺構に伴う柱穴の可能性がある。また、当遺跡の竪穴住居跡は一辺4m前後の規模が多く、本遺構も同規模とするならば、SB503-P8がP1に対応する柱穴になる可能性がある。

**遺物出土状況** 壁溝から土器5点、小穴（P1）から土器9点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

**時期** VII期のSB503とSB504より先行するため、本遺構の時期はVII期以前と考えられる。

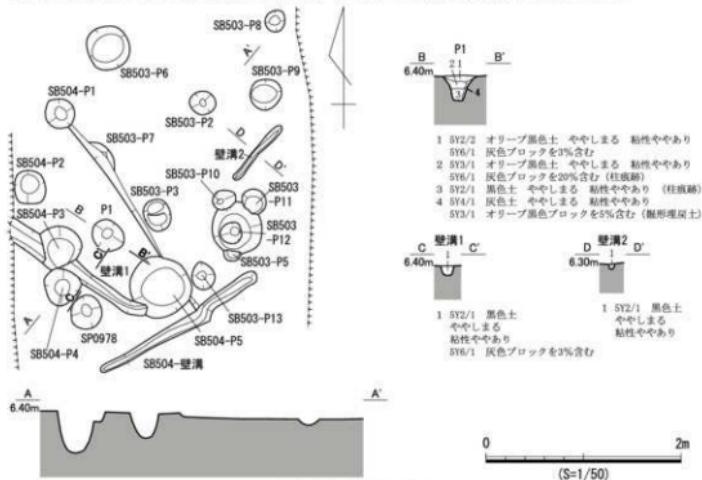


図1815 SB505 遺構図

## SB506（遺構：図1816・1817、遺物：図1818）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は擾乱により失われ、北側はSB503とSB504に切られ、南西側はSB509に切られる。本遺構の南辺は比較的明瞭に確認できた。

**形状** 南辺は直線的にのびるが、南辺しか検出していないため、形状は不明である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。層界に凹凸がみられ、いずれの層もブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）は確認できず、床面にて小穴を18基検出した。しかし、本遺構の床面ではSB507とSB508も検出しており、18基のうちには両遺構に属する穴も含まれている。この

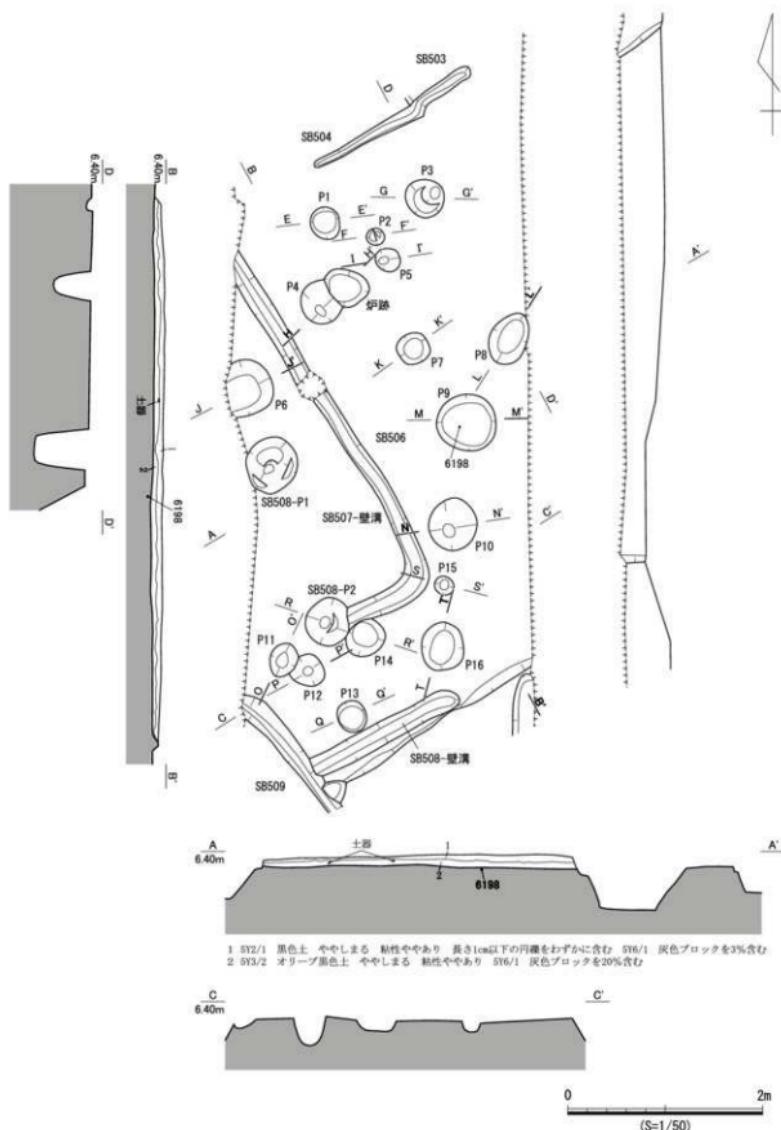


図 1816 SB506 遺構図 (1)

うち、平面形が明瞭に確認できた16基を本遺構に属する遺構と判断した。しかし、SB508-P2と本遺構のP14は検出時に重複関係を誤認している可能性がある。16基の小穴のうち、P8とP11では柱痕跡を断面で確認でき、P3、P5、P10などは掘形の深い穴である。また、P10では拳大の粘土塊が2層中から出土した。平面的な位置関係から、P3とP11が柱穴の可能性がある。炉跡は、本遺構検出時に北西



図 1817 SB506 遺構図（2）

から中央付近にかけての焼土が部分的にみえていた。焼土の厚さは約1cmで、遺構を掘削すると南東側が深くなり、南東端では土坑底面で焼土を確認できた。なお、本遺構に伴う壁溝は確認できていない。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,795点、石器類3点、小穴から土器239点、炉跡から土器2点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、IV期とV期の土器片もわずかに出土した。また、P3、P4、P5、P9からもVI期～VII期の遺物が出土した。

**出土遺物** 6194はVI期～VII期壺H2b類。口縁端部が内湾して端部を尖らせ、直下に沈線を2条施す。6195、6196はVI期～VII期甕A3類。6195は口縁部が外反し、端部付近で屈曲して直立する。端部内面にはナデによると思われる凹面がわずかに認められ、外面には刺突を加える。6196は口縁部が屈曲して受口状となり、端部には顕著な平坦面をもつ。6197はVI期～VII期甕A4類。口縁部が短く外反し、端部付近でわずかに屈曲する。端部はほぼ直立して尖り、直下には刺突を加える。頸部直下に直線文が認められる。6198はVII期甕E2類。口縁部が短く屈曲し、端部を尖らせる。最大径は胴部中央からやや下がり、胴部形状はやや下膨れ気味である。短い脚部が内湾気味に開き、接地面は平坦である。器面に文様は認められず、ハケによる調整痕が認められる。6199はVII期甕D2b類。屈曲する口縁部が上下段ともに強く屈曲する。6200はVII期甕D類。器壁の薄い脚部がわずかに内湾して開き、端部内面には粘土の折り返しが認められる。6201はVI期高杯G3b類。杯底部は平坦であるが、口縁部との段は不明瞭である。口縁部が外傾して開き、わずかに内湾傾向を示す。端部付近は直立するよう内湾し、直立気味の部位にのみ多条沈線を施す。器面全体にミガキ調整が認められる。6202は

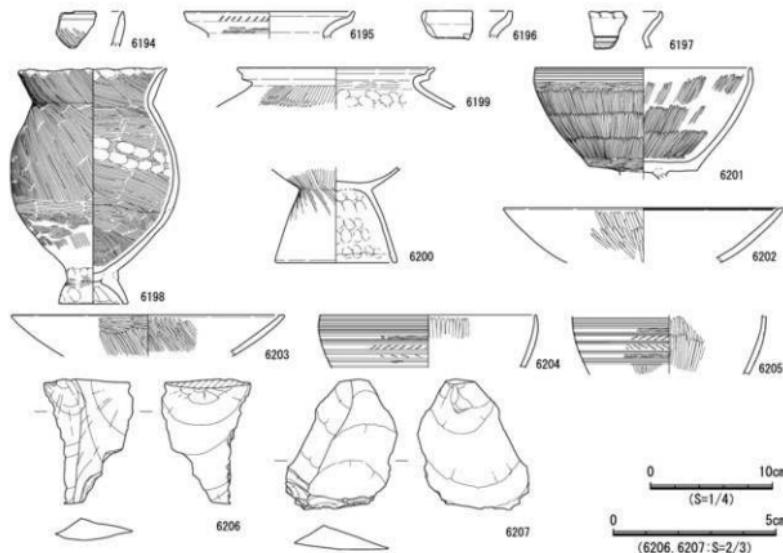


図1818 SB506 遺物実測図

VII期高坏D2類。口縁部が皿状に開き、端部には内傾面を形成してその部位のみ多条沈線を施文する。6203はVII期高坏D2類。口縁端部に内傾する平坦面をわずかに形成し、そこに沈線を施文する。6204、6205はVII期高坏G3c類。6204は口縁部が内湾し、端部直下から多条沈線が施文される。その間に二重山形文、刺突文を加える。6205は口縁部がわずかに内湾し、外面には精緻な文様が認められる。多条沈線の間にクシ状工具による二重山形文、刺突文を規則的に配置する。6206、6207はMF。いずれも泥岩製で、素材となる縦長剥片の一側縁に細かい剥離が認められる。

**時期** VII期のSB503、SB504に切られることと、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB507（遺構：図1819）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB506床面においてほぼ直角に曲がる細長い溝を検出したため、竪穴住居跡の壁溝と判断した。なお、壁溝はSB508-P2に切られていると判断したが、検出時に重複関係を誤認した可能性が高い。

**形状** 遺構の東辺と南辺しか検出できていないが、方形を呈すると考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上では3基の小穴を確認したが、これらが本遺構に伴うものか、SB506に伴うものかは定かでない。SB508-P1は土層断面で柱痕跡を確認でき、SB507-P1は直径が小さいものの、深くてほぼ垂直に掘り込まれている。SB508-P1は位置的にSB508の柱穴となる可能性が高いため、SB507-P1を本遺構の柱穴と考えた。壁溝は検出面で明瞭に確認できたものの、掘形は浅く、SB508-P2より西側では確認できなかった。

**遺物出土状況** 壁溝から土器34点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

**時期** SB506より先行することから、VI期～VII期以前と考えられる。

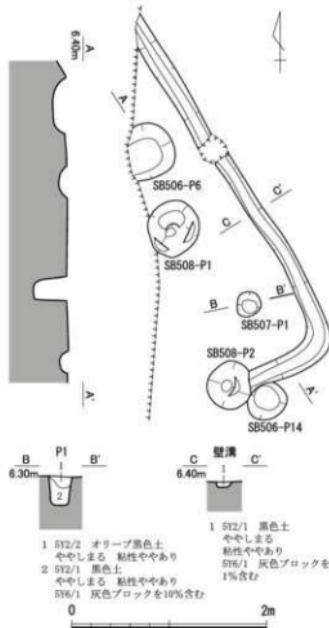


図 1819 SB507 遺構図

#### SB508（遺構：図1820、遺物：図1821）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は擾乱により失われ、南西側でSB509に切られる。本遺構の壁溝はSB506床面で検出し、その内部にはブロック土を含む貼床（整地土）が広がっていた。しかし、貼床上面の遺構の平面形がとても不明瞭で判然としないため、若干掘り下げて小穴等を検出した。

**形状** 住居の東半分のみの検出であるが、北西～南東長約4.3mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1m未満で、壁面もほとんど遺存していない。

**埋土** 住居埋土は確認できず、掘形埋土をわずかに確認したのみである。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて小穴を12基検出した。本遺構の床面はSB506、SB507とほぼ同じ高さであり、12基のうちには両遺構に属する穴が含まれ、遺構の重複関係等からP1～P5を本遺構に属するものと判断した。P1、P2、P4は柱痕跡を土層断面で確認でき、P1とP2は柱痕跡と掘形の形状が類似し、平面的な位置関係から本遺構の柱穴と考えた。なお、壁溝は南壁沿いと東壁沿いの南側で確認できた。壁溝の平面形は明瞭であったが、掘形は浅く、住居の南東隅で途切れている。炉跡は確認できなかった。

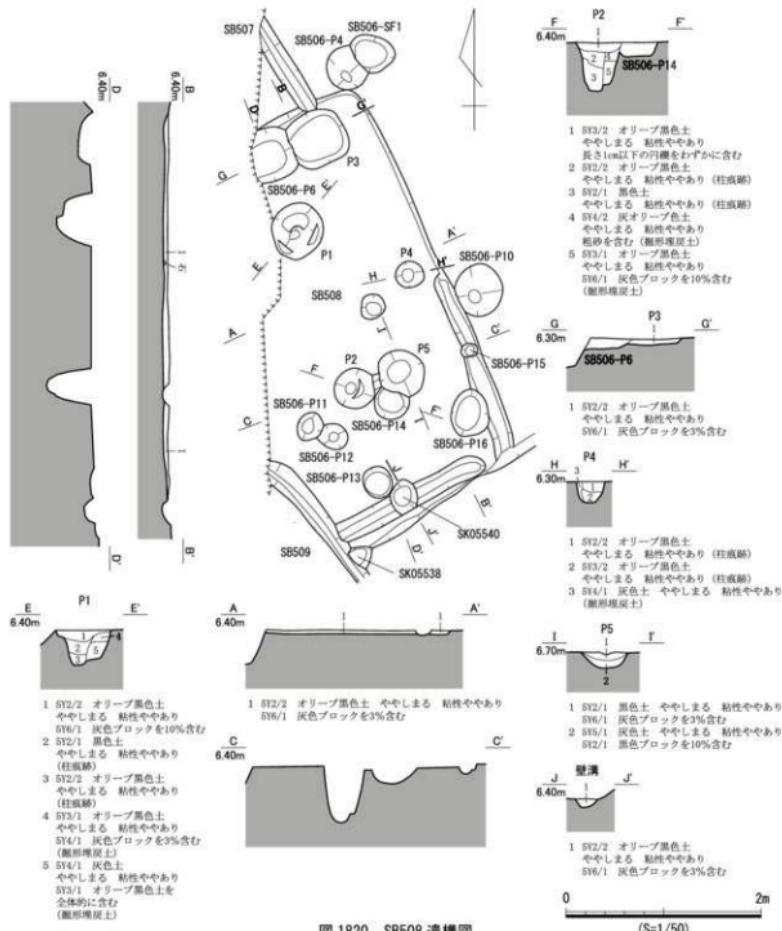


図 1820 SB508 遺構図

**遺物出土状況** 埋土中から土器93点、壁溝から土器16点、小穴から土器111点が出土した。このうち、P2からは59点の土器片が出土している。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、IV期とVIII期のものがわずかに混入している。

**出土遺物** 6208はVI期～VII期壺A3類。口縁部が屈曲し、外面に刺突を加える。6209はVII期壺D類。屈曲する口縁部が大きく外方に開く。6210はVII期高環D5類。口縁部が浅く皿状に開き、口縁部には内傾する平坦面を形成する。そこから内面にかけて多条沈線を施し、その間に連弧文を加える。

**時期** VI期～VII期のSB509に切られるが、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。



図 1821 SB508 遺物実測図

SB509（遺構：図1823、遺物：図1822）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側は擾乱により失われ、北側でSB508、東側でSB511を切り、南側はSB512に切られる。平面形は比較的明瞭であった。

**形状** 遺構の東辺と南辺しか検出できていないが、方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。1層が覆土、3層が壁溝埋土及び掘形埋土である。覆土は円礫やブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて3基の小穴と壁溝を検出した。小穴のうちP1とP3では柱痕跡を確認し、平面的な位置関係からP1が柱穴と考えられる。壁溝は検出した範囲では壁面に沿って全周している。なお、炉跡は確認できなかった。

**掘形** 壁溝周辺部のみ約0.5mの幅でオリーブ黒色土が残っていたため、竪穴住居跡の掘形と認識し、掘削した。その結果、掘形底面にてさらに細長い溝状遺構を4条（壁溝2～5）検出した。壁溝5はSB512底面で検出し、いずれの遺構にもブロック土の混入が少なかった。なお、竪穴住居跡の中央部では整地痕跡を確認できなかった。幅約0.5mの掘形底面では4条の溝の他に6基の小穴を検出し、P6では柱痕跡を確認した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器358点、石器類1点、壁溝から土器72点、掘形から土器84点、小穴から土器76点が出土した。埋土中の出土土器はVI期のものが多く、小穴からはV期～VII期の高環や壺が出土している。

**出土遺物** 6211はV期～VI期壺A1類。口縁部が外反し、端部付近で屈曲して開く。端部を上下にわざかに拡張し、外面には擬回線が認められる。6212はV期～VI期高環B3b類。环底部から口縁部が大きく外反する。6213はVII期高環C3c類。内湾する口縁部内面には多条沈線を施す。6214はVII期高環D5類。口縁部内面に多条沈線、連弧文が認められる。6215はVI期～VII期手焙り形土器。覆部の端部小片で、胴部との接合部にあたる。端部には幅広の平坦面をもち、沈線が認められる。

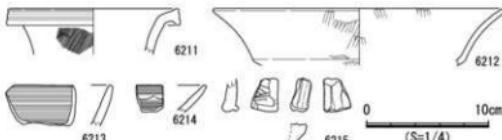


図 1822 SB509 遺物実測図

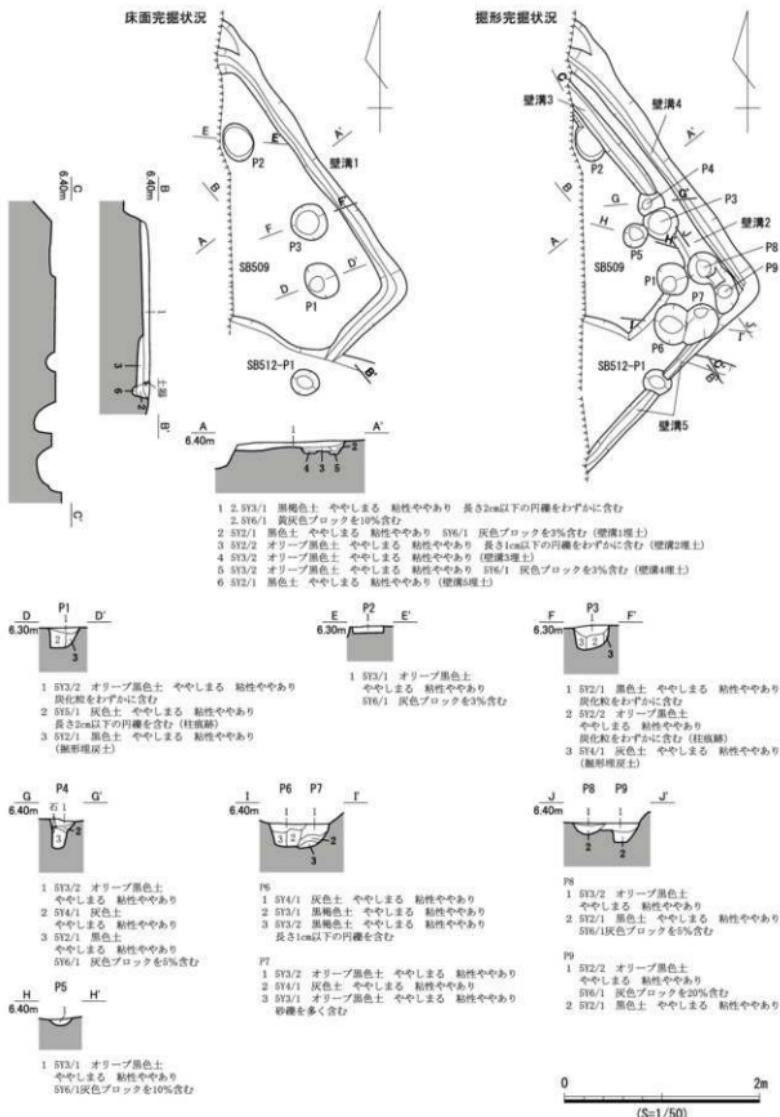


図 1823 SB509 遺構図

外面には文様が描かれるが、小片のため全容は不明である。

時期 小穴の出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB510 (遺構: 図 1824、遺物: 図 1825)

検出状況 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側は搅乱により失われ、SB509、SB512に切られ、東側でSB513を切る。周辺遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状 遺構の東辺と南辺しか検出できていないが、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1m未満で、壁面の傾斜は急である。

埋土 単層であり、円礫をわずかに含む。ブロック土の混入は確認できなかったものの、時期的に近似する遺構の重複が著しいことから、埋土は人為堆積の可能性が高い。

床面 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面の基盤層は砂質シルトであり、床面上の遺構検出は不明瞭であった。床面上にて4基の小穴を検出したが、柱痕跡を確認できる遺構はなく、その性格は不明である。また、壁溝は東辺と南東隅で検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器91点、壁溝から土器6点、小穴から土器34点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、わずかにIV期の土器片が混入する。

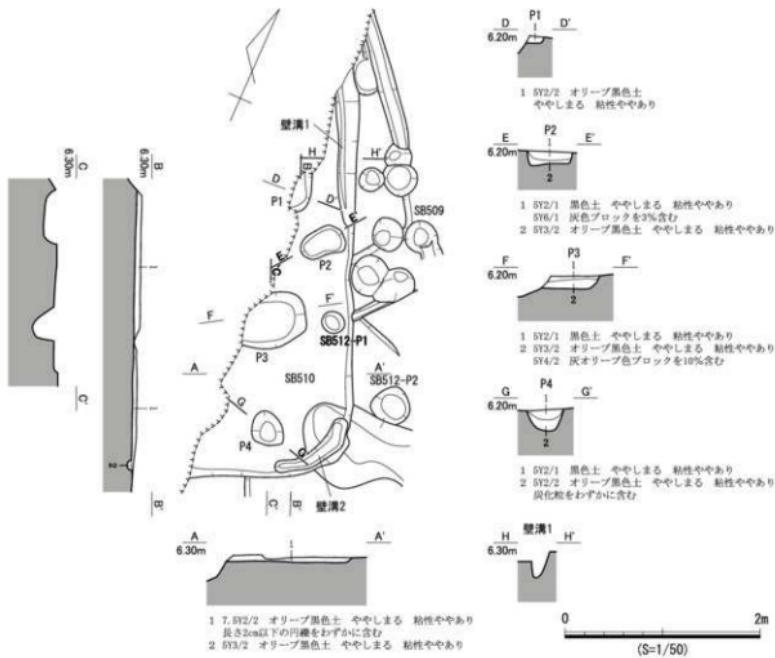


図 1824 SB510 遺構図

**出土遺物** 6216はVI期～VII期甕A4類。口縁部が短く外反し、端部がわずかに屈曲して外面に平坦面を形成する。端部は尖り気味となり、外面には刺突を加える。頸部には太い沈線が1条認められる。6217はVI期～VII期鉢A3a類。口縁部が短く外反し、端部上端が拡張され、尖り気味である。

**時期** VI期～VII期のSB509、SB512に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

#### SB511（遺構：図1826・1828、遺物：図1827）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、08\_9地点と11\_5地点にて検出した。中央を搅乱により失われており、平面形は比較的明瞭であった。西側はSB509に、南西側はSB512に、南東側はSD1153に、それぞれ切られている。

**形状** 南側は定かでないものの、およそ方形を呈すると考えられる。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 08\_9地点では検出時に床面の遺構が見えていたが、11\_5地点ではわずかに埋土を確認できた。埋土は単層であり、ブロック土と小円礫を含むことから、人為堆積と考えられる。

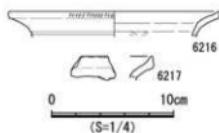


図1825 SB510 遺物実測図

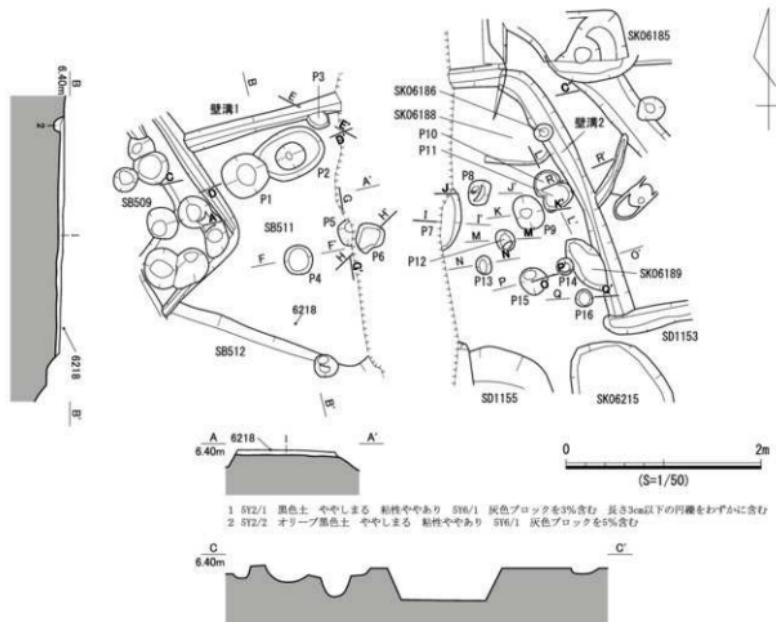


図1826 SB511 遺構図（1）

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できず、床面にて小穴を16基検出した。柱痕跡をP2、P9、P15で確認したが、柱穴の認定は困難である。なお、壁溝は検出した範囲内を周囲している。

**遺物出土状況** 埋土中から土器209点、小穴から土器181点、壁溝から土器25点が出土した。埋土中の出土土器はVI期～VII期のものが多く、IV期の土器片もわずかに混入する。壁溝からVI期～VII期の手捏ね土器が複数出土した。

**出土遺物** 6218はVII期高壺C類。壺底部は嬌小で、口縁部が開き気味に立ち上がる。壺底部中央には小さな穿孔が認められる。6219、6220はVI期～VII期手捏ね土器C類。口縁部が直線的に外傾して開く。内面にはユビナデ痕が明瞭に残り、端部は外面にわずかに粘土がはみ出す。

**時期** VI期～VII期のSB509とVI期～VII期のSB512に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

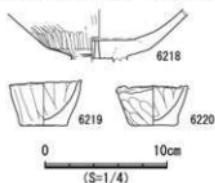


図 1827 SB511 遺物実測図

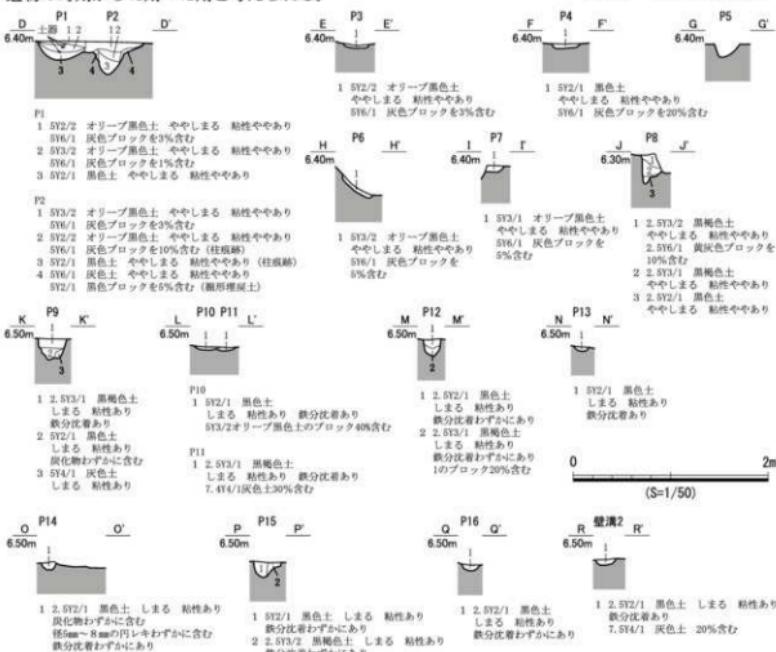


図 1828 SB511 遺構図（2）

SB512（遺構：図1829、遺物：図1830）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東側をSK05587に、南側をSK05588とSD1103に切られ、平面形は不明瞭であった。

**形状** 北辺と東辺を検出し、両辺が直角気味な位置関係にあることから方形を呈すると考えられる。

深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、下層は炭化粒をわずかに含んでいた。北壁沿いでは、床面からやや上位レベルで、29cm×20cmの範囲で焼土塊を検出した。その全体形はU字状を呈し、厚さは約5~10mmと薄い。また、東壁沿いでは、床面からやや上位で、1~5cm程度の粘性の高い褐色粘土塊がまとまって出土した。焼土塊や褐色粘土塊の検出した標高値がほぼ同じであることから、本来は床面が1層と2層の層界付近であった可能性もあるが、構造はすべて2層下で検出した。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、壁溝は確認できず、床面にて6基の小穴を検出した。このうち、

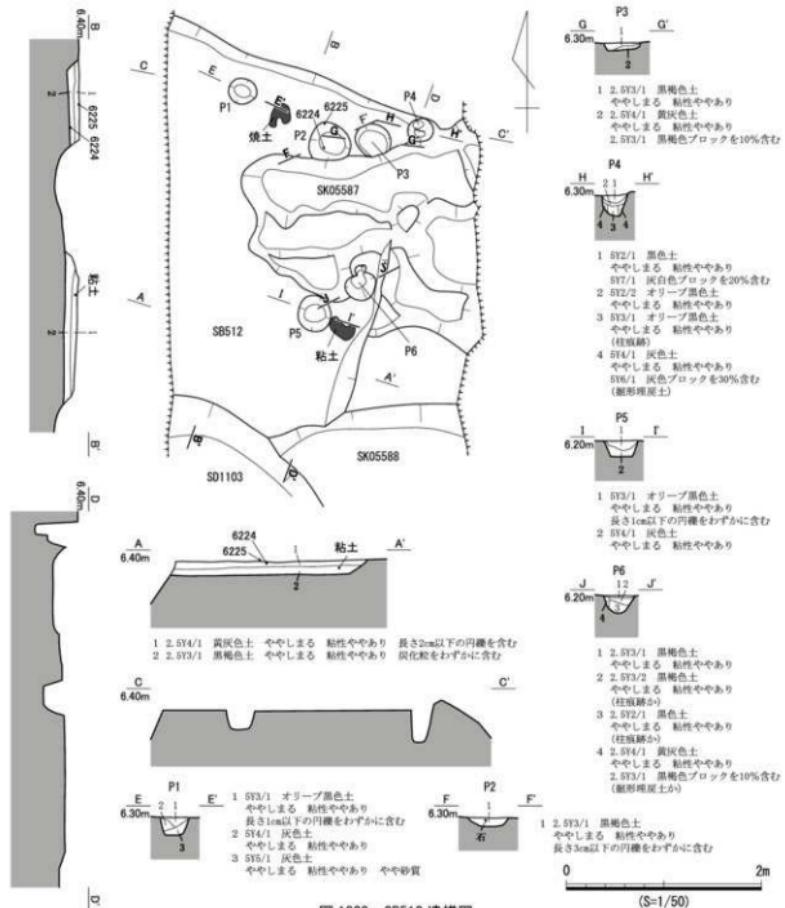


図1829 SB512 遺構図

P4とP6は柱痕跡を確認したが、いずれも壁際に位置するため住居の柱穴である可能性は低い。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,201点、石器類1点、小穴から土器98点が出土した。埋土中の出土土器はIV期～VII期のものまで含まれるが、IV期とVII期のものは混入と考えられる。

**出土遺物** 6221はIV期壺A2類。口縁部には凹線が認められ、以下には斜位の刺突文が方向を変えて3帯施文される。6222はIV期甕A2類。口縁部が短く屈曲し、平坦に仕上げた端部には下端にタタキが認められる。胴部は横方向のタタキの後に縱方向のハケ調整を施す。6223はVI期甕D1b類。屈曲する口縁部下段は外方に開くが、上段は直立気味に立ち上がる。外面には刺突を加える。6224はVII期高坏C4c類。内湾する口縁部内面に多条沈線が認められる。6225はVII期高坏。坏底部に平坦面は認められず、段をもたずに口縁部がゆるやかに立ち上がる。外面の稜は痕跡程度に残る。端部には内傾する平坦面を形成し、内外面ともに丁寧なミガキを施す。内外面ともに弧状の煤が付着するが、接合部位で煤が途切れ、断面に煤が付着する。破損してから煤が付着した可能性が高い。

**時期** VII期のSK05588に切られることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

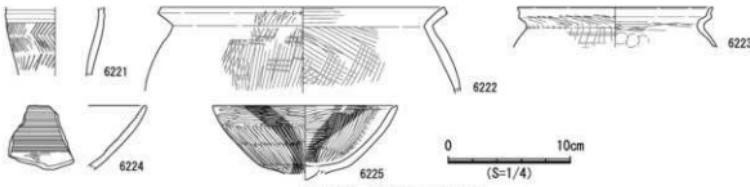


図 1830 SB512 遺物実測図

#### SB513（遺構：図1831）

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB511底面で検出し、北側をSB509に、西側をSB510に、南側をSB512とSK05587に切られている。

**形状** 東辺のわずかな範囲しか検出できておらず、不明である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。上下層ともにブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では新たに遺構を確認できなかったが、重複するSB509、SB510、SB512などの底面で検出した小穴のいずれかは本遺構に伴う可能性がある。そのため、本遺構を竪穴住居跡と判断した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器47点が出土した。

出土土器のうち時期が判明する破片はIV期、VI

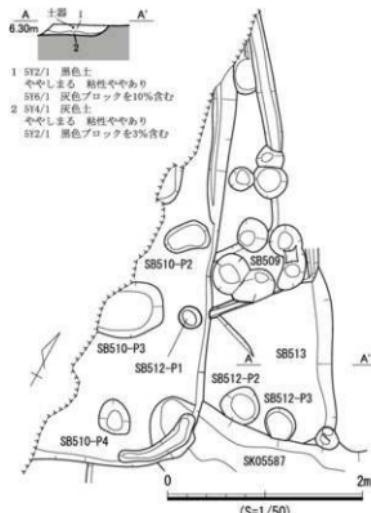


図 1831 SB513 遺構図

期、VII期のものがあるが、いずれも細片であり図示していない。

**時期** VI期～VII期のSB509～SB512に切られるが、出土遺物の時期からそれ以前と考えられる。

#### SB514（遺構：図1832）

**検出状況** 東部西側南寄りに位置し、SD1103掘削後に検出した。検出面ではすでに壁溝が見えており、埋土は削平されたと考えられる。壁溝はSK05564、SK05566に切られている。

**形状** 壁溝の配置から不整形を呈すると考えられ、壁溝1と壁溝2の主軸方位が若干ずれていることから、建て替えがなされた可能性がある。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。検出面にて4基の小穴を検出し、P1のみ掘形が深いことから柱穴の可能性がある。壁溝は途切れているが、深さがとても浅いことから上部が削平されていると考えられる。

**遺物出土状況** 壁溝から土器8点、小穴から土器14点、石器類1点が出土したが、いずれも小片であり図示していない。

**時期** 出土遺物が少なく、遺構の重複関係からも時期を言及できないため、不明である。

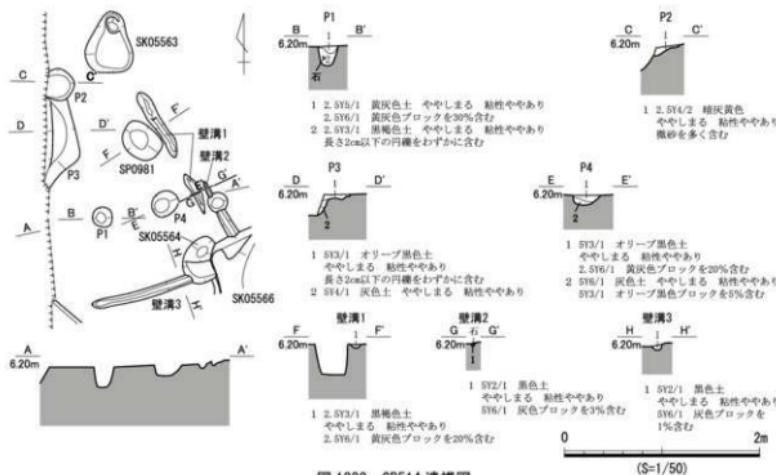


図1832 SB514 遺構図

#### SB515（遺構：図1834、遺物：図1833）

**検出状況** 東部西側南寄りに位置し、西側をSK05589とSD1103に切られている。本遺構付近の遺構検出面は微砂～シルト質土であり、上層からの多数の踏み込みが見られたため、平面形は不明瞭であった。

**形状** 西側を削平されているため形状は不明であるが、北東隅部は丸みを帯びている。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜も不明瞭である。

**埋土** 単層であり、ブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できず、床面にて小穴を3基検出した。そのうちP1は掘形が深く、P3は最下層に炭化粒を含むが、住居の全形が不明であるため、その性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器22点、小穴から土器19点が出土した。

**出土遺物** 6226はVII期高杯G3c類。脚部が扁平に開き、外面に多条沈線を

施し、その間に連弧文を2帯加え、端部には刺突を加える。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

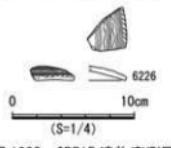


図 1833 SB515 遺物実測図

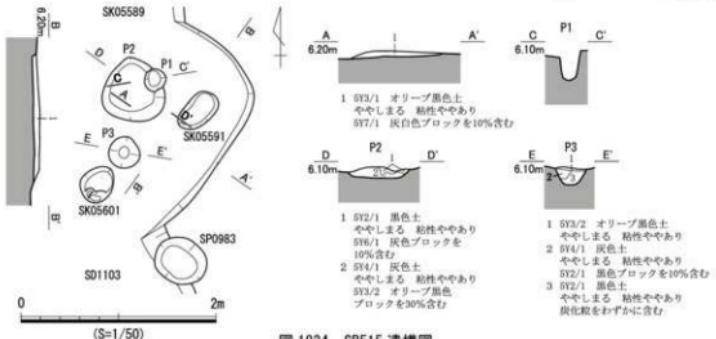


図 1834 SB515 遺物図

SB516（遺構：図1836、遺物：図1835）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面において検出したが、平面形はやや不明瞭であった。南西隅部を土坑SK05801に切られ、SZ178を切る。

**形状** 東側の半分以上が調査区域外となるうえ、南側をSK05801に切られるため、全形は不明である。確認範囲から方形を呈すると考えられ、北西隅部は丸みを帯び、北辺と西辺はそれぞれ直線的である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。大半の埋土は黒褐色土であるが、その成因は不明である。

**床面** ほぼ平坦で、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて8基の小穴を確認した。柱痕跡は確認できなかったが、平面的な位置関係からP1とP2が柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器316点、小穴から土器28点が出土した。埋土中からの出土土器はVII期のものが多く、他にIV期の小片がわずかに混入する。

**出土遺物** 6227はVII期壺A3類。口縁部を上方に拡張し、内面には羽状文を施す。端部には擬回線が認められ、3条1組の棒状浮文が施される。端部には、棒状浮文上面も加えて全面に赤色顔料が塗布される。6228はVII期高杯C4d類。口縁

部内面に多条沈線を施し、その間に、現状では山形文を2帯加える。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

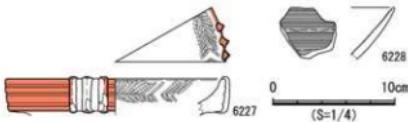


図 1835 SB516 遺物実測図

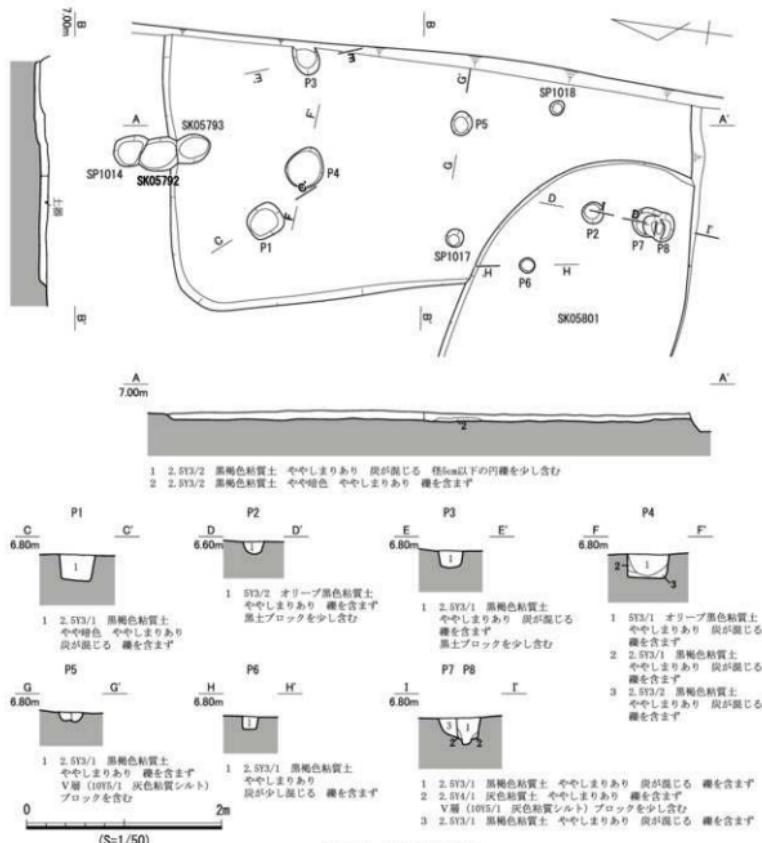


図 1836 SB516 遺構図

SB517 (遺構: 図 1837・1838、遺物: 図 1839)

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。炭化物や土器片を多く含む黒褐色土の範囲を平面形として検出した。東隅部でSK06082を切り、南北側に搅乱があり、やや不明瞭であった。

**形状** 隣接調査区との空闊地があり、北東部のみを検出した。そのため全形は明らかではないが、北西-南東長約5.0mの方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。土層図の1・2層が覆土、4層が掘形埋土である。覆土は炭化物や土器片を含み、ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦で、貼床(整地土)があり、部分的に硬化面を確認した。床面上では、小穴7基と壁溝を検出した。小穴の大半は浅いが、P1のみ深くして土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置関

床面完掘状況

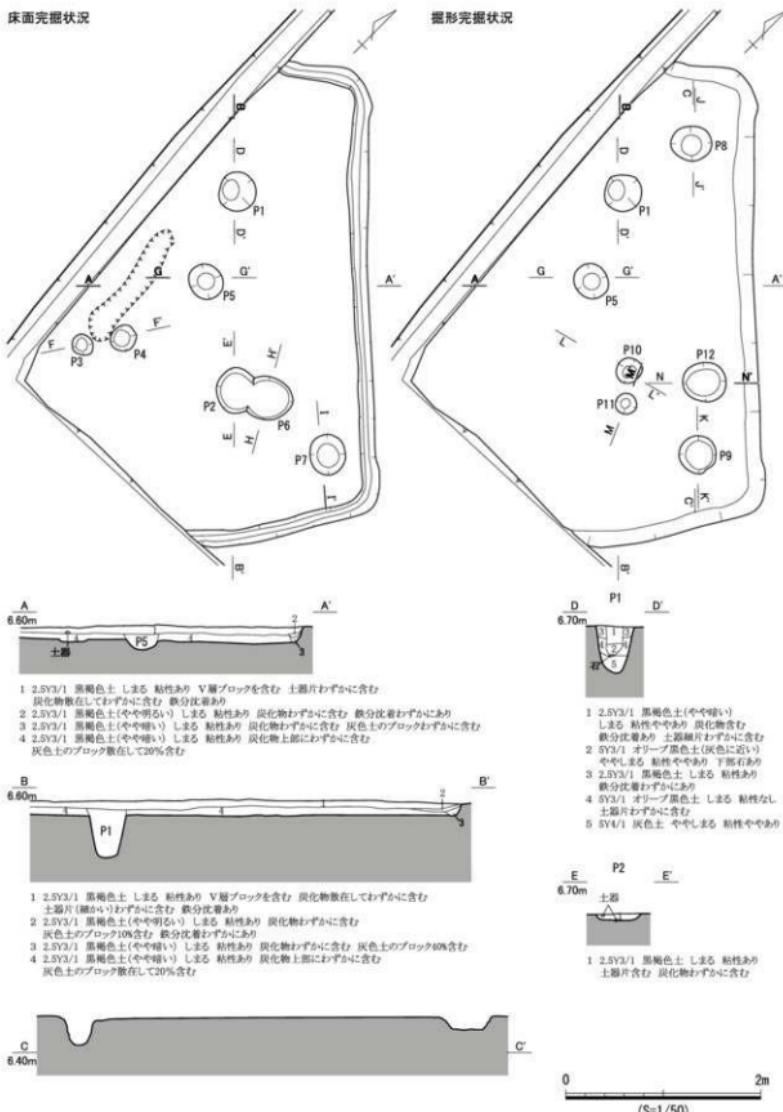


図 1837 SB517 遺構図 (1)

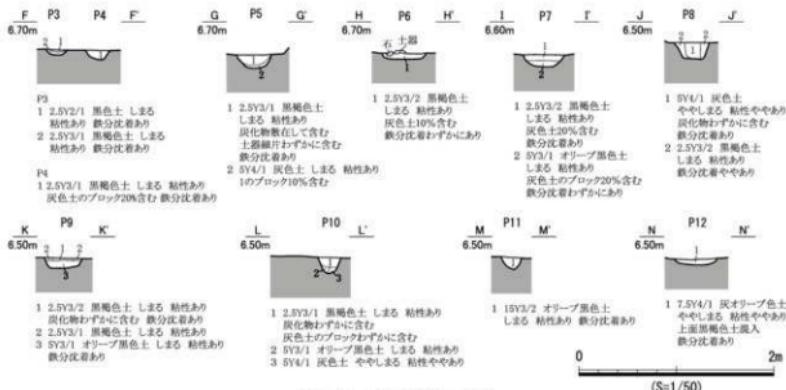


図 1838 SB517 遺構図 (2)

係からP1とP2が柱穴と考えられる。なお、壁溝は検出範囲において全周し、幅・深さともにほぼ一定である。炉跡は確認できなかった。

**掘形** 比較的浅く埋土は単層で、灰色ブロック土が混入する。掘形底面は平坦で、小穴を5基検出した。そのうちP8では、土層断面で柱痕跡を確認した。床面では検出できなかったものの、平面的な位置関係から、P8とP9は、P1とP2に先行する段階において柱穴であった可能性もある。そのため本住居は、規模の拡張を行わずに床面を成形し、柱穴の位置をずらして再構築している可能性がある。

**遺物出土状況** 覆土と掘形埋土から土器705点、石器類4点、床面の小穴から土器63点、石器類2点、壁溝から土器8点、石器類1点が散在して出土した。また、掘形底面の小穴から土器7点、石器類1点が出土した。出土土器はVI期のものが多く、P6からV期～VI期の壺A類(6229)が出土した。

**出土遺物** 6229はV期～VI期壺A3類。口縁部が外反し、内面には顕著な段を形成する。端部を下方に拡張し、擬四線を施した上に、3本1組の棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面にはヘラによる羽状文を4.5帯配し、内外面ともに赤彩を施す。6230は砥石。表面の底面には線状痕が残り、裏面は剥離している。

**時期** 出土遺物の時期と、I期のSK06082を切ることから、VI期と考えられる。

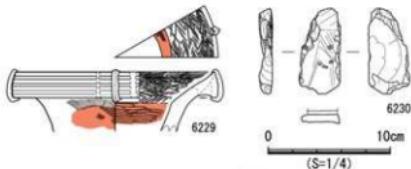


図 1839 SB517 遺物実測図

#### SB518 (遺構: 図 1840、遺物: 図 1841)

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。炭化物や土器片を多く含む黒褐色土の範囲を平面形として検出し、その範囲内には長さ約10cmの角礫や亜円礫も含まれていた。西側でSK06082を切る。

**形状** 北辺と西辺のみを検出したため、規模は不明である。両辺とも直線的にのび、隅部はほぼ直角

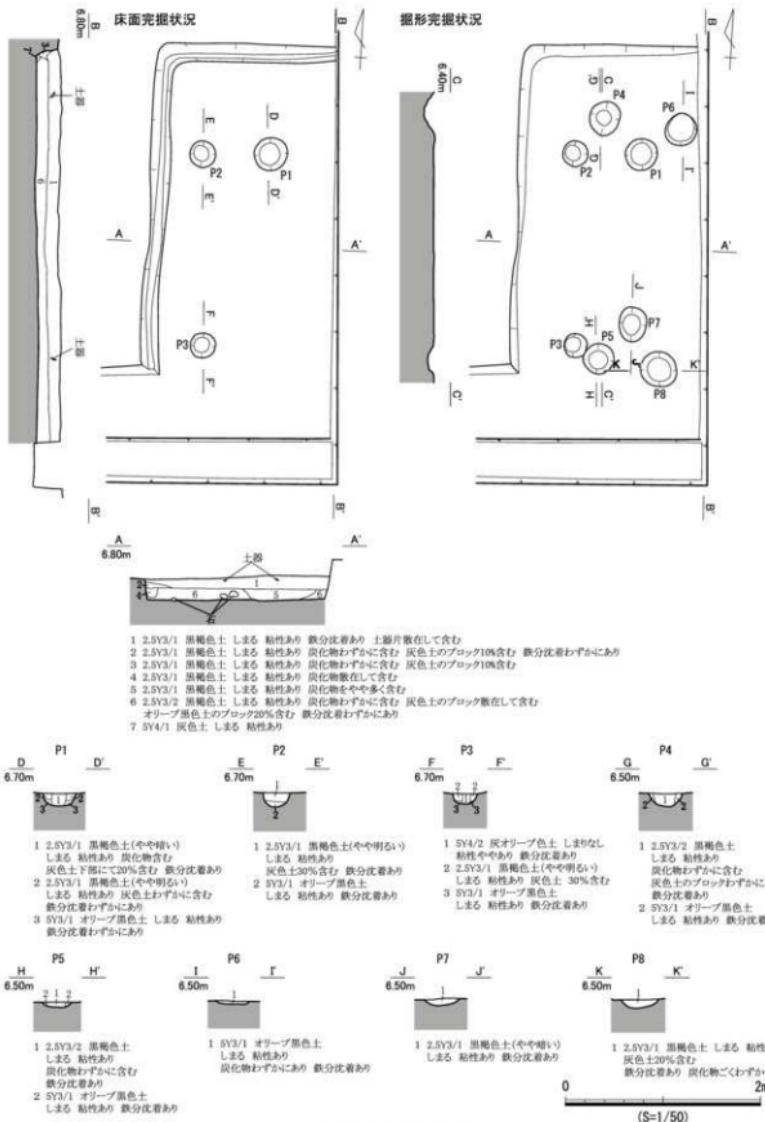


図 1840 SB518 遺構図

に屈曲することから、方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 5層に分層した。土層図の1・2層が覆土、5～7層が掘形埋土である。覆土には炭化物や土器片とともにブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）がある。底面上では小穴3基と壁溝を検出した。小穴のうち、P1とP3では土層断面で柱痕跡を確認したが、平面的な位置関係から、P2とP3が柱穴と考えられる。なお、壁溝は検出範囲において全周し、幅・深さともにほぼ一定である。炉跡は確認できなかった。

**掘形** 埋土の多くは単層で、オリーブ黒色及び灰色ブロック土が混入する。掘形底面は平坦で、小穴を5基検出した。そのうち、P4とP5では土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。床面では検出できなかったものの、P2とP3に先行する段階において柱穴であった可能性もある。そのため本遺構は、規模の拡張を行わずに床面を成形し、柱穴の位置をずらして再構築している可能性がある。

**遺物出土状況** 覆土と掘形埋土から土器944点、石器類2点、床面の小穴から土器15点、石器類2点、壁溝から土器56点が出土した。また、掘形底面の小穴から土器14点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多く、I期とIV期の土器がわずかに混入している。

**出土遺物** 6231はIV期壺H類。斜格子文帯を挟んで直線文帯を配し、無文帯にはナデ調整が認められる。6232はVI期～VII期壺。底部がやや突出する。6233はVII期壺A類。胴部上半には、複数の直線文と大振りの山形文が交互に施され、最下部の直線文下には刺突を加える。直線文帯を除いた山形文周辺及び刺突以下の無文帯に赤彩を施す。6234はIV期壺A2類。口縁部が短く外反し、端部にタタキを加える。胴部には右下がり方向のタタキ調整を施した後、左下がり方向に粗いハケ調整を施す。6235はIV期壺A類。底部に穿孔が認められる。6236はV期～VI期壺A1類。口縁部が屈曲し、端部にかけて内傾する。内面にはナデによる凹面が形成され、外面にはヘラによる刺突を加える。6237はVI期高壺C3a類。内外面ともに丁寧なミガキを施す。6238はVII期高壺C4d類。内面に多条沈線を施し、その間に山形文を配する。6239は砥石。砥面は2面残るが、それ以外は割れている。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

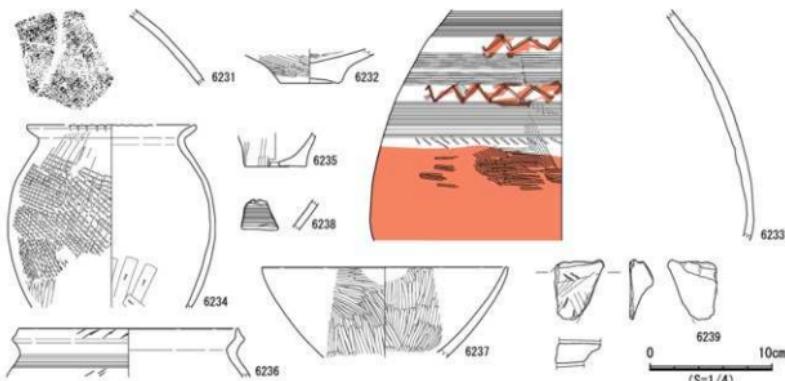


図1841 SB518 遺物実測図

## SB519（遺構：図 1842・1843、遺物：図 1844）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側は調査区域外に位置し、南西辺から南東辺にかけて複数の土坑に切られている。北側の平面形は明瞭であったが、他は遺構の重複が著しく不明瞭であった。

**形状** 東側が調査区域外に位置するがおよそ方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。埋土中に砂質土ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

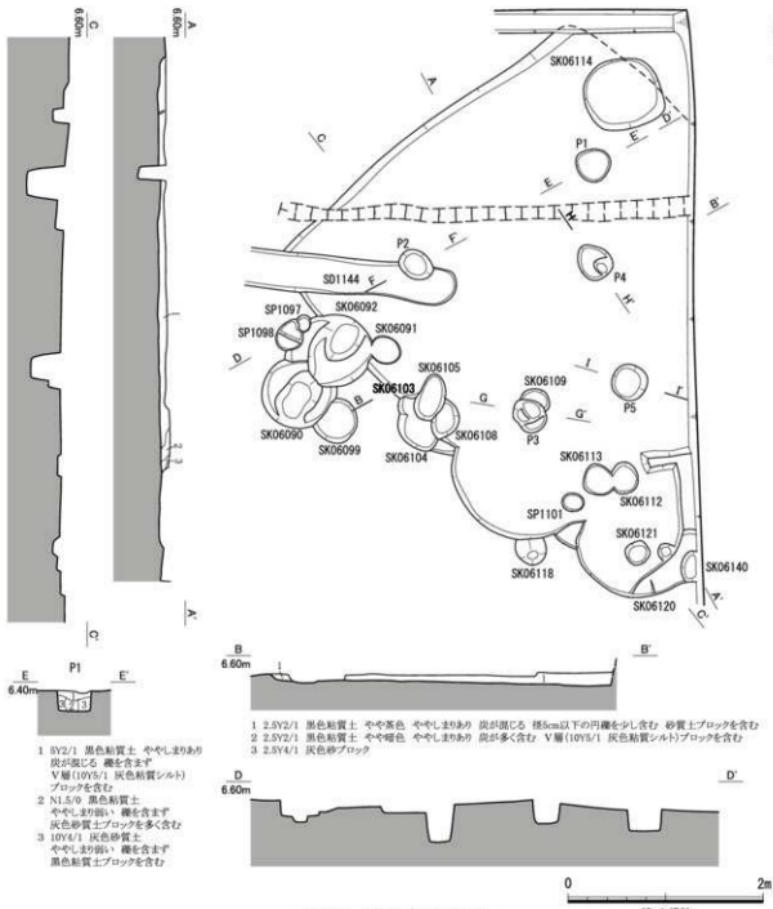


図 1842 SB519 遺構図 (1)

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴を5基検出した。このうち、P1とP2は土層断面でほぼ垂直にのびる柱痕跡を確認し、P4では底面に円形の窪みを確認した。また、P3は掘形が深く、P5は単層で掘形がやや浅い。このような形状や土層に加えて、平面的な位置関係からP1～P3を柱穴と考えた。

**遺物出土状況** 埋土中から土器843点、小穴から土器103点が出土した。埋土中の土器片は散在した状態で出土し、VII期の土器が多く、IV期の土器片がわずかに出土した。

**出土遺物** 6240はIV期壺C類。頸部には斜格子文が認められ、それ以下はハケによる調整痕が残る。6241はVII期壺B3類。口縁部が外反し、端部を丸く收める。6242はIV期甕A2類。口縁部が短く屈曲し、端部が肥厚する。平坦に仕上げられた端部には凹線が1条認められ、下端にはタタキが認められる。6243はIV期甕A3類。口縁部が強く屈曲して直立し、端部や外面にタタキが認められる。6244はVI期～VII期甕。短い脚部がハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6245はVII期甕B3類。口縁部が長く外反し、内外面には粗いハケ調整痕が残る。端部はナデによって平坦面が形成され、作りがやや雑である。6246はVII期高杯D5類。浅く内湾する口縁部内面には多条沈線を施し、その間に貝による連弧文帯を配する。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

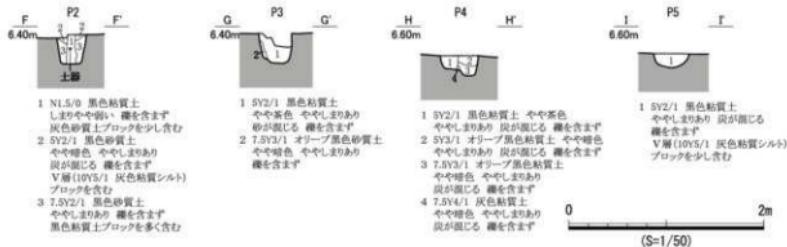


図1843 SB519 遺構図（2）

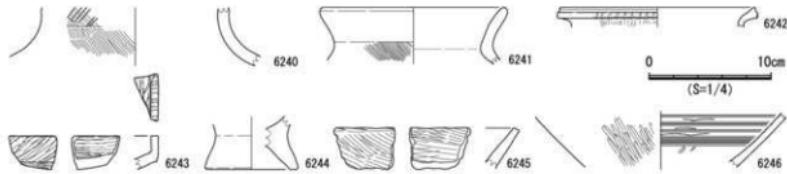


図1844 SB519 遺物実測図

SB520（遺構：図1845、遺物：図1846）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。西側は搅乱により失われ、東側上面にも搅乱があった。また、南西側をSB521に切られ、南東側でSB522を切る。なお、平面形は不明瞭であった。

**形状** 全形は不明であるが、東辺は直線的にのび、隅部はほぼ直角に屈曲することと、柱穴の配置状況から、全形はおよそ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、東壁面の傾斜はほぼ垂直

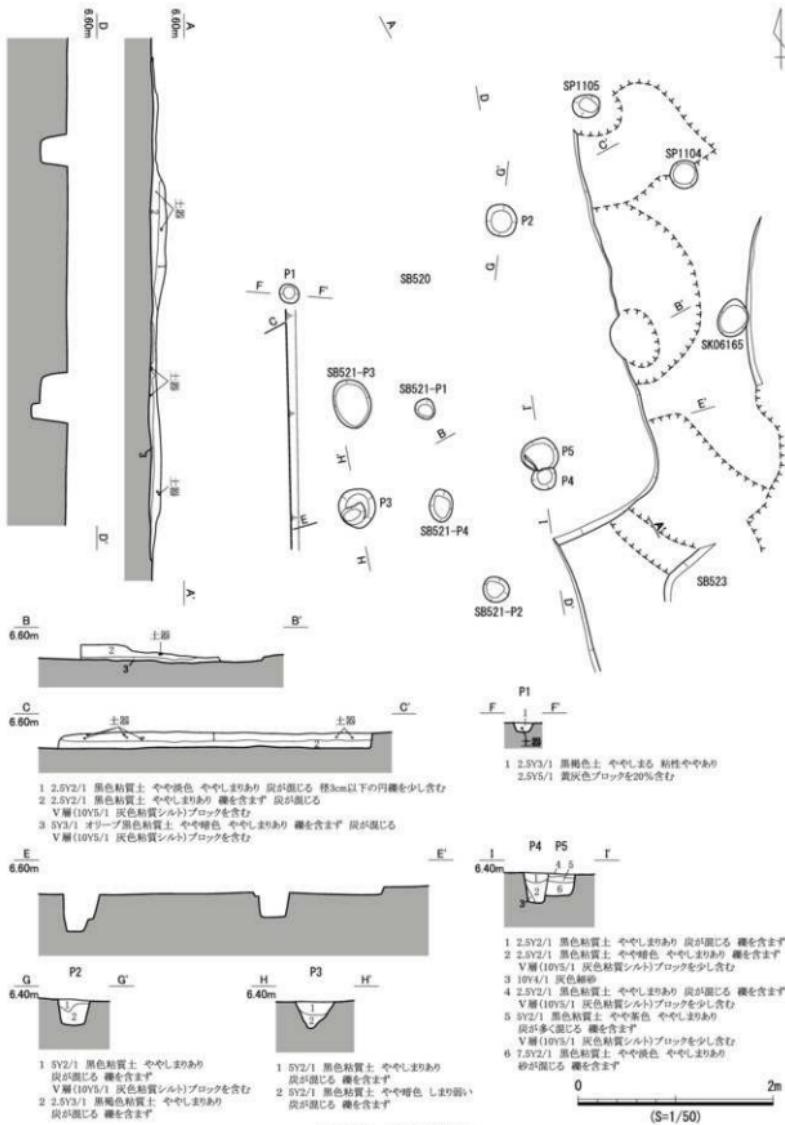


図 1845 SB520 遺構図

である。

**埋土** 3層に分層した。どの層にも炭が含まれ、ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴を5基検出した。このうち、P3のみ断面形が三角形を呈するが、他は逆台形を呈し、壁面の傾斜はほぼ垂直である。柱痕跡は確認できなかったが、小穴の形状や平面的な位置関係からP1～P4（もしくはP1～P3、P5）が柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,600点、木製品2点、小穴から土器37点が出土した。埋土中の遺物は散在して出土し、VI期～VII期の土器が多い。

**出土遺物** 6247はVI期～VII期壺A3類。口縁部が外反し、端部を上下両方に拡張する。内面は顯著な段をもって屈曲し、段は粘土を貼付して形成する。端部外面には沈線が1条認められ、内面の加飾は外側から羽状文、円形刺突文、直線文の順に配置される。6248はVI期～VII期甕。脚部がやや内湾し、接地面を平坦に仕上げる。6249はVII期高杯G3c類。脚部が扁平に開き、端部付近を多条沈線と山形文で加飾する。脚裾端部には平坦面をもち、沈線を施す。

**時期** VI期～VII期のSB522を切り、VII期のSB521に切られることと、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

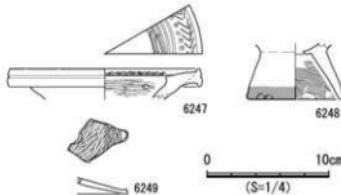


図1846 SB520 遺物実測図

#### SB521（遺構：図1847、遺物：図1848）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。西約半分は調査区域外にあり、東側から南側にかけてSB520とSB522、SB524を切る。本遺構周辺は多くの遺構が重複しており、土壤化の進行もあって平面形は不明瞭であった。

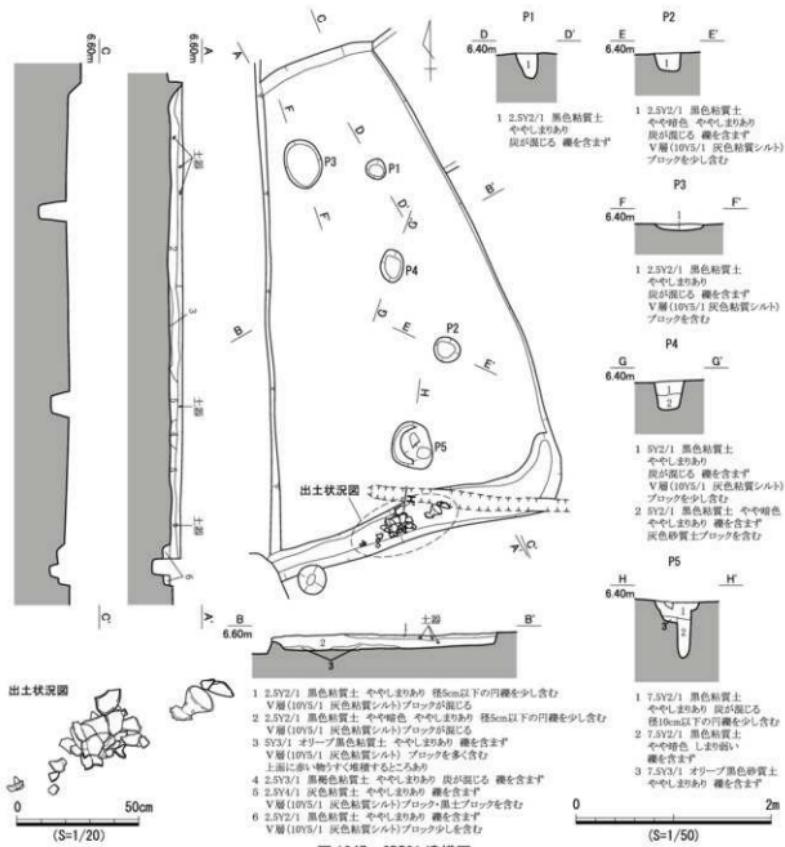
**形状** 東辺はやや外側に膨らみ、南辺はほぼ直線的にのびる。西側約半分が調査区域外に位置するが、北東隅と南東隅がほぼ直角に屈曲することから、南北長約5.0mの方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は北壁がやや緩く、東壁と南壁は急である。

**埋土** 5層に分層した。全体的にV層ブロックを含んでおり、人為堆積と考えられる。なお、3層上面では焼土の可能性がある赤色を呈する面を確認した。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面はV層ブロックが多く含まれており、床面よりやや下がった位置で小穴5基と壁溝を検出した。このうち、P3以外の4基は掘形が深く、P5では土層断面で柱痕跡を確認し、底面は南側が深く落ち込んだ。床面における平面的な位置や小穴の形状、深さなどからP1とP2が柱穴の可能性がある。壁溝は南壁に沿って検出した。幅約0.3m～0.4mとやや広く、埋土中にブロック土が含まれる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,263点、小穴から土器38点、壁溝から土器93点が出土した。埋土中の土器は散在して出土し、壁溝内では比較的の良い状態の遺物（6251、6254）がまとまって横位で出土した。土器はVI期～VII期のものが多く、IV期のものがわずかに混入する。

**出土遺物** 6250はIV期壺C類。口縁部が大きく外反し、端部を上下にわずかに拡張して顯著な平坦面を形成する。口縁部内面にはヘラ状工具による刺突を施し、その内側に振り幅の小さい波状文を施す。6251はVI期～VII期壺A3類。口縁部が外反し、端部を上下に拡張する。内面には粘土を貼付して顯著な段をもち、屈曲して端部に至る。端部側から羽状文、円形刺突文、擬凹線の順に施すし、更に赤彩を加えて加飾する。羽状文は、刺突文の方向を変えて3帯認められ、円形刺突文の間隔は一定しない。擬凹線は2条認められる。口縁端部及び頸部には直線文が認められる。6252はVI期～VII期壺B1類。口縁部が大きく外反し、端部には平坦面を形成する。頸部は直立気味である。6253はVI期器台B3類。受部がやや内湾し、端部を丸くおさめる。6254はVI期器台B3類。受部は大きく開く。受部直下の脚部にはわずかに直立する部位が認められ、以下は円錐状に開く。透孔を3方向に配置し、透孔



以下はわずかに内湾する。

**時期** 出土遺物はVI期～VII期のものが多いが、VII期のSB524を切ることからVII期と考えられる。

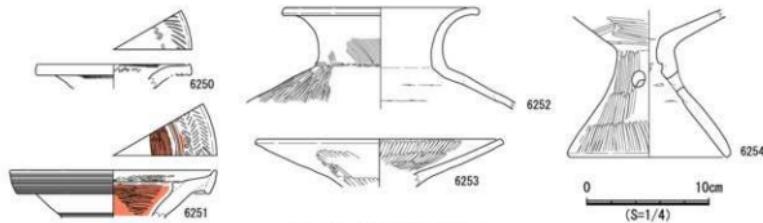


図 1848 SB521 遺物実測図

SB522（遺構：図 1849・1850、遺物：図 1851）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。上部をSB520、SB521、SB523、SB524等に切られていることから平面形を明確に把握することができず、各遺構の底面にて本遺構の壁溝を確認した。なお、埋土は部分的にしか残存しておらず、東側は調査区域外へのびている。

**形状** 上部が削平され、東側が調査区域外へのびているため定かではないが、壁溝の平面形からおよ

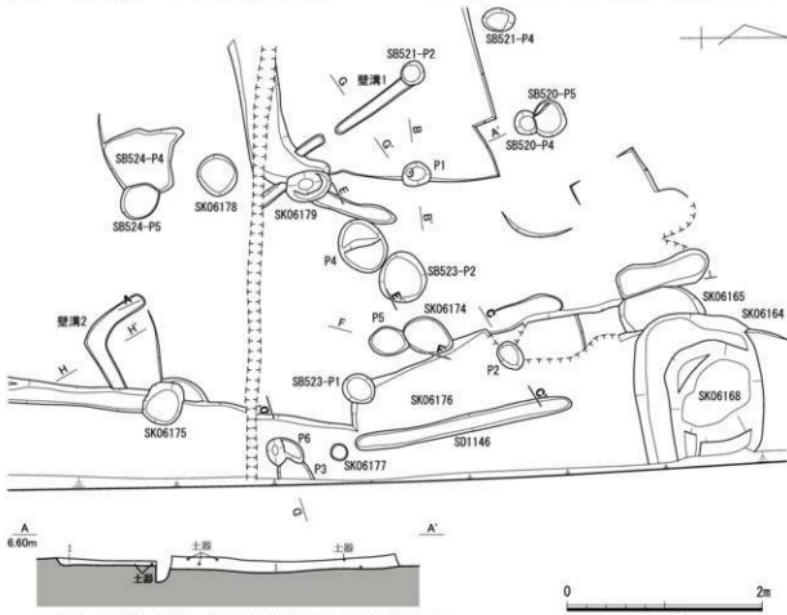


図 1849 SB522 遺構図（1）

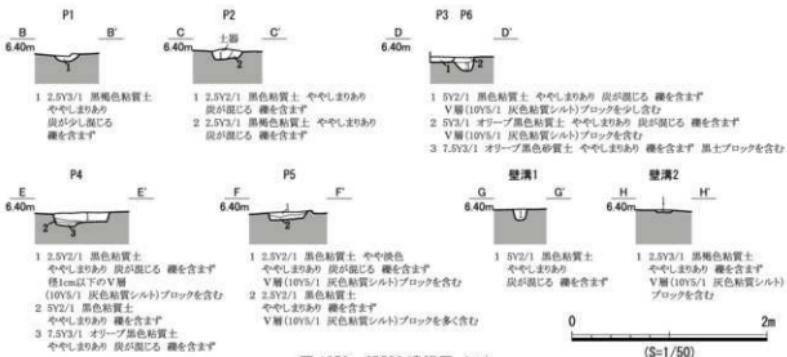


図 1850 SB522 遺構図(2)

そ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、残存している壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。炭や円礫を含み、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上では小穴を6基と壁溝を検出した。P1～P6はいずれも掘形が浅く、埋土は1層～3層に分層したが、柱痕跡は確認できなかった。平面的な位置関係からP1～P3が柱穴と考えられる。壁溝は西溝が深く、南溝は浅い。

**遺物出土状況** 埋土中から土器335点、小穴から土器18点、壁溝から土器12点が出土した。なお、埋土中の土器片は散在した状態で出土し、時期的にはVI期～VII期のものが多い。なお、P2からVII期高坏（6257）が出土した。

**出土遺物** 6255はVI期～VII期壺B類。底部はやや突出し、その外面には木葉痕が認められる。6256はVI期～VII期高坏C4a類。口縁部が直線的に開き、端部を丸くおさめる。6257はVII期高坏C4b類。口縁部が直線的に開き、端部付近でわずかに内湾する。端部には内傾する平坦面をわずかに形成して、2条の沈線を加える。

**時期** P2からVII期の土器が出土したが、周辺の竪穴住居跡との重複関係では本遺構が最も先行するため、VI期～VII期と考える。

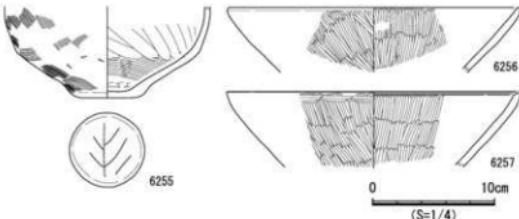


図 1851 SB522 遺物実測図

SB523（遺構：図1852、遺物：図1853）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側の半分以上は調査区域外に位置し、西側でSB522を切り、北側でSK0616に切られる。平面形は不明瞭であった。

**形状** 半分以上が調査区域外に位置するため、平面形は不明である。北西隅は丸みを帯びており、深

さは0.1m未溝で、残存している壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 単層で、炭と直径3cm以下の円礫をわずかに含む。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴を2基検出した。P1は単層、P2は3層に分層したが、柱痕跡は確認できず、いずれも掘形は浅い。そのため、性格は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器711点、小穴から土器26点が出土した。埋土中の土器は散在して出土し、北西隅の床面上にて残りの良い高壺G類（6262）が内面を上にして出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多い。

**出土遺物** 6258はVII期壺G2b類。口縁部が直立し、端部直下に多条沈線を施文する。内外面に煤が付着する。6259はVI期～VII期壺。脚部がハの字に開き、わずかに内湾する。6260はVII期壺E3類。口縁部が短く外反し、端部にはナデによって平坦面を形成する。頸部内面は屈曲が強く、屈曲部の外面には粘土を充填してわずかに直立する部位を形成する。6261はVI期～VII期鉢A2類。口縁部が短く外反し、端部先端で短く屈曲して受口状を呈する。外面は直立し、端部は尖る。6262はVI期高壺G3b類。平坦な壺底部から口縁部が直線的に外傾して開き、端部を丸くおさめる。口縁部直下にのみ多条沈線が認められ、壺底部に段は認められない。6263はVII期高壺G3c類の脚裾部。端部には顕著な平坦面をもつ。外面には多条沈線及び刺突文を交互に配し、端部平坦面には沈線のみを施文する。端部上端にも刺突を加え、精緻なつくりの資料である。6264はVI期～VII期台B2a類。受部がやや内湾し、

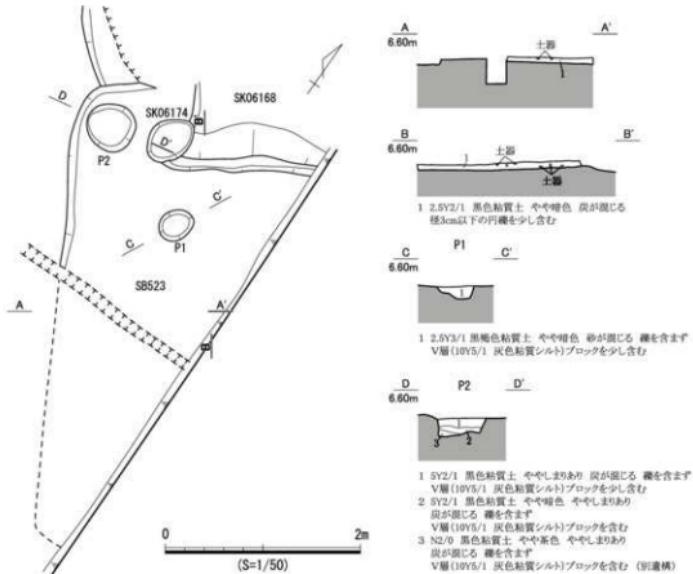


図 1852 SB523 遺構図

わずかに上下に拡張した端部には顯著な平坦面が認められ、そこに沈線を加える。

**時期** VI期～VII期のSB522を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

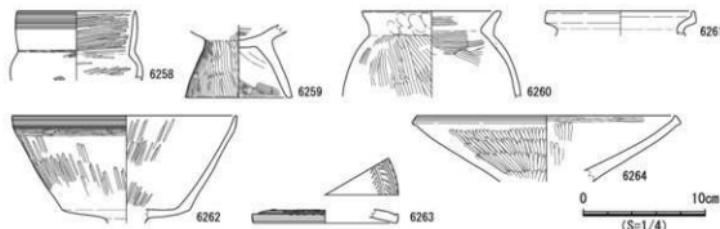


図 1853 SB523 遺物実測図

SB524（遺構：図 1854、遺物：図 1855）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。南側と西側は調査区域外に位置し、北側でSB521に、西側でSK06172などに切られ、東側でSB522を切る。本遺構周辺は多くの遺構が重複し、土壤化の進行もあって平面形は不明瞭であった。なお、検出時において銅鏡1点が出土した。

**形状** 東辺は直線的にのびるが、南側と西側が調査区域外に位置し、北側をSB521に切られるため、形状は不明である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 4層に分層した。ほぼ水平堆積であり、上下層とも炭を含む。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴8基を検出した。しかし、いずれも掘形は浅く、埋土は1層～2層である。また、柱痕跡が確認できなかったことから柱穴の推定は困難である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,665点、銅鏡1点、小穴から土器300点が出土した。小穴ではP5とP8からの出土が多く、埋土中からは散在した状態で多くの土器片が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多く、P5からVII期壺C類（6270）が出土した。

**出土遺物** 6265はVII期壺C類。口縁部が直立気味に立ち上がり、端部には顯著な平坦面を形成する。6266はVII期壺。口縁部を欠損するが、頸部にはやや直立する部位が認められる。胴部は球形を呈すると考えられ、器面にはハケによる調整を施す。6267はVI期～VII期壺A2b類。頸部には直立する部位がはっきり認められ、口縁部が受口状に屈曲する。端部付近は直立気味で、端部を丸くおさめる。頸部に直立部位を形成するために、頸部外面から粘土を充填した痕跡が認められる。6268はVI期～VII期壺。脚部がやや内湾する。6269はVII期壺B4類。口縁部がやや長く立ち上がり、外反して端部を丸くおさめる。胴部の最大径は中央より下がった位置となり、やや下膨れ気味となる。文様は認められず、粗いハケ調整を施すのみとなる。底部は低脚で、八の字に開く。6270はVII期壺C1類。口縁部が内湾し、端部をナデによって尖らせる。内面には端部直下に肥厚部を形成して沈線を施す。6271はVII期壺E類。脚部はやや短く、八の字状に開き、接地面を平坦に仕上げる。6272はVI期～VII期壺A2類。口縁部が短く外反し、端部付近で屈曲して受口状となる。6273はVI期～VII期鉢A4類。口縁部は直線的に開き、端部がわずかに内湾し、頸部直下には明瞭な直線文が認められる。6274はV期高杯B3a類。杯底部から口縁部が大きく外反し、平坦に仕上げた端部には擬凹線状のわずかな凹みが認められる。口縁部

は内面の屈曲は認められないが、外面の屈曲する稜は突帯状となり、きわめて明瞭である。6275はⅦ期高窓C類。脚据部がやや内湾する。6276はⅦ期高窓C2c類。口縁部がやや内湾し、内面に多条沈線を施す。6277は銅鑄。有茎鎌で、鎌身は膨をもつ長三角形を呈する。基部には鋳型段階のバリが一部に残る。

時期 VI期～Ⅶ期のSB522を切ることと、小穴出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

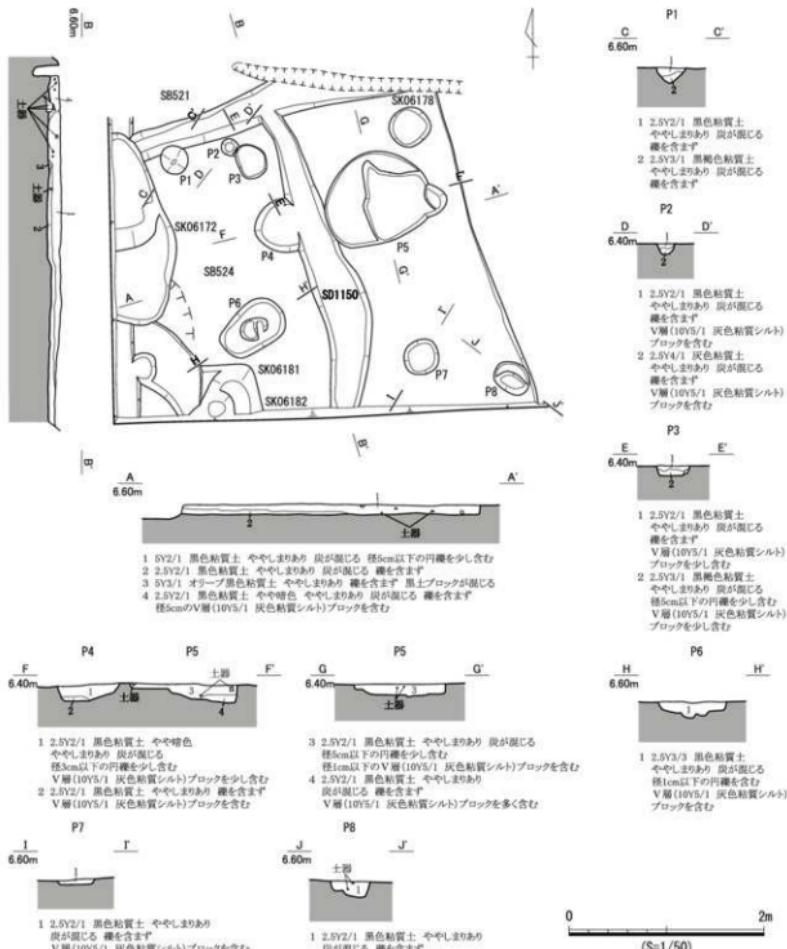


図 1854 SB524 遺構図

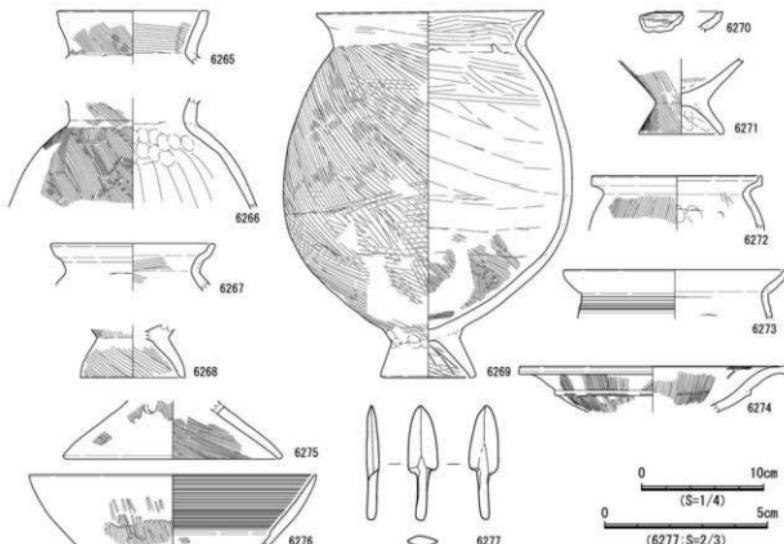


図 1855 SB524 遺物実測図

SB25 (遺構: 図 1856、遺物: 図 1857)

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側の半分以上は調査区域外に位置し、西側でSK06175に、北側でSK06176に切られる。平面形は不明瞭であった。

**形状** 東半分以上が調査区域外に位置するが、西壁が直線的にのび、南西隅はほぼ直角に屈曲することから、方形を呈すると考えられる。南北長約5.8m以上、深さ約0.2mであり、確認できた壁面の傾斜は急である。

**埋土** 北側では3層、南側では2層に分層した。なお、土層図C-C'、D-D'の1層は覆土、3層は掘形埋土である。覆土中には炭が多く含まれ、わずかに材として残存しているものもあった。また、ブロック土の混入が認められることから人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、南側で貼床（整地土）を確認した。床面上では小穴は確認できず、壁溝のみ検出した。壁溝の埋土は単層でブロック土を含み、底面が平坦で壁面の傾斜は急である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器537点、壁溝から土器4点が出土した。なお、埋土中の土器片は散在した状態で出土し、VII期のものが多い。

**出土遺物** 6278はVII期壺A5類。口縁部が短く外反して立ち上がり、端部を下方に拡張し、外面に擬凹線を施文する。6279はVI期～VII期甕C1類。口縁部が内湾し、端部をナデによって尖らせ、外面には沈線を施文する。6280はVII期高壺C3c類。口縁部が内湾し、内面には多条沈線を施文する。6281はVII期高壺C4b類。口縁部がやや肥厚して内傾面を形成し、多条沈線を施文する。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

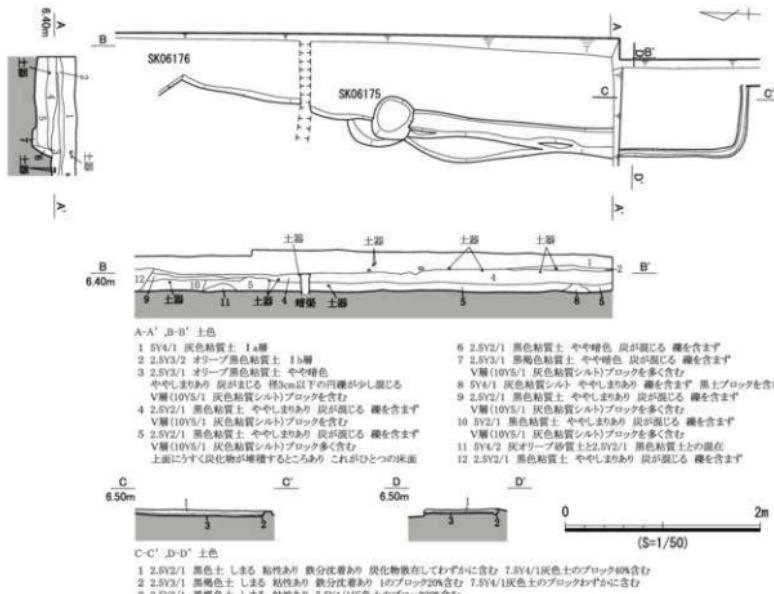


図 1856 SB525 遺構図



SB526 (遺構: 図 1858)

**検出状況** 東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。遺物包含層掘削後、幅約0.1mの溝を2条検出し、それらがほぼ直角をなす位置関係になるため、竪穴住居跡の壁溝とした。検出した溝は隅部が確認できず、断続的であった。なお、北側はSB525に切られる。

**形状** 東側半分ほどが調査区域外になるため全形は不明であるが、およそ方形を呈すると考えられる。また、壁溝はつながっていないため、隅部の状況は不明である。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。直角をなす位置関係にある壁溝の内側で、小穴を5基検出した。そのうち、P1、P2、P5は掘形が深く、P1とP5では土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から、P1とP2が柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 小穴から土器19点、壁溝から土器28点が出土した。しかし、いずれも細片であり、図示していない。

**時期** VII期のSB525に切られるため、VII期以前と考えられる。

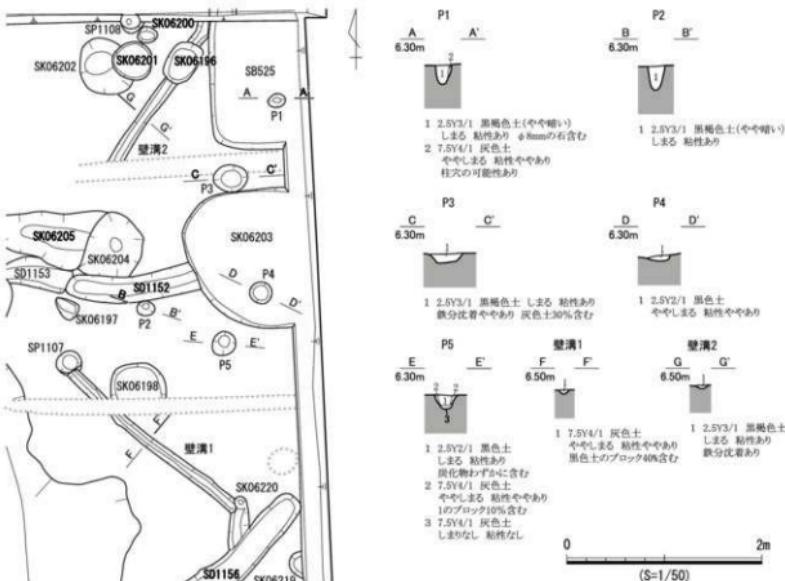


図 1858 SB526 遺構図

SB527（遺構：図 1859、遺物：図 1860）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面及び搅乱底面において検出し、平面形は不明瞭であった。竪穴住居跡の東側を検出したが、西側の隣接する調査区では確認できなかった。

**形状** 南北長約4.0mの隅丸方形を呈し、各辺は直線的である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。炭をわずかに含み、壁溝にはブロック土が混入している。

**床面** ほぼ平坦で、貼床（整地

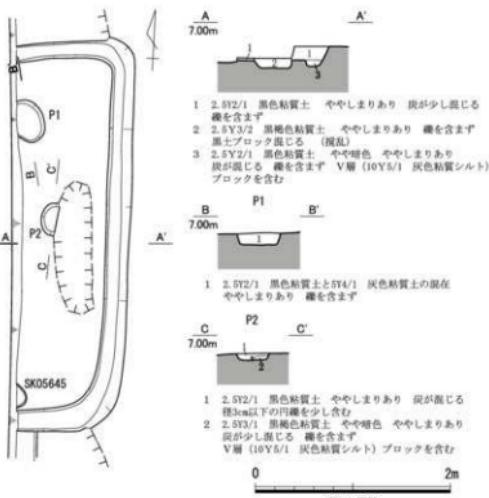


図 1859 SB527 遺構図

土)、炉跡は確認できなかった。床面にて壁溝及び2基の柱穴を検出した。壁溝は確認した範囲では途切れることなく全周しており、底面はほぼ平坦である。P1は浅いものの、北東隅部との位置関係から柱穴の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器242点、小穴から土器4点、壁溝から土器20点が出土した。埋土中の出土土器はV期～VII期の細片が多く、わずかにI期の遠賀川系土器片が含まれる。また、P1からV期の壺A類(6282)の口縁部片が出土した。

**出土遺物** 6282はV期壺A1a類。口縁端部を下方に拡張する。端部には擬凹線が認められ、内面には羽状文を施文する。

**時期** P1出土遺物の時期からV期と考えられ、VII期には埋没したと考えられる。

SB528 (遺構: 図1861、遺物: 図1862)

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面において検出し、平面形は明瞭であった。竪穴住居跡の東側を検出したが、西側の隣接する調査区では確認できなかった。

**形状** 南北長約4.4mで隅丸方形状を呈する。北東隅に比べて南東隅は丸みが顕著であり、東辺はほぼ直線的にのびる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 5層に分層した。1～3層が覆土、4・5が掘形埋土である。覆土には炭化物が混入しているものの、その成因は不明である。

**床面** ほぼ平坦で、灰色土ブロックを含む面を床面とした。床面にて4基の小穴を検出し、そのうちP1、P2、P4は掘形が深く、壁面の傾斜も急である。平面的な位置関係からP1とP2が柱穴の可能性がある。なお、壁溝及び炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器389点、小穴から土器3点が出土した。土器の時期はVI期～VII期である。

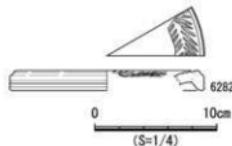


図1860 SB527 遺物実測図

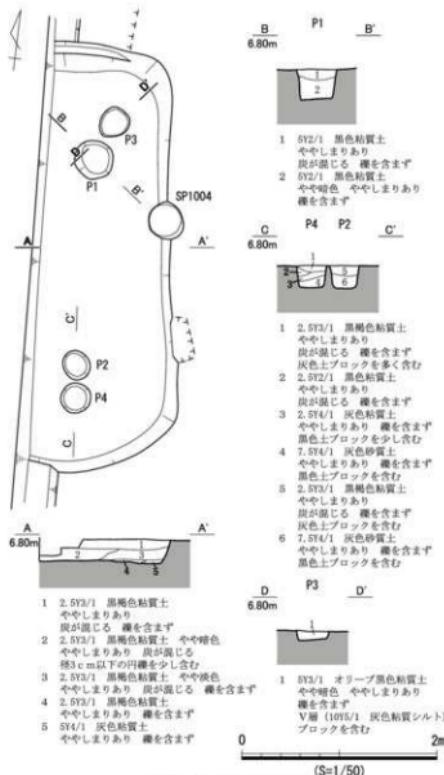


図1861 SB528 遺構図

**出土遺物** 6283はVI期～VII期鉢E類。胸部は丸みを帯び、口縁部は緩やかに外反する。

**時期** III期～IV期のSZ175を切っていることと出土遺物の時期から、IV期～VII期と考えられる。

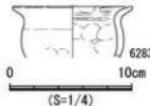
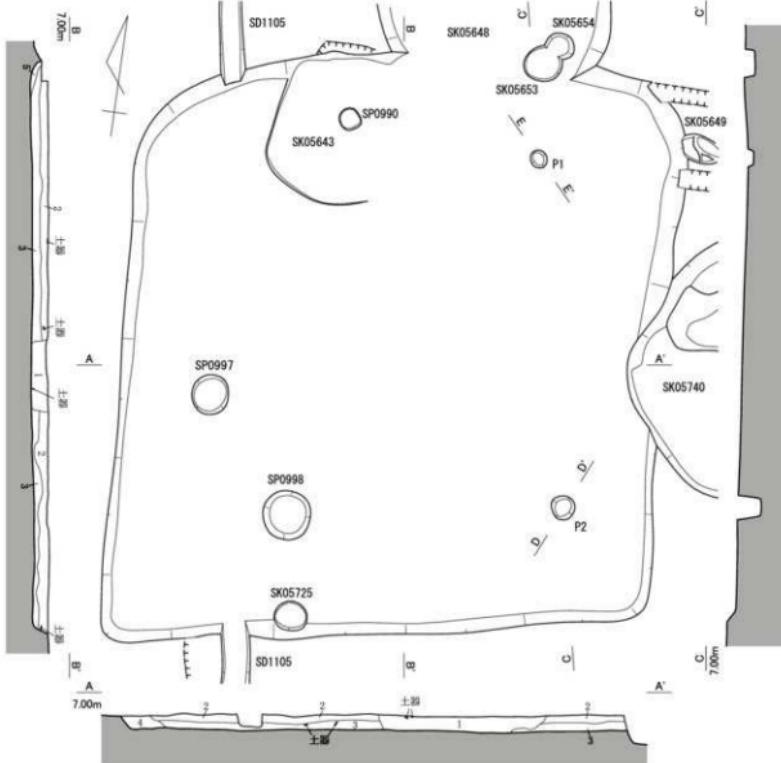


図 1862 SB528 遺物実測図

**SB529 (遺構: 図 1863、遺物: 図 1864)**

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側はSK05643、SK05648などに、東側はSK05649、



- 1 2.SY2/1 黒色粘質土 やや油性 ややシルト質 ややしまりあり 2.SY3/1 黑褐色土 下の内壁を少し含む
- 2 2.SY2/1 黑褐色土 やや砂質 ややしまりあり 壁が混じる 2.SY3/1 黑褐色土 ややしまりあり 壁が混じる
- 3 SY3/1 オリーブ黒色砂質土 ややしまりあり 壁が混じる 3.SY2/1 黑色粘質土を少し含む 黑色土ブロックを含む
- 4 SY2/1 黑色粘質土 ややしまりあり 壁が混じる 4.SY2/1 黑色粘質土 ややしまりあり 壁が混じる 砂を含まず
- 5 SY3/1 黑褐色粘質土 ややしまりあり 壁が混じる 砂を含まず

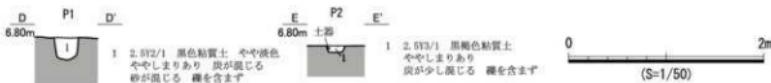


図 1863 SB529 遺構図

SK05740などに切られ、他遺構との重複が著しく平面形は不明瞭であった。

**形状** 南北長約6.0m、東西長約5.7mの不整隅丸方形を呈する。北側の隅部は丸みが顕著であり、各辺は北辺を除いてほぼ直線的に伸びている。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 5層に分層した。埋土全体に炭化物の混入が認められ、北壁から西壁にかけては壁面沿いに斜めの堆積がある。また、全体的にブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であるが、貼床（整地土）は確認できず、床面にて2基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも単層であるが、P2よりもP1が深く、P1は壁面の傾斜も急である。底面の標高に差があるものの、平面的な位置関係からP1とP2は柱穴の可能性がある。なお、壁溝及び炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,137点、小穴から土器2点が出土した。埋土中の土器は細片が目立ち、時期的にはVII期のものが多いが、わずかにI期の遠賀川系土器や、IV期の壺、甕片が含まれている。

**出土遺物** 6284はVI～VII期壺胴部。やや不明瞭ながら、数条の線刻が認められる。6285はVII期甕E類脚部。

口縁部がくの字に屈曲し、尖り気味の端部をユビナデで形成する。6286はVII期甕E類脚部。小型の脚部が直線的に開く。6287はVII期高杯G3類脚部。付根から裾部まで脚部が強く開き、透孔は単孔を3方向に配置する。6288はVII期高杯G3c類脚部。裾部が扁平に開き、端部には平坦面をもつ。外面に多条沈線が認められ、端部には二枚貝による刺突文、多条沈線間にには二枚貝による二重連弧文を2帯施文する。6289はI期遠賀川系土器の壺。木葉文もしくは連弧文と考えられる文様が認められる。

**時期** 遺構の重複関係から時期は言及できないが、出土遺物の時期からVII期と考えられる。

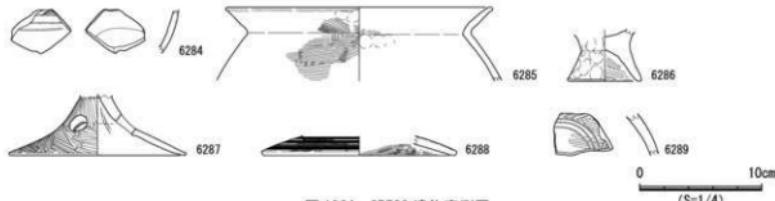


図 1864 SB529 遺物実測図

#### SB530（遺構：図1865）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側をSK05631など、西側をSB529など、南側をSK05720などに切られるように、他遺構との重複が著しく平面形は不明瞭であった。

**形状** 規模は不明であるが、確認できた範囲から平面形は方形の可能性が高い。東辺は直線的で、南東隅はほぼ直角に屈曲している。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜はやや急である。

**埋土** 4層に分層した。埋土中央が窪み堆積であるが、ブロック土が混入していることや、遺構の重複が著しいことから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、壁溝、炉跡を確認することはできなかった。床面と同じ標高で多くの小穴を検出したが、掘形の形状及び埋土の状況からP1とP2が柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,498点、石器類1点、小穴から土器73点が出土した。土器の時期は

VII期～VIII期であるが、いずれも細片であり図示していない。

**時期** 出土遺物からの言及は困難であるが、VII期のSB529に切られる事からそれ以前と考えられる。

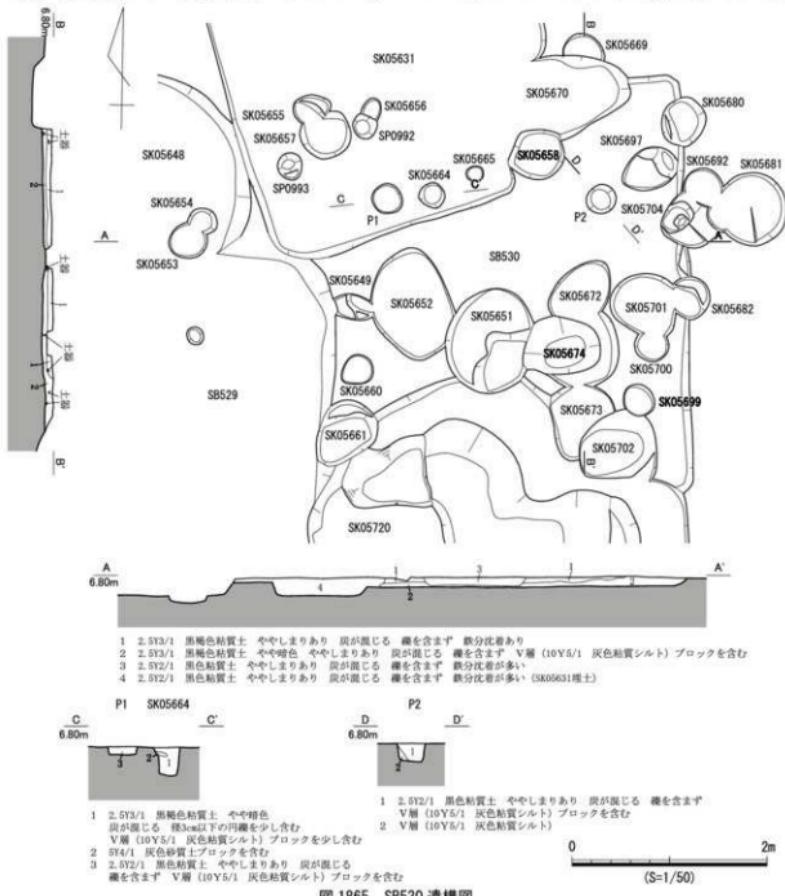


図 1865 SB530 遺構図

SB531 (遺構: 図 1866～1868、遺物: 図 1869)

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面において検出し、平面形は比較的明瞭であった。本遺構は、埋土全体から炭化物が出土し焼土や炭化材も確認できることから、焼失家屋と考えられる。

**形状** 南北長約5.3m、東西長約5.3mの不整隅丸方形を呈する。西辺はやや蛇行しており、北東隅

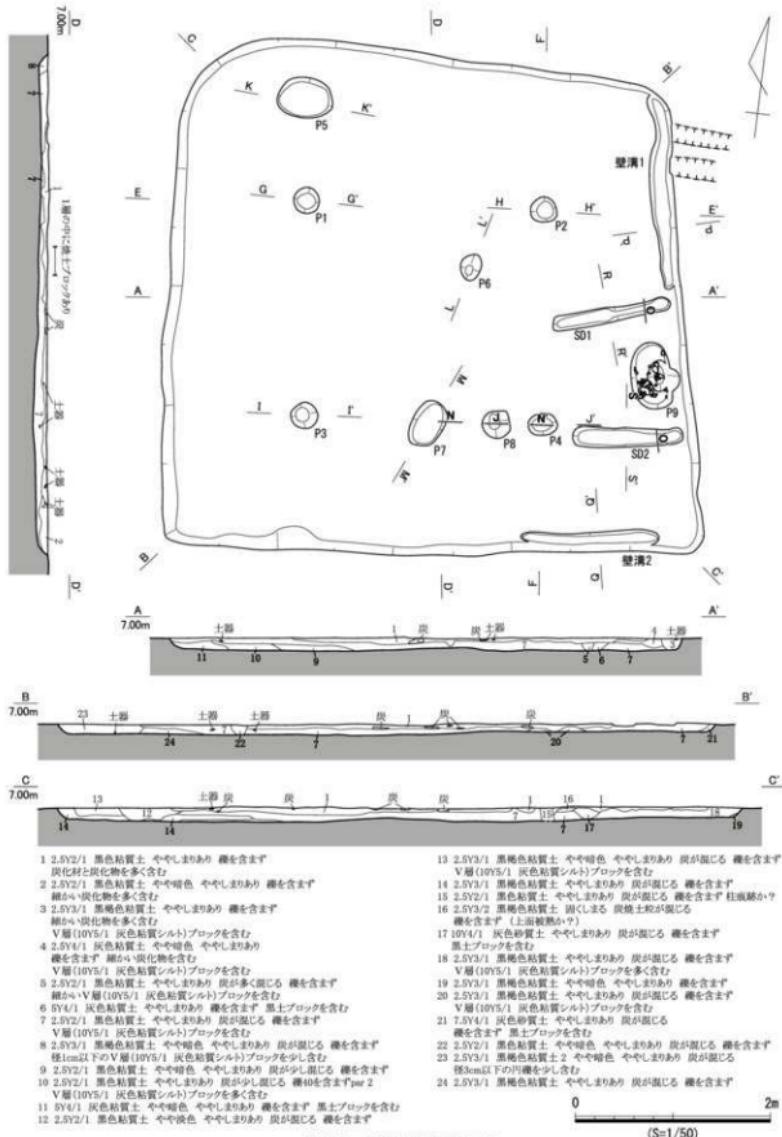


図 1866 SB531 遺構図 (1)

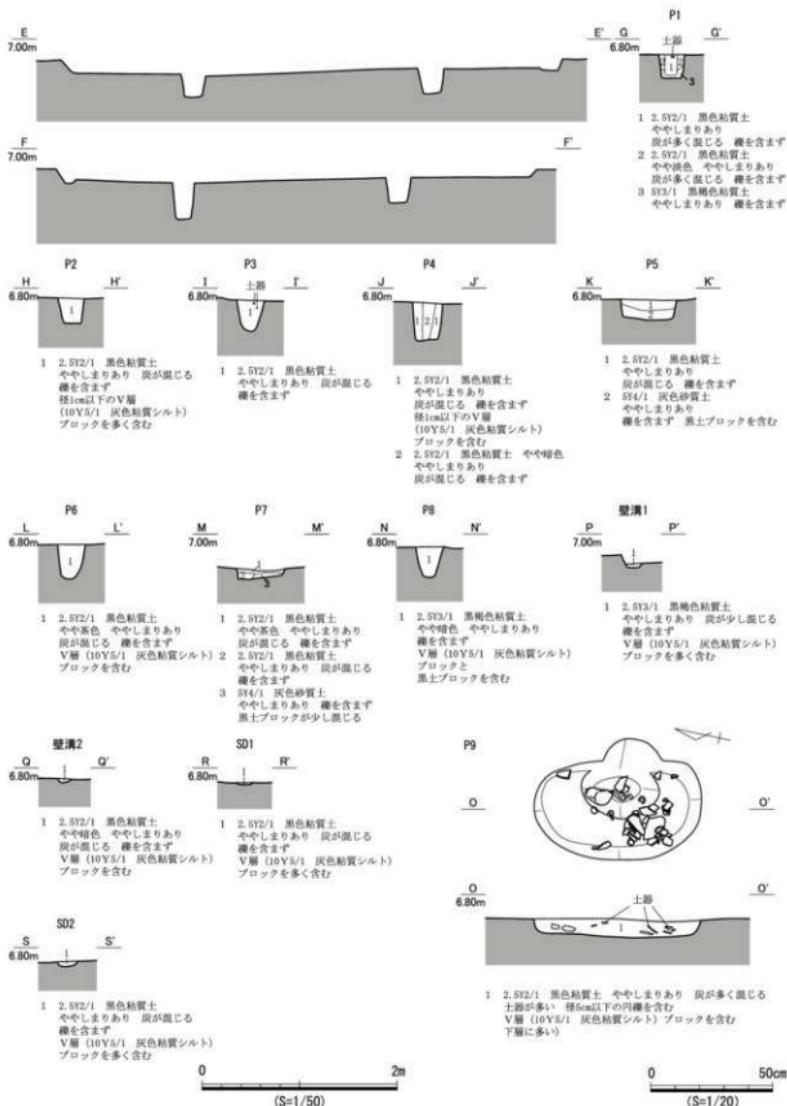


図 1867 SB531 遺構図 (2)

部と北西隅部は丸みを帯び、南東隅部は鋭角気味である。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 24層に分層した。面的な広がりが確認できる埋土は1層と7層である。埋土上層には焼土ブロックが、埋土全体には炭化物が認められる。住居中央付近では床面よりやや上位で炭化材が面的に広がっており、材の遺存状態は良くないものの、材の方向は中央から放射状となって出土したもののが目立つ。樹種同定の結果、炭化材の多くはクリもしくはその可能性のある材であった（第6章第7節参照）。また、炭化材を含む7層にはブロック土の混入が認められる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面にて9基の小穴と壁溝、溝などを確認した。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられ、そのうちP1とP4では土層断面で柱痕跡を確認した。東壁と南壁沿いでは溝状の浅い遺構を確認し、壁溝の一部と判断した。SD1とSD2は浅い溝状遺構で、P9はSD1とSD2の間にある小穴である。P9の検出時の平面形は明瞭で、底面は凹凸がある。土器がまとまって出土し、土器とともに円錐形も出土した。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器3,315点、石器類1点、種子類1点、小穴から土器218点、壁溝から土器13点、SD3とSD4から土器7点が出土した。住居の北西隅部では、床面直上においてVI期～VII期の壺D類（6296）が逆位で出土した。また、P9の中央やや南寄りから台付甕の脚部片が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多く、わずかにVIII期～IX期のものも出土したが、混入と考えられる。

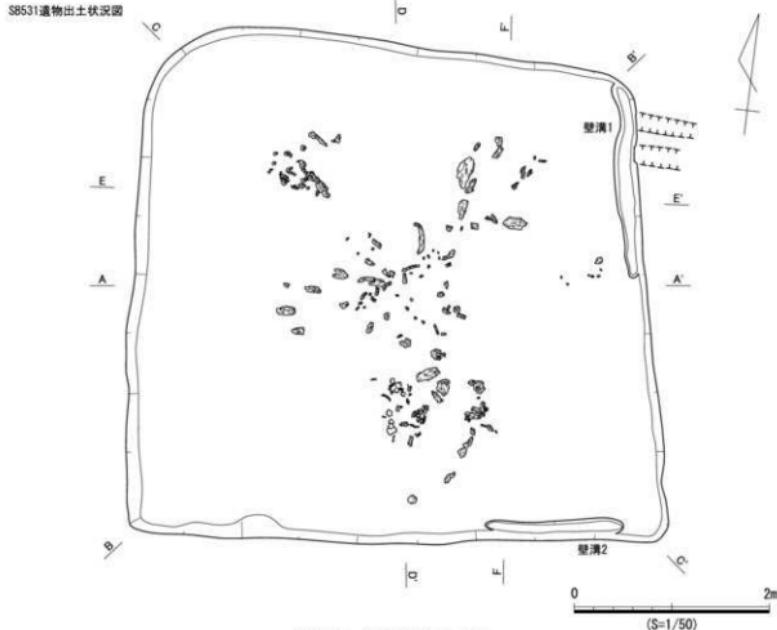


図1868 SB531遺構図(3)

**出土遺物** 6290はIV期壺。胸部下半にはハケ目が残り、煤が付着する。内面にはナデ及びケズリが認められる。6291はVI期～VII期壺A5類。口縁部が外反し端部を下方に大きく拡張する。端部には顕著な平坦面を形成して、直線文を施文する。胸部にはミガキが認められる。6292はVII期壺。口縁部が内湾し、端部を下方に大きく拡張する。口縁部内面には貝による羽状文3帯とその内側に円形刺突文を施文すし、外面には羽状文及び刺突文が認められる。6293はVI期～VII期壺A類。胸部上半に貼付突帯を4帯形成し、その上下に山形文を1帯ずつ施文する。その下方には刺突文が認められる。6294、6295はVI期～VII期壺。6294は胸部が丸く球形を呈し、器面はハケ調整を基本とする。胸部上半には格子状の線刻が認められるものの、明確な規則性にしたがって描かれたものとは考えにくい。内面にはハケ後ナデ調整を施す。底部は平底で突出する。6295は胸部に沈線が4条認められる。6296はVI期～VII期壺D3a類。頸部がなだらかに外反して立ち上がり、口縁部が強く外反する。端部が強く屈折して

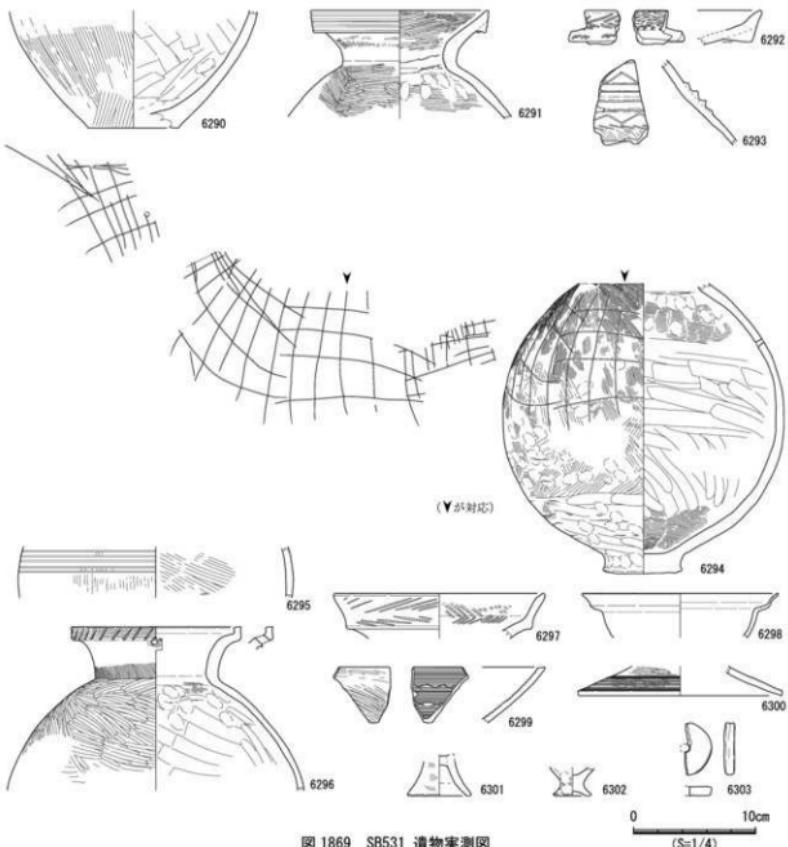


図 1869 SB531 遺物実測図

直立し、顯著な平坦面を形成する。外面には刺突文が認められる。口縁部内面には焼成前穿孔が1孔認められる。胴部外面にはハケ後ミガキ調整が認められる。6297はIX期壺。柳ヶ坪型壺で、口縁部内面及び端部に羽状文が認められる。6298はIX期鉢。口縁部下段が外反し、屈曲して上段がさらに強く外反する。外面に一部煤が付着する。6299はVI期～VII期高坏D4類。口縁部が大きく開き、端部に顯著な平坦面を形成する。内面には多条沈線を施し、その間にヘラによる山形文1帯及びヘラによる菱形文1帯を加える。6300はVII期高坏G3c類。脚裾部が平坦に開き、端部に平坦面を形成する。裾部上面には多条沈線を施し、その間にクシによる山形文3帯を加える。6301、6302はVI期～VII期手捏ね土器E類。6301は高坏脚部を模したと考えられ、裾部が外反する。6302の脚部は短く、大きく開く。6303は土製品。円盤状を呈し、中心に穿孔が認められる。胎土・調整からV期～VII期の可能性がある。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB532 (遺構: 図1870、遺物: 図1871)

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置し、南側は調査区域外にのびる。SD1107とSK05746に切られ、北側でSB533を切る。平面形は不明瞭であった。

**形状** 東西長約4.2mの不整方形を呈する。各辺ともに直線的にのびるが、北西隅部は大きく湾曲している。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は急である。

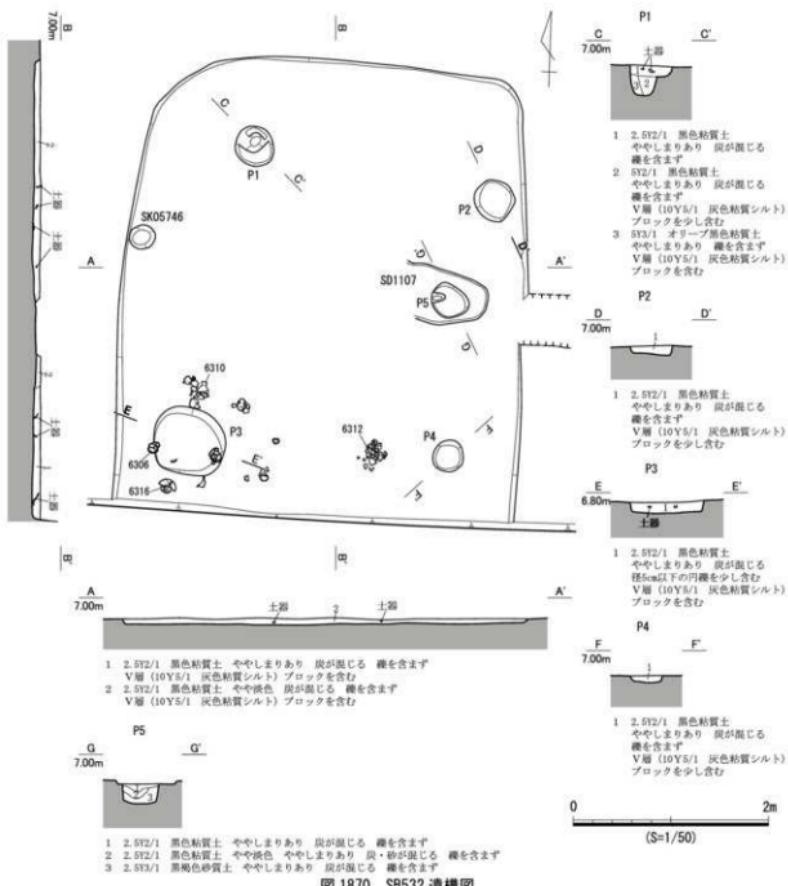
**埋土** 2層に分層した。いずれもブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面にて5基の小穴を検出し、そのうちP1では柱痕跡を確認した。底面の標高に差があり、掘形とややすれているが、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,695点、石器類1点、小穴から土器149点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多く、わずかにVIII期～IX期のものも出土した。住居南側では土器がまとまって出土し、P3検出面にて壺J類（6306）と甕E類（6310）が横位で、高坏坏部（6316）が正位で出土した。また、P3から鉢B類（6314）が出土した。

**出土遺物** 6304はVI期～VII期壺A5類。口縁部が内湾し、端部付近を肥厚して上下に拡張する。口縁部内面には羽状文を施し、端部には擬凹線が認められる。6305はVI期～VII期壺。頸部直下には直線文を施し、その下方に山形文状の刺突文が認められる。胴部は球形を呈し、底部は平底でやや突出する。器面調整はミガキを基本とし、内外面ともに部分的に煤が付着し、破断面にも煤が付着する。6306はVI期～VII期壺J1類。口縁部が短く外傾し、やや内湾する。胴部最大径は上方に位置して肩部が張り、底部は平底である。外面は全面にミガキ調整を施す。器面の一部に煤が付着する。6307はVII期壺A類。胴部上半に幅広の直線文を2帯施し、その間に山形文が認められる。6308はVI期壺D1a類。口縁部の屈曲が明瞭で、上段が短く外反して内傾面を形成する。外面には刺突が認められる。6309はVI期～VII期甕D類。器面には粗いハケ目が残る。6310はVI期～VII期甕E5類。口縁部が短く内湾し、端部を丸くおさめる。胴部最大径は上方に位置して肩部が張り、脚部がハの字に開く。器面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。6311はVII期甕B3類。口縁部がくの字に屈折し、口縁部が直線的に外傾する。頸部には口縁部形成時の貼付痕が認められ、端部には断続的なナデによる平坦面を形

成する。外面にはハケ調整を施し、一部に煤が付着する。6312はVII期斐D類脚部。器壁が薄く、器面にはハケ目が残り、煤が付着する。脚部がハの字に開き、端部を折り返す。6313はIX期斐。口縁部がわずかに屈曲し、大きく外方に開く。頸部には沈線を1条施文する。6314はVI期～VII期鉢B類。口縁部がやや内湾し、端部には平坦面を形成する、器面には粗いハケ目が残る。6315はVII期高坏D類。脚部が付け根から円錐状に開き、裾部がやや内湾する。脚部中位に透孔が認められ、2孔1対で2方向に配置される。6316はVII期～VIII期高坏。平坦な坏底部から口縁部が直線的に外傾し、端部がやや内湾する。内面の段、外面の棱ともに明瞭に残り、内外面ともに丁寧なミガキ調整を加える。坏底部は嬌小で、口径の3分の1以下である。6317はVII期～VIII期高坏D5類。口縁部が浅く直線的に開き、外面に



はミガキ調整を施す。内面には多条沈線を施し、その間にヘラによる連弧文が認められるが、器面の摩耗が著しく、文様は不明瞭である。

**時期** 出土遺物の多くはVI期～VII期であり、P3からもほぼ同時期の遺物が出土した。VI期～VII期のSB533を切ることから、VII期～VIII期と考えられる。

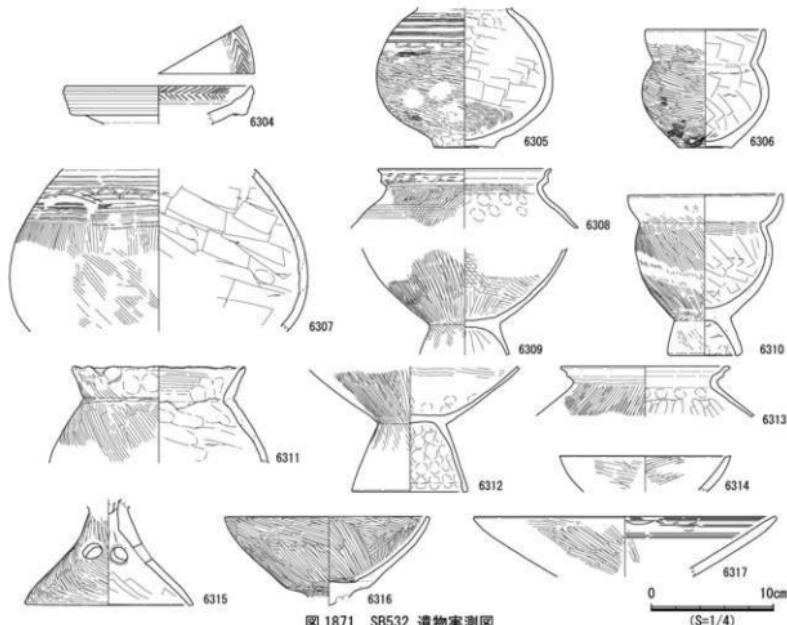


図 1871 SB532 遺物実測図

#### SB533 (遺構: 図 1872、遺物: 図 1873)

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。南北方向に直線的にのびる溝2条（壁溝1、2）を検出し、その内側に柱穴を確認したため、竪穴住居跡と判断した。検出面において壁溝が見えており、埋土は削平されたと考えられる。北東側をSB531に、南東側をSB532に切られている。

**形状** 南北辺は確認できていないが、東西2条の壁溝の配置から、隅丸方形状と考えられる。なお、壁溝間の距離は約5.2mである。

**床面** 壁溝間において3基の小穴を検出した。いずれも掘形が深く、壁面の傾斜は急であり、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。また、P1とP2では柱痕跡を確認した。なお、貼床（整地土）と炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 柱穴から土器41点、壁溝から土器7点が出土した。いずれもVI期～VII期の小片である。

**出土遺物** 6318はVII期壺H2b類。口縁部外面に多条沈線を施し、その間にヘラによる山形文、刺突文を加える。内外面ともにミガキ調整を施す。6319はVI期～VII期甕A4類。口縁端部が強く内湾し、

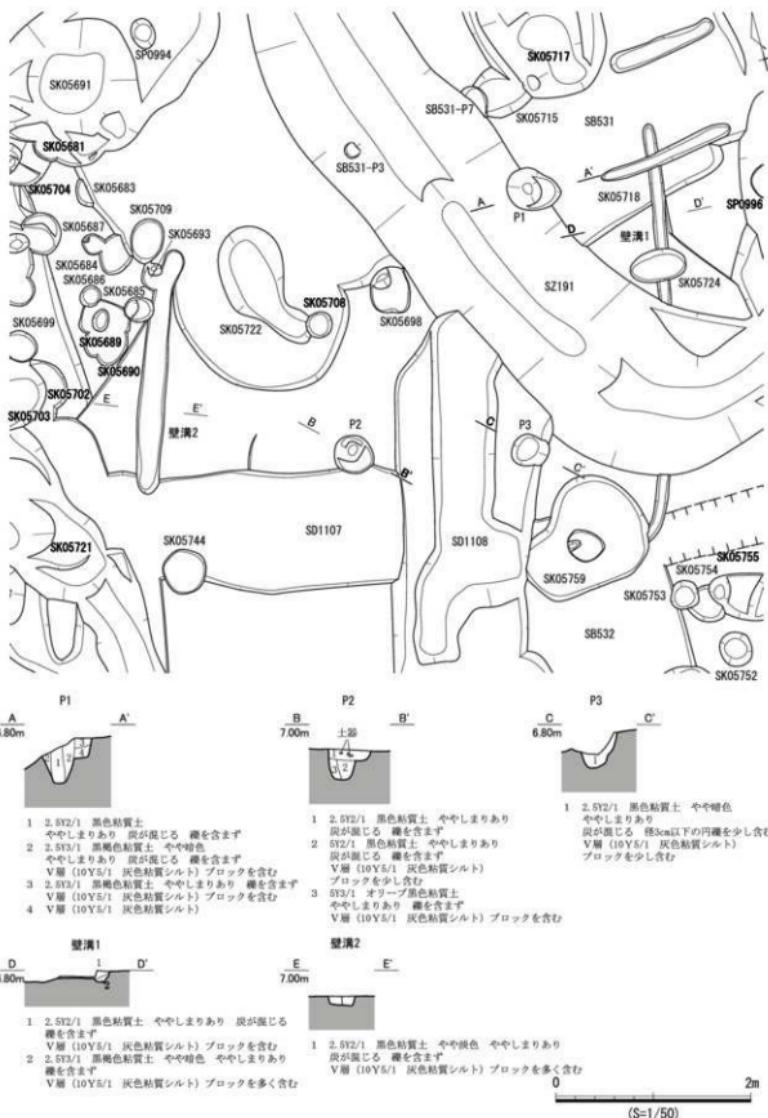


図1872 SB533 遺構図

端部は尖り気味である。

時期 VI期～VII期のSB531に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。



図 1873 SB533 遺物実測図

SB534 (遺構: 図 1874～1876、遺物: 図 1877)

検出状況 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側が調査区域外にある。V層上面における検出であり、遺構の重複が著しいため平面形が不明瞭であった。北東側でSB536に、中央東寄りで

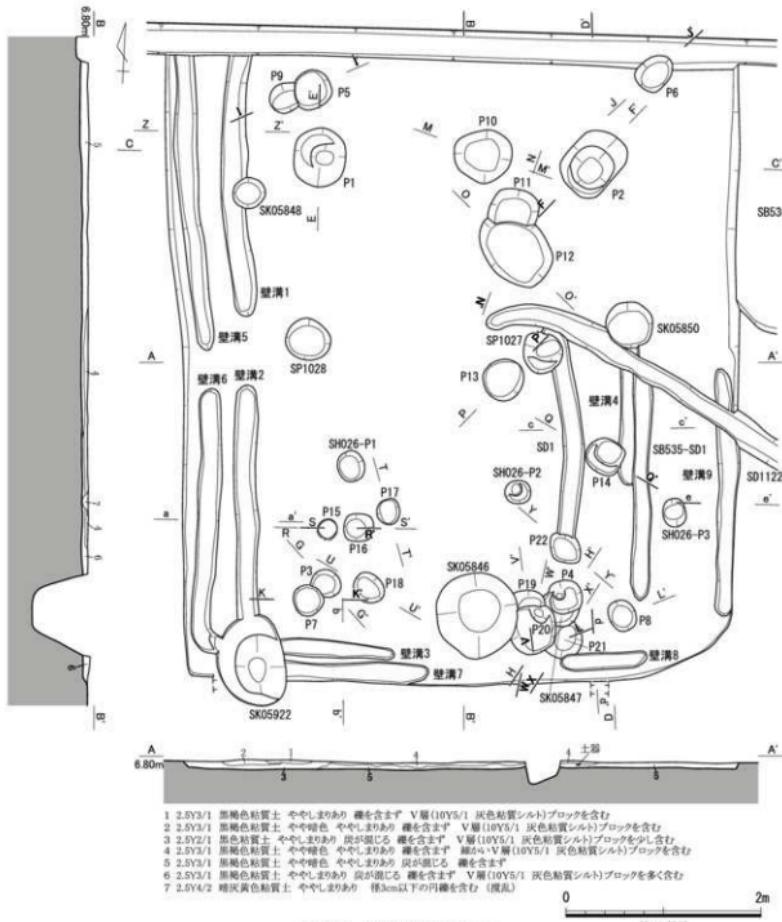
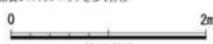


図 1874 SB534 遺構図 (1)

1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 繩を含まず V層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや白色 ややしまりあり 繩を含まず V層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3. 2.5Y2/1 黑褐色粘質土 ややしまりあり 壁が崩じる 繩を含まず V層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少く含む
4. 2.5Y3/1 黑褐色粘質土 やや白色 ややしまりあり 繩を含まず 縄からV層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
5. 2.5Y3/1 黑褐色粘質土 やや白色 ややしまりあり 壁が崩じる 繩を含む
6. 2.5Y3/1 黑褐色粘質土 ややしまりあり 壁が崩じる 繩を含まず V層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
7. 2.5Y4/2 増灰黄色粘質土 ややしまりあり 3cm以下の円錐形を含む (複数)



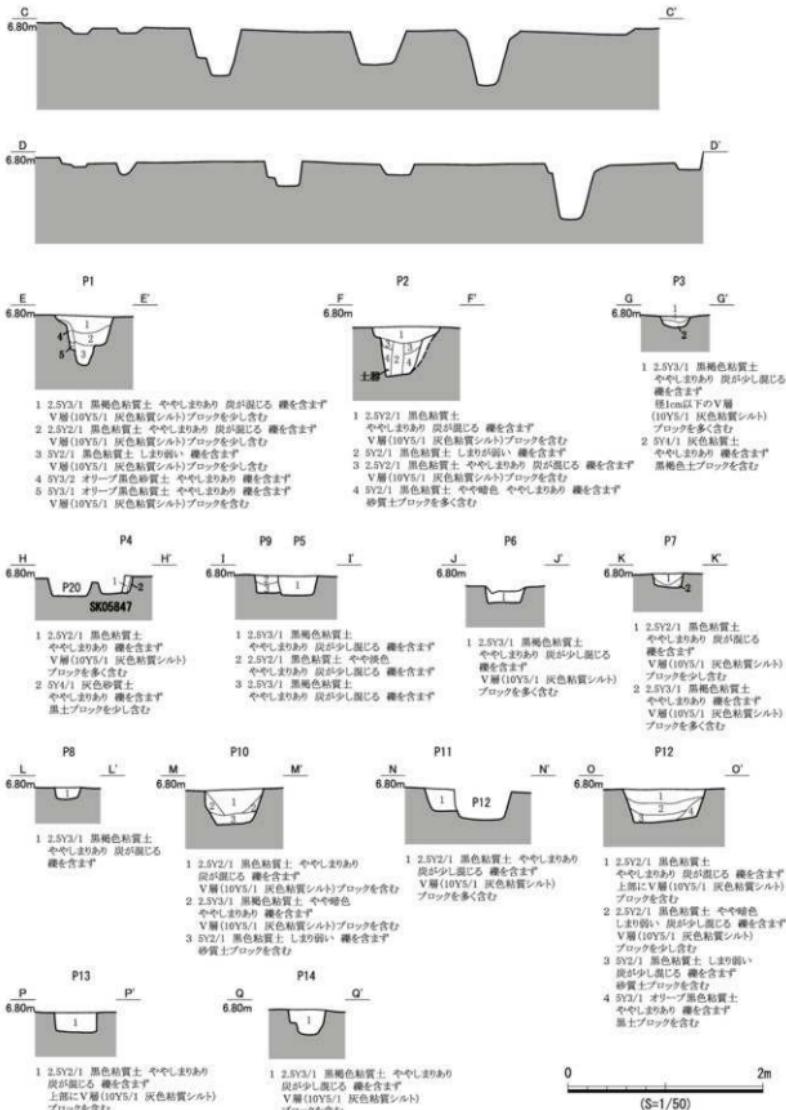


図1875 SB534 遺構図（2）

SD1122に、南西側でSK05922に切られ、南側でSB535を切る。

**形状** 東西長約5.2mで、南北に長い長方形を呈する。確認できた3辺は直線的で、南西隅部はほぼ直角であるが、南東隅部は丸みを帯びる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 7層に分層した。埋土中にブロック土の混入が多く、層界の凹凸もみられるため人為堆積と考えられる。なお、埋土掘削中に北西部の床面近くで炭化物の広がりを確認した。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上で小穴22基と壁溝を含む溝状

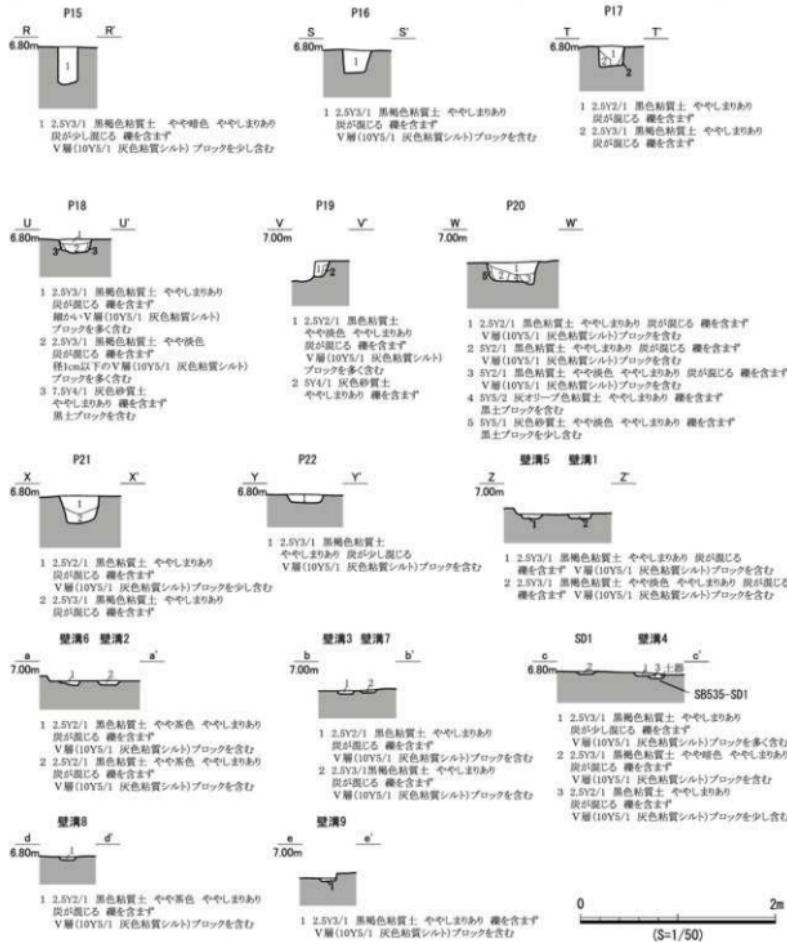


図1876 SB534 造構図（3）

遺構10条を検出した。壁溝が二重になることから建て替えがあったと考えられ、柱穴P7がP3を切ることから、柱穴は内側から外側へ拡張されたと考える。壁溝も同様の変更があったとして、内側の壁溝2が古いと判断した。平面的な位置関係からP1～P4を建て替え前、P5～P8を建て替え後の住居跡の柱穴と考えた。また、残りの15基の小穴の一部は、重複するSB535に所属する可能性もある。壁溝については、内側の壁溝1～壁溝4を建て替え前、外側の壁溝5～壁溝9を建て替え後とした。SD1は間仕切り溝の可能性が考えられる。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,182点、小穴から土器297点、壁溝やSD1から土器38点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが主体であり、少量ながらVIII期以降の遺物も出土した。なお、P18からVI期～VII期の甕A類(6323)、P21からVII期の甕D類(6325)が出土した。

**出土遺物** 6320はVI期～VII期壺A類。口縁部が強く外反する。口縁端部下面には剥離痕が認められることから、端部を下方に拡張していた可能性が高い。6321はVII期壺A類。胴部上半に直線文が2帯認められ、その間に大振りの山形文を施文する。山形文の文様に合わせて赤彩を施す。6322はVII期～IX期壺。口縁部が外反する。外面には段を形成して二重口縁状を呈し、間隔をあけて羽状文を施文する。6323はVI期～VII期甕A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。端部には顕著な平坦面を形成する。6324はVI期～VII期甕A4類。口縁部がくの字に屈折し、端部が屈曲してほぼ直立する。6325はVII期甕D2b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が短く屈曲する。6326は偏平な円盤状の土製品であるが、蓋である可能性が高い。胎土・調整からV期～VII期の可能性がある。

**時期** VI期～VII期のSB536に切られるが、小穴出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

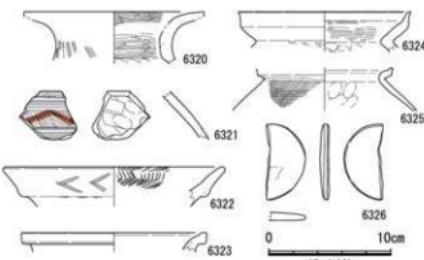


図1877 SB534 遺物実測図

#### SB535（遺構：図1878）

**検出状況** 東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、大半をSB534に切られる。V層上面において検出したが、平面形は不明瞭であった。

**形状** 確認範囲はわずかだが、丸みを帯びた南東隅部と南西隅部を確認したことから、全形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と考えられる。南辺は2条の壁溝（壁溝1、壁溝2）に沿うと考えられ、ほぼ直線である。

**埋土** 2層に分層した。南東隅部と南西隅部では埋土の様相が異なり、南西隅部にはブロック土の混入が認められる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴は検出できず、2条の壁溝を確認したのみである。他にも、本遺構を切っているSB534の埋土下層から、壁溝の可能性がある溝状遺構（SD1）を確認した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器10点、壁溝から土器8点が出土した。大半がVI期～VII期の小片だが、わずかにV期のものも出土している。しかし、いずれも細片であり図示していない。

**時期** VI期～VII期のSB534に切られることから、それ以前と考えられる。

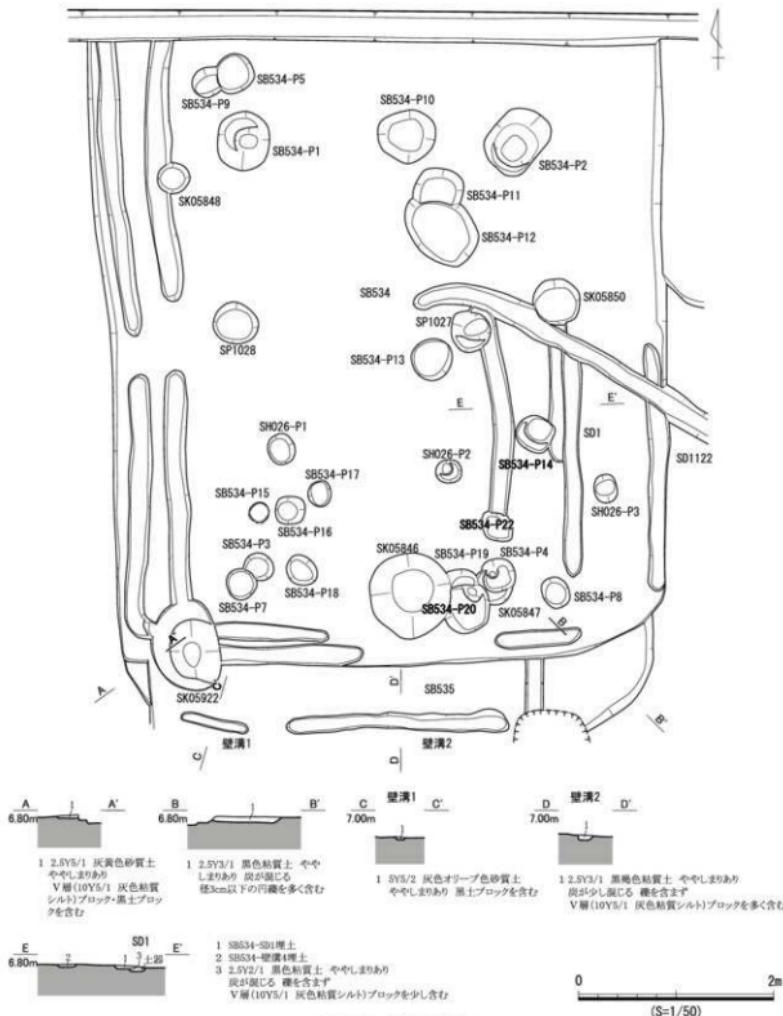


図 1878 SB535 遺構図

## SB536（遺構：図1879、遺物：図1880）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置し、西側でSB534を切る。V層上面における検出であるが、遺構の重複のため平面形は不明瞭であった。なお、埋土上面でSF003を検出した。

**形状** 半分以上が調査区域外となるため、平面形は不明である。南東辺は直線的であるが、南西辺は中央がやや外側に膨らみ、隅部はやや丸みを帯びている。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。埋土全体にブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上で7基の小穴を確認し、そのうち、P1、P5、P6はやや深く、壁面がほぼ垂直である。平面的な位置関係から、P1が柱穴と考えられる。また、P7は東西に長い楕円形の穴で、底面東側にて土器がまとまって出土した。なお、壁溝、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器572点、石器類1点、小穴から土器60点が出土した。南西隅でVI期

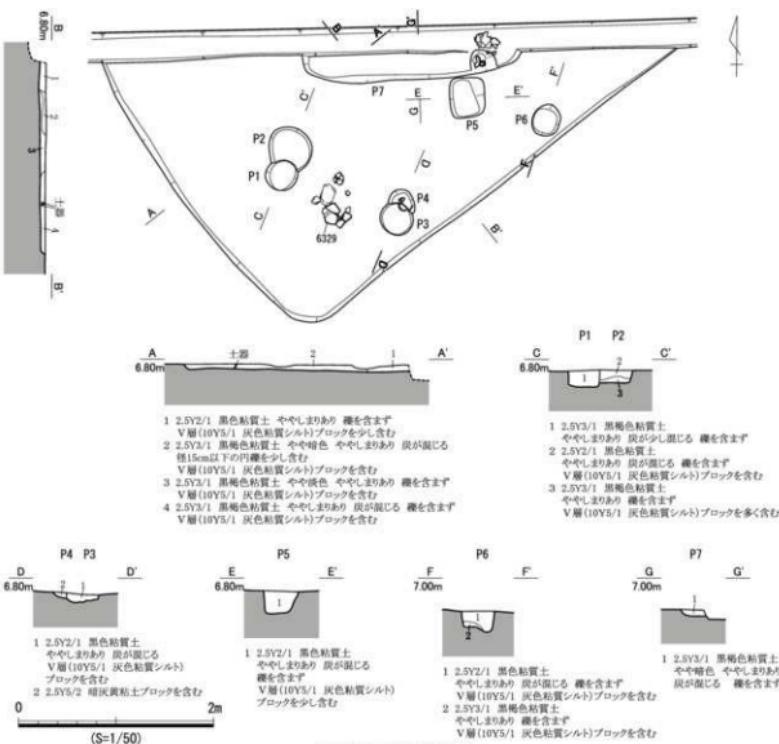


図1879 SB536 遺構図

～VII期の甕(6329)とともに砥石(6331)が正位で出土した。また、埋土中からヒスイ製の勾玉(6332)も出土した。埋土中の土器は散在して出土し、VI期～VII期のものが多い。

**出土遺物** 6327はVI期～VII期壺。胴部内面には粗いハケ目が残る。外面にはハケ及びナデによる調整を加えるものの、輪積み痕が明瞭に残るなど雑な作りである。底部はやや小さく、中央が大きく窪む。6328はVI期～VII期壺A5類。口縁部を下方に大きく拡張し、内面には羽状文、端部平坦面には擬凹線を施文する。端部には赤彩を施す。6329はVI期～VII期甕B2類。口縁部が強く外反して端部を丸くおさめ、外面には煤が付着する。6330はVI期～VII期高杯C3c類。口縁部が内湾し、肥厚する内面に多条沈線が認められる。6331は砥石。扁平な円盤の表裏面を砥面として使用し、大きく窪んでいる。側面には多数の敲打痕が残り、表面下方に幅約0.6cmの溝状の窪みがある。6332はヒスイ製の玉類。不整形を呈し、穿孔の断面形は円錐状である。

**時期** VI期～VII期のSB534を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

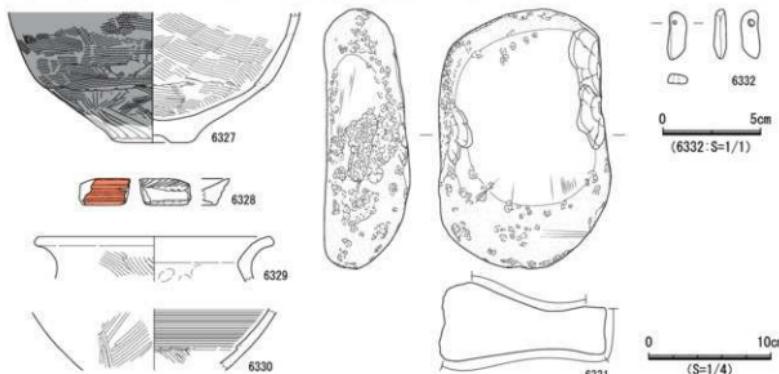


図1880 SB536 遺物実測図

SB537（遺構：図1881・1882、遺物：図1883～1885）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置し、SB538とSB540に切られる。本遺構周辺は、複数の堅穴住居及び方形周溝墓の溝が重複し、平面形は不明瞭であった。なお、底面でSK05384を検出したが、遺物の出土状況から、SK05384は本遺構より後出する可能性が高い。

**形状** 北西～南東長約5.6m、北東～南西長約5.1mで、東西方向にやや長い不整形形を呈する。南東辺は直線的だが、南西及び北西辺はやや蛇行する。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層し、埋土全体に炭化物が混入する。また、中層以下にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて17基の小穴を検出した。いずれも土層断面で柱痕跡は確認できなかったが、P13とP16は他の小穴よりも深く、壁面の傾斜も急である。しかし、平面的な位置関係から柱穴を想定するのは困難である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器6457点、炭化材・炭化物1点、石器類8点、小穴から土器96点が出

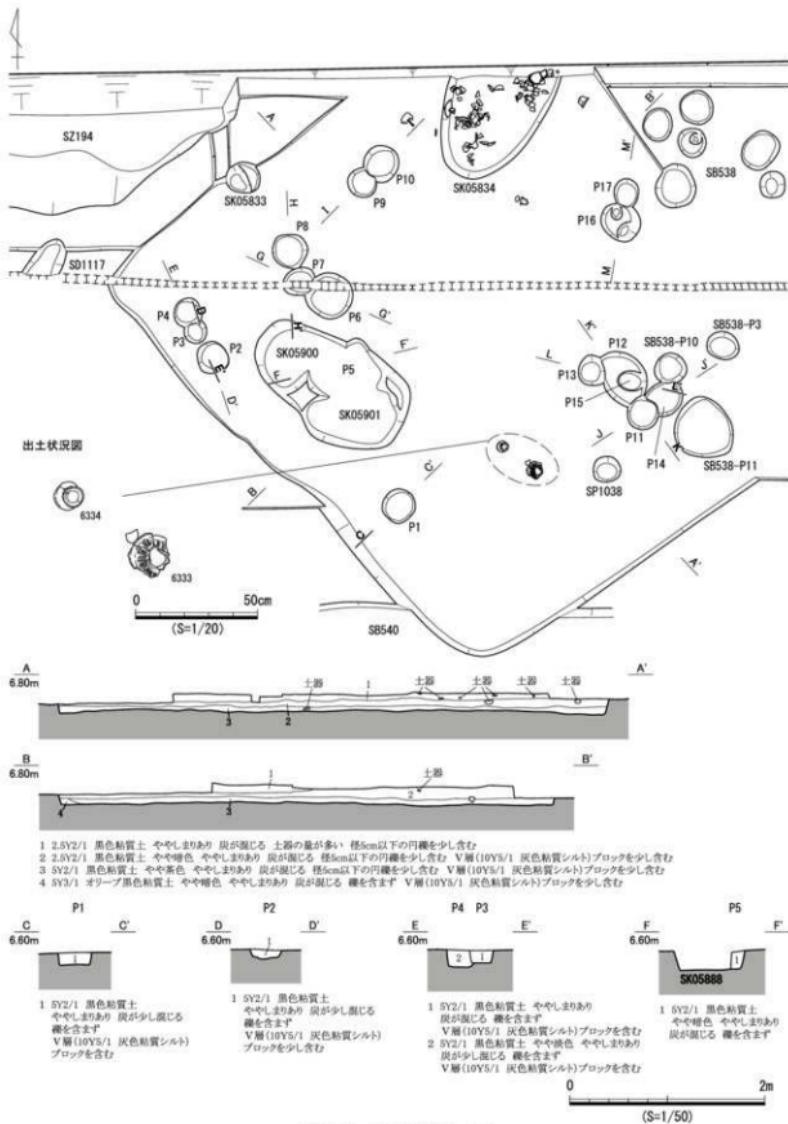


図 1881 SB537 遺構図（1）

土した。中央南寄りの床面上ではV期の壺J類(6334)が口縁部を上にしてほぼ完形で出土し、その横からV期の壺A類(6333)の口縁部片が出土した。土器はV期～VII期のものが多く、わずかにVIII期やIX期のものが混入する。なお、SK05834出土遺物との接合は確認できなかった。

**出土遺物** 6333～6346は壺。6333はV期壺A1a類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張して平坦面を形成する。口縁部内面には、端部際に刺突文を施文し、その内側に円形刺突文を配する。端部平坦面にはクシによる羽状文を施文し、3条1組の棒状浮文を複数箇所に貼付する。内面にはミガキ調整を施し、外面にはナデ、ハケを施す。頸部には貼付突帯が認められる。頸部の突帯直下に直線文、波状文が認められる。6334はV期壺J1類。口縁部が短く直線的にハの字に開き、端部に顯著な平坦面を形成する。底部を欠損するが、胴部最大径の肩部が強く張る。胴部下半の一部に煤が付着する。6335、6336はV期壺K類。6335は頸部が長く直立し、口縁部が外反する。端部の内外面にはナデによるわずかな凹面が認められ、端部には外傾する平坦面を強いナデによって平坦に仕上げる。6336は口縁部が外反し、端部を大きく下方に拡張して端部に顯著な平坦面を形成する。端部には擬凹線が認められ、その上に円形浮文を貼付する。端部及び口縁部外面は、被熱のためか赤色化している。胎土から生駒西麓産の可能性がある。6337はV期壺。脚部がハの字に開き、裾部が外反する。6338はV期～VI期壺A類。胴部上半に刺突文帯と直線文帯が交互に施文される。6339はV期～VI期壺A1a類。口縁部が直線的に外傾し、端部を下方に拡張して顯著な平坦面を形成する。口縁部内面には、端部側からクシによる羽状文2帯、直線文帯、クシによる羽状文2帯の順に施文される。端部には擬凹線を施文し、2本1組の縦位の棒状浮文を貼付する。6340はV期～VI期壺B2a類。頸部が胴部から直立気味に立ち上がり、口縁部が大きく外反して端部に顯著な平坦面を形成する。6341はV期～VI期壺。底部は小さく、

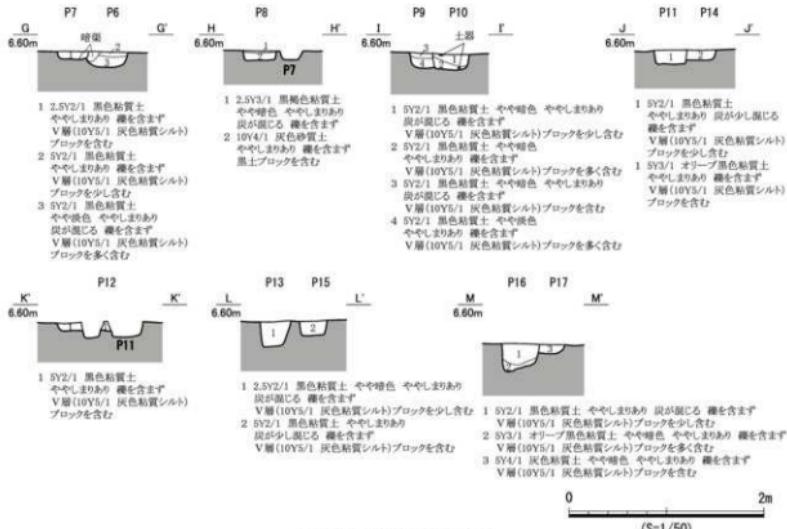


図1882 SB537 遺構図(2)

中央に窪みが認められる。胴部下半は直線的に外傾し、最大径の肩部が強く屈曲する。6342はVI期～VII期壺B2a類。口縁部が大きく外反し、端部に顯著な平坦面を形成する。6343はVI期～VII期壺B類。底部は平底で、胴部下半の外面には粗いハケ目が残り、一部に煤が付着する。内面にはハケ後ナデを施し、輪積み痕が残る。6344はVI期～VII期壺H3類。口縁部が直線的に外傾し、端部付近がやや内湾する。6345、6346はVI期～VII期壺。6345は底部が一部残存し、胴部外面にはミガキ調整を施し、内面には粗いハケ目が残る。6346は底部が平底で、外面は磨耗が進行しているため、文様や器面調整については不明である。内面にはハケ及びナデ痕が認められる。

6347～6368は甕。6347はIV期甕D類。口縁部が短く外反し、端部を外方に拡張して顯著な平坦面を形成する。平坦面上には3条の凹線が認められる。頸部には刺突文を施し、外面には一部に煤が付着する。6348はV期甕A1類。口縁部が外反し、端部が屈曲してほぼ直立する。外面には刺突を加え、頸部には直線文が認められる。6349、6350はV期甕A2a類。頸部が直立気味で、口縁端部がナデによって短く屈曲する。端部には平坦面を形成し、外面には刺突を加える。6350は頸部以下に直線文を施し、それ以下に刺突文が認められる。6351はV期甕A2b類。口縁部が外反し、端部が短く屈曲して直立する。端部下端には刺突を加え、頸部以下には直線文、刺突文が認められる。6352はV期甕A類。頸部直下にクシによる直線文、その下方にやや難な波状文が認められる。6353、6354はV期甕B1b類。口縁部が短く外反し、端部には顯著な平坦面を形成する。6353は胴部に文様は認められず、外面はハケ調整を基本とする。内面にはナデ及びケズリが認められ、底部は平底で穿孔が認められる。胴部最大径は上から3分の1ほどの上方に位置し、肩部が張る。外面には煤が付着する。6354は頸部直下に刺突文を施し、それ以下にはハケ目が残る。内面にはケズリが認められる。6355はV期甕A2a類。口縁部が外反し、端部がナデによって短く屈曲する。端部には平坦面を形成し、外面には刺突を加える。頸部以下には幅広の直線文及び刺突文が認められ、一部に煤が付着する。6357はV期～VI期甕A3類。口縁部が外反し、端部がやや屈曲して内湾する。外面には刺突を加え、頸部には直線文が認められる。6358はV期～VI期甕B2類。口縁部が短く外反し、端部には強い平坦面を形成して沈線状となる。内外面ともにナデ調整を施し、外面には煤が付着する。6359はVI期～VII期甕A2b類。口縁部が大きく外反し、端部がナデによって短く屈曲する。端部には平坦面を形成し、外面にも直立する平坦面を形成する。頸部がやや肥厚する。6360はVI期～VII期甕A4類。口縁部がくの字に屈折し、端部付近が内湾する。胴部外面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。6361はVI期～VII期甕A3類。口縁部がくの字に屈折し、端部付近がナデによって強く屈曲する。端部はほぼ直立して受口状を呈し、わずかな平坦面を形成する。胴部に文様は認められず粗いハケが残り、煤が付着する。脚部がハの字に開き、接地面が平坦である。6362、6363はVI期～VII期甕B2類。内外面ともにハケ調整を施す。胴部外面には煤が付着する。6362は口縁部がくの字に屈折し、長く開いて端部に平坦面を形成する。6363は口縁部がなだらかに外反し、端部に平坦面を形成する。6364、6365はVI期～VII期甕B4類。口縁部が比較的長く屈折外反し、端部を丸くおさめる。6364は胴部外面に粗いハケ目が残り、煤が付着する。内面にはケズリが認められる。胎土には比較的大きい砂粒が認められる。6366はVI期～VII期甕E4類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。外面には一部に煤が付着する。6367はVII期甕E3類。

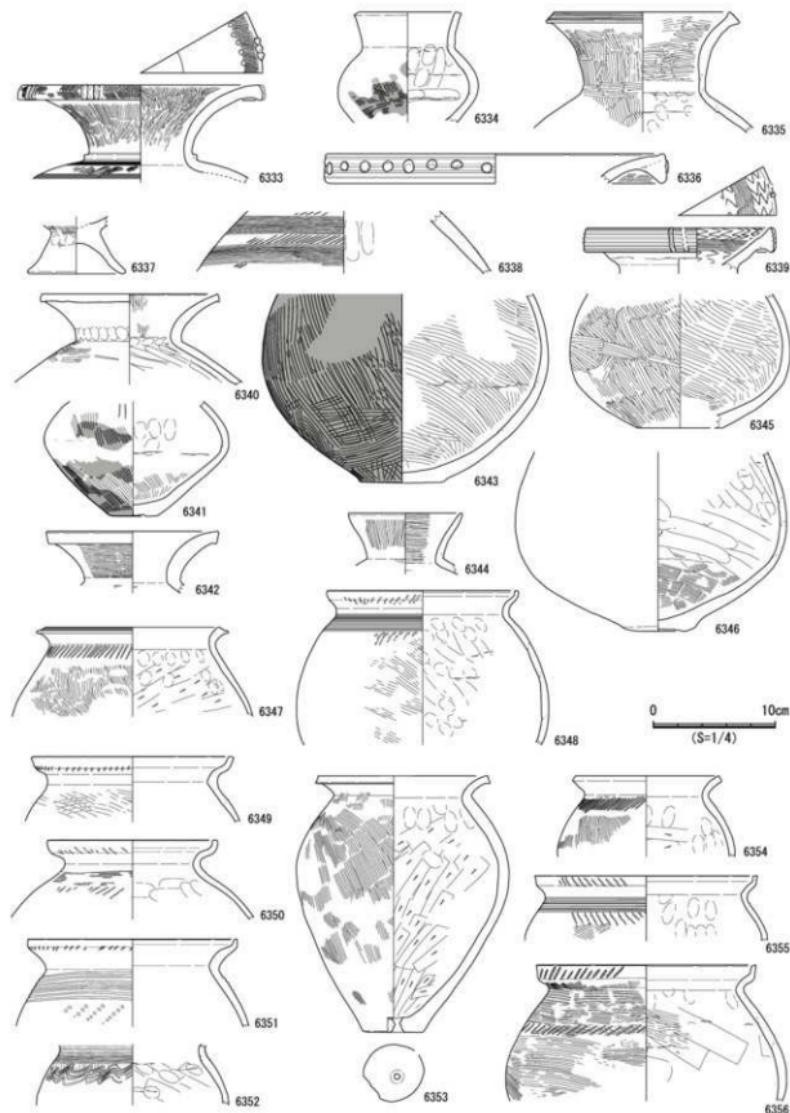


図 1883 SB537 遺物実測図 (1)

口縁部がくの字に屈折し、直線的に外傾する。端部には断続的なナデによるわずかな平坦面を形成する。胴部形状は球形に近く、外面にはハケを施し、煤が付着する。6368はVII期壺D3類。口縁部の屈曲は形骸化し、外方に大きく開く。口縁部外面には煤が付着する。

6369～6371は鉢。6369はV期～VI期鉢A3a類。頸部の屈曲はゆるやかで口縁部が外反し、端部をつまみあげるように尖らせる。外面には平坦面を形成し、下端には刺突を加える。端部以下には幅広の直線文帯を施し、その下方に刺突文が認められる。胴部下半に煤が付着する。6370はV期～VI期鉢B1類。胴部は外傾し、口縁部は内湾して直立気味となる。内面は板ナデ、外面にはナデ調整を施し、外面には煤が付着する。6371はVII期～IX期鉢。口縁部が外反し、中段が屈折して二重口縁を形成する。

6372～6388は高坏。6372、6373はV期高坏B類。付根から脚部が円錐状に開く。6372は裾部がやや内湾し、透孔を3方向に配置する。一部に煤が付着する。6373は裾部がやや強く外反する。6374、6375はV期高坏B3b類。ともに坏底部から口縁部が大きく外反し、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。6375の口縁部は一部が歪む。6376はV期～VI期高坏I2類。口縁部が内湾し、端部が直立気味である。内面はナデ、外面にはミガキが認められる。外面には、一部に煤が強く付着する。6377はVI期高坏C類。脚裾部が大きく開き、やや内湾する。外面にはミガキが認められる。6378はVI期～VII期高坏C3c類。口縁部がわずかに内湾し、端部付近が内湾して直立する。内面には多条沈線が認められる。6379はVI期～VII期高坏C類。坏底部は中央部がやや高くなり、明瞭な段をもって口縁部が外傾して開く。脚部が付根から円錐状に開き、透孔が認められる。6380はVI期～VII期高坏G3b類。坏底部から口縁部が外傾し、端部付近が内湾してほぼ直立する。端部を丸くおさめ、外面には多条沈線が認められる。脚部は低く、付根から円錐状に開く。透孔は3方向に配置され、それ以下で裾部が大きく開く。内面の段、外面の稜とともに明瞭に残り、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。6381はVII期高坏C4b類。口縁部が直線的に外傾して開き、端部付近がやや内湾する。端部には内傾する平坦面を形成し、多条沈線が認められる。内外面ともにミガキ調整を施す。6382～6385はVII期高坏C4d類。6382は、口縁部内面の多条沈線間にヘラによる山形文を2帯、クシによる羽状文を1帯加える。6383、6384は口縁部内面の多条沈線間に、ヘラによる山形文を2帯加える。6385は、口縁部内面の多条沈線間に、やや大型の円形刺突文を1帯加える。6386はVII期高坏C類。坏底部は平坦で、付根から脚部が円錐状に開く。2孔1対の透孔を2方向に配置して脚裾部が大きく開き、やや内湾する。6387はVII期高坏G3c類。口縁部外面に多条沈線を施し、その間にクシによる刺突文を3帯加える。6388はIX期高坏。坏底部から口縁部が直線的に外傾する。外面の稜は明瞭に残るが、内面の段は不明瞭である。

6389～6391は器台。6389はV期器台A1類。口縁部がなんだかに外反し、端部をわずかに上下に拡張して顕著な平坦面を形成する。6390、6391はVI期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部に平坦面をもつ。6390は脚部が柱状に直立し、裾部が大きく外反する。透孔は3方向に配置され、脚部下方に位置する。全面にミガキ調整を施す。

6392は砥石。大半は割れているが、3面の砥面が確認できる。

**時期** 床面直上からV期の遺物が出土しているが、VI期～VII期のSB538とIX期のSB540に切られるごと、埋土全体の出土遺物の時期から、V期～VII期と考えられる。

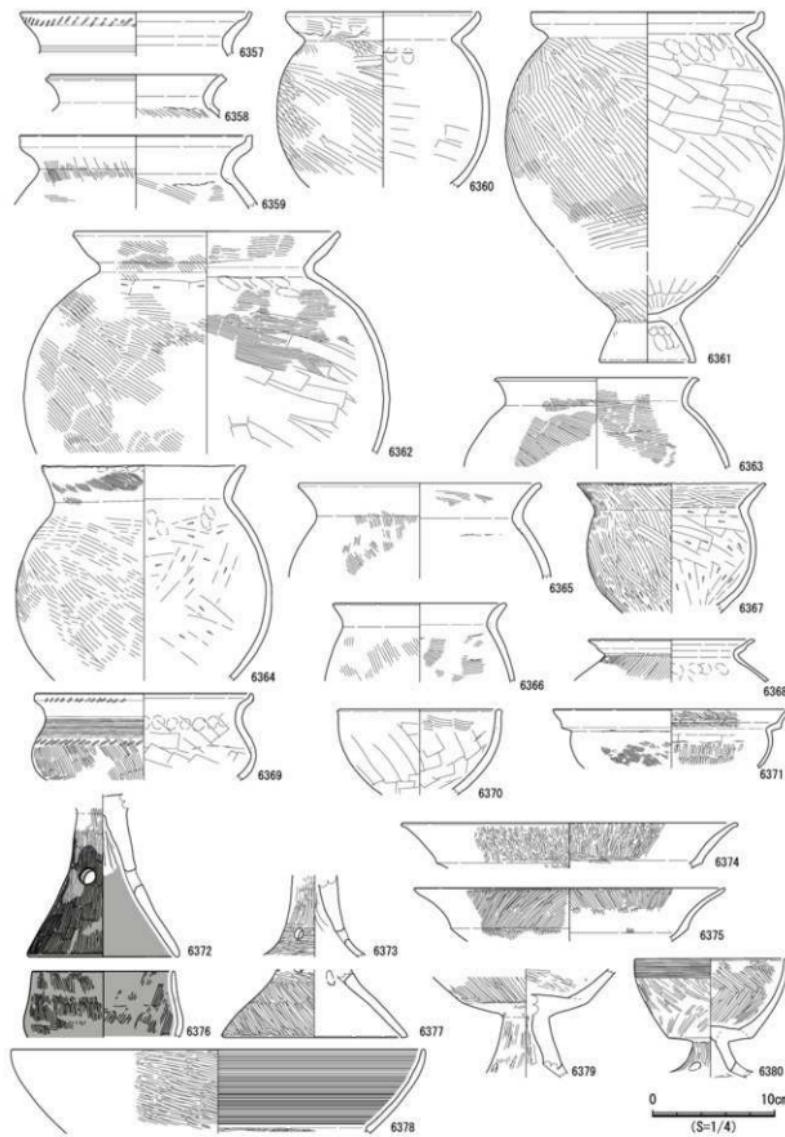


図 1884 SB537 遺物実測図（2）

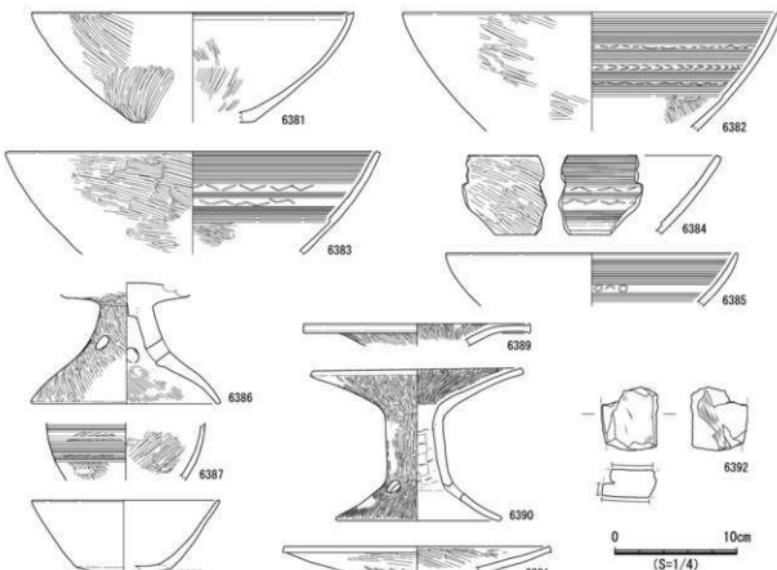


図 1885 SB537 遺物実測図 (3)

SB538 (遺構: 図 1886・1887、遺物: 図 1888)

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置し、北側は調査区域外にのびる。V層上面において検出し、平面形は不明瞭であった。東側をSB539に、南側をSK05903に切られ、西側でSB537を切る。

**形状** 東西長約4.6mの隅丸方形を呈し、西辺と南辺は直線的にのびている。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は垂直に近い。

**埋土** 10層に分層した。全体的に炭化物が混じり、住居の南西側の床面上の堆積土(8~10層)にブロック土が混入する。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床(整地土)は確認できなかった。床面上にて13基の小穴を確認し、平面的な位置関係からP1~P4の4基を柱穴と考えた。P1には柱根が残存しており、P4は0.36mと深いが、P2とP3は浅い。この4基を柱穴とした場合、平面形の方位と柱筋の方位とがずれており、平面形を誤認したか、あるいは平面形を確認できなかった別の竪穴住居に伴う柱穴の可能性がある。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器564点、小穴等から土器40点、木製品1点が出土した。出土土器はⅦ期のものが多く、P1出土の柱根(6397)は先端がわずかに東へ傾いていた。

**出土遺物** 6393はVI期~VII期壺G2a類。口縁部が内湾して長く立ち上がり、内外面ともに丁寧なミガキを施す。6394はVI期~VII期壺K類。口縁部がわずかに外傾し、長く直線的に立ち上がる。胴部との境界には貼付突縁を形成し、胴部にはミガキが認められる。6395はVII期壺D3b類。口縁部がな

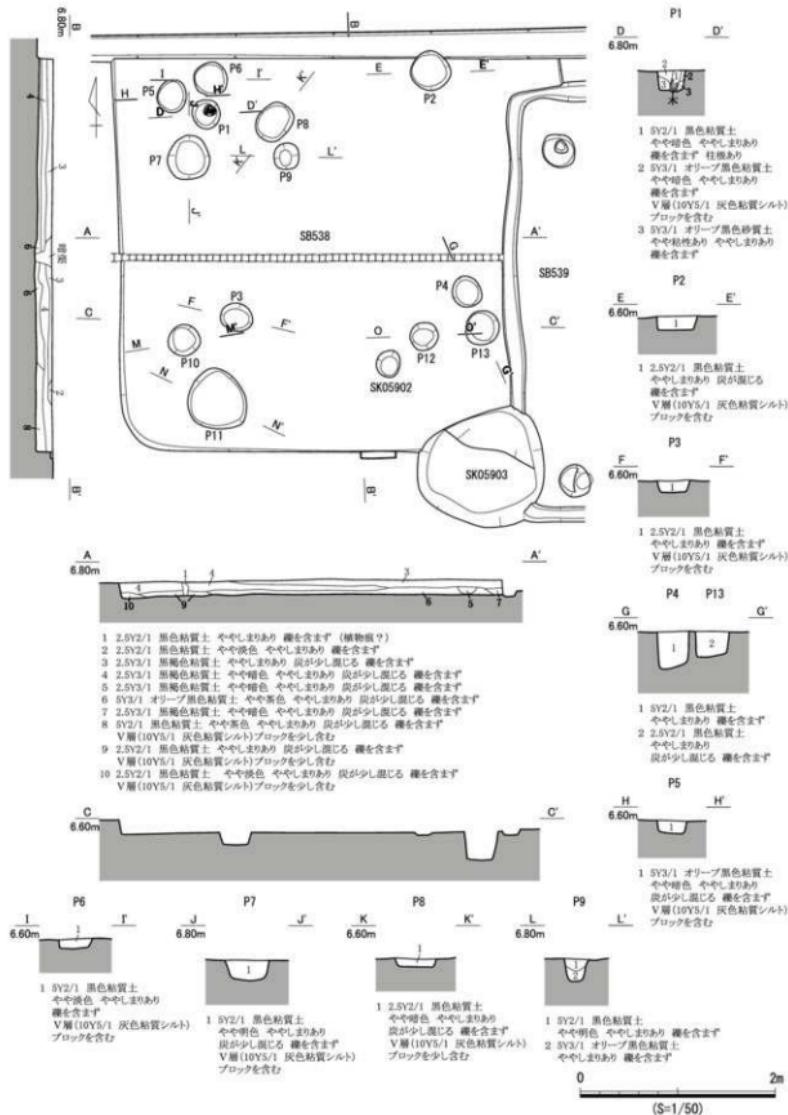


図 1886 SB538 遺構図 (1)



図 1887 SB538 遺構図(2)

だらかに外反し、端部が屈曲して直立する。端部には平坦面を形成し、外面には直線文が認められる。6396はⅦ期壺D3類。口縁部の屈曲が形骸化して大きく開き、外面には煤が付着する。6397は柱根。底面は4方向から粗く削り出し、やや丸みを帯びている。側面には樹皮がわずかに残存している。

**時期** VI期～VII期のSB539に切られ、V期～VII期のSB537を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

**SB539 (遺構: 図 1889・1890、遺物: 図 1891)**

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置す

る。V層上面において検出し、平面形は比較的明瞭であった。西側でSB538を切る。

**形状** 南北長約4.5m、東西長約4.1mの、南北にやや長い隅丸方形を呈する。四辺ともわずかに蛇行しているが、それぞれがほぼ直角に屈曲し、全体的には方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層したが、大半は1層と2層である。中央が窪み堆積で、1層下方にて糞状の炭化物が面的に広がっていた。散在した状態ではなく、まとまりが認められることから、埋土中の混入ではなく、原位置を保っていると考えられる。また、炭化物直下に直径約0.4mの範囲で、硬化した焼土塊を確認した。竪穴住居廃絶後の埋没途中で、窪地状になった地形を利用して火を使用した痕跡と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床(整地土)と炉跡は確認できなかった。床面上にて6基の小穴を確認し、平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。そのうち、P1とP3では底面で柱当たりを確認し、P3とP4では土層断面で柱痕跡を確認した。また、ほぼ中央に位置するP6でも柱痕跡を確認した。壁溝は幅約0.2mで、東側はわずかに途切れるものの、それ以外は全周する。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2313点、石器類4点、小穴等から土器34点、壁溝から土器57点が出土した。土器の大半はIV期～VII期のもので、P5からVI期～VII期の甕(6404)が出土した。

**出土遺物** 6398はVI期～VII期壺A3類。口縁部が外反し、端部を大きく下方に拡張して平坦面を形成

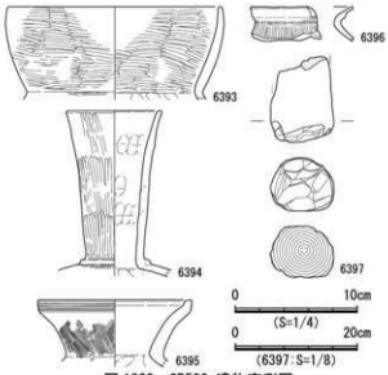


図 1888 SB538 遺物実測図

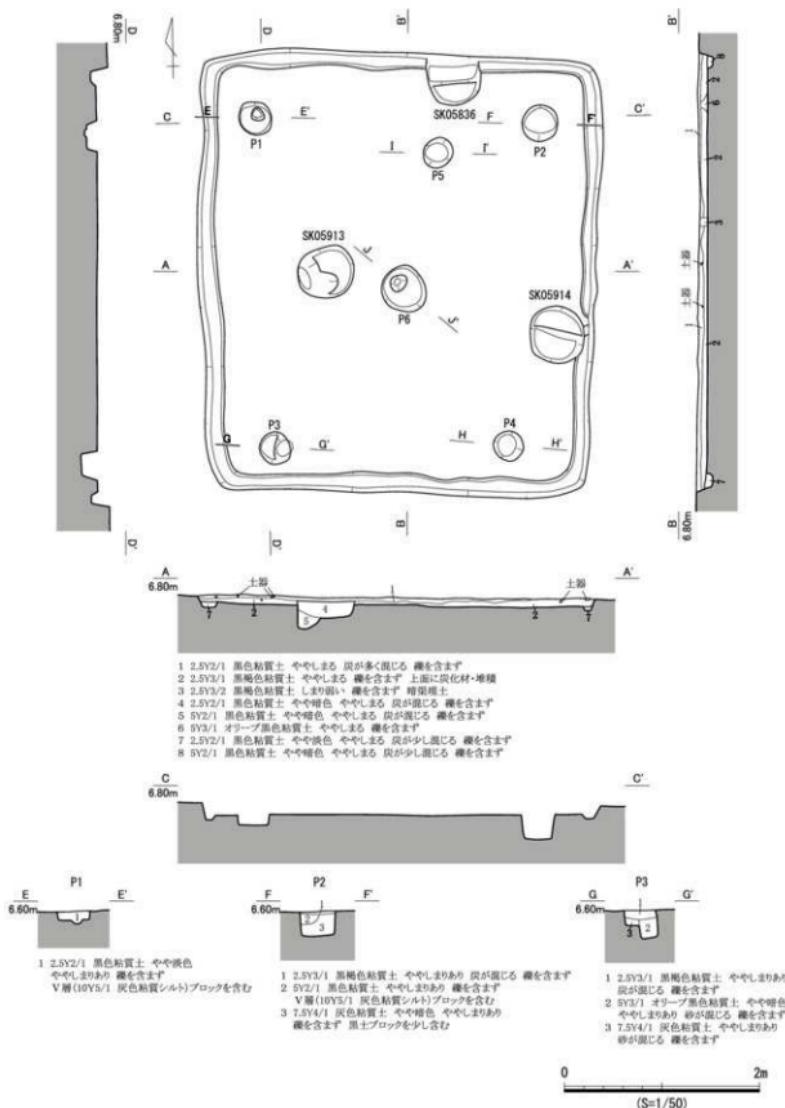


図 1889 SB539 遺構図 (1)

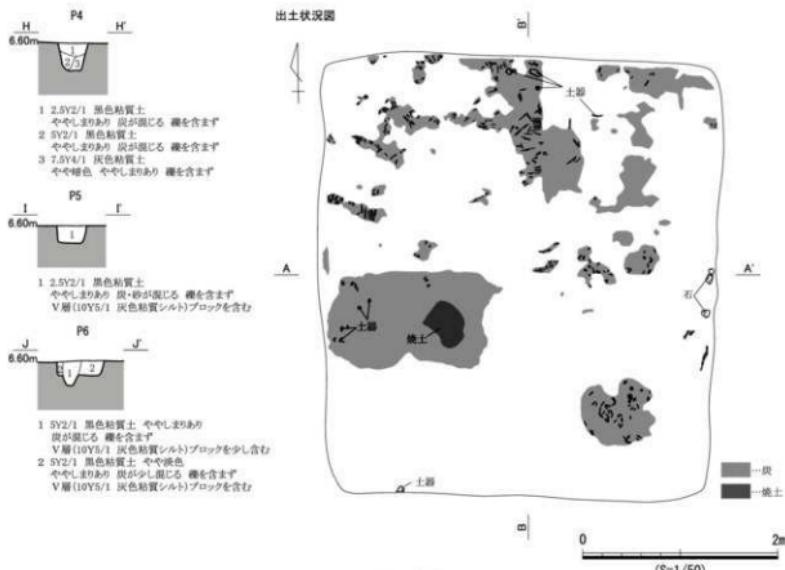


図 1890 SB539 遺構図（2）

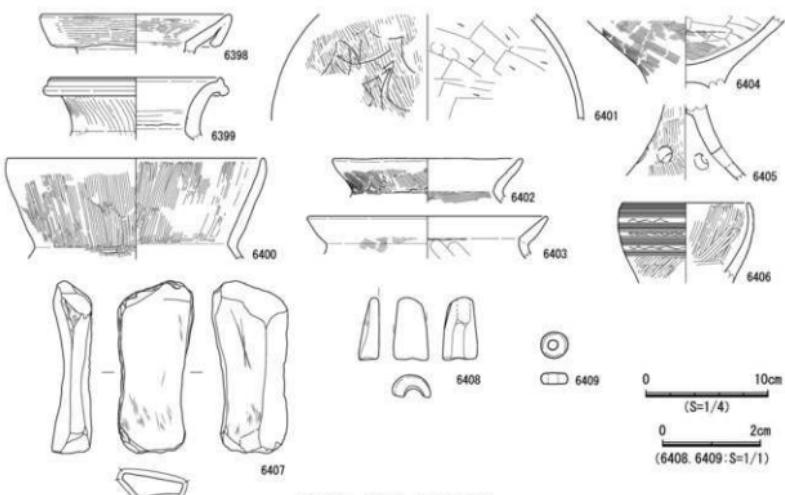


図 1891 SB539 遺物実測図

する。口縁部内面、端部ともにハケ調整を施す。6399はVI期～VII期壺B2a類。口縁部が強く外反し、端部を上下に拡張して沈線を施文する。6400はVI期～VII期壺G2a類。口縁部が外傾して長く立ち上がり、端部付近が内湾する。6401はVI期～VII期壺。器面にはミガキ調整を施し、弧状の線刻が多数認められる。6402はVI期～VII期壺A4類。口縁部が屈折し、端部付近がわずかに内湾する。内面はナデ調整を施すが、外面の作りは雑である。6403はVI期～VII期壺B2類。口縁部がぐの字に屈折し、端部を丸くおさめる。6404はVI期～VII期壺。脚部を欠損する。外面にはハケ、内面にはハケ後ナデを施す。外面に弧状の煤が付着する。6405はVI期～VII期高环C類。脚部が付根から円錐状に開き、2孔1対の透孔を2方向に配置する。6406はVII期壺H2b類。口縁部が外傾して立ち上がり、端部付近が内湾する。口縁部外面の中位のやや下まで多条沈線を施文し、その間にクシによる山形文を2帯加える。もう一つの文様帶は、クシによる羽状文と対向山形文が同じ文様帶に施文される。6407は砥石。凝灰岩製で、中央で割れている。砥面は平滑で、上下端部の面には凹凸が認められる。6408は管玉。縱方向にほぼ半分に割れており、磨滅が著しい。6409は丸玉。断面形は扁平で、厚さ2.5mmを測る。

**時期** VI期～VII期のSB538を切るが、埋土やP5出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

#### SB540（遺構：図1892・1893、遺物：図1894）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。平面形が不明瞭であったため、排水溝壁面を利用して埋土を確認した。北側でSB537を切っており、南側は調査区域外に及ぶ。

**形状** 東西長約6.3mで、隅丸方形を呈すると考えられる。各辺は直線的にのび、深さは約0.2mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 18層に分層した。西壁沿いでブロック土を含む土が斜めに堆積している。また、全体的にブロック土の混入が多く、層界の凹凸も認められることから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて17基の小穴を確認し、そのうち、P5、P9、P14では土層断面で柱痕跡を確認した。また、P11は掘形が深く、壁面の傾斜がほぼ垂直である。これらのいずれかが柱穴の可能性もあるが、平面的な位置関係からP1～P3の3基を柱穴と考えた。なお、中央付近にて床面から少し浮いた高さで炭化材が出土したが、炉跡は確認できなかった。また、壁溝も確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器8,376点、石器類2点、小穴から土器239点が出土した。V期～VII期の土器片が散在して出土し、少量ながらIV期のものも出土した。また、P1からV期～VI期高环脚部（6435）が、P5、P7、P9からIX期壺（6430～6432）が出土した。

**出土遺物** 6410はVI期～VII期壺B2a類。口縁部が屈曲して外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。6411はVI期～VII期壺F1類。口縁部が短く、直立気味である。6412はV期壺A2a類。口縁部が外反し、端部が強いナデとともに屈曲して直立する。端部に内傾面を形成し、端部下端には刺突を加える。胴部外面には全面にハケ調整を施し、その上から胴部上半には直線文と波状文を交互に間を開けて2回ずつ施文する。内面にはケズリが認められる。6413～6415はV期壺A2b類。6413は口縁部が外反し、端部が屈曲してつまみあげたように端部が尖る。端部には外傾する平坦面を形成し、下端に刺突を加える。頭部直下には幅広の直線文帯を施文し、その下方に刺突文が認められる。器面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。内面にはケズリが認められる。6414は口縁部が大きく外反し、端部が屈曲

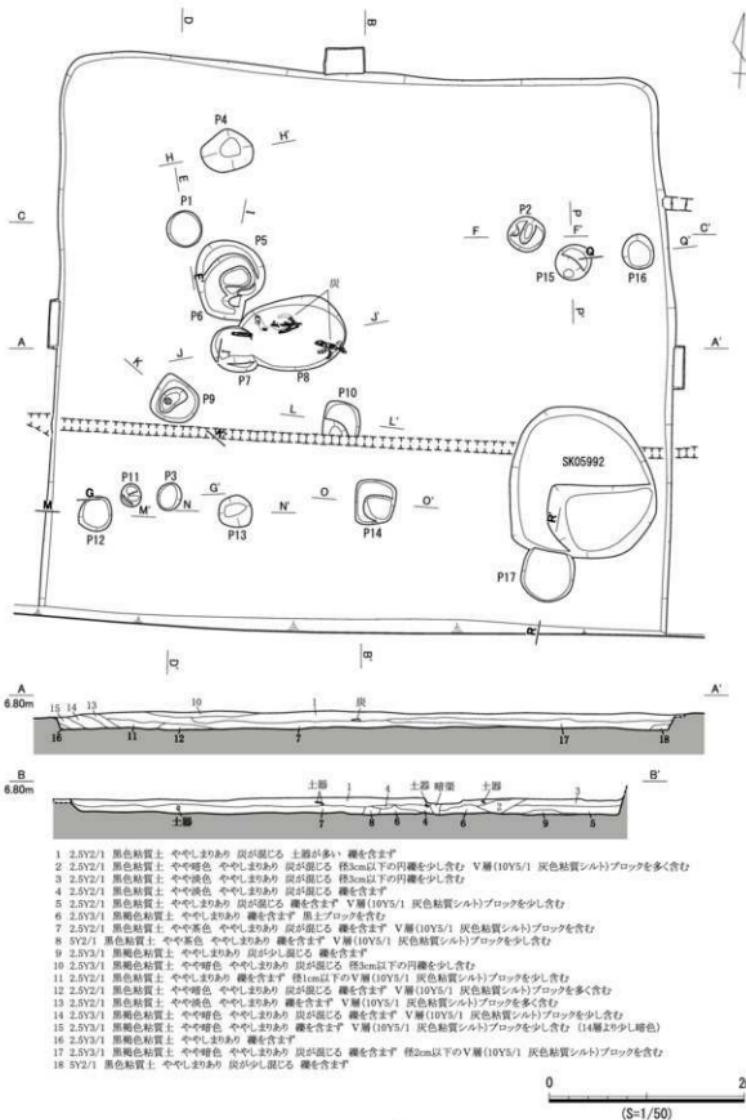


図 1892 SB540 遺構図 (1)

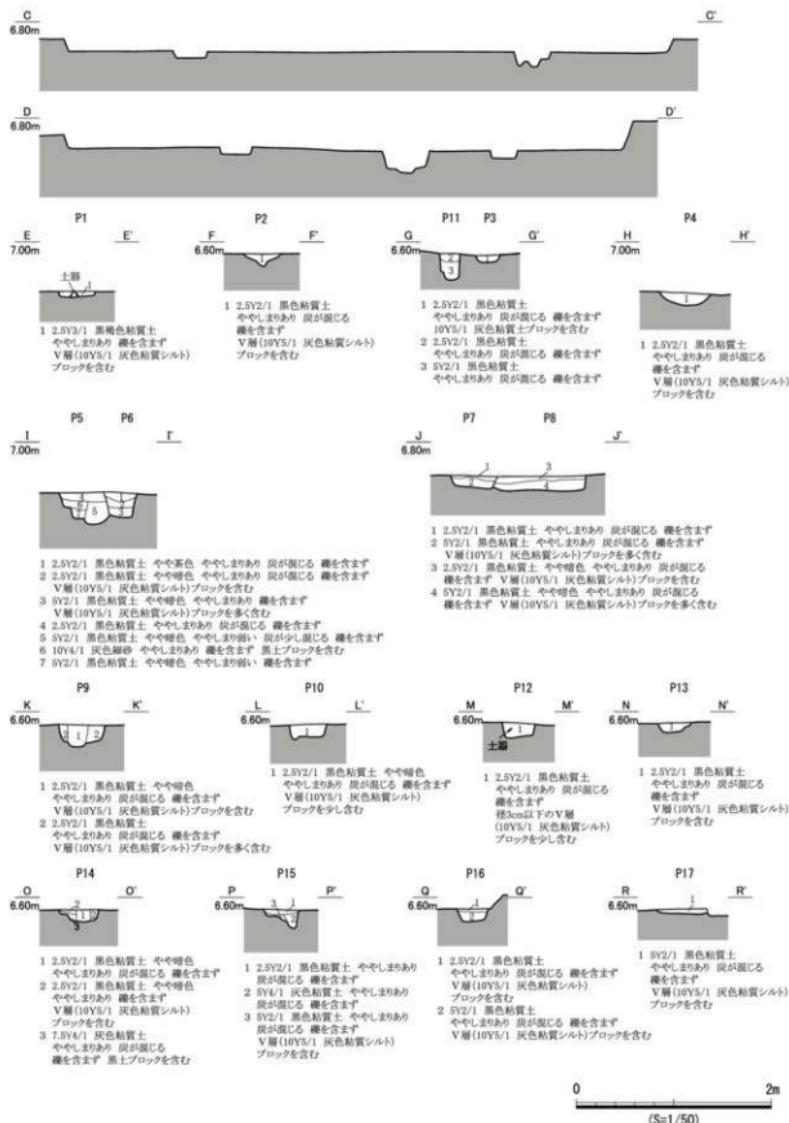
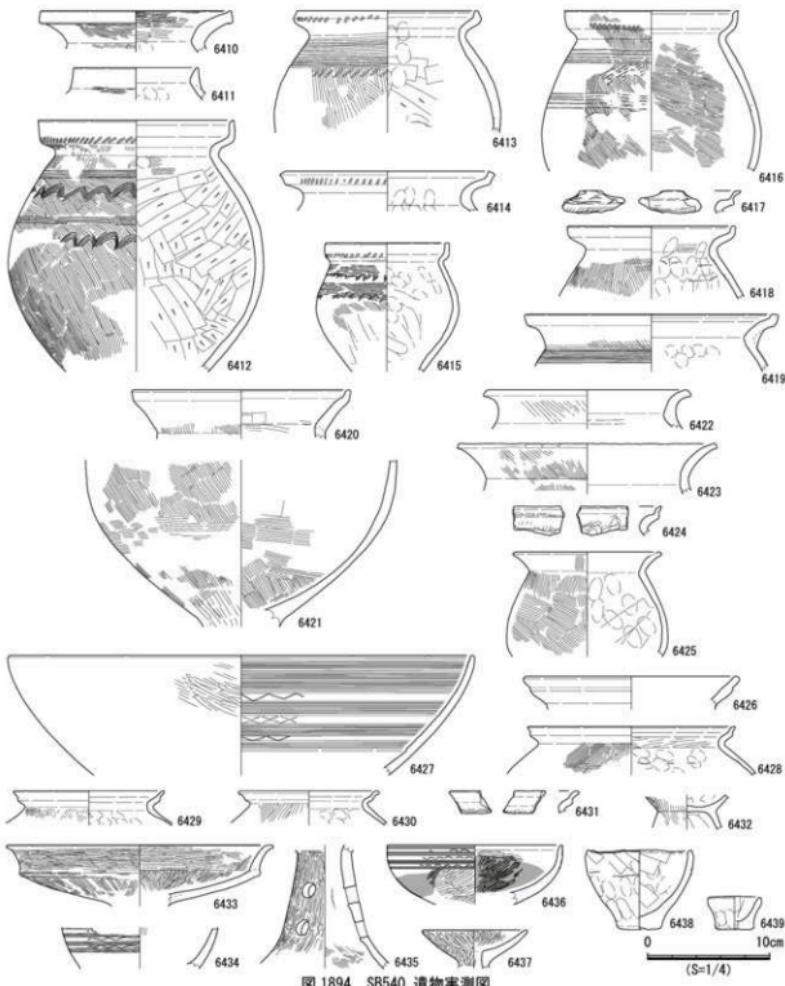


図 1893 SB540 遺構図 (2)

して端部に顯著な平坦面を形成する。端部下端には刺突を加える。6415は口縁部が短く外反し、端部がナデとともに屈曲して比較的長く直立する。端部には平坦面を形成し、端部下端には刺突を加える。胴部外面には全面にハケ調整を施し、その上から胴部上半には直線文と波状文を交互に2回ずつ施文する。最下段の波状文が胴部最大径部にある。6416はV期～VI期瓈A2a類。口縁部が短く外反し、端部が強く屈曲して直立する。端部には内傾する平坦面を形成する。頸部下方に直線文を2帯施文



し、その間に波状文らしき文様が認められる。内外面ともにハケ調整を施し、外面には煤が付着する。6417はVI期甕D1a類。口縁部の屈曲が明瞭で、上段が短く外反して内傾面を形成する。外面には刺突が認められる。6418、6419はVI期～VII期甕A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。6418は端部を丸くおさめ、強いヨコナデ痕が認められる。6419は端部に上面と外面に平坦面を形成し、強いヨコナデ痕が認められる。頸部内面は明瞭に屈曲するが外面には粘土を貼付して肥厚し、直下には直線文が認められる。頸部外面には煤が付着する。6420はVI期～VII期甕A4類。口縁部が屈折し、端部付近がわずかに内湾する。内面はナデ調整を施す。6421はVI期～VII期甕。脚部を欠損する。外面にはハケ、内面にはハケ後ナデを施す。内外面ともに煤が付着する。6422はVI期～VII期甕B2類。口縁部が強く外反して端部に平坦面を形成する。6423はVI期～VII期甕B3類。口縁部が大きく外反し、端部には平坦面を形成する。6424はVI期甕D1b類。口縁部が強く屈曲し、上段が短く外反して内傾面を形成する。外面には刺突が認められる。6425はVI期～VII期甕E2類。口縁部が短く外反し、胴部外面にはハケ目が残る。6426はVII期甕B2類。端部には平坦面を形成する。段は強いヨコナデによって作出されたと考えられる。6427はVII期高坏C4d類。やや内湾する口縁部内面に多条沈線を施し、その間にヘラによる山形文2帯、クシによる対向山形文1帯が認められる。6428はVII期甕D2b類。口縁部下段が強く外方に引き出され、上段がわずかに屈曲する。6429はVII期甕D類。口縁部の屈曲は痕跡的で、外方に大きく開く。6430～6432はIX期甕。6430、6431は口縁部で、端部がやや肥厚して外面に煤が付着する。6432は脚部。6433はV期高坏B2a類。浅い皿状の坏底部から口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁端部が強く外反し、端部を外方に引き出すように平坦面を形成する。屈曲部の稜は極めて明瞭である。6434はVI期～VII期高坏G3c類。口縁部に多条沈線を施し、その間にヘラによる山形文が2帯認められる。6435はV期～VI期高坏B類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔は2段で3方向に配置される。裾部は外反する。6436はVII期高坏H2類。坏部が碗状を呈し、端部内面には内傾面を形成する。外面には多条沈線を施し、その間にヘラによる連弧文を3帯加える。6437はVII期器台C2類。受部が浅い皿状を呈し、端部を丸くおさめる。6438、6439はVI期～VII期手捏ね土器C類。平底の底部から胴部が外傾して開く。6438は口縁部が内湾し、内面にはユビナデ痕が認められる。6439は特に小型品である。

**時期** 埋土中の遺物はV期～VII期までのものが多いが、V期～VII期のSB537を切っていることと、P5、P7、P9からIX期甕が出土していることから、IX期と考える。

#### SB541（遺構：図1895・1896、遺物：図1897）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面において検出したが、平面形は不明瞭であった。中央をSP1049とSP1050に切られ、南側でSB542を切っている。

**形状** 規模は不明であるが、西辺と南辺が直線的にのび、南西隅部が丸みを帯びることから、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 7層に分層した。南北壁面沿いではブロック土を含む土が斜めに堆積しており、全体的に炭の混入が認められる。また、ブロック土の混入も多く、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて19基の小穴を確認し、P17とP18では土層断面で柱痕跡を確認した。また、P7、P12、P13などは掘形が深く、壁面の傾斜も急

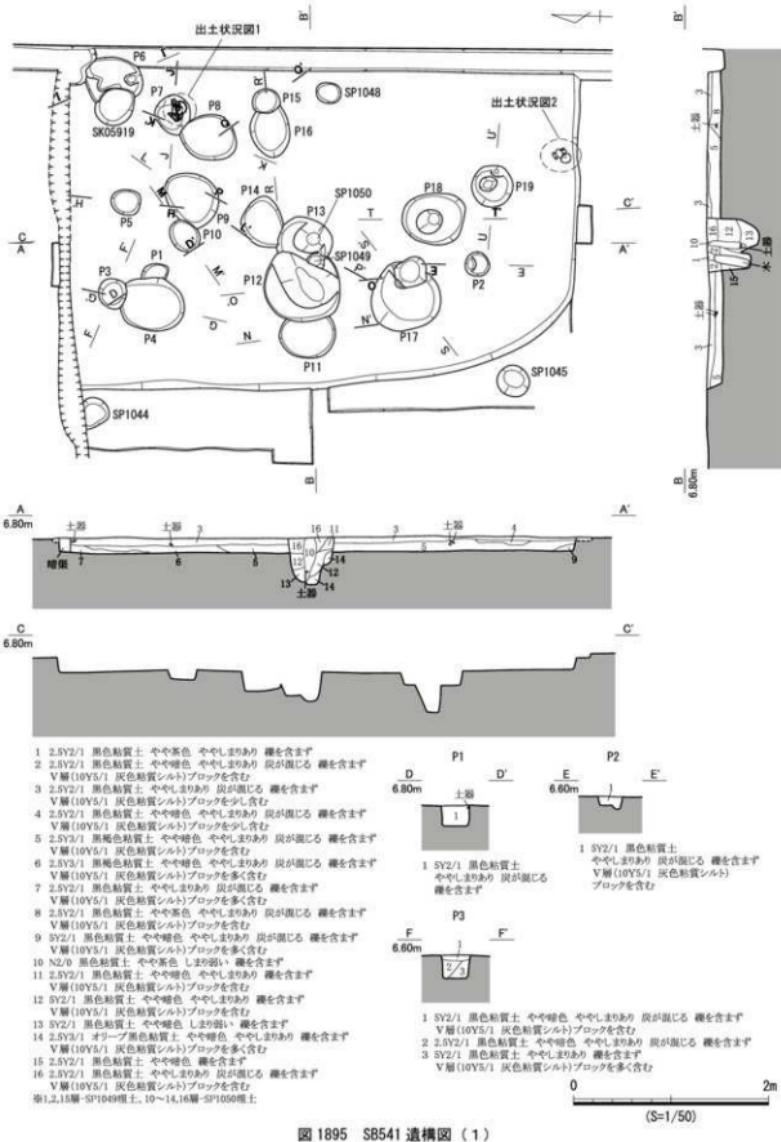


図 1895 SB541 遺構図 (1)

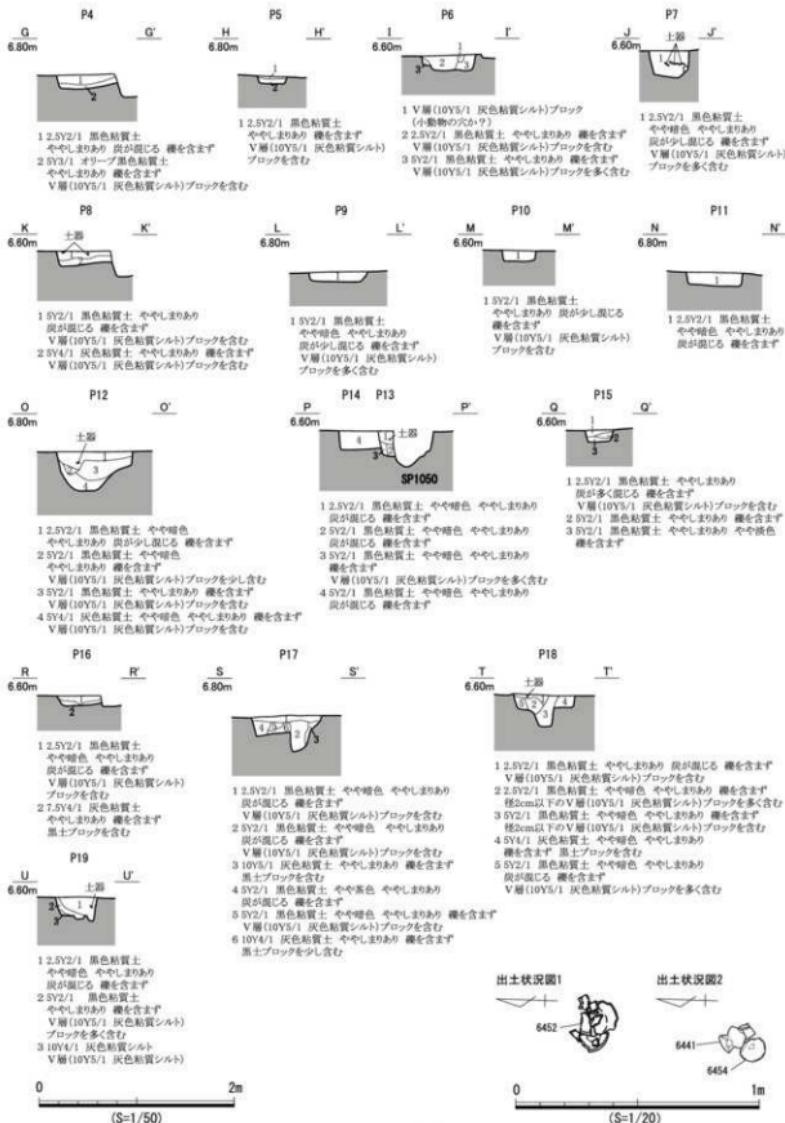


図 1896 SB541 遺構図 (2)

である。これらのいずれかが柱穴の可能性もあるが、平面的な位置関係からP1とP2を柱穴と考えた。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器4422点、石器類1点、炭化物・炭化材1点が、小穴から土器343点、木製品1点が出土した。また、南壁沿いの床面上にて、VI期～VII期の鉢F類(6454)が正位で、V期の壺J類(6441)が横位で、いずれもほぼ完形の状態で出土した。また、P4、P7、P14、P17からVI期～VII期の壺や甕(6446、6447、6450、6452)が出土した。出土土器はV期～VII期のものが確認でき、特にVI期～VII期のものが多い。

**出土遺物** 6440はV期壺Ala類。口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張して平坦面を形成する。端部には擬凹線を施し、口縁部内面には貝による羽状文2帯及び円形刺突文が認められる。6441はV期壺J1類。口縁部が直線的に外傾しながら、直線的に立ち上がる。胸部最大径はや上方に位置し、肩部が強く張る。6442はV期～VI期壺A類。胸部上半にクシによる直線文及び羽状文が認められる。6443、6444はVI期～VII期壺A2類。6443は形状、胎土等から6444と同一個体の可能性がある。6444は口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張して顕著な平坦面を形成する。平坦面には刺突文が2帯認められるが、その方向を変えて羽状文風に施す。6445はVI期～VII期壺C類。口縁部が直線的に

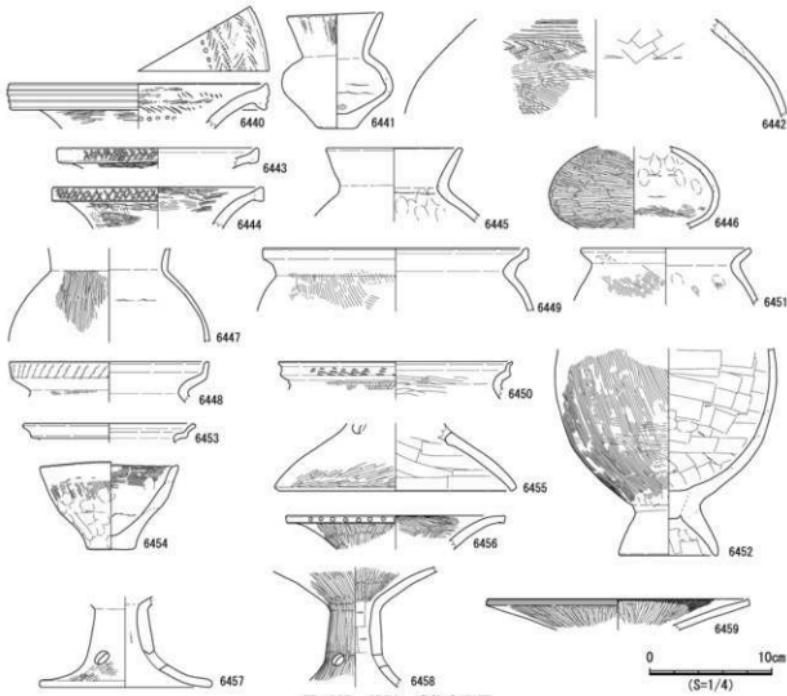


図1897 SB541 遺物実測図

外傾しながら立ち上がる。6446はVI期～VII期壺H類。胴部が扁平で、肩部が強く張る。外面にはミガキ調整を施す。6447はVI期～VII期壺K類。頸部はやや外反気味であり、端部を欠損する。6448はV期壺A2b類。口縁部が大きく外反し、端部が屈曲してほぼ直立する。端部を丸くおさめ、外面には刺突を加える。6449はVI期～VII期壺A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。端部には平坦面を形成し、外面にも垂直な平坦面を形成する。6450はVI期～VII期壺D1b類。口縁部が強く屈曲し、上段が短く外反する。外面には刺突が認められる。6451はVI期～VII期壺E4類。口縁部が短く屈折し、端部を丸くおさめる。6452はVI期～VII期壺。胴部下半の形状は丸みを帯び、外面には粗いハケ目が残る。内面にはハケ後ナデを施す。脚部の器壁は厚く、やや内湾気味にハの字を開く。6453はVII期壺D2b類。口縁部が屈曲して開き、端部が肥厚気味となる。6454はVI期～VII期鉢F類。胴部がやや内湾して立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。底部は平底で突出気味で、外面に強く煤が付着する。6455はVI期～VII期高杯C類。脚裾部が内湾して開く。6456はV期器台Ala類。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成して円形刺突文を加える。内外面ともにミガキ調整を施す。6457はV期器台A類。脚部は付根から柱状にほぼ直立し、3方向に配置された透孔を境に裾部が外反する。6458はV期～VI期器台B類。口縁部が直線的に外傾し、わずかに外反する。脚部は付根から柱状にほぼ直立し、3方向に配置された透孔を境に裾部が外反する。6459はVI期器台Bla類。口縁部が直線的に開き、端部に平坦面を形成する。口縁部内面及び端部に煤が付着する。

**時期** V期～VII期のSB542を切っているが、小穴出土遺物の時期や埋土出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SB542（遺構：図1898・1899、遺物：図1900）

**検出状況** 東部西側中央の遺構密集域に位置する。V層上面において検出し、平面形は不明瞭であった。北東側をわずかにSB541に切られる。

**形状** 規模は不明であるが、北辺と西辺がおよそ直線的にのび、北西隅部は丸みを帯びながら直角気味に屈曲することから、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層し、すべての層に炭が混じる。また、ブロック土の混入も多く、層界の凹凸も確認できることから、人為堆積と考えられる。なお、3層はブロック土の混入が顕著であったため、貼床（整地土）の可能性もある。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて26基の小穴を確認し、大半の遺構は埋土が単層か2層に分層できたが、P15のみ土層断面で柱痕跡を確認した。P1とP2はやや深く、壁面の傾斜がほぼ垂直であることや、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。しかし、住居の外縁ラインからかなり内側に位置するため、他の可能性を検討すべきかもしれない。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器4455点、石器類1点、小穴等から土器603点が出土した。P9の南側の埋土中層にて、V期～VI期壺（6464）とVI期～VII期高杯（6478）が残りの良い状態で出土した。全体的にはV期～IX期までの時期幅の土器が出土し、その多くはV期～VII期に属する。

**出土遺物** 6460はIV期壺C類。口縁部が大きく外反し、端部に平坦面を形成する。口縁部内面には

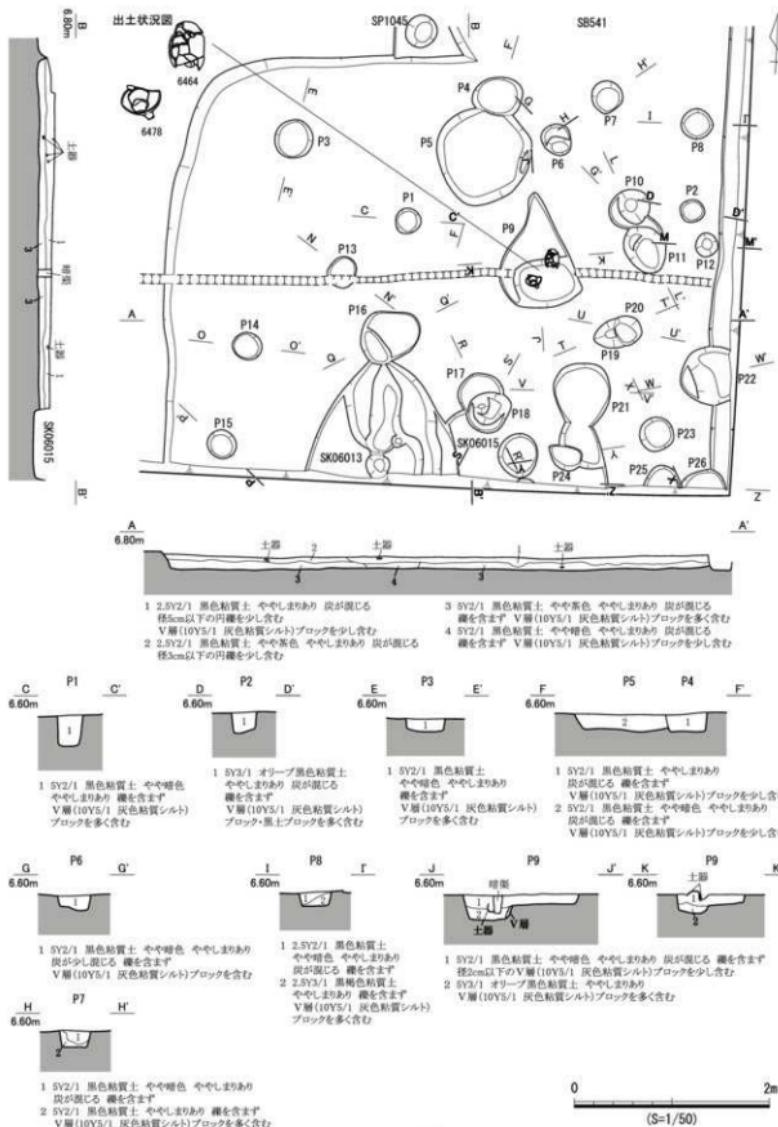


図1898 SB542 遺構図(1)

扇形文が2帯認められる。6461はV期壺A1b類。口縁部が大きく外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。口縁部内面には振幅の大きい波状文が認められる。6462はV期～VI期壺A1a類。口縁部が外反し、端部を大きく下方に拡張して平坦面を形成する。端部平坦面には直線文を施し、口縁部内面には羽状文と円形刺突文が認められる。端部下端はナデによって平坦に整形され、頸部外面にはミガキが施される。6463はVI期～VII期壺A3類。口縁部が外反し、内面は明瞭な段をもって屈曲する。端部を上下に拡張し、顕著な平坦面を形成する。口縁部内面にはヘラによる羽状文2帯と円形刺突文を施し、端部平坦面には擬凹線と4本1組の棒状浮文が認められる。また、頸部下端や口縁端部には赤色顔料が塗布される。6464はVI期～VII期台付無頸壺である。口縁部を摘み上げるようにわ

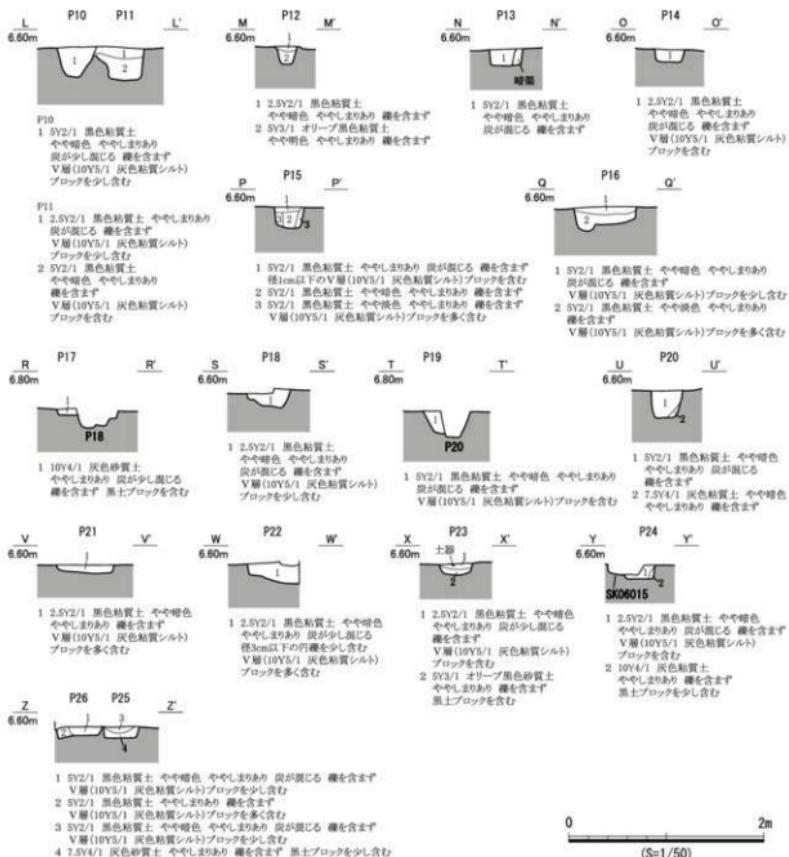


図 1899 SB542 構造図 (2)

0 2m  
(S=1/50)

すかに外反させる。胴部はやや偏平で、ハケ及びナデ調整を施す。脚部の大半を欠損するが、ハの字に開くと考えられる。口縁端部に歪みがあり、胴部外面に輪積み痕が認められるなど、雑な作りである。6465、6466はV期～VI期壺J1類。6465は口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がり、端部には平坦面を形成する。胴部最大径は中央に位置し、肩部が強く張る。底部は平底である。6466は胴部最大径が強く屈曲し、底部に焼成後の穿孔が認められる。6467はVII期～IX期壺。やや突出する平底の底面には、木葉痕らしき痕跡が認められる。胴部にはミガキ調整を施し、底部から胴部に煤が付着する。6468はIX期壺。小型で扁平な胴部から、口縁部が大きく開く。6469はV期～VI期壺A類。胴部下半の外面にはハケ後ナデを施し、内面にはハケ目が残る。底部は丸みを帯び、中央がやや窪む。6470はVI期～VII期壺。脚部がハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6471はVII期壺D2b類。口縁部下段が

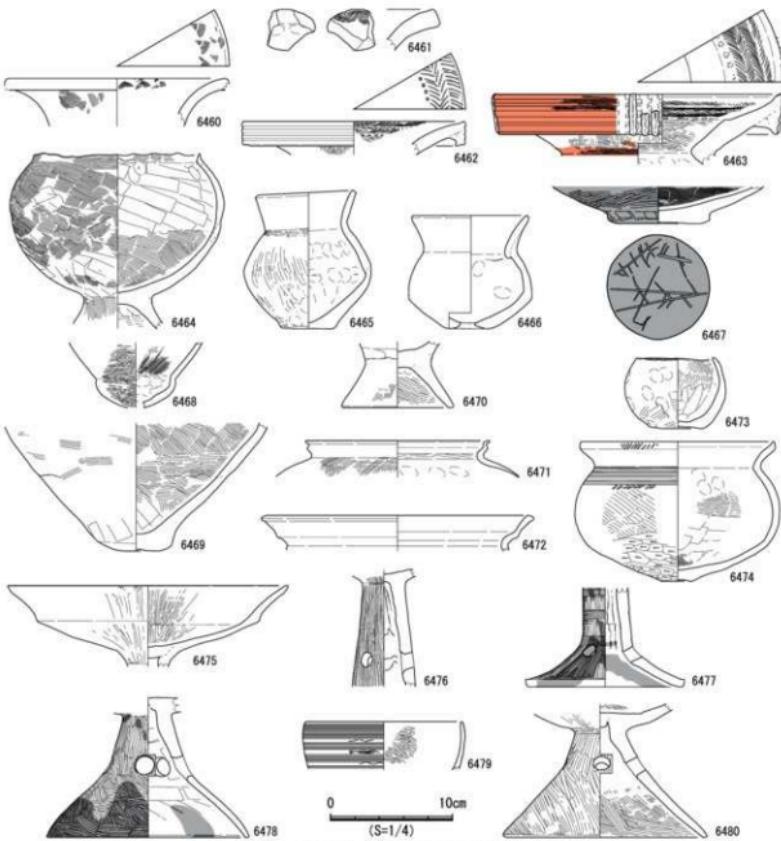


図 1900 SB542 遺物実測図

外方に引き出され、上段が短く屈曲し、端部には内傾面を形成する。6472はIX期壺。口縁部が屈曲し、上段が直線的に外傾して端部が肥厚する。6473はV期～VI期手捏ね土器C類。胴部は球形を呈し、底部は平底である。口縁部は内湾し端部を尖らせる。外面にはハケ目が残り、内面の胴部上半にはハケ目が認められる。6474はV期～VI期鉢A3a類。口縁部が外反し、端部がわずかに内湾してつまみあげるように尖る。外面には平坦面を形成し、刺突を加える。頸部直下には直線文及び刺突文が認められる。胴部上半にはハケ、下半にはケズリが認められ、底部は小さく、中央が窪む。6475はV期高坏B3b類。浅い皿状の坏底部から、明瞭な稜をもって口縁部が外反して開き、端部付近はわずかに内湾気味である。6476はV期高坏B類。脚部が付根から柱状に細長く伸び、わずかに円錐状に開き気味である。透孔を3方向に配置し、ミガキが認められる。6477はV期高坏B類。脚部が付根から柱状に直立し、直線文を3帯施文する。3方向に配置される透孔を境に裾部が大きく外反し、端部に平坦面を形成する。6478はVI期～VII期高坏C類。脚部が坏底部から円錐状に開き、裾部が大きく開いて端部が内湾する。透孔は2孔1対を2方向に配置する。外面や脚部上端の破断面に煤が付着する。6479はVII期高坏G3c類。口縁部がやや内湾し、端部を丸くおさめる。端部外面に多条沈線を施文し、その間にクシによる山形文を2帯、ヘラによる複合鋸歯文を1帯加える。6480はVII期～VIII期高坏。坏底部は嬌小で、口縁部は大きく開く。脚部は付根から円錐状に開き、やや外反する。透孔を4方向に配置する。

**時期** VI期～VII期のSB541に切られるが、P9出土遺物の時期と埋土全体の出土遺物の時期から、V期～VII期と考えられる。

#### SB543（遺構：図1901、遺物：図1902）

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。SB545と並列しており、北側は調査区域外にのび、西側はSB544を切る。北側の検出面には搅乱があり、西側は遺構の重複が著しかったため、平面形は不明瞭であった。

**形状** 東西長約4.7mの隅丸方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 4層に分層した。1層～3層が住居埋土、5層が掘形埋土である。壁沿いの埋土は、中央に向かって下降するブロック土を含む堆積層が認められる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面上では小穴3基と壁溝を検出した。このうち、P1とP2は掘形が浅いものの平面的な位置から柱穴と考えられ、P2底面には柱当たりと考えられる浅い凹みを確認した。また、P3は楕円形を呈する壁面の傾斜が緩やかな穴で、埋土中に炭化物を含んでいる。なお、南東隅部付近では貼床が認められなかった。壁溝は東壁面でわずかに途切れているが、掘形は比較的明瞭である。しかし、西壁面沿いは遺構の重複が著しく、検出はやや困難であった。

**掘形** 埋土は単層であり、ブロック土を含む。掘形底面は平坦であり、SH027-P1、P5、P6やSD1241などを検出ましたが、いずれも本遺構に伴わない遺構と判断した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器303点、小穴から土器4点が出土した。出土土器はV期～VII期のものが多いが、遺構の重複関係からV期のものは混入の可能性がある。

**出土遺物** 6481はV期壺A1a類。口縁部が外反し、端部を上下に拡張して平坦面を形成し、擬凹線を施文する。内面には二枚貝による刺突文が認められ、方向を変えて4帯施文する。さらに内側には、

円形刺突文が認められる。6482はV期甕B2類。口縁部が短く屈折し、端部を平坦気味におさめる。胴部外面にはハケ目が残り、内面にはケズリが認められる。6483はVI期～VII期甕A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。屈曲部内面はくの字に屈折するが、外面には粘土を貼付して直立気味となる。6484はVI期～VII期手捏ね土器E類。高壺もしくは器台を模して作った土器の脚部である。

**時期** VI期～VII期のSH027より後出するが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

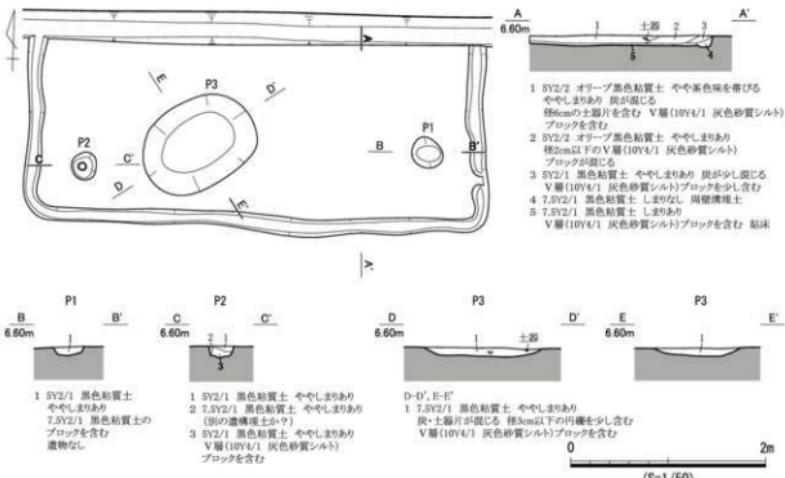


図1901 SB543 遺構図

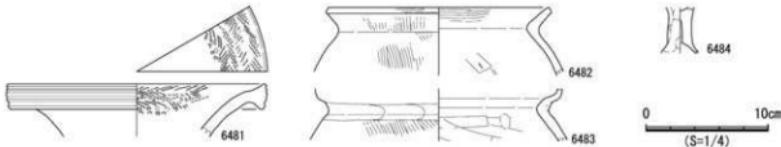


図1902 SB543 遺物実測図

SB544（遺構：図1904、遺物：図1903）

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。北側は調査区域外にのび、中央をSD1254に、東側をSB543とSD1241に切られている。なお、SH027との前後関係は不明である。

**形状** 規模は不明で、全形はおよそ隅丸形を呈するが、南壁中央付近がやや北側に湾曲している。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。1・2層が住居埋土、3層が掘形埋土である。埋土中にはブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴2基と壁溝を検出した。小穴2基はい

ずれも浅く、柱痕跡も確認できていないが、平面的な位置から柱穴の可能性がある。壁溝は浅く、南壁沿いを中心に確認できた。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器61点、木製品1点、小穴から土器5点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多いものの、大半は小片である。なお、I期の土器片もわずかに出土したが、混入資料と考えられる。

**出土遺物** 6485はI期壺。遠賀川系土器である。

**時期** 出土遺物からの言及は困難であるが、VI期～VII期のSB543に切られることから、それ以前と考えられる。

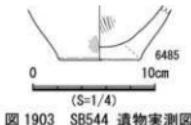


図 1903 SB544 遺物実測図

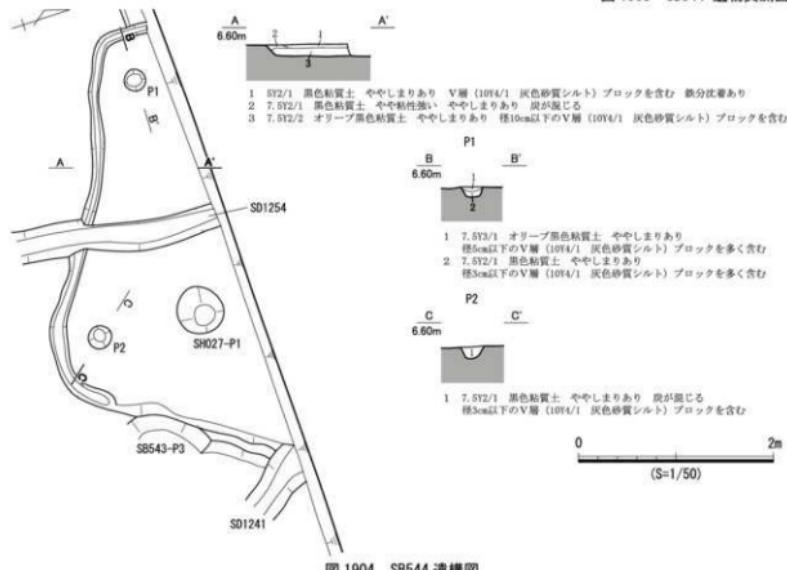


図 1904 SB544 遺構図

SB545（遺構：図1905・1906、遺物：図1907）

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。SB543と並列しており、北東隅でSB549、南側でSB547、SB548を切り、周辺の竪穴住居跡との新旧関係では最も新しい。周辺遺構との重複が多く、遺構の輪郭も漸移的であったため、平面形は不明瞭である。

**形状** 東西長約5.0m、南北長約4.9mの隅丸方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 3層に分層した。1・2層が住居埋土、5層が掘形埋土である。埋土中にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面上では小穴8基と壁溝を検出した。このうち、P1～P4はいずれも土層断面で柱痕跡を確認できることから柱穴と考えられる。P5は中央南寄りに位

置する方形土坑である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直であり、土坑中央西寄りで円礫が2個立つように出土した。また、P7は不整円形を呈する小穴で、検出面中央において高環脚部片が横位で出土した。なお、P6は壁溝上で検出した細長い小穴であるが、性格は不明である。壁溝の残存状

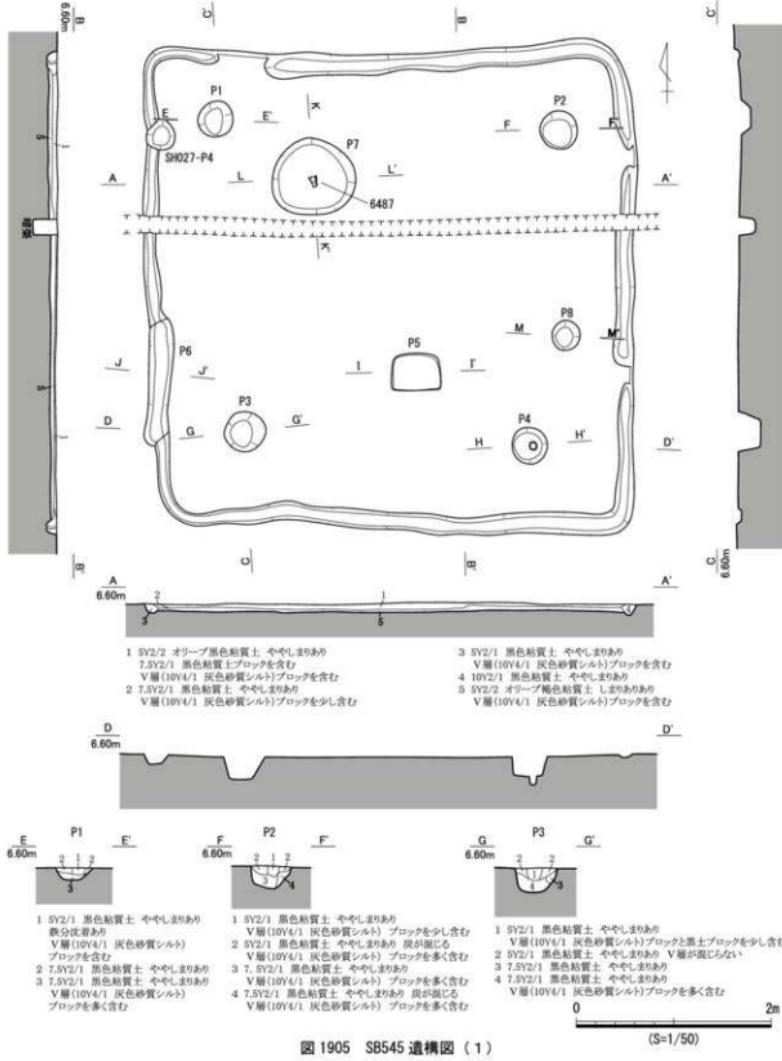
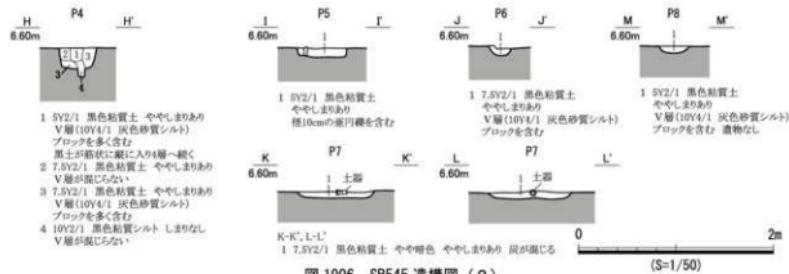


図1905 SB545遺構図(1)

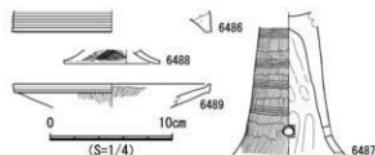


況は良好であるが、北壁中央西寄りで1箇所と東壁中央付近で2箇所において途切れている。その埋土は単層で、およそ底面は平坦である。なお、SH027-P4がSB545の壁溝を切っていると判断したが、平面形の検出時に誤認した可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器175点、小穴から土器10点が出土した。出土土器はV期～VII期が多く、P7からV期高脚部片（6487）が出土した。

**出土遺物** 6486はVI期～VII期壺A1a類。口縁端部平坦面に擬凹線が認められる。6487はV期高脚B類。付根から脚部がわずかに円錐状に開き、裾部が大きく外反する。柱状部には直線文が4帯認められ、裾部には透孔が認められる。6488はV期高環J類。脚裾部が外反し、端部は面取りされる。外面には、細い工具により斜格子文が施文される。6489はV期～VI期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部を上下に拡張して平坦面を形成する。平坦面には沈線が認められる。

**時期** P7からV期の遺物が出土したものの、VI期～VII期のSB548とSB549を切っていることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。



#### SB546（遺構：図1909、遺物：図1908）

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。西側と南側は調査区域外にのび、北辺をSK06635に、中央北寄りをSK06655に切れられ、東側でSB547を切る。

**形状** 規模は不明であるが、北辺と東辺が直線的にのび、北東隅ではほぼ直角に屈曲することから、全形はおよそ隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。1・2層が住居埋土、4・5層が掘形埋土である。埋土中にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴4基と壁溝を検出した。そのうち、P1は不整方形を呈し、断面形は西壁面の傾斜は緩やかで、東壁面はほぼ垂直である。ただし、埋土4～7層はSZ199の周溝埋土を誤認して掘削した可能性もある。壁溝は浅く断面は皿状を呈し、東壁沿いの南側では部分的にしか検出できなかった。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器77点、小穴から土器37点が出土した。小穴のうちP1からの出土が

目立ち、VI期～VII期の壺B類(6490)も出土した。また、住居埋土からはVI期～VII期のものが多く出土し、V期の小片もわずかに出土した。

**出土遺物** 6490はVI期～VII期壺B2類。口縁部が強く外反し、内外面とともにハケ目が残り、端部平坦面には沈線状の窪みが認められる。

**時期** V期～VII期のSB547を切っているが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

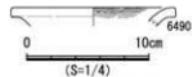


図 1908 SB546 遺物実測図

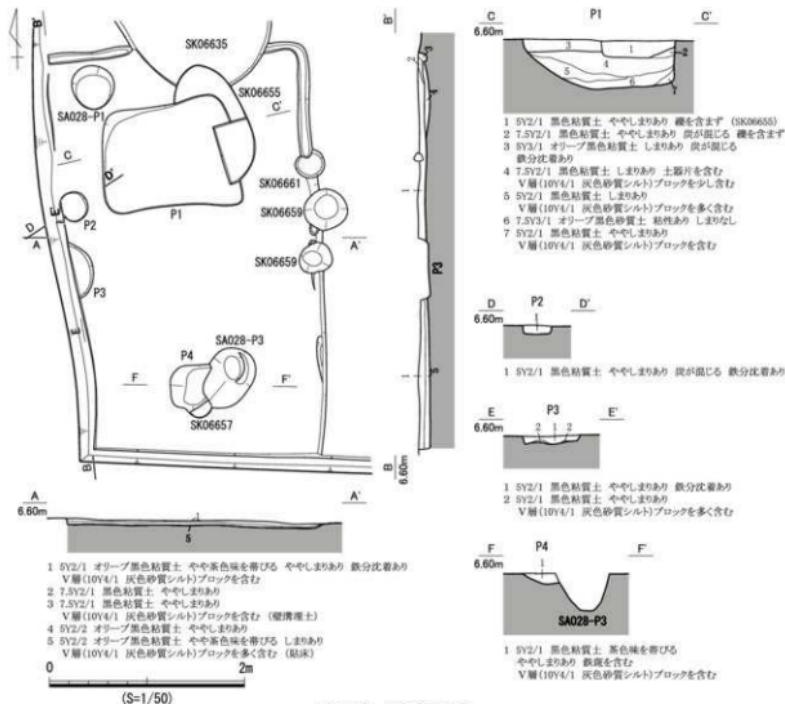


図 1909 SB546 遺構図

#### SB547 (遺構: 図 1910、遺物: 図 1911)

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。西側をSB546に、北側をSB545に、東側をSB548に切られており、周辺の竪穴住跡との新旧関係では最も古い。検出時にすでに壁溝が見えていた。

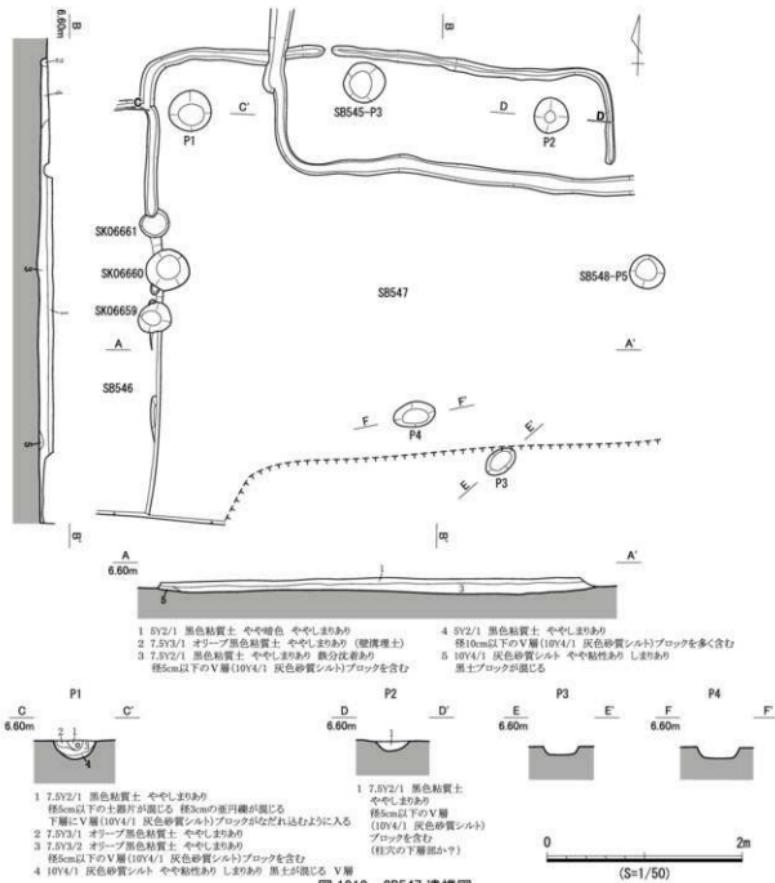
**形状** 規模は不明であるが、壁溝の平面形から隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。1層が住居埋土、3層～5層が掘形埋土である。住居埋土は部分的にしか残存していないかった。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴4基と壁溝を検出した。そのうち、P1は床面上、P3とP4は貼床除去後、P2は先行するSB545貼床除去後に検出し、P1とP2は位置的に柱穴の可能性がある。いずれも掘形は浅いが、P1のみ柱痕跡の可能性がある堆積を確認した。壁溝は北壁沿いと東壁の北側で検出した。北壁中央付近で途切れており、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器429点、小穴から土器14点が出土した。土器はV期～VII期までのものが出土し、多くはVI期～VII期に属する。また、P1からV期の高環B類（6498）が出土した。

**出土遺物** 6491はV期～VI期壺F2類。口縁部が短く直立し、わずかに外傾する。端部には平坦面を



形成する。口縁端部から外面にかけて全面に赤彩を施し、煤も付着する。6492、6493はVI期壺D1b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が短く屈折する。外面に刺突を加える。6494はVI期～VII期壺A3類。口縁部が外反し、端部付近がナデによってわずかに屈曲して内湾する。6495はVI期～VII期壺B類。口縁部が外反し、端部をナデによって平坦に整形する。6496はVI期～VII期壺B3類。口縁部が外反し、端部をナデによって平坦に整形する。頸部直下には直線文が認められる。6497はVII期壺D類。口縁部の屈曲が形骸化し、大きく開く。6498はV期高杯B類。脚部が付根から円錐状に開き、裾部で大きく開く。透孔が縦方向に2孔並ぶ。6499はVII期高杯G3c類。外面に多条沈線を施し、その間にヘラによる山形文、クシによる刺突文を加える。

**時期** 壁穴住居跡の重複関係では最も古い住居といえるが、出土遺物の時期からV期～VII期と考えられる。

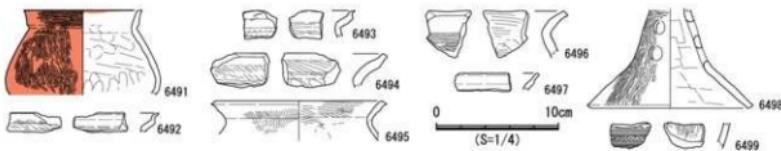


図 1911 SB547 遺物実測図

SB548 (遺構: 図 1912、遺物: 図 1913)

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置し、北西隅をSB545に切られ、西側でSB547を切る。V層ブロックを含まない黒色土が全体的に広がっていたが、平面形はやや不明瞭であった。

**形状** 南側を搅乱により失われ全形は不明であるが、東西長約5.1mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。1層が住居埋土、3・4層が掘形埋土である。

**床面** 平坦であり、貼床(整地土)を確認した。床面はやや硬化しており、小穴8基と壁溝を検出した。そのうち、P1～P3、P6は土層断面で柱痕跡を確認し、P1は底面にて柱当たりを検出した。平面的な位置からP1とP2が柱穴と考えられ、他の小穴は住居の中央付近に分布している。壁溝は北、西、東壁沿いで確認したが、西壁沿いの平面図は図化できなかった。その掘形は浅く、断面形は皿状を呈し、北壁中央付近と北東隅でわずかに途切れている。なお、炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器332点、石器・石製品1点、小穴から土器2点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多く、V期の土器もわずかに出土した。P3からVI期の壺D類(6502)が出土した。

**出土遺物** 6500はV期壺A1類。口縁部が強く外反し、端部を下方に拡張して擬凹線を施文する。内外面ともに赤彩を施す。6501はV期～VI期壺B2類。口縁部が短く外反して端部に平坦面を形成し、刺突を加える。6502はVI期壺D1b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が直立する。外面に押し引きを加える。6503、6504はVI期～VII期壺A3類。口縁部が屈折し、端部は直立して平坦面を形成する。6503は拡張気味の下端に刺突を加える。6504は頸部外面に直立部が認められる。6505はVI期～VII期手焙り形土器。覆部の小片で、貼付突带上にキザミを加え、上方に波状文を施文する。

**時期** V期～VII期のSB547を切り、VI期～VII期のSB545に切られることと、出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

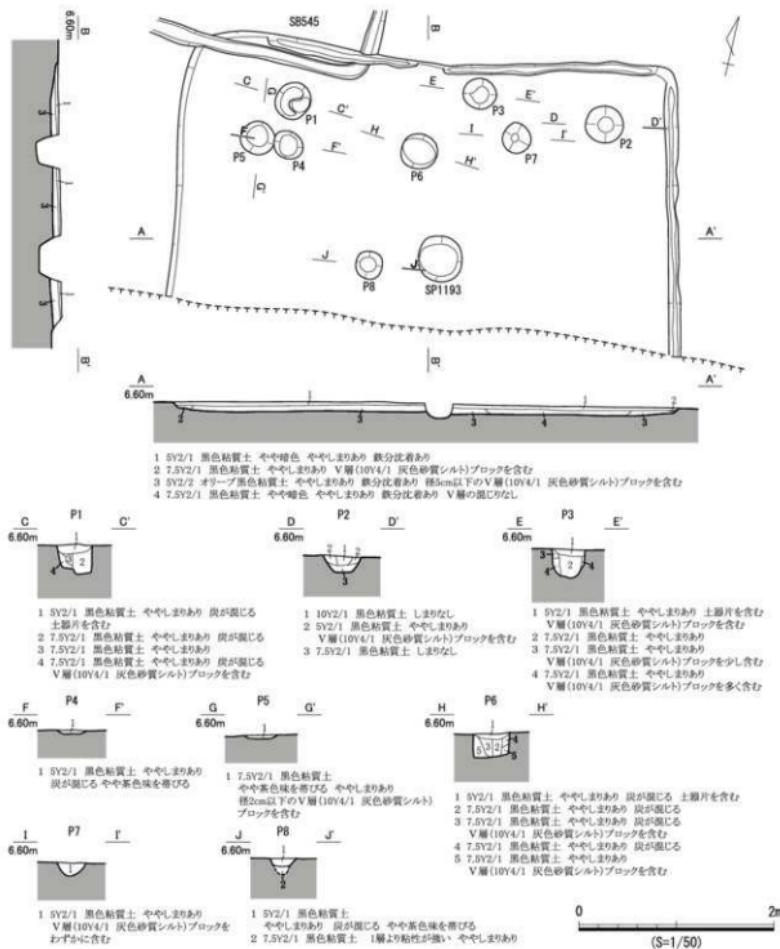


図 1912 SB548 遺構図

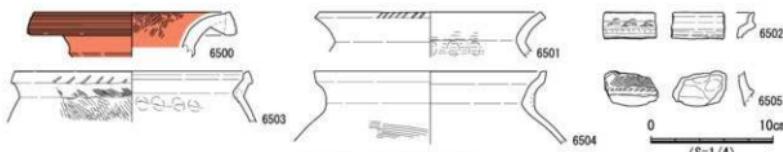


図 1913 SB548 遺物実測図

## SB549（遺構：図1914、遺物：図1915）

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置し、西側をSB545に切られている。平面形は北東隅が明瞭であったが、南辺と西辺はやや不明瞭であった。

**形状** 東西長約3.7m、南北長約3.5mの隅丸方形を呈する。深さは約0.1mで、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 3層に分層した。1層が住居埋土、3・4層が掘形埋土である。埋土はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴5基と壁溝を検出した。そのうち、P2は底面中央に円形の浅い凹みがあり、柱当たりの可能性がある。また、P3とP4はいずれも土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置からP2とP3が柱穴と考えられ、P1も掘形が浅いものの柱穴の可能性がある。壁溝は西壁中央付近から北壁を経て、東壁中央付近まで確認でき、北東隅付近で約0.4m間が途切れている。しかし、図化できなかった。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器16点が出土した。土器のうち時期がわかる破片は、VI期～VII期に属

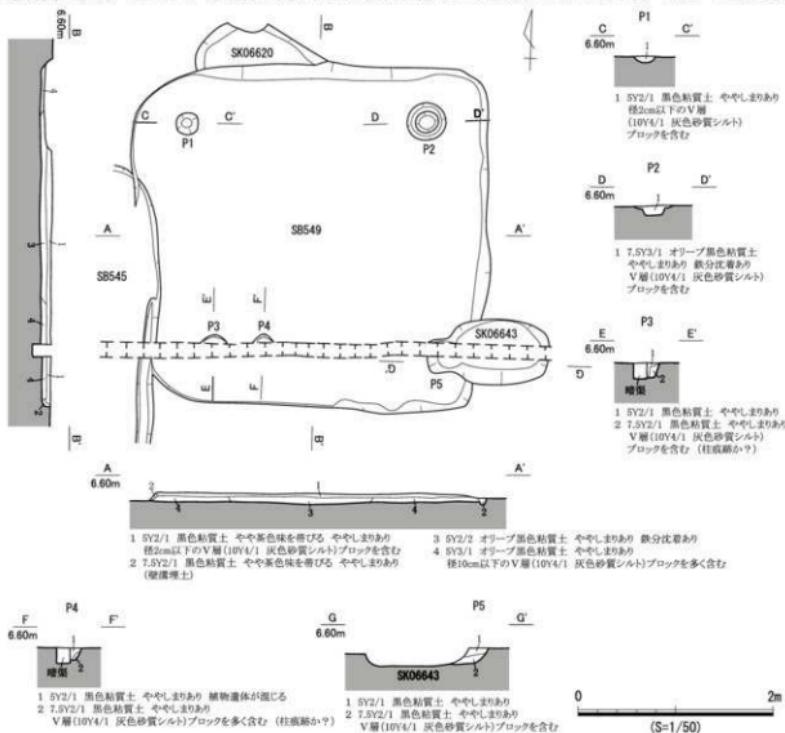


図1914 SB549 遺構図

する。

**出土遺物** 6506はVI期～VII期甕A3類。口縁部が屈折し、端部付近で内側に屈曲する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には刺突を加える。

**時期** VI期～VII期のSB545に切られるが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

#### SB550(遺構:図1916、遺物:図1917)

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。北側は搅乱により失われ、調査区域外へのびている。平面形は南西隅が明瞭であったが、南東隅はやや不明瞭であった。

**形状** 東西長約3.3mであり、各辺は直線的にのび、隅部はほぼ直角に屈曲することから、全形は隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 単層である。埋土中にブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床(整地土)を確認した。床面では小穴4基と壁溝を検出した。いずれも掘形は浅く、土層断面で柱痕跡を確認できていないが、P1とP2は平面的な位置関係から柱穴の可能性がある。なお、壁溝の残存状況は悪く、南西隅と南東隅においてわずかに確認できたのみである。

炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器16点が出土した。そのうち、P1北側の埋土中にて手捏ね土器(6508)が割れた状態で出土した。出土土器はVI期～VII期のものが多い。

**出土遺物** 6507はVI期～VII期甕A3類。口縁部が屈折し、端部付近で内側に屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には煤が付着する。屈曲部内面はくの字に屈折するが、外面には粘土を貼付して直立部を形成する。頸部直下には直線文らしき文様が認められる。6508はVI期～VII期手捏ね土器B類。

胴部が丸みを帯び、底部が小さい。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

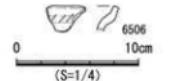


図1915 SB549 遺物実測図

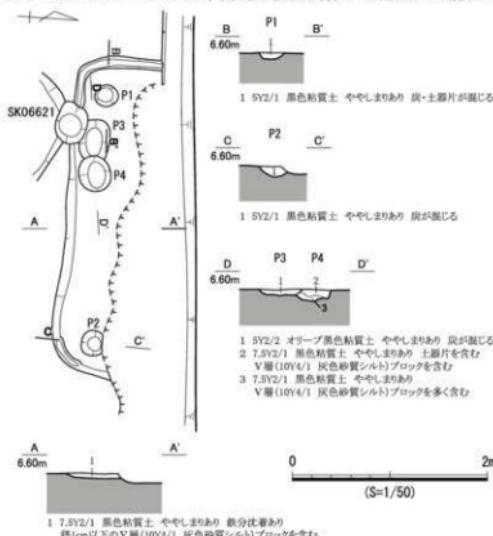


図1916 SB550 遺構図

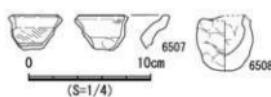


図1917 SB550 遺物実測図

## SB551(遺構:図1919、遺物:図1918)

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置し、北側は調査区域外にのびる。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形が不明瞭であった。また、検出時にすでに壁溝が見えていた。

**形状** 東西長約3.1m、南北長約4.0mであり、北側がやや外側に開く不整方形を呈する。掘形の深さは0.1m未満であり、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

**埋土** 単層である。ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

**床面** 平坦であり、貼床(整地土)は確認できなかった。床面では小穴3基と壁溝を検出した。そのうち、P1とP3は土層断面で柱痕跡を確認し、P3は底面に柱当たり痕が残る。住居の規模が小さいため、いずれかが柱穴であった可能性もある。壁溝はやや幅が広く、途切れることなく全周している。

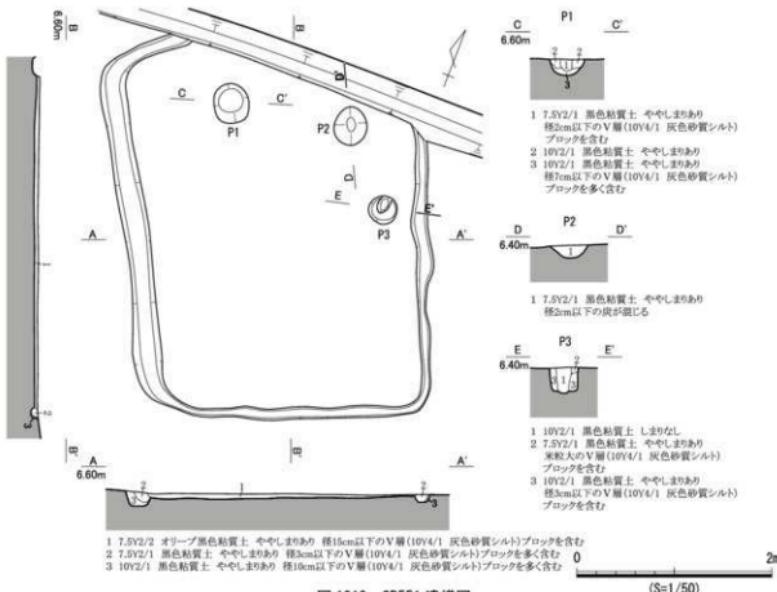
**遺物出土状況** 埋土中から土器37点、小穴から土器19点が出土した。出土土器の多くはVI期～VII期の小片であるが、SZ201と重複しているためか、IV期の土器片も出土した。

**出土遺物** 6509はIV期壺A2類。口縁部がくの字に屈折し、下端にキザミを加える。胴部内面にはハケ、外面にはタタキ後ハケ調整を施す。6510はIV期壺A類底部。内面にはケズリ、外面にはハケ調整を施し、底部にもハケ目が残る。

**時期** 出土遺物から時期の言及は困難であるが、IV期のSZ201を切ることからIV期以降といえる。



図1918 SB551 遺物実測図



## SB552 (遺構: 図1920、遺物: 図1921)

**検出状況** 東部中央に位置する。北側は調査区域外にのび、中央南側を2条の溝 (SD1246、SD1252) に切られる。平面形はやや不明瞭であり、その周縁に幅広の溝状掘形を有する堅穴住居跡である。

**形状** 東西長約5.8mで、東辺と西辺は直線的にのび、南東隅部が外側に膨らむ不整形形を呈する。掘形最深部までの深さは約0.2mであり、壁面の傾斜は急である。

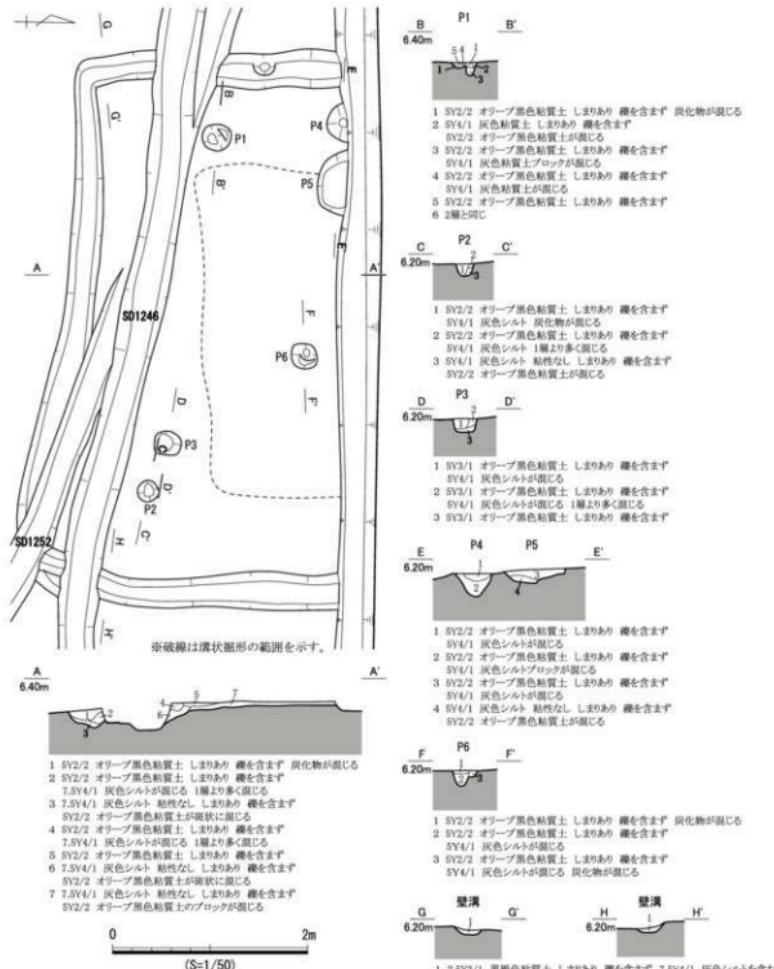


図1920 SB552 遺構図

**埋土** 7層に分層した。土層断面A-A'の1層は壁溝埋土、2、3、6層は溝状掘形の埋土、4、5層は住居埋土もしくは溝状掘形の埋土、7層は中央の掘形埋土である。1層のみ炭化物を含み、他の層はブロック土や2種類以上の土が混在していることから、1層以外は掘形埋土の可能性が高い。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面では小穴6基と壁溝を検出した。そのうち、P1～P3、P6は土層断面で柱痕跡を確認でき、平面的な位置関係からP1とP2（もしくはP3）が柱穴と考えられる。壁溝は確認した壁面を全周し、埋土は単層で、断面形は皿状を呈する。

**掘形** 壁面から約1.1mの幅で溝状の掘形が全周している。その埋土はシルトと粘質土が混在する土であり、最深部では深さ約0.2mであるが全体的には浅い。中央にはブロック土が混じる土があり、幅広の溝状掘形とは埋土が異なっている。掘形底面はおよそ平坦であるが、中央北寄りではやや凹凸が見られた。

**遺物出土状況** 埋土中から土器75点が出土した。主体はV～VI期の小片で、VII期の土器片は認められなかった。

**出土遺物** 6511はV期～VI期窓B2類。口縁部が屈折して短く外傾し、端部には平坦面を形成して刺突を加える。6512はVI期窓A3類。口縁部が外反し、端部には平坦面を形成して刺突を加える。外面には部分的に煤が付着する。

**時期** V期～VI期のSD1246に切られることと出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

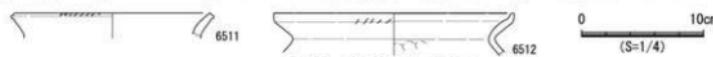


図1921 SB552 遺物実測図

SB553（遺構：図1923・1924、遺物：図1922）

**検出状況** 東部中央の遺構密集域に位置する。3基の小穴が重複もしくは近接して3箇所で検出でき、2回以上の建て替えを行った豊穴住居跡の柱穴と考えた。なお、北東隅の柱穴は不明である。

**形状** 柱穴（P1～P3、P4～P6、P7～P9）の位置から、東西に長い長方形を呈すると考えられる。

**床面** 9基の柱穴の対応関係は不明である。土層断面で柱痕跡を確認できたものはP2とP5であり、それ以外で掘形の深い遺構はP4、P7、P8である。残りの遺構は掘形が浅く単層である。また、9基の内側に小穴5基（P10～14）を検出したが、いずれも掘形は浅く、埋土は単層から2層で、その性格は不明である。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

**遺物出土状況** 小穴から土器43点が出土した。その多くはV～VI期の小片である。

**出土遺物** 6513はVI期～VII期壺。器面に線刻の一部が認められる。6514はV期高杯B4類。杯底部から口縁部が大きく外反する。屈曲部外縁の稜は認められるが、屈曲そのものは形骸化している。6515はVI期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部に顯著な平坦面を形成する。6516は時期及び用途が不明の土製品。

**時期** 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

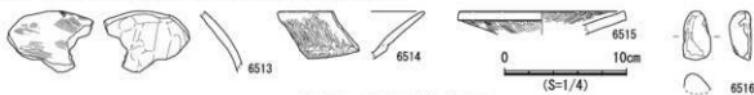


図1922 SB553 遺物実測図

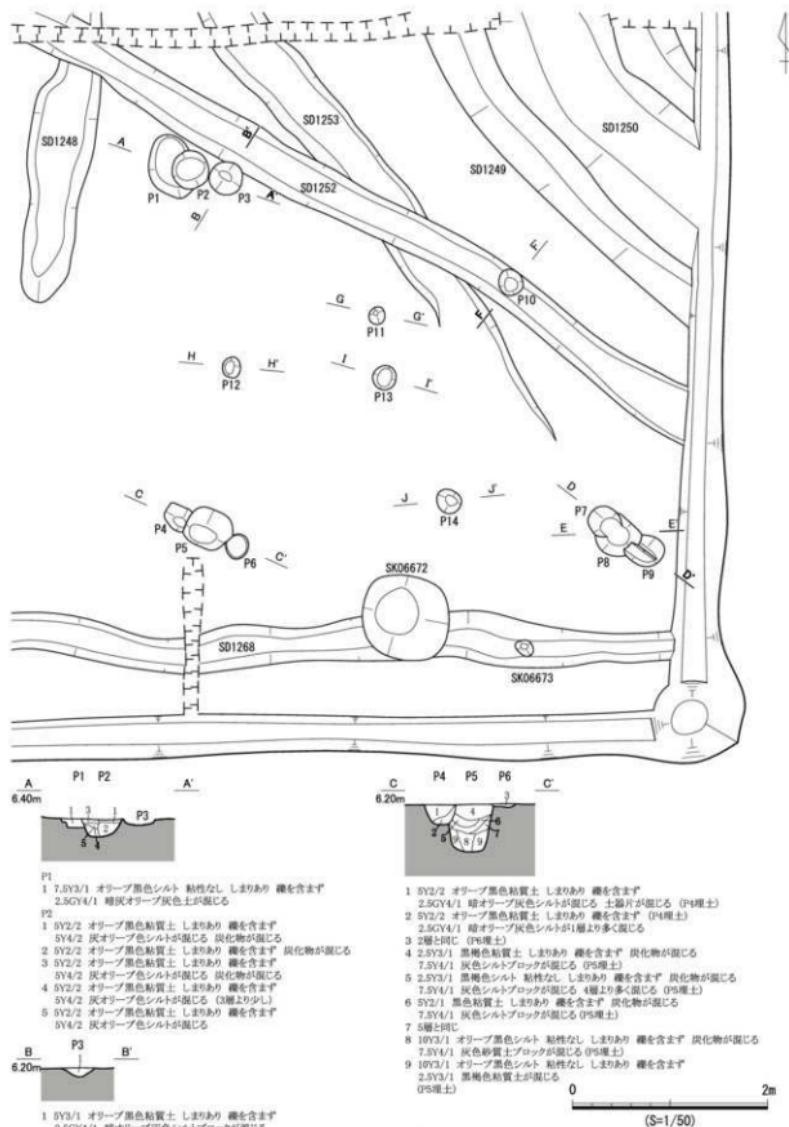


図 1923 SB553 遺構図 (1)

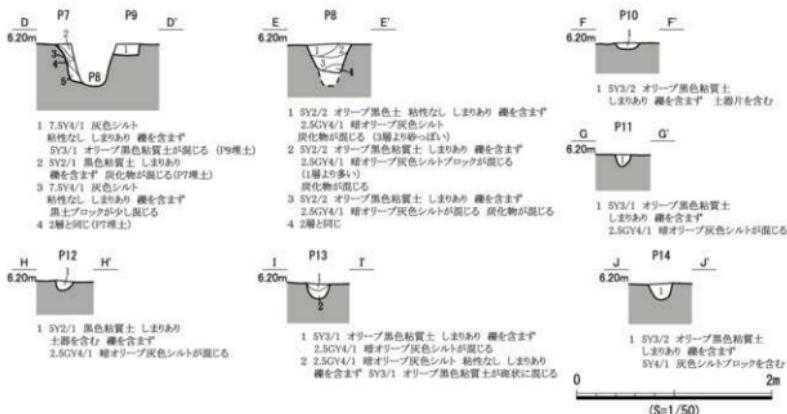


図 1924 SB553 遺構図（2）

## SB554（遺構：図 1925～1928、遺物：図 1929）

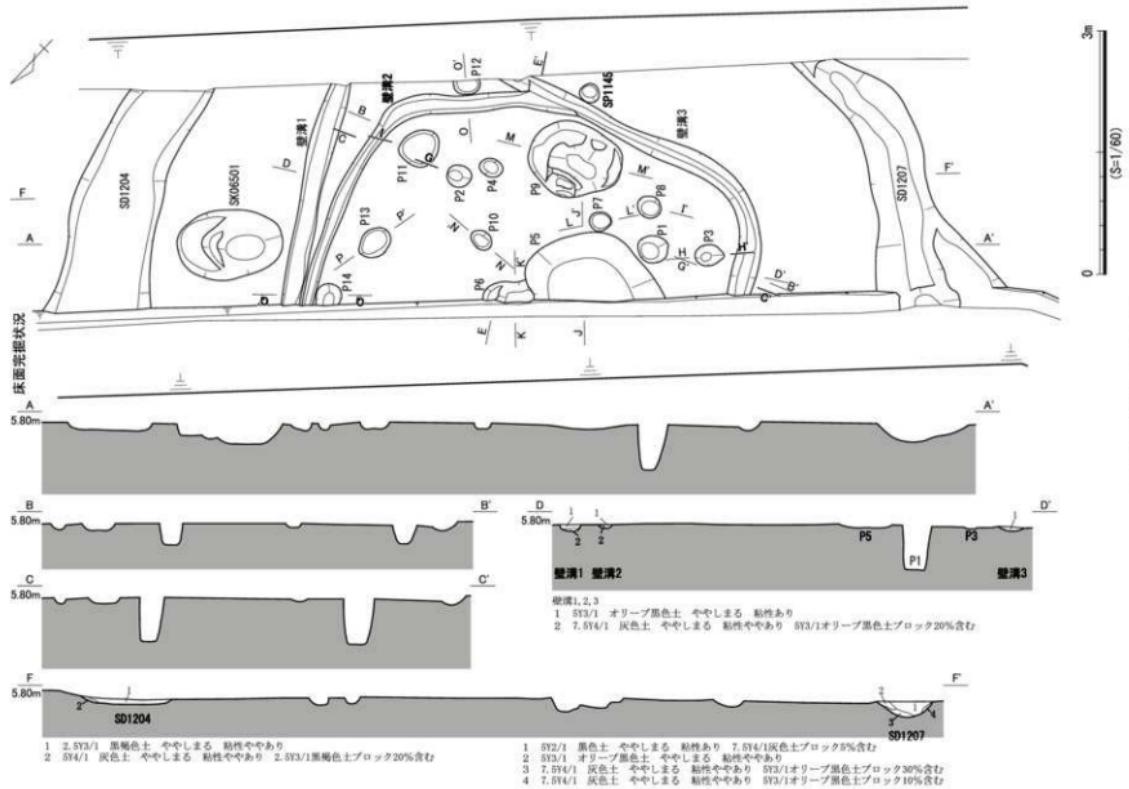
**検出状況** 東部中央南寄りの、SD0381東側に位置する。SD0381の埋土上層を掘削した後に検出したことから、SD0381の最終埋没時にSB554も埋没したと考えられる。検出時には、最初に壁溝1と壁溝3を確認し、その後の精査で壁溝2を検出した。また、壁溝1の東側にSD1204、壁溝3の南西側にSD1207を検出し、SB554を中心とする一連の遺構（外周溝）であると考えた。なお、住居の埋土は削平されており、検出時にすでに床面が見えていた。

**形状** 南北側は調査区域外にのびるため、全形は不明である。しかし、壁溝の平面的な位置関係から東西長約5.2mの隅丸方形を呈していたと考えられる。

**床面** 壁溝を検出した面を床面とし、貼床（整地土）がある。壁溝のうち、壁溝3は壁溝2を切っており、壁溝2は掘形底面で検出した壁溝4に連続する可能性が高い。そのため、住居構築当初は壁溝2と壁溝4が存在し、その後床面等を再整地し、壁溝1と壁溝3が機能したと考えられる。床面上では、壁溝内側で小穴を14基検出した。このうち、P1～P4の4基は土層断面で柱痕跡を確認し、P1とP2、P3とP4のそれぞれがほぼ同じ掘形の深さである。平面的な位置関係からP1とP2が柱穴と考えられ、P1の底面には礎盤の可能性ある木材が残存していた。また、P6検出面では炭化物層を検出したが、焼土や被熱痕跡は確認できなかった。P9は住居南辺中央付近に位置する長軸長約1.1mの不整椭円形を呈する穴である。壁面の傾斜は緩やかで、壁面から底面にかけて凹凸が著しい。底面付近からベンガラ、粘土塊、炭化物、土器片などが混在して出土し、P1とP9からもベンガラが出土した。なお、炉跡は確認できなかった。

**掘形** 掘形埋土を掘削すると、その底面にて小穴4基を検出した。このうち、P17は土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係から建て替前の柱穴である可能性が高い。

**外周溝** SD1204は幅約1.0m、深さ約0.1m、SD1207は幅約0.7m、深さ約0.2mであり、壁溝1・3から約1.3m～1.7m外側に位置する。いずれもSB554を中心に緩やかな弧を描いており、検出時の埋



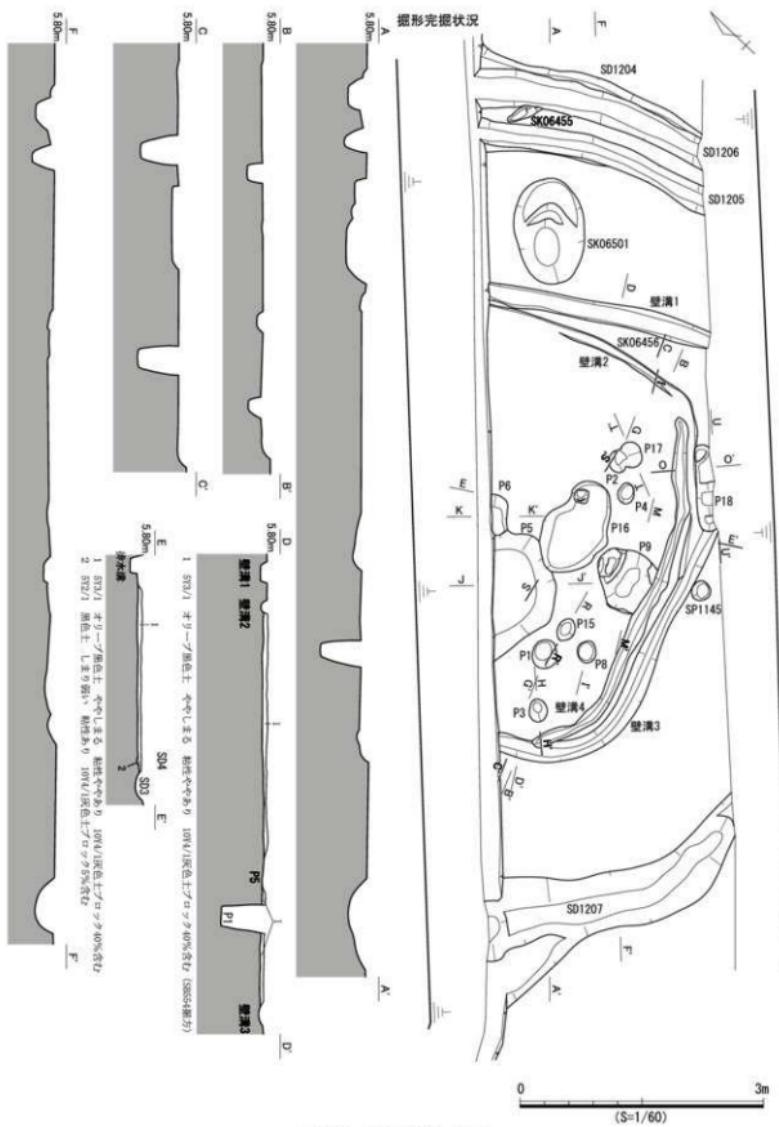


図 1926 SB554 遺構図 (2)

も類似することから、外周溝と考えた。その埋土は2層～4層に分層し、ブロック土を含む。外周溝と壁溝の間には空闊地があり、周堤等の施設の存在が想定できるため、その崩落土が外周溝内に堆積した可能性も指摘できる。なお、SD1204底面では細い溝状構造2条（SD1205、SD1206）を検出した。いずれも掘形が深く、壁面の傾斜が急である。また、SD1207の西壁面には幅広い平坦面が形成されている。

**遺物出土状況** 小穴から土器118点、木製品1点、壁溝から土器1点、外周溝から土器153点、木製品6点が出土した。住居南西隅では、壁溝3の検出面で赤色顔料が面的に広がっていたが、壁溝3の

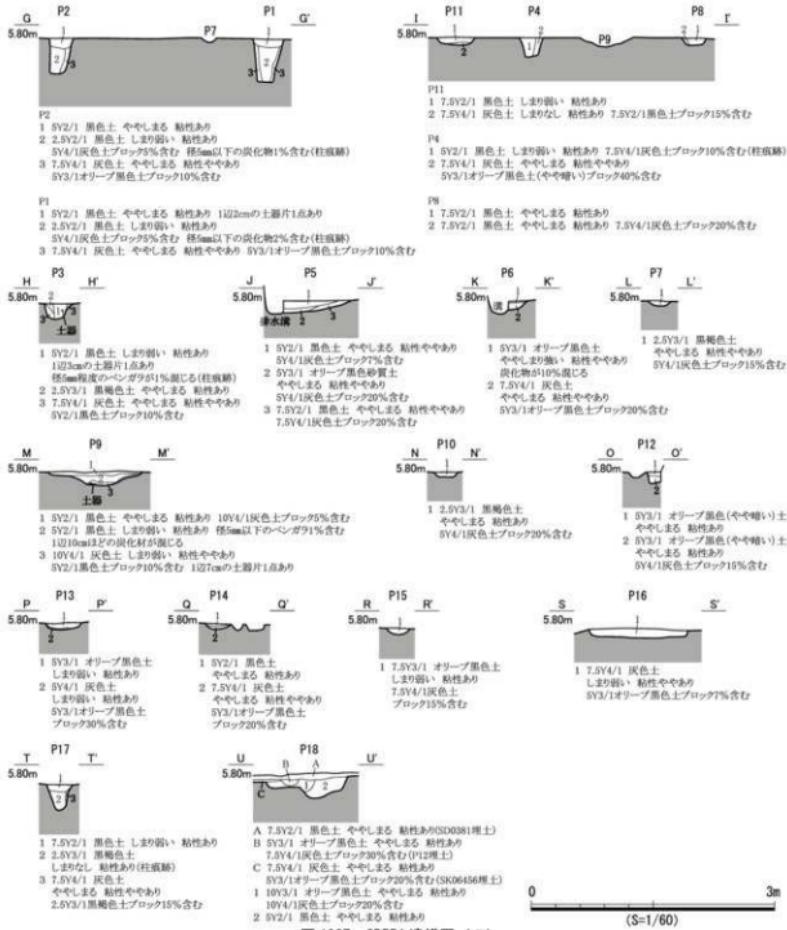


図1927 SB554構造図(3)

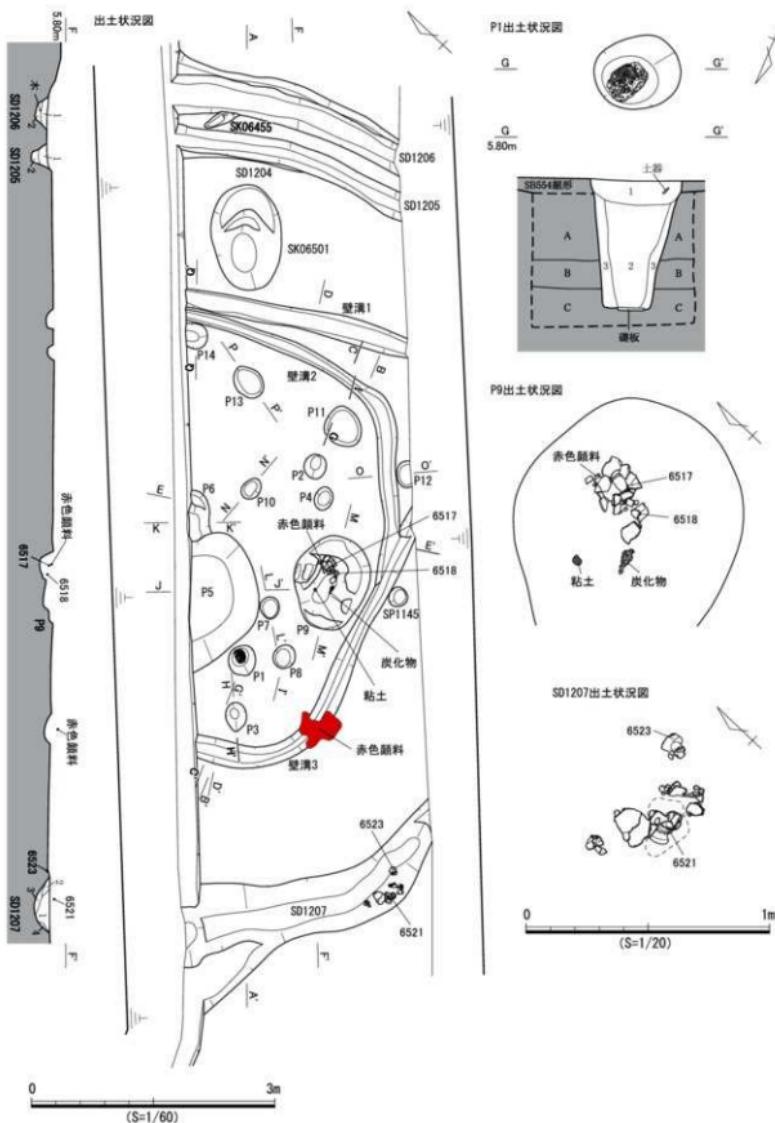


図 1928 SB554 遺構図 (4)

平面形よりも南側（外側）に広がっており、住居機能時に伴う可能性は低い。外周溝から出土した木製品は棒状材であり、およそ溝の長軸方向に平行して出土した。しかし、いずれも腐食が著しく図示していない。なお、P9からV期の遺物が出土し、外周溝からV期～VII期の遺物が出土した。

**出土遺物 <SB554-P9出土遺物>** 6517はV期甕。胸部上半以上を欠損するため全形は不明であるが、最大径は胸部中央より上方に位置すると考えられる。器面に文様は認められないが、全体にハケによる調整が認められ、煤が付着する。底部は嬌小な平底で、中央が窪む。6518はV期器台A1a類。付根から脚部が柱状に直立し、3方向に配置される透孔以下で大きく開く。

**<SD1205出土遺物>** 6519はVI期～VII期高环C類。坏底部から口縁部が開いて立ち上がり、内面の段、外面の稜ともに明瞭である。脚部は付根から円錐状に開き、2孔1対の透孔をもつ。内外面ともに煤が付着する。

**<SD1206出土遺物>** 6520はV期～VI期壺。胸部に赤彩が認められる。

**<SD1207出土遺物>** 6521はV期～VI期壺B4類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。胸部は球形を呈し、器面には粗いハケ目が残る。脚部がハの字に開く。胸部中央付近には煤が付着する。

6522はV期～VI期鉢A3a類。口縁部が短く屈曲し、端部はつまみ上げるように内湾して尖らせる。外  
SB554-P9 (6517・6518)

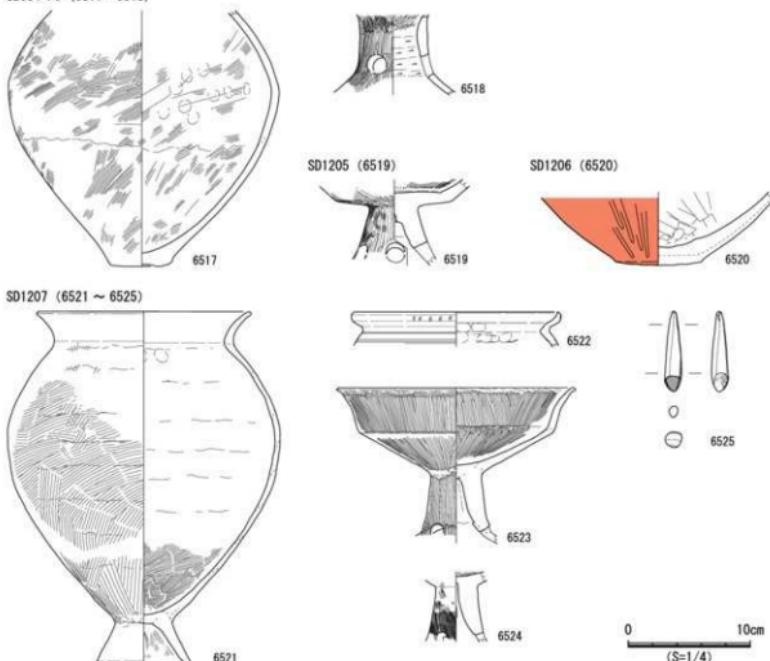


図1929 SB554 遺物実測図

面には刺突を施し、頸部以下には直線文が認められる。6523はV期高壺B2c類。壺底部は皿状を呈し、口縁部が大きく外反して端部を丸くおさめる。脚部は柱状にほぼ直立し、3方向に配置された透孔以下で裾部が開く。器面全体がハケ後ミガキの調整となるが、ミガキが一部に認められるのみで、ハケ目が目立つ。壺底部と口縁部との接合痕が内外面とともに残ることも含めて、全体的に粗雑なつくりである。6524はV期～VI期高壺。脚部が付根からわずかに円錐状に開き、透孔を3方向に配置する。6525はSD1207から出土した棒材。削り出し棒で、上下端部は尖り炭化している。木鐵かヤスの先端の可能性がある。

**時期** 小穴や外周溝出土遺物から、V期には機能しており、VII期頃に埋没したと考えられる。

#### SB555（遺構：図1930～1933、遺物：図1934・1935）

**検出状況** 東部中央南寄りの、SD0381西側に位置する。V層上面で検出したが、鉄分の沈着が著しく遺構の重複も多いことから、平面形は不明瞭であった。南側は調査区域外にあり、西側でSK06527とSB556を切る。

**形状** 各辺ともやや蛇行するものの、東西長約3.9mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 7層に分層した。V層直上にある層（C-C' 5層、D-D' 7層）は掘形埋土であり、それ以外は住居埋土である。住居埋土はブロック土と土器片を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上では、小穴6基と溝状構造1条を検出した。いずれも掘形は浅く、埋土は1層～2層に分層した。このうち、P4の底面には柱当たりの可能性がある円形の窪みがある。平面的な位置関係から、P1とP2、あるいはP3とP4が柱穴と考えられる。なお、SD1の性格は不明である。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器3,010点、石器類27点、金属製品1点、小穴から土器8点、SD1から土器35点が出土した。埋土中の多くの遺物は細片で上層から出土しており、近い位置の破片同士が接合している。その中には、銅鐵（6563）も含まれている。また、住居の北西側では、上層遺物を取り上げた後に灰白色を呈する粘土塊や炭化材などが出土した。出土遺物の時期は、IV期～VII期まで認められる。このうちV期の土器の遺存状態が良好であるが、重複するSK06527がV期の遺構であるため混入している可能性がある。また、P6からVI期～VII期の甕が出土している。

**出土遺物** 6526はVI期壺C類。口縁部が短く直立し端部を丸くおさめる。6527はVI期～VII期壺。矮小な底部が突出する。6528はVI期～VII期壺A2類。口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張して擬凹線を施す。6529はVII期壺。口縁部が直線的に外傾して開き、端部を尖らせる。胴部はやや扁平で丸みを帯び、最大径は胴部中央より下方に位置する。底面は丸底で、器面にはミガキを施す。6530はVI期～VII期壺H1類。口縁部がやや直立する。6531はV期～VI期甕B1a類。口縁部が短く外反し、端部には刺突を加える。6532はV期～VI期甕B2類。口縁部が短く外反し、端部には平坦面を形成する。頸部にはわずかに直立する部位が認められる。6533、6534はVI期～VII期甕A3類。6533は頸部に直立部が認められず、口縁端部が直立する。外面に刺突文を施し、頸部直下の胴部には直線文が認められる。6534は頸部がやや直立して口縁部が屈折し、端部が屈曲して受口状を呈する。6535はVI期～VII期甕A4類。口縁部が短く屈曲し、端部がわずかに内湾する。外面を肥厚して平坦面を形成し、クシに

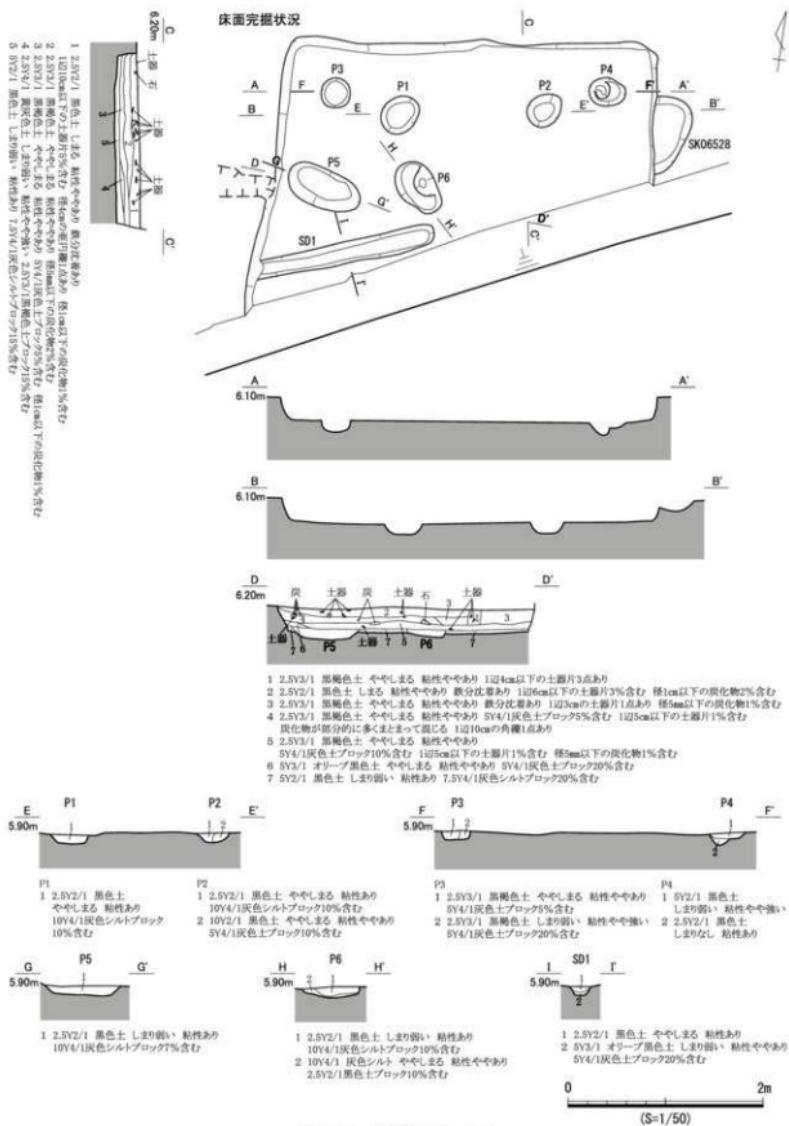


図 1930 SB555 遺構図 (1)

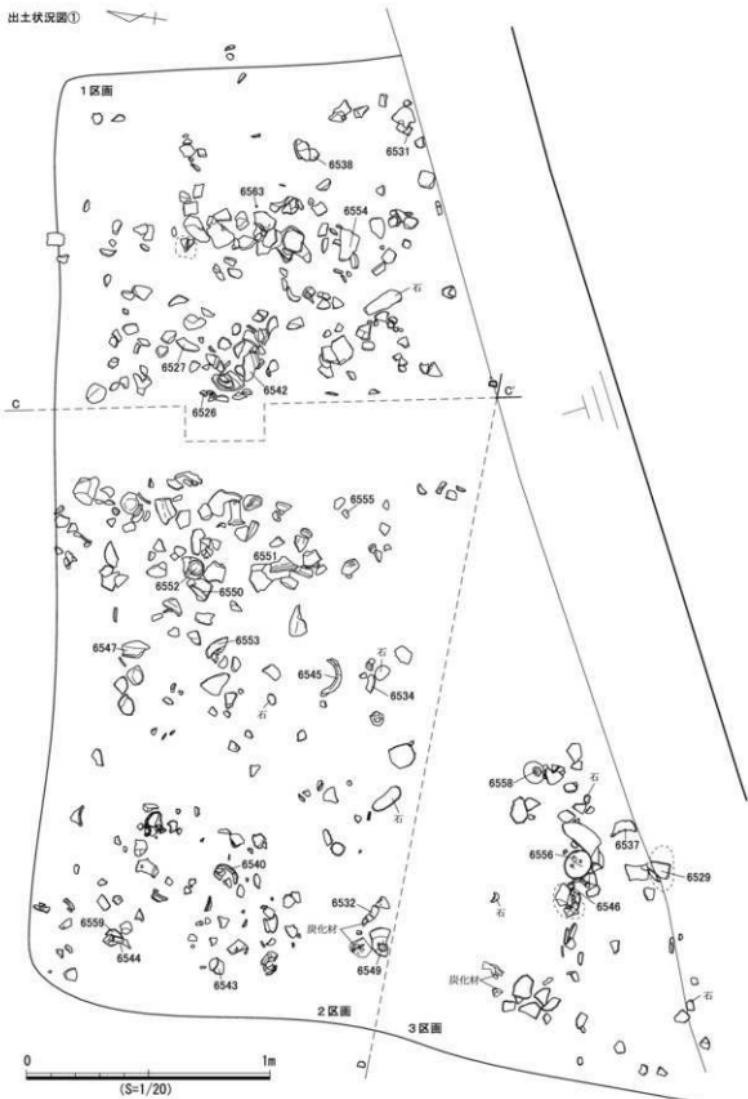
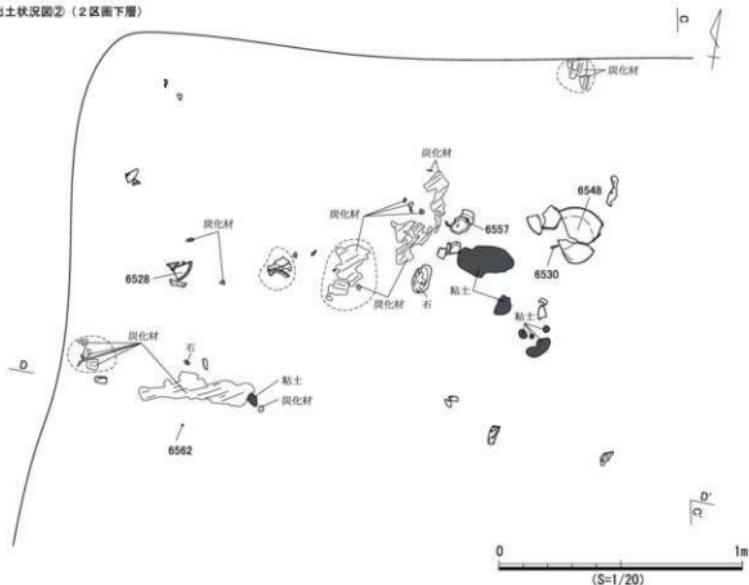


図 1931 SB555 遺構図（2）

出土状況図② (2区画下層)



遺物接合状況

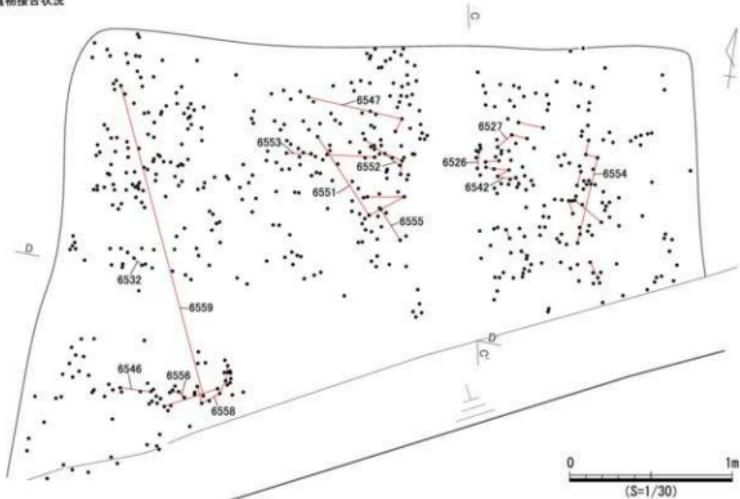
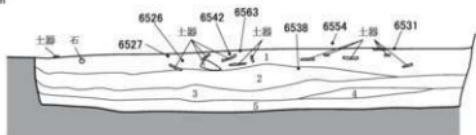


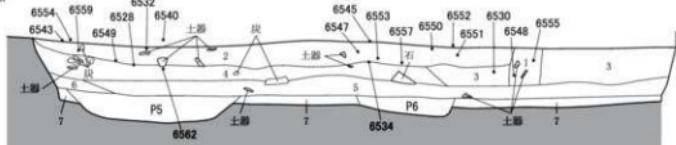
図 1932 SB555 遺構図 (3)

1区面遺物ドット図

C  
6.20m

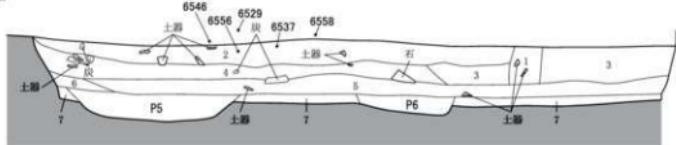
C'

2区面遺物ドット図

D  
6.20m

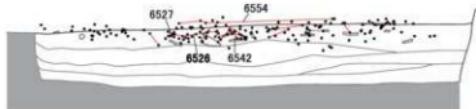
D'

3区面遺物ドット図

D  
6.20m

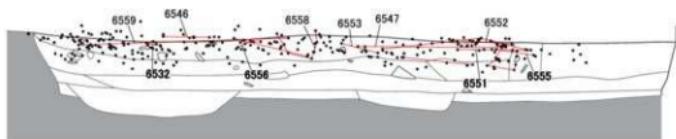
D'

1区面遺物接合状況

C  
6.20m

C'

2・3区面遺物接合状況

D  
6.20m

D'



図 1933 SB555 遺構図（4）

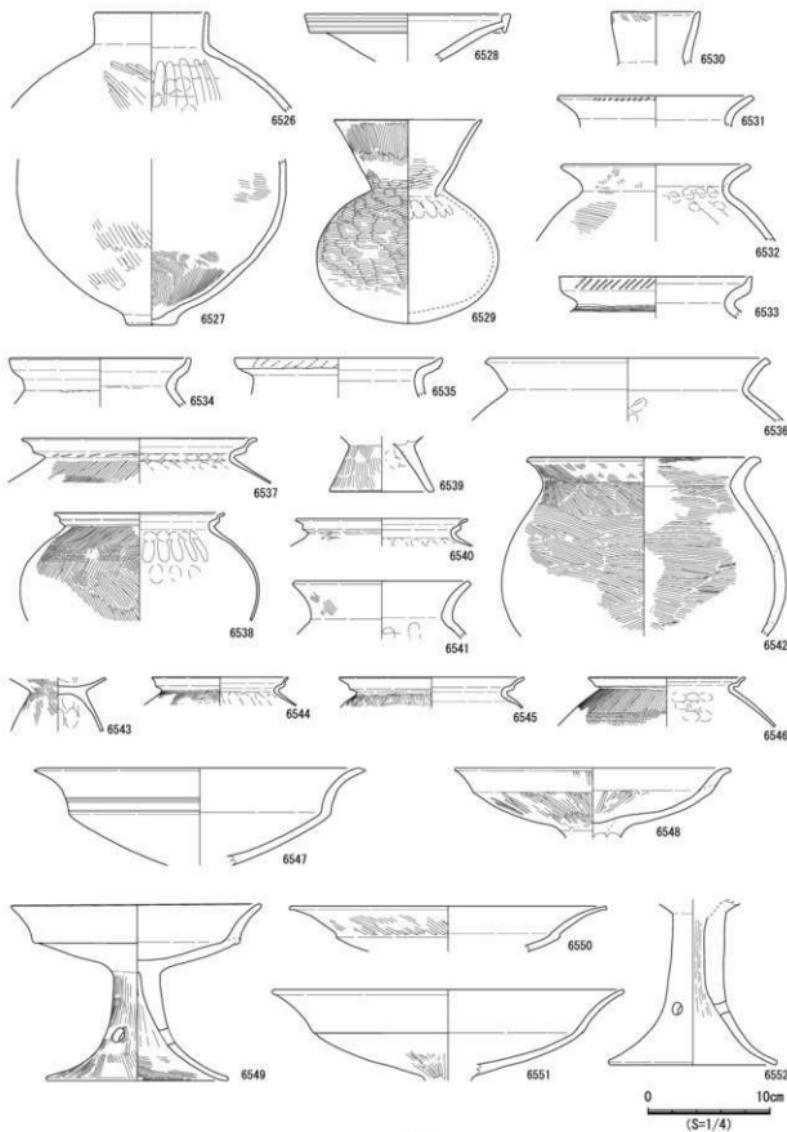


図 1934 SB555 遺物実測図 (1)

より刺突を加える。6536はVI期～VII期甕B2類。口縁部がくの字に屈折してわずかに外反し、端部には平坦面を形成する。6537はVII期甕D2b類。口縁部が屈曲して端部を肥厚する。下段外面には刺突状のハケが認められる。6538はVII期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が外反して端部に平坦面をもつ。胴部に煤が付着する。6539はVI期～VII期甕。脚部がハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6540はVII期甕D2b類。端部が肥厚気味である。6541はVII期～VIII期甕B4類。口縁部が屈折し、やや長く外反して開く。端部には平坦面を持つが、やや凹凸が認められる。6542はVII期～VIII期甕B4類。頸部が直立してから口縁部が緩やかに外反し、端部は外傾する。曖昧ながら平坦面を形成する。口縁部、胴部ともに器壁が厚く、器面にはハケ調整を施す。6543はVII期～VIII期甕D類脚部。6544はVII期～VIII期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が短く外反する。6545、6546はVII期甕D類。口縁部の屈曲が弱く、大きく開く。

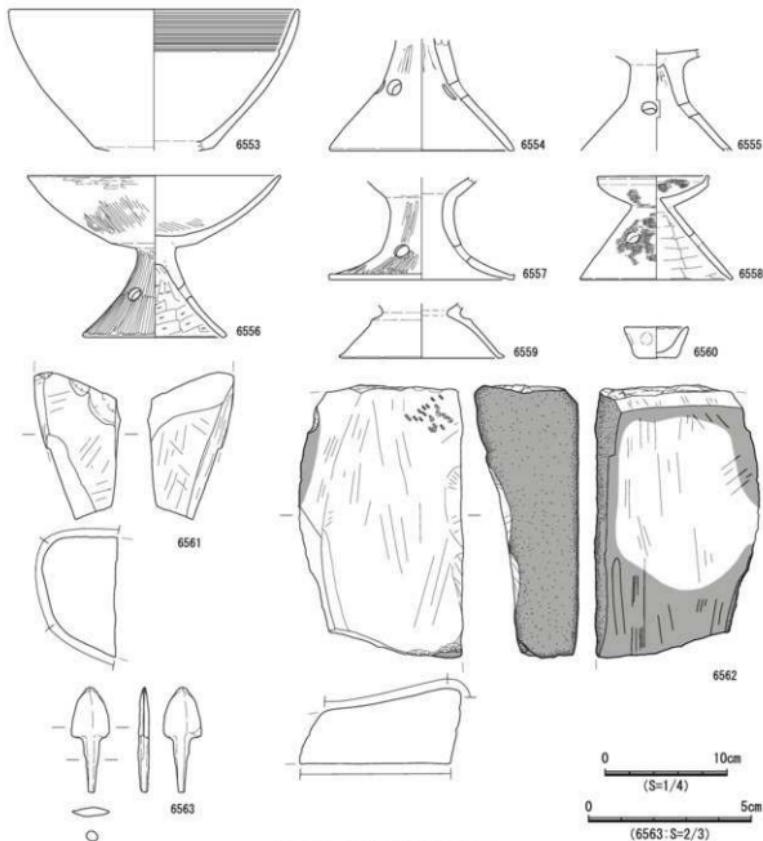


図 1935 SB555 遺物実測図 (2)

6547はV期高坏B2a類。坏底部から口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が大きく外反して顯著な平坦面を形成する。屈曲部外面の稜、内面の段ともに明瞭で、外面の稜付近には擬凹線が3条認められる。6548はV期高坏B2b類。坏底部は浅い皿状を呈し、口縁部が短く外反して端部を丸くおさめる。内面に段は認められず、外面の稜も不明瞭である。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ後ナデを施す。6549はV期高坏B3a類。浅い皿状の坏底部から、口縁部が直立して強く外反する。屈曲部の稜は明瞭である。脚部は付根から柱状に直立し、裾部は大きく外反する。透孔は3方向に配置され、タテミガキを施す。6550、6551はV期高坏B3b類。口縁部が坏底部から強く外反し、端部を丸くおさめる。外面の稜は明瞭に残る。6552はV期高坏B類。脚部が付根から柱状に直立し、透孔を境に裾部が外反する。透孔は3方向に配置する。6553は、VI期～VII期高坏C3c類。口縁部が直線的に開き、端部付近は内湾する。口縁部内面の上から3分の1程を肥厚して多条沈線を施文する。6554はVI期高坏C類。脚部が円錐状に開き、裾部がわずかに内湾する。2孔1対の透孔を2方向に配置する。6555はVI期～VII期高坏C3類。脚部が付根から直立気味に立ち、裾部が大きく開く。透孔を3方向に配置する。6556はVIII期高坏。坏部が碗状を呈し、口縁部は尖る。脚部が付根から円錐状に外反する。透孔を3方向に配置し、タテミガキが認められる。6557はV期器台A類。脚部が柱状に直立し、裾部が外反して端部に平坦面をもつ。透孔を3方向に配置する。6558はVII期器台C3類。受部が浅い皿状を呈し、端部が屈曲して直立する。脚部は付根から円錐状に直線的に開く。6559はVIII期器台。受部直下の脚部にはナデによって強く凹面が形成され、下方には突帯状の凸部が認められる。脚部全体は円錐状に開く。山陰系と考えられる。6560はVI期～VII期手捏ね土器C類。口縁部が直線的に外傾して立ち上がる。6561、6562は砥石。砥面は6561が3面、6562が2面であり、6562の表面右上には断面三角形を呈する細かい窪みがあり、裏面から側面にかけて煤が付着している。6563は銅鎌。有茎鎌で、鎌身は膨をもつ三角形を呈する。基部には鋤型段階の脇抜がわずかに残る。

**時期** V期のSB556やSK06527を切ることや、埋土と小穴出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられ、最終的にVIII期頃に埋没したと考えられる。

#### SB556（遺構：図1936・1937、遺物：図1938）

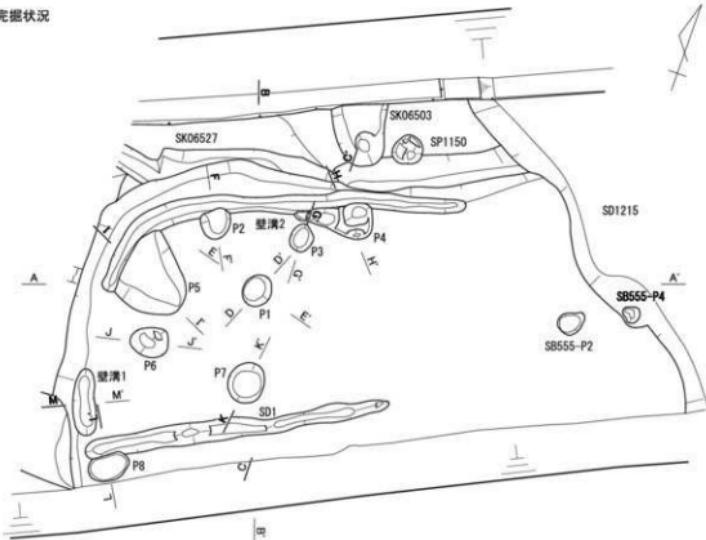
**検出状況** 東部中央南寄りの、SD0381西側に位置する。V層上面で検出したが、鉄分の沈着が著しく遺構の重複が多いことから、平面形は不明瞭であった。なお、東側はSB555とSD1215に、西側はSK06527に切られており、検出時にはすでに大半の床面が見えていた。南側は調査区域外にある。

**形状** 全形は不明であるが、検出された遺構北西部の状況から、平面形は隅丸方形状となると考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、確認できた掘形の深さ約0.1mである。

**埋土** 住居の住居埋土は削平されているため確認できなかった。土層図C-C'の4・5層は掘形埋土である。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。貼床はブロック土の混入が顯著であったが、硬化面は確認できなかった。床面上では小穴8基と溝3条を検出した。小穴のうちP1は柱根が残存しており、その上部は東南東側（住居中央側）に傾いていた。平面的な位置関係から本遺構の柱穴と考えられるが、東側に対応する穴は確認できなかった。また、P6とP7は掘形が深く、壁面の傾斜は垂直に近い。

床面完掘状況



北東部炭化材出土状況

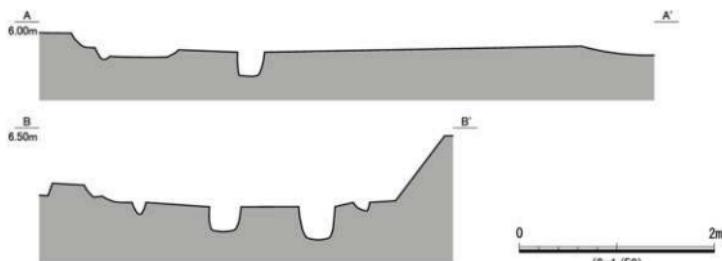
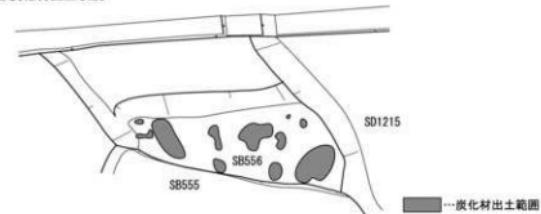


図 1936 SB556 遺構図 (1)

なお、壁溝は2条確認し、いずれも住居の掘形上端線からやや内側で検出した。SD1の性格は不明である。なお、床面の北東側では炭化物がまとまって出土したが、その南側をSB555に切られているため、どの程度の広がりを有していたのか定かではない。炉跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 掘形埋土中から土器354点、小穴から土器39点、壁溝から土器8点、SD1から土器6点が出土した。出土遺物の時期はV期～VII期であり、V期の遺物が多い。なお、P1-d層からVII期の高坏C類(6568)が出土したが、P1出土の柱根の年代測定を実施したところ、41calBC-60calAD(95.4%)でIV期～V期に相当する年代が測定された。

**出土遺物** 6564はV期壺A1a類。口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張する。端部には擬凹線を施す。6565はV期甕A4類。頸部内面はくの字に屈折するが、頸部外面には粘土を充填して直立部を形成し、刺突文を施文する。口縁部が外傾し、端部が屈曲して短く直立する。6566はV期高坏B2b類。坏底部から口縁部が垂直に立ち上がり、端部が強く外反する。端部には平坦面を形成し、口縁部

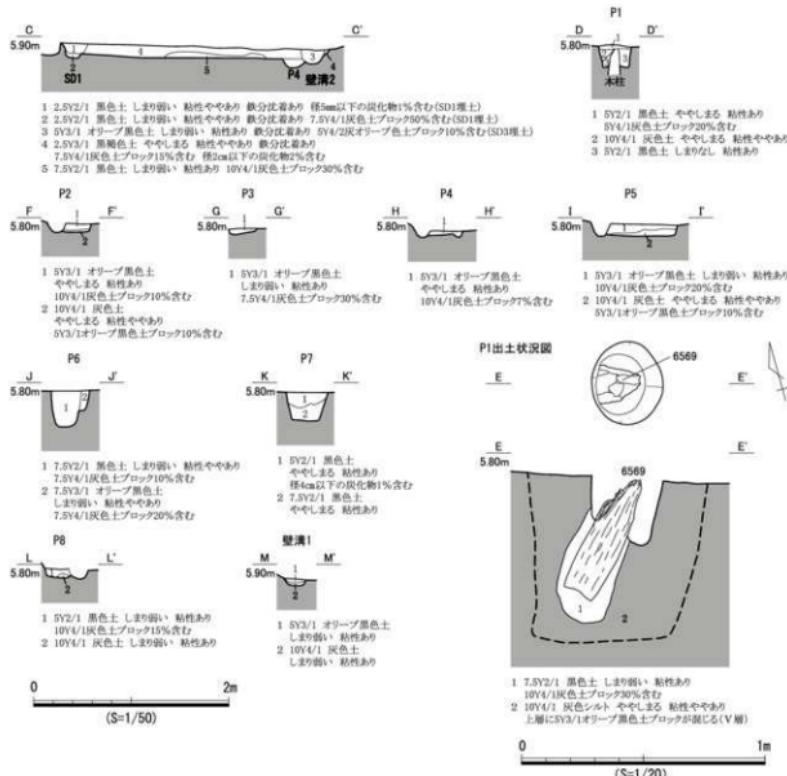


図1937 SB555 遺構図(2)

外面には波状文が認められる。屈曲部外面の稜が強く残り、稜の直上、波状文の下方に沈線が2条認められる。6567はV期高坏B2c類。坏底部から口縁部が直立して立ち上がり、外反する。端部には顯著な平坦面を形成する。6568はVI期高坏C類。坏底部から口縁部が、明瞭な段、稜を持って外傾する。6569は柱根。削り出しの柱材で、底面は平坦であり、多方向からの粗い加工痕が残る。側面に加工痕は認められない。

**時期** 本遺構の埋土中にV期の遺物が多いこと、V期の遺物がまとまって出土したSK06527に切られること、P1出土の柱根の年代がIV期～V期であることなどから、V期と考える。しかし、P1からVI期の破片が出土しており、検討を要する。

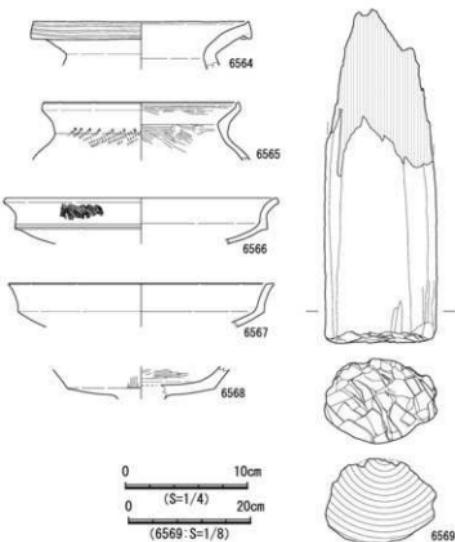


図 1938 SB556 遺物実測図

#### SB557（遺構：図1939、遺物：図1940）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。周辺はIV層がほとんど遺存せず、Ib層除去後にV層表面で検出した。平面形は、東側は明瞭であったが、西側は不明瞭であった。

**形状** 北側は調査区域外となり全形は不明であるが、東辺と西辺がほぼ平行することから、東西長約4.4mの方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 10層に分層した。1～5層は住居埋土、6～10層が掘形埋土である。住居埋土にはブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

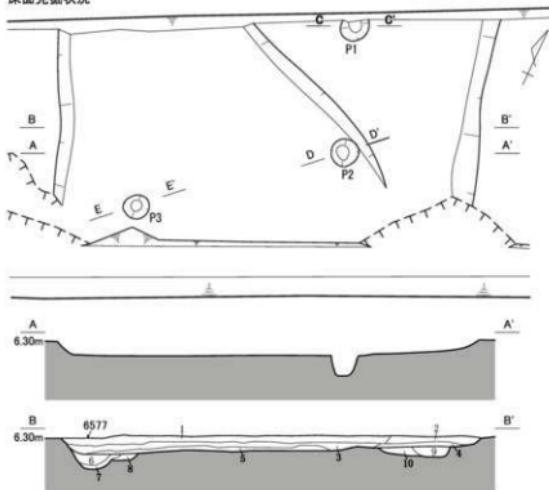
**床面** 中央付近から南東隅にかけて浅い段を有し、貼床（整地土）がある。床面上では小穴3基を検出した。このうち、P2とP3は掘形が深く、P2は壁面の傾斜が急である。平面的な位置関係から、P2は柱穴である可能性が高い。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

**掘形** 住居周縁に幅約0.8m～1.0m、深さ約0.1m～0.2mの溝状遺構が周囲しており、ブロック土の混入が目立つことから掘形埋土と考えた。溝状遺構の底面は南側がほぼ平坦であるが、東西側は幅約0.5mの細長い溝状の落ち込みが南北方向にのびている。

**遺物出土状況** 住居埋土中から土器1,383点、石器類2点、小穴から土器20点、掘形埋土から土器247点、石器1点が出土した。このうち、住居埋土からVI期～IX期の土器が、掘形からVI期～VII期の土器が出土している。

**出土遺物** 6570はVI期～VII期壺D3b類。口縁部が湾曲しながら大きく外反し、端部付近で屈曲する。

## 床面完掘状況



1. 2.SY3/1 黒褐色土 シamar 粘性ややあり 鉄分沈着あり 残1cm以下の鉄化物1%含む
2. 2.SY3/1 黒褐色土 シamar 粘性ややあり 鉄分沈着あり 8. SY4/1灰色土ブロック10%含む
3. 2.SY3/1 黒褐色土 (やや弱) 土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり
4. 2.SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 8. SY4/1灰色土ブロック20%含む
5. 2.SY3/1 黑褐色土 シamar 粘性やや強い 鉄分沈着あり 7. SY4/1灰色土ブロック40%含む
6. 2.SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性やや弱い 鉄分沈着あり 8. SY4/1灰色土ブロック15%含む 12cm程の土器片1点あり 鉄化物がわずかに見じる
7. SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性やや弱い 鉄分沈着あり 7. SY4/1灰色土ブロック30%含む
8. 2.SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 7. SY4/1灰色土ブロック10%含む
9. 2.SY3/1 灰色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 2. SY3/1黑褐色土ブロック40%含む
10. 7.SY4/1 灰色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり

C C' P1

6.20m

1. 2.SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 8. SY4/1灰色土ブロック10%含む
2. SY4/1 灰色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 2. SY3/1黑褐色土ブロック30%含む

D D' P2

6.10m

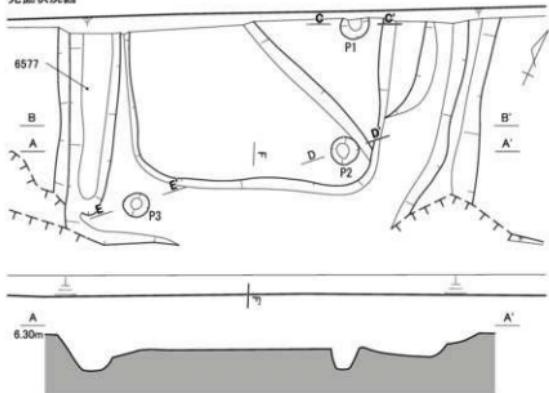
1. 8.D3/3 オリーブ褐色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 7. SY4/1灰色土ブロック20%含む
2. 5.D4/2 灰オリーブ色土 ややしづる 粘性やや強い 5.SY3/1オリーブ褐色土 ブロック15%含む

E E' P3

6.10m

1. 2.SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性ややあり 7. SY4/1灰色土ブロック7%含む
2. 5.SY3/1 オリーブ褐色土 ややしづる 粘性ややあり 5.SY4/1灰色土ブロック10%含む

## 完掘状況図



F F'

6.20m

1. 2.SY3/1 黑褐色土 ややしづる 粘性ややあり 鉄分沈着あり 7. SY4/1灰色土ブロック7%含む
2. 5.SY3/1 オリーブ褐色土 ややしづる 粘性ややあり 5.SY4/1灰色土ブロック10%含む 鉄化物がわずかに見じる

0 2m  
(S=1/50)

図 1939 SB557 遺構図

端部は丸くおさめ、文様は認められない。6571はIX期壺。二重口縁壺で、大きく外反する口縁部外面には段が認められる。頸部には宽带を貼付し、刺突を加える。6572はV期～VI期壺B1a類。口縁部が大きく外反し、端部に顯著な平坦面をもつ。端部を下方にわずかに拡張する。6573はVI期壺D1b類。口縁部が屈曲し、上段は短く外反する。外面に刺突を加える。6574はVI期～VII期高環C3c類。内湾する口縁部内面に多条沈線が認められる。6575はVII期高環G類。坏底部から脚部がわずかに皿状に開き、透孔部を境に大きく外反する。透孔を3方向に配置する。6576はIX期高坏。器壁が薄く、坏底部は浅い円錐状を呈する。6577は砾石。断面方形を呈する長楕円礫を素材とし、自然面を砥面として利用している。

**時期** 挖出出土の遺物の時期からVI期～VII期に構築され、IX期頃に埋没したと考えられる。

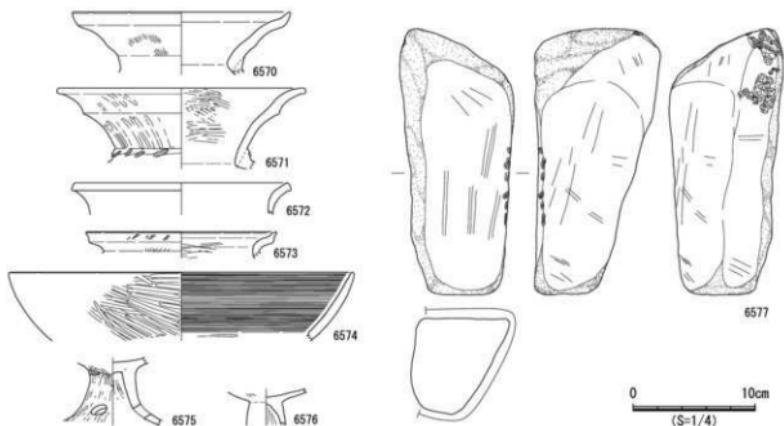


図 1940 SB557 遺物実測図

#### SB558 (遺構: 図 1941・1942、遺物: 図 1943)

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、SB559を切る。周辺はIV層がほとんど遺存せず、Ib層除去後にV層表面で検出した。遺構輪郭は不明瞭であり、排水溝や搅乱の壁面の土層を確認して判断した。なお、南西側は平成20年度調査、それ以外は平成22年度調査であり、平成20年度調査では平面形を確認できなかった。

**形状** 長軸長約4.7m、短軸長約4.5mで、隅丸方形を呈する。各辺はやや蛇行するものの、およそ直線的になり、北西隅部がやや外側に突出する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は北辺が急で、他はやや緩やかである。

**埋土** 6層に分層した。2層が厚く堆積し、ブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

**床面** ほぼ平坦であり、貼床(整地土)は確認できなかった。床面上で小穴14基を検出した。そのうち、P1～P3、P8では土層断面で柱痕跡を確認し、P9は掘形が深く壁面の傾斜もほぼ垂直である。平面的な位置関係からP1～P3は柱穴と考えられ、やや北西側にずれるがP8とP9のいずれかも柱穴の可能性がある。また、中央には住居の南北辺に平行する長軸を有するP6があり、P6を切るP7の底面

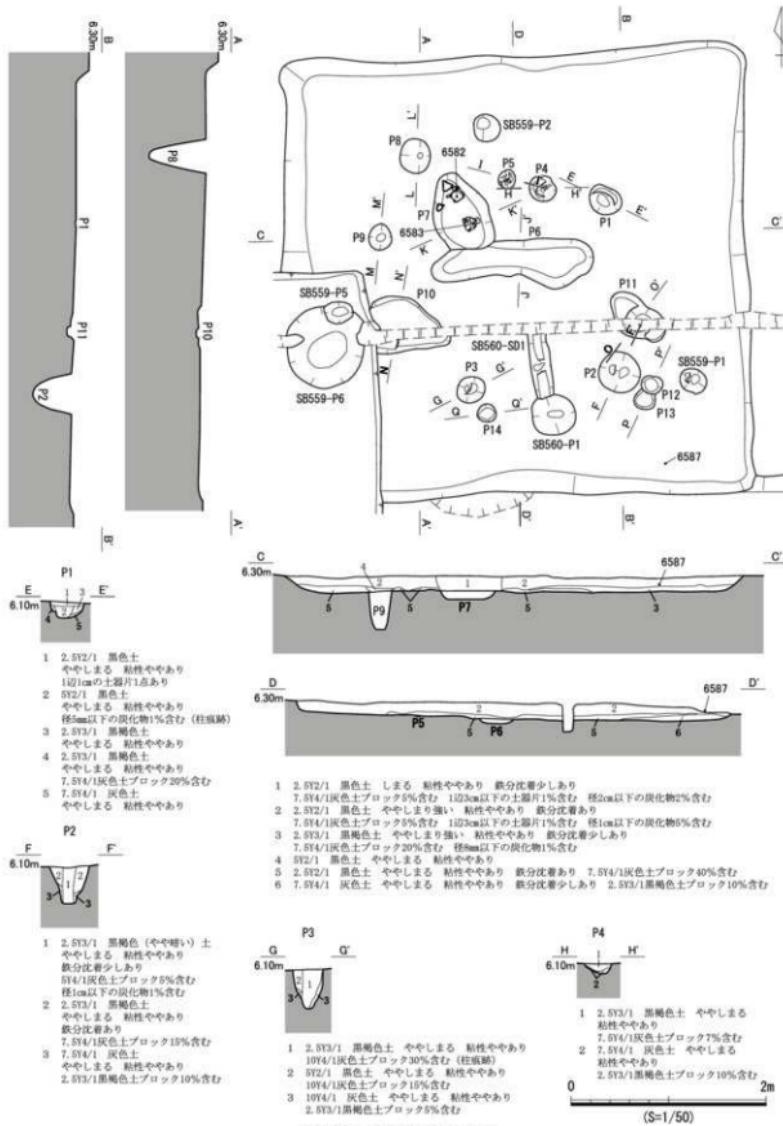


図 1941 SB558 遺構図 (1)

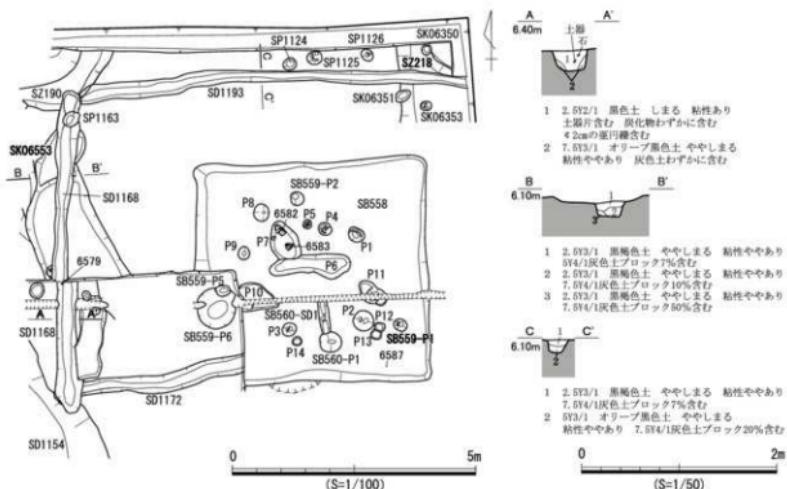
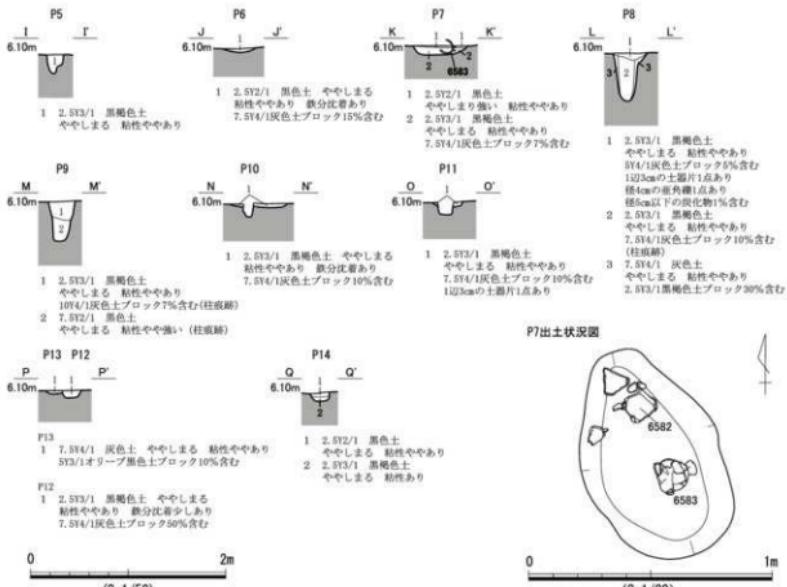


図1942 SB558 遺構図(2)

直上では、VI期～VII期の甕E類（6583）が口縁部を南西方向に向けて横位で出土した。

**関連遺構** SB558の西側と北側には、SB558の主軸と同じ方位の細い溝（SD1168、SD1193）が存在する（図1942下）。SD1168とSB558西辺との距離は約2.6m、SD1193とSB558北辺との距離は約1.8mであり、出土遺物の時期から同時期存在の可能性が考えられるため、本遺構の関連遺構として記載する。いずれも断面逆台形を呈する深さ約0.1m～0.2mの溝で、SD1168の北端とSD1193の西端は底面が連続しないものの、上端は接している。埋土中にはブロック土の混入が認められるため人為堆積と考えられ、SD1168南側では残りの良い土器が横位でまとまって出土した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器3,026点、石器類2点、小穴から土器157点が出土した。出土土器はVI期～VII期のものが大半で、他にIV期～V期のものが混入している。P2からVII期高壙、P7からVI期～VII期の甕や高壙などが出土した。

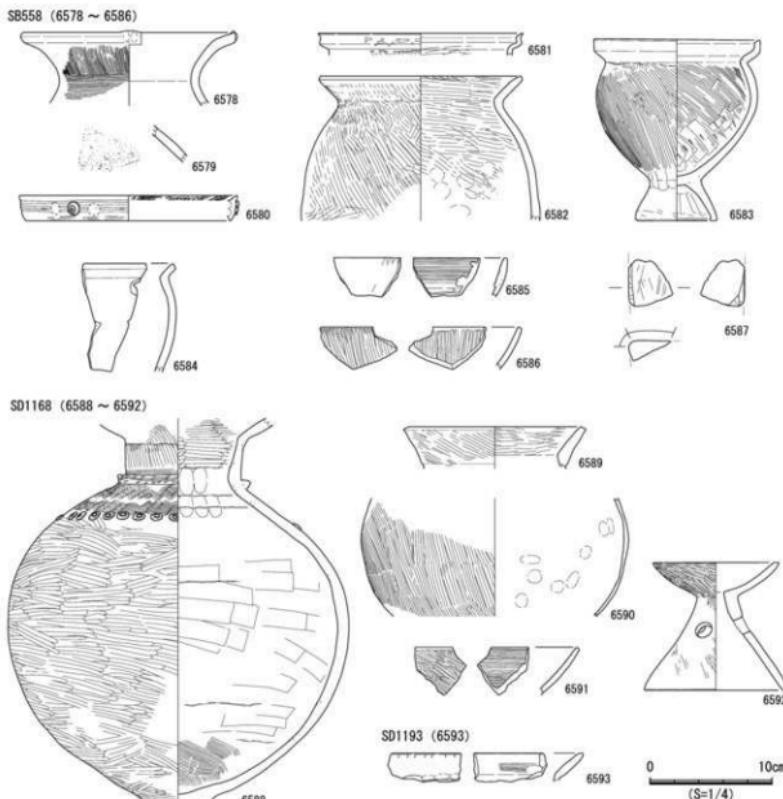


図1943 SB558 遺物実測図

**出土遺物** 6578、6579はともにIV期壺H類。6578は口縁部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。口縁部形状を確認することができる稀少な資料である。端部上端にはわずかなふくらみを形成するが、内面に加飾は認められない。口縁部外面は縦位のハケ調整が認められ、頸部には横位の直線文を施す。6579は、胴部に直線文が認められる。6580はV期～VI期壺A1b類。口縁端部を上下に拡張し、内面には貝による刺突文を施す。端部には擬凹線を施し、その上に円形浮文を貼付する。浮文上には円形刺突文を施し、3個1組で配置される。6581はVI期壺D1b類。口縁部が屈曲し、下段がやや外方に引き出される。外面には顕著な刺突が認められる。6582はVI期～VII期壺B2類。口縁部の屈曲は弱く、外反気味に開く。端部を丸くおさめ、胴部には粗いハケ目が認められる。6583はVI期～VII期壺E5類。口縁部が屈曲して受口状を呈する。ナデにより屈曲部内面に凹面が形成され、端部には内傾する平坦面を形成する。胴部最大径は頸部から3分の1付近に位置し、やや肩が張る。脚部は短く八の字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6584はIV期鉢B類。口縁部がくの字に外反して端部には明瞭な平坦面を形成する。6585はVI期高杯C3b類。端部直下を肥厚して、その部分に多条沈線を施す。6586はVII期高杯C4a類。口縁部が内湾し、端部にはわずかに平坦面が認められる。6587は砾石。大半は割れているが、線状痕が残る砥面が確認できる。

＜SD1168出土遺物＞ 6588はVII期～VIII期壺E類。口縁部を欠損するが、二重口縁壺と考えられる。頸部がほぼ直立してハケ目が残り、口縁部が屈曲して外方に開く。頸部と胴部の境には貼付け突帯を形成し、ナデによって尖らせた後に刺突を加える。突帯直下には、振り幅の小さい波状文が、わずかな無文帯を挟んで2帯施文される。さらにその下方には円形浮文を貼付し、浮文上から円形刺突を加える。それ以下は無文帯となり、全面が丁寧なミガキによって器面調整が施される。胴部径の大きさに比して、平底の底部は嬌小である。胴部最大径は中央よりやや上方に位置するものの、肩の張り出しあは弱く、球形に近い。頸部以下がほぼ完存する稀少な資料である。6589はVI期～VII期壺B3類。口縁部が屈曲して直線的に外傾し、端部にはわずかに平坦面を形成する。内外面ともに粗いハケ目が残り、外面には調整後の粘土塊がそのまま残り、器面整形が難である。6590はVI期～VII期壺D類。器壁の薄い胴部に煤や炭化物が付着する。6591はVII期高杯C4c類。口縁部内面に多条沈線を施す。6592はVII期器台C2類。小型の器台で、受部は皿状に内湾し、端部にはわずかに平坦面をもつ。透孔を3方向に配置し、脚部は円錐状に開くが、裾部は内湾気味となる。

＜SD1193出土遺物＞ 6593はVI期～VII期壺B4類。口縁部が直線的に外傾して端部を丸くおさめ、下端に刺突を加える。

**時期** V期～VII期のSB559を切るが、小穴出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

#### SB559（遺構：図1944・1945、遺物：図1946）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。遺構の大半をSB558床面で検出し、SB560を切る。検出時にすでに壁溝が見えており、平面形は明瞭であった。

**形状** 住居の住居埋土は削平されて不明だが、壁溝間の距離は長軸長約5.0m、短軸長約4.8mの方形を呈する。

**床面** ほぼ平坦であり、住居周縁にブロック土を多く含む貼床（整地土）がある。床面上では小穴8基を検出した。このうち、P1～P3では土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係からP1～P3

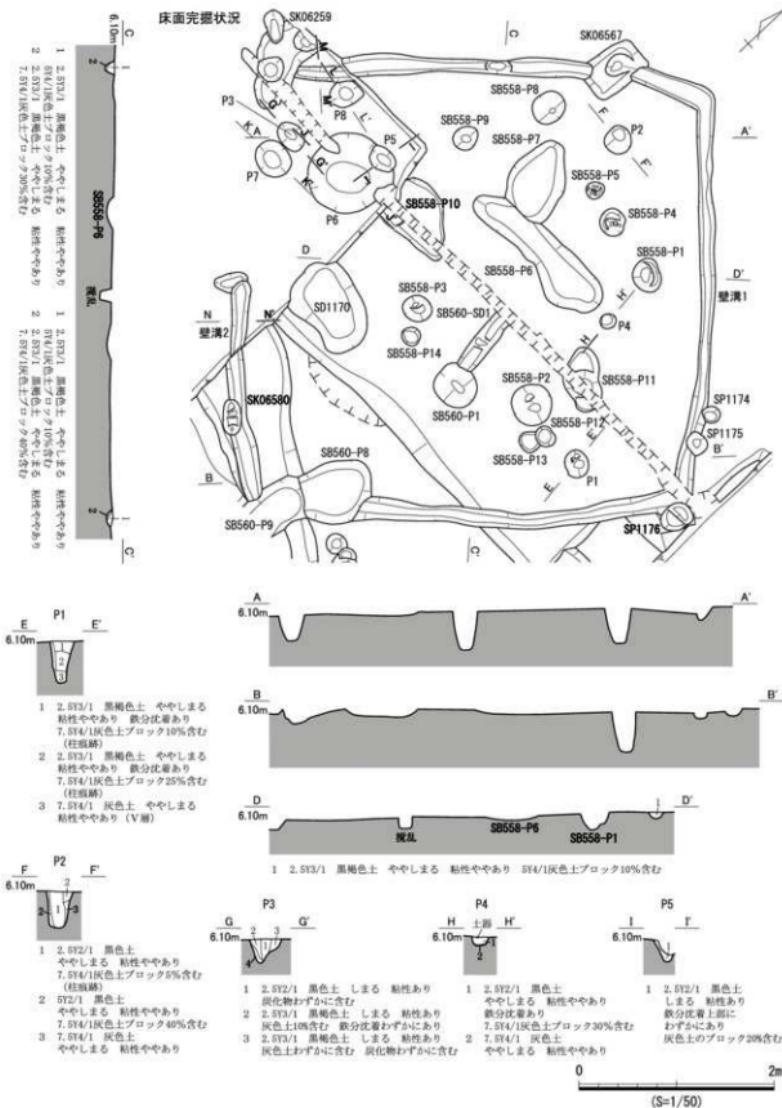


図 1944 SB559 遺構図 (1)

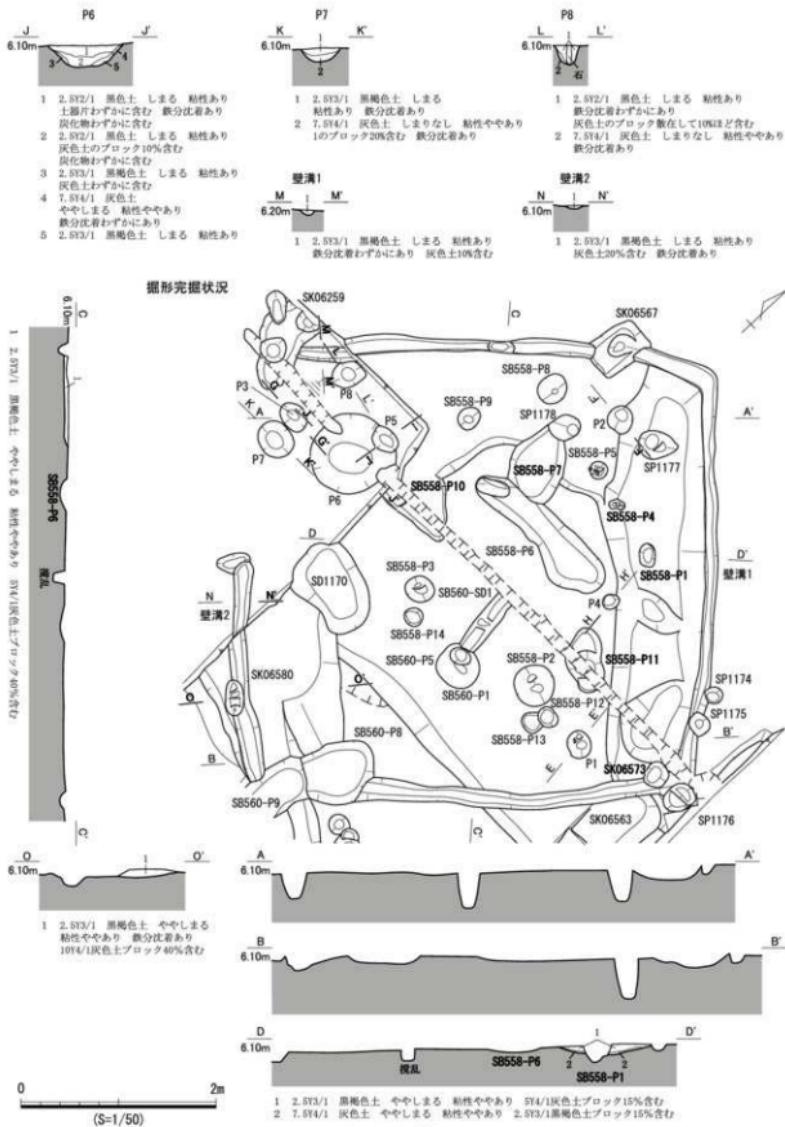


図145 SB559 遺構図（2）

が柱穴と考えられる。また、P8では中央に長さ24.2cmの砥石(6599)が立った状態で出土した。一方、住居周縁に整地土が巡る豊穴住居跡の場合、整地土の隅部付近に柱穴が配置されることが多く、掘形はやや浅いもののSB559-P5、SB558-P5、SB558-P11も柱穴となる可能性がある。壁溝は幅約0.2mで、深さは0.1m未満である。南西辺の一部は検出できていないが、それ以外は全周している。なお、炉跡は確認できなかった。

**掘形** 住居周縁に幅約1.0m、深さ約0.1m～0.2mの溝状遺構が南東辺を除いて全周しており、ブロック土の混入が目立つことから掘形埋土と考えた。溝状遺構は北東辺沿いのものが他より深く、底面に凹凸が認められる。

**遺物出土状況** 小穴から土器51点、周溝から土器23点、掘形埋土から土器125点が出土した。出土土器はIV期～VII期のものであり、掘形埋土からはVI期～VII期の土器が、P2からVI期～VII期の壺(6596)が、P6からV期の壺(6595)が出土した。

**出土遺物** 6594はIV期壺H類。胴部に横位の直線文が複数帯認められ、間に無文帯をはさむ。その上部には、同じ工具で弧状に施文する文様も認められる。6595はV期壺B1類。口縁部が大きく外反し、端部に平坦面をもつ。口縁部、胴部ともに無文で、ハケの後にナデによる調整が施される。6596はVI期～VII期壺A1b類。口縁部を上下に拡張し、内面に羽状文を施文する。6597はVI期～VII期甕。器壁の厚い脚部が内湾し、接地面を平坦に仕上げる。6598はVII期高壺C類。壺底部から口縁部が外傾して開く。外面の稜が明瞭に認められる。6599は砥石。大型の亜円錐を素材とし、その自然面の一面を砥面として利用している。

**時期** VI期～VII期のSB558に切られ、VI期～VII期のSB560を切ることと、掘形や小穴出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

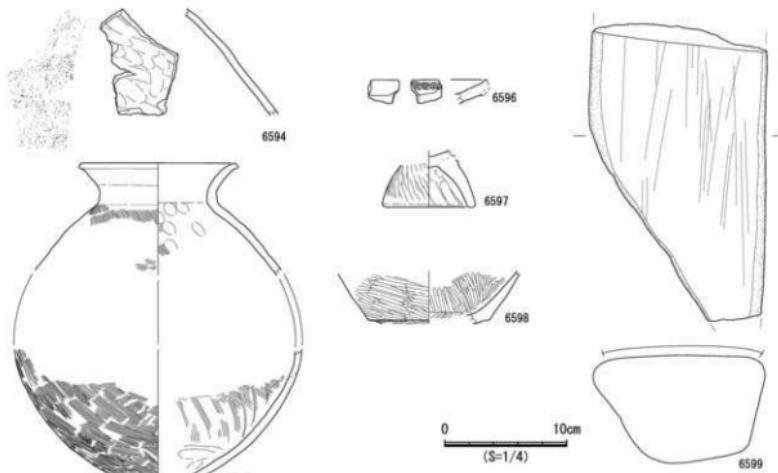


図1946 SB559遺物実測図

## SB560（遺構：図 1947・1949、遺物：図 1948）

**検出状況** 東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。北側を SB558、SB559 に切られ、中央を SD1170 や SD1183 に切られる。検出時にすでに壁溝が見えており、平面形は壁溝 1・2 が比較的明瞭で、壁溝 3 が不明瞭であった。

**形状** 住居の住居埋土は削平されて不明だが、壁溝間の距離は長軸長約 5.0 m、短軸長約 4.9 m の方形を呈する。

**床面** ほぼ平坦であり、西隅部にブロック土を多く含む貼床（整地土：SD2）を確認した。床面上では小穴 16 基と壁溝を検出した。このうち、P2～P4、P6、P12 では土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係から P1～P4 が柱穴と考えられる。また、P8、P9 は住居中央にある楕円形状を呈する穴であり、炉跡の可能性も検討したが焼土や被熱痕は確認できなかった。壁溝は幅約 0.2 m で北東辺の一部が途切れている。なお、炉跡は確認できなかった。

**掘形** 住居西隅に幅約 0.9 m～1.0 m、深さ約 0.1 m の溝状遺構が L 字状に巡り、ブロック土の混入が認められることから掘形埋土と考えた。しかし、他の隅部では確認できておらず、詳細は不明である。

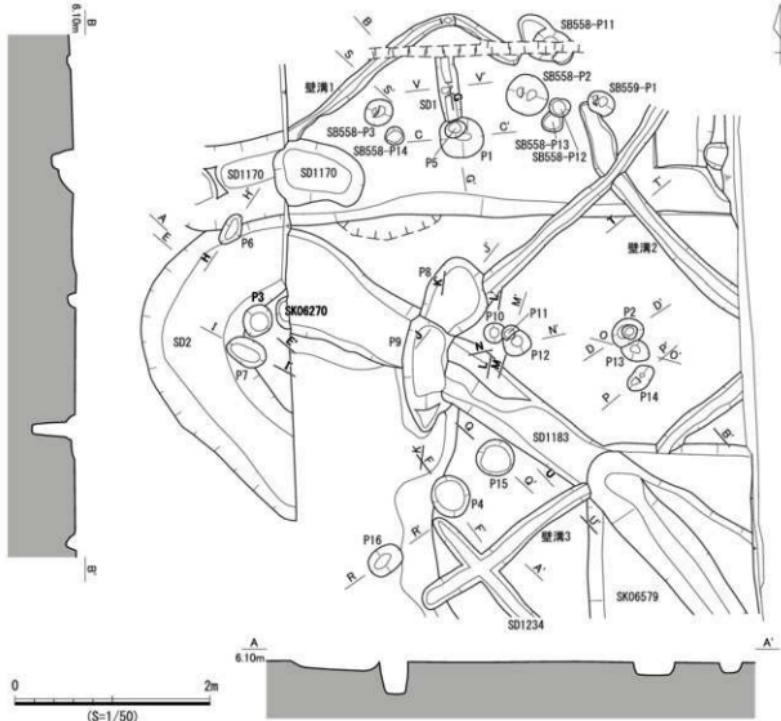


図 1947 SB560 遺構図（1）

**遺物出土状況** 小穴から土器212点、壁溝から土器21点、掘形埋土から土器9点が出土した。出土土器はIV期とVI期～VII期のものであるが、いずれも細片で摩滅が進んでいる。なお、P16からVI期～VII期の壺(6600)が出土した。

**出土遺物** 6600はVI期～VII期壺。平底の底部がやや突出する。

**時期** VI期～VII期のSB558、SB559に切られるが、P16出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

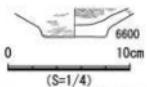


図 1948 SB560 遺物実測図

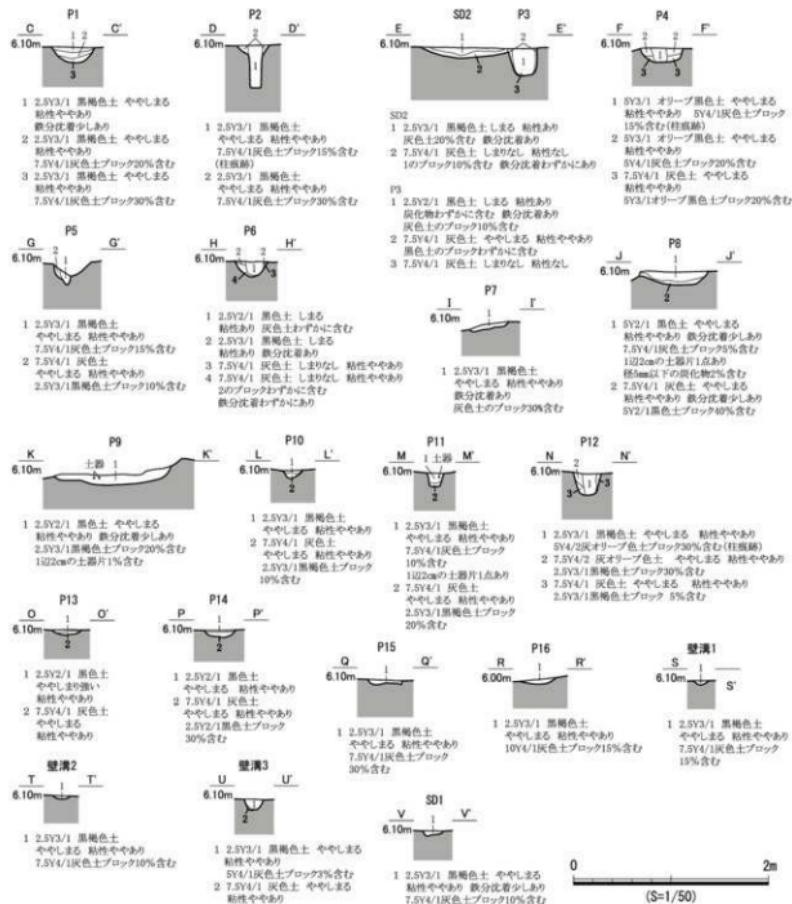


図 1949 SB560 遺構図（2）

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第131集

荒尾南遺跡B地区II  
(第5分冊)

2015年3月13日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ